

荒くれものの人生 侍

(´・ω・`)しょんぼりくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生に疲れた男、人生に後悔を持った女性、それが運命のいたずらで出会ってしまう

目次

侍の国	1
奇妙な出会い	7
壬生浪	11
酒の力	21
手柄	27
お固い女性	32
嵐の予感	37
強襲	41
同じ失敗	50
護衛依頼	60
土佐の人切り	72
二人の変化	80
顔に似合わない甘い二人	93
異変	99
佐藤和也と言う人間	113
時代が望む姿	129
笠の男	137
割れた新選組と傷ついた恋人	151
油小路事件 裏側	161
時代の変化	167
二人の思い出	179
夜の緑雷紫火	188
荒川将吾（佐藤和也）の歴史	203

久々の楽しみ	318
中国の虎	306
戦法家 柳	287
束の間の休息	269
維新の革命家	254
奇怪な戦争	241
突然の奇襲	225
Fate／Grand Order 異界聖杯戦争 岩洞	
事件の裏側	218

侍の国

和哉「あああああああ?!!?!」

ある男が黒い穴から落ちてきた、黒い散髪で赤いシャツにその上に黒いジャンパーを着ている、男の名前は佐藤和也、ある理由があり世界を回されている

和哉「かあくそお、またかよ」

和哉「さて次は何処?アメリカ?ロシア?まさか異世界とか言わないでくれよ」

男は色々な所に飛ばされているかのような口振りだが、ある時は百年戦争に、ある時は新宿にと、色んな所に本当に飛んでいた。取り敢えず周りを見回していると大きな街を見つける

和哉「おお見つけ、古くさい建物が並んでんなく」

目をこらして見てみると、昔の日本のように着物をきて髪はちょんまげにしている人がいた

和哉「それにあのちょんまげ、なるほど頭の悪い俺でも理解したぞ。ここは日本、しかも江戸時代か?どうせならバブル時代に飛ばして欲しかったぜ、金とかそのまま持ち帰ればやっていけるのに」

そう欲をだしながら取り敢えず目の前の街に行くことにした

和哉「何人か散髪がいるな」

だいたいはちょんまげだが何人か散髪がいる。だがその散髪をしている人たちは、どうも日本人には見えなかった

和哉「あーあれだったか、外国との交流が多くなった時か?」

外国との交流が多くなりその文化を取り入れるために色々しているときだったはずだ

男「おい兄ちゃん」

和哉「?」

それを聞き後ろを振り向くとそこにはみすばらしい男がいた

男「お前だよお前」

男「金目の物だしな？」

それを聞いた途端その男を殴り飛ばした

男「ぶべえ!!」

和哉「お前誰？」

男「な、なぐってからきくんじゃねえ!!」

和哉「ああ悪い悪い、あまりにもむかつく顔だったんでな、口より先に手が動いちまった」

男「こ、こいつ、もう容赦しねえぞ」

男はキレ気味になり刀を抜いた

和哉「へえ、それが日本刀か、身なりきたねえ癖にそれだけは綺麗

：：じやないな、刃こぼれしまくってる、悪い悪い全部汚いな☆」

男「こんのお、しねええ!!」

そう真っ直ぐに振り下ろしてくる。それを手で受け止めて下に持っていく、握りにくしてから上に向けて取り上げた

和哉「よ」

男「あ!?!」

そして呆然としている相手の顎に目掛けてアツパーをかました

男「べへえ!!」

男「く、くそお、覚えてろよ!」

男は逃げ出そうとするが和也に服を掴まれた

男「な、なんだよ、離せ!」

和哉「いやさ、丁度おれもあんたに用があつたのよね」

相手の方を見て笑顔を作り答える

和哉「取り敢えずこの刀と、金目のものよこしな」

男「あ、ああ」

和哉「にしても刃こぼれすげえな、雑に使いやがって」

歩きながら刀を見ながら状態を見ていた、刃こぼれが酷すぎてとて

もじやないが使えそうにもない、けど

和哉「一回持ってみたかったのよね、日本刀」

和哉「さて、あいつあんまり持ってなかったな、何処か働ける場所
は」

一応金も奪ったが雀の涙しかなかった、だからなんとか金を稼ぐ必
要がある

? 「君」

そんな事を考えているとまた声をかけられた、取り敢えず振り向か
ず声だけ返す

和哉「はあ、また? 悪いけどカツアゲなら貴族にやってくれ、どう
せむかつくやつだし」

? 「いやいやそうじゃない、君に頼みたい事があるんだ」

和哉「あ?」

それを聞き振り返った、さっきの男とは違い服装は悪くない

? 「我々と共に時代を変えないか?」

和哉「うえ?」

? 「我々は長州藩のもの、時代を変えるために手を貸してはくれな
いだろうか」

和哉「あー、そんな話あったっけ」

確かこのとき何か合って不満を持った人たちが集まって何かし
ていたはずだ、相変わらずうる覚え過ぎるので取り敢えず適当に返す

和哉「俺金ねえぜ、入場料払おうにもそんなになくてね」

男「それは関係ない、君の腕を買っているのだ」

? 「これ! そのやつ!」

そうこうしているとまた声をかけられた、それを聞いた瞬間男がた
め息をついた

男「この話は後で」

和哉「あ、おい」

和哉「行っちゃまった」

話しも終わったようなので自分も離れようとするが周りを誰かに
囲まれた

和哉「ふえ？」

それを見た和也は彼らの服装を見てある疑問が浮かぶ

和哉（ん？浅木色の羽織？）

浅木色の羽織、そして背中に一という数字があつた

？「貴様！やつと何を話していた！」

和哉「何か家に来ないかとかどうか？」

？「まさか、その藩の名は？」

和哉「藩？ああ確か県の名前だっけか、長州？とか言つてたような」

？「やはり、おい！」

それを掛け声に全員が刀を抜いた

和哉「何でこうなるんだよ」

？「貴様には聞きたい事がある、屯所まで来てもらうぞ」

和哉「やだ」

？「な!？」

和哉「と言うか俺なんか捕まえる前にさつき逃げたやつを捕まえろよ、見た限りあんたらお巡りだろ？」

？「なんだと、見るからに怪しい格好をしておつて、南蛮人か貴様」

和哉「失敬な、純度100%日本人だ馬鹿野郎」

？「もう一回言うぞ、屯所までこ「いやだ」……なるほど、なら力
ずくで来てもらおう」

和哉（さて、かの有名な新撰組のお手並みを拝見するとしますかね）

何人かが刀を振り上げて突っ込んでくる。最初のやつを刀で受け

止め、股関節掛けて蹴り上げた

男「はふっ!？」

情けない声をあげながらその場でうずくまる。次に別のやつが突
きを放ってきた。それに刀を当ててずらしたあと、喉元目掛けて逆刃
を当てる

男「かつ」

前に倒れてしまう。そのうちにうずくまっている男に首もとに峰
打ちをすました後次に備える、だがさつきの戦いを見ていたのか、静
観しているようだ

和哉「ふうー」

息を吐き落ち着かせる、お互いに構え出る機会をまつ……はずだったのだが

和哉「ほい」

男3「へ？」

何と刀を相手に向かって投げた、それもまるで軽く物を渡すかのよう、だがこれが狙いだ、相手が刀を見ている間にその顔目掛けてドロップキックを放った

和哉「どりやあああ!!!」

男3「ぶっ!？」

男はそのまま吹っ飛ばされ動かなくなった

和哉「意外とたいしたことなかったな」

新選組と言うから期待していたんだが期待外れだ、ため息をつきながら後にしようとする

?「おい」

和哉(!?)

後ろから嫌な気配がし直ぐ様前に進み相手から距離をとり振り替える、すると同じ浅木色の羽織を来た少女がそこにいた

和哉(ん?他のやつが着ているのとちよつと違うような)

多少の違いだが他の奴が着ているのは違う、それだけじゃない、相手の殺気も凄まじい

?「貴様、何をしている」

和哉(こいつ……強いな)

雰囲気もそうだが中々に鋭い目をしている、まるで獲物を狙う獣の目、しっかりと目に力が入っている

和哉「変な言いがかり吹っ掛けられたから返り討ちにしたって所かな?」

?「どのようなことで?」

和哉「意味のわからないやつに変な集会に誘われたんだけどよ、それ断ろうとしたら急にあんたらが来て、そいつが逃げたと思ったら囲まれてさ、連行とか言われたから断った」

? 「ならば行けばよかったでしょうに、そうすればこんなにややくしくはなりませんでしたよ?」

和哉「嫌だよ、牢屋の世話にはなりたくねえもん」

昔では怪しい奴がいたら片っ端から捕まえて牢獄に放り込まれる、そして下手をすれば殺されることもあるのだ

? 「まあ取り敢えずあなたには来てもらいますが」

和哉「おいおいそんな怖い顔すんなよ」

? 「: : :」

和哉「無視かよ」

額に汗を流しながら相手を見る、刀は抜いていないがその気になれば殺されそうな感じがする

? 「そちらの名は?」

和哉「えっと、荒川だ、あんたは?」

取り敢えず適当に偽名を使うことにした、荒川は和也が住んでいた所でよく使われていた名前だ

? 「沖田」

和哉「へ?」

よく聞いたその名前、さらに新選組ともあればその名にあたるのは一人しかいなかった

沖田「新撰組一番隊隊長、沖田総司」

和哉「ええええええええ!!?!」

これが彼女と彼の初めでの出会いだった

奇妙な出会い

和哉「へ、はあ!?!沖田!?!嘘だろ!?!」

沖田（またこれか）

女性は心のなかでため息をついてしまう、変な噂で変な人相をした
てられ正直うんざりしてしまう

沖田（何処の馬鹿だ？変な事を言い出したのは）

もし見つけたらいらんことを言う前に喉でも潰した方がいいかも
しれない、そんな事を考えていると

和哉「嘘こけえ!!」

沖田「……はい?」

それを聞いた沖田はキョトンとしてしまう

和哉「見た目完全中学生の餓鬼じゃねーか!嘘つくならあと三十セ
ンチ身長伸ばしてから出直してこい」

それを聞き心に苛立ちを感じる、一応これでも二十歳なのに

沖田「中々に度胸がありますね、私を馬鹿にするとは」

和哉「度胸?おいおい胸を張ったって何もうまれないぜ、シリ
コンでも入れて胸膨らましてこいよ」

額にこめかみが浮かび相手を睨み付ける、小さいんじゃない、邪魔
だからさらしで潰しているだけだ

沖田「きさま、死にたいのか」

和哉「おお怖い怖い、にしてもおつかしいな、噂じゃ美少年のはず
だが、これじゃ美少女剣士沖田さんじゃねえか」

沖田（!?!）

それを聞いた沖田の顔が少し赤くなった、それを見た和也がニヤニ
ヤしながら沖田を見ていた

和哉「お、その反応、なるほど、さすがの沖田さんもこんな誉めら
れ方されると照れちゃうか」

沖田「ふざけるな、こんな程度で動じはしない」

和哉「よせよせ見栄を張らなくてもわかる、中々目付きに似合わず
可愛いところあるじゃん」

沖田「きさま」

和哉「これ以上言ったら怒っちゃうな」

笑いながら沖田を見ている、沖田はそれを気に入らないのか怖い顔をしながら睨み付けていた

沖田「ともかく大人しくついてこい、それが出来なければここで切る」

和哉「け、俺はそこまで弱くねえーよ」

それを言った途端場の空気が冷たくなっていく、お互いににらみ合い警戒しあう、そして沖田が刀を抜きこちらに突きを入れてきた

和哉「!？」

和也はそれをギリギリで避ける

沖田（避けた!?!）

そしてそのまま沖田の横をすり抜け構える、額に汗を流して冷や汗を感じるも相手の背中を見て次にそなえた

和哉「あ、あつぶねえ、速いな」

沖田「……やはりただ者ではなかったか」

そしてゆっくりとこちらを振り返り剣を両手に持ち自分の左に持っていき頭より後ろにやり構える

和也（確か、突きが主体だったか?）

新選組の流派天然理心流は棒術や体術など色々取り入れてはいるが一番の特徴は刀による平突きだ、斎藤一の左片手一本突き、沖田の三段突きで有名なのはこの流派が突きが主体なためだったのもある

沖田「きさま、何奴」

和哉「なに、よく意味のわからない戦争に巻き込まれてるただの未来人さ」

沖田「？」

相手はおそらくなに言っているだこいつと思っっているに違いない、まあ仕方がないことだが

和哉（さてどうする?）

刀で対応してみたいが自分の持っている刀があつた状態では正直戦えない、それに相手は殺す気だし素手でやるのは自殺行為だ、なら答

えは一つだ

和哉「逃げるんだよおー！」

沖田「……………は？」

背を向け走り出した、沖田はそれに驚き固まっていたがすぐに追撃に出た

沖田「ち！」

和哉「おわ!?あぶねえ!？」

沖田「臆病者め、逃げるな！」

和哉「ふざけんじゃねえ、お巡りに喧嘩なんか売ったらつかまつちまうだろうが」

沖田「もうやった後でしょう！」

和哉「おお、ナイスツツコミ」

沖田「ふざけたやつ！」

和也はそのまま逃げ続け表に出る、周りにいる人はこちらに関わらないように道を譲っていく

和哉「悪いね！」

そして和哉は民間に立て掛けてある長い棒を何本か掴み道の人に投げ渡す

和哉「これ持つとけ！」

民「は、はい？」

沖田「!？」

男はなげわたされた棒を投げ渡されたように横にもつ、そうすると後から来る沖田の障害になってしまった、沖田はそれを潜り抜け最後は人通りが多いため飛び越えた、和哉はそれをまっていたかのように最後の棒を足元に転がした

沖田「!？」

それを踏んでしまいスツ転んでしまう、和哉はそれを見ると直ぐに振り返り走る

和哉「あばよ！」

そう言い残しそのまま人混みに消えていった

沖田「覚えたぞ、その顔は」

背中をさすりながら怒りの表情を浮かべていた沖田であった

沖田「……」

沖田はあの後屯所に戻っていた、若干尻の痛みを感じ顔が崩れそうになるがそれと同時に嫌なやつ顔も思い浮かび目を鋭くなり威圧を感じさせる顔をしている

？「おおう怖い顔やな、どないしたんや、沖田？」

そんな彼女に声をかける人がいた、成人男性より少し大柄な男、髪は後ろで結んであり多少髭も生えているこの男は新選組二番隊隊長永倉新八であった

沖田「…いえ、きになさらず」

そう言葉を返し再び前を歩きだした、永倉はやれやれとため息をつきながら沖田は眺めている

永倉「いつにもまして怖い顔しとつたな、あいつ」

そう言い残し永倉はその場を後にした

和也「まじ!? いや〜助かるわ〜それ」

女将「ええんどす、丁度用心棒が欲しかったところなんや、こつちからお願ひしたいわ」

和也「任せとけ！」

一方和也は女将を困らせていた連中をしめたお礼に、宿に泊まらせてくれることになっていた

壬生浪

沖田「見つかりましたか？」

京都の街、その商店街付近で沖田の隊が集まり何か話していた、いつもの見回りもあるだろうが沖田が前あつた荒川を何人かの隊士に命じて探させていたのだ

隊士「いえ、これと言つては」

沖田「そうですか」

沖田（そういえば最近長州藩の者が騒がしいですね、薩摩や土佐の奴もいるし気を付けなくては）

ここ京都で派手に動いているのは長州、土佐、薩摩などの藩である、逃げの小太郎や西郷などの実力派が率いてこの街にやってきたのだ、そのためその指導者たちも捕まえるのが難しく中々抑える事が出来ないでいた、いつ終わるのやらとため息をついていると腕から血を流している人が病院に駆け込んでいくのが見えた

沖田「またですか」

隊士「隊長、今の人つて」

沖田「ええ、おそらく試験で腕でも切られたのでしよう」

新選組でも隊士は募集しているがその試験の内容が幹部との実技試験、そのため中々受かるものがないのだ

沖田「あなたたちも訓練は怠らないように、浪士に切られてああんりたくはないでしょう？」

隊士「は、はい」

沖田「では時間ですので交代を」

隊士「はい、隊長は？」

沖田「私は少し残ります」

それを聞いた隊士たちは屯所の方に向かった、沖田は取り敢えず商店街の方に行き少し歩いていく、その頭のなかには昨日の男がいた

沖田（あの男は一体）

不思議な格好をした日本人なのは間違いないのだが何か不思議な感じがするのだ、こうここにいるのが何か違和感があるような気がする

る

男の子「あー！お姉さんだ！」

そんな事を考えていると横から子供の声が聞こえた、それを聞いた沖田は表情を和らげ笑顔で接する

沖田「はい、皆さんの大好きな沖田さんですよ」

男の子「ねえねえ一緒に遊ぼう！」

沖田「ごめんね、今お仕事中だから」

そう屈んで目線を合わせ答える、それを聞いた子供は頬を膨らます

男の子「ぶーけち」

沖田「また寺子屋には顔を出すから、その時一緒に遊ぼう？」

男の子「ほんと？」

沖田「ほんとほんと」

男の子「んじゃ指切り！」

元気よく出された小指を自分の小指で掴み伝統の約束の契りを交わす、それを終えた子供は沖田の方を見ながら離れていく

男の子「それじゃ約束だよー！」

沖田「さて、そろそろ戻りましょうか」

商店街を外れ屯所まで歩いていく、屯所は少し山奥に建てられており屯所は階段で上がった先にある、その階段を上がると肩までウエーブがかかった男がいた、沖田と同じ隊服を着た男は新選組三番隊隊長齋藤一であった

沖田「今戻りました」

齋藤「どうだった街は？」

沖田「やはり浪士が多いですね、今のところ大きな騒ぎは起こってませんが、嵐の前の静けさと言うのもあります」

齋藤「また面倒な事起こりそうだなこりゃ」

沖田「その前に家で騒ぎがありそうですけどね」

沖田はそうため息をつくと齋藤の顔も曇り始める、新選組の幹部の中では派閥が生まれ始めており近藤派と伊東派で別れ始めており会議の中でもいがみ合う事が多くなってきたのだ

沖田「伊東さんも何を考えているのやら」

斎藤「近いうちに割れちやんじやない？」

沖田「笑えませんか？」

何だか話しているとお互いに辛くなってくる、その空気を変えたいのか斎藤が話題を変えた

斎藤「そうだ、今回の試験で合格したやつがいたぜ」

沖田「へえー、確か今日は井上さんの試験ですね」

井上源三郎、六番隊の隊長で無口でありしやべらないが部下の稽古は怠らずかなりの歳だが腕は衰えていない、今回の試験は彼の仕切りでその彼に認められるのは珍しいことなのだ

斎藤「ああ、腕はいいぜあいつ」

沖田「見ていたのでは？」

斎藤「暇だったからさ」

沖田「そうになると、12ですかね合格者は」

斎藤「そうだよ、永倉はともかくあの井上さんが通すなんてね、期待してもいいかもな」

そして話の途中で思い出したのかあつと声を出し沖田に報告する

斎藤「そうだそれとは別件で伝える事があったわ、土方さんから今月の試験合格者配属の話があるってよ」

沖田「わかりました」

それを聞いた沖田は早速話し合いが行われている部屋に行く、草履を脱ぎ廊下を歩いていき目的の部屋に着いた

沖田「入ります」

そう一言いれ襖を開ける、するとそこには

荒川「あ」

沖田「え？」

昨日会った男がいた

沖田「まさか実技試験に受かったのが貴方だとは、探す手間がはぶけました」

少し広い部屋の用意されている座布団に二人とも座っており沖田が話しかける、だが何やら針のある言葉だった

荒川「こんなべっぴんさんに目をつけられるとは嬉しいねその目がなけりや誘ってたかもな」

沖田「藩の人間かもしれないやつを信用しろと？笑えませんかよ」

荒川「おいおい今の話の何処に笑いどころがあったんだ？べっぴんの所か？もしかしてスベった話笑うタイプ？」

沖田「タイプとはよくわかりませねえ、もつと分かりやすい言葉で言ってくれます？」

荒川「それくらい分かれよ、ちゃんと勉強してる？」

沖田「あなたよりまともに会話はできる程度には知識はありますよ」

荒川「俺と数回話しただけなのにもうそこまでわかったの？なんか気持ち悪いな」

沖田「敵を追うのは得意ですので、何なら今すぐその喉を貫いてもいいのですよ？」

荒川「それ追うじゃなくて殺るな、頭のなか知識じゃなく剣がつまってんじゃねえのか？ほら、ちようど伸びているアホ毛がひとつあるぜ」

それを聞いた沖田は額にこめかびが浮かび始める

沖田「わかりました、死にたがりやなのですな？だからそんなに煽るんでしょう？」

荒川「おいおい今の下り冗談だつてことぐらいわかるだろ？お前もあいつと同じでジョーク通じにくいのかおわっ!？」

いい終える前に沖田の刀が荒川の前を通りすぎる

沖田「すみません、つい力んで滑りました」

荒川「その滑つたのくんだりちよつとしゃれにならないよ？もつと面白いのを考えろよな、これだから真面目なやつは面白くないんだよ」

沖田「わかりました、では口をだしてください、いい感じに切れば笑顔ができます」

荒川「おうやってみろ硬者女、お前のかなとこの胸と違って俺の頬

は柔らかいから守らせてもらうぜ」

沖田「もういい、殺す」

土方「そこまでだ」

殺意が全快になり変な喧嘩が始まろうとしていた時、同じ浅木色の隊服を着た隊士が前の襖を開けて入ってきた、新選組副長で鬼の土方とも恐れられている土方歳三である

土方「お前は変なことをするんじゃないやねえ、らしくねえぞ」

沖田「すみません」

すぐに刀を納め座り直す、土方も向かいに座り荒川が切り出した

荒川「んで？俺は何処に行くんだ？」

土方「その事で来た、お前が行くのは」

土方は沖田に指を指す、つまり

土方「沖田の所だ」

沖田「え!？」

それを聞いた沖田は驚き、荒川の方は若干嫌がっていた

荒川「えゝこいつのかよ」

沖田「そんな、何ですか!？」

土方「お前の隊は人数が少ない、人数合わせには丁度いいだろ」

沖田「人数なら間に合ってます！こんなやつ信用できません！」

土方「だからお前に任せるんだ、変な動きをしたら切ればいい」

沖田「ですが！」

土方「これ以上は受け付けん、お前のところで面倒を見ろ、いいな」

沖田「っ！」

そう強く言われるとこれ以上は反論出来なくなる、荒川の方は手に顎を置き沖田の方を見ている

沖田「…わかりました」

土方「よし、それじゃ一通り教えてやれ」

沖田「はい」

沖田「我々新撰組はこの町の警護、見回り、もしくはお偉いがたの依頼を仕事としてやってます」

荒川「ほへえ、これが浅木色の羽織か、かつけえ」

荒川は貰った浅木色の羽織の着て喜び沖田は説明を続けているが少しイラついている

沖田「私の隊の一番隊は人数は少なく切り込みが多いため注意してください」

荒川「この刀もいいな、あのボロ刀何かより使いやすい」

荒川は貰った刀の調子も見始めた、沖田の顔が少し崩れていく

沖田「け、稽古の際はサボらないように、もしサボったら背中打ちですから」

荒川「いや、いいね、やつと自分の刀が貰えたよ、給料いくらかな」

沖田の目が鋭くなり荒川を睨み始めた

沖田「聞いているのか？」

荒川「聞いているって、ようは危険が一杯一番隊ってことだろ？大丈夫だよ」

沖田は怒りで色々言いたくなるが何だかその気も失せてきてため息をついた

沖田「あなたの最初の仕事は私の隊の皆と顔合わせに行ってください、その後私と一緒に見回りをしますよ」

荒川「わかったぜ隊長」

そう指示を出し早速自分の隊の顔合わせのため隊士を集め始めた

部隊との顔合わせも済ませ一番隊の巡回する場所を覚えさせるために沖田が直々に通りながら進んでいる、そんな事は他の隊士にでも任せればよいのだが

沖田（正直私以外に手綱は握れそうにありませんからね）

刀の実力はよくわからないがああ井上に認められるほどだ、実力は

ある以上沖田でしか対処できないかとも思いしばらく付いていく事にしたので

荒川「あんまり面白いことねえな」

沖田「当たり前です、そんな四六時中起こられても困ります」

そんな事も知らず彼はあくびをしながら沖田に付いていつている、沖田はそんな彼の様子にため息をつき呆れていた

荒川「おおなんだここ、でか」

荒川の横には高い塀がありその奥にはここからでも見える屋敷があった、塀があるというのに屋根上がはつきりとわかる

沖田「あまりはしゃがないように」

荒川「わかっているよ、いやゝにしてもすげえなホントにタイムスリップしてみたんだ」

一体何を言っているのかわからない時があるが元から頭がおかしいから気にしない方でいた、そうしてしばらく歩き続け沖田はある疑問を思い浮かべる

沖田「あなた、なぜ入隊を？」

荒川「いやよ、金がないのは困ってたのよね、それでいい仕事探したら新人募集中とか言ってたからよ、それで試験に受かって入った」

沖田「あの井上さんの試験を」

荒川「ああ、おっさんの癖に偉い強かったよあの人」

沖田「当然ですよ」

試衛館からの付き合いなのだ当然強いに決まっている、その疑問が晴れた時誰かが店の前で喧嘩をしている

荒川「ん？」

女将「ちよつと、困ります！」

男「だけんつけにしとけて言うとするやろが」

男は少し小汚ない服装で身なりもそこまですくはない、そんな男が女将に怒鳴りつけていた

女将「そんな事言っつて払わない気なんやろ？騙されんで！」

男「なんやとお!？」

それを見た沖田はため息をつきながら腰にある刀に手をかける

沖田「最近浪士が多くて困りますね、あなたはここで……」

男「ぶぎや!？」

そういい終える前に彼がその男の横腹を蹴飛ばした

荒川「悪いな、あまりにも邪魔だったから蹴つちまった」

男「し、新撰組!？」

男は横腹を擦りながらこちらを見ていた、それを荒川は見下ろしながら笑っている

荒川「おうよ、痛い目見ないうちに早く金渡して消えな」

男「ふ、ぶぎけんなよ、誰が払うかあ!」

立ち上がり刀を抜きこちらに向けてきた、荒川は呆れながらそれ見ている

荒川「おいおいいきなり抜くんじゃねえよ、ほんと息をするかのようにポンポン抜くよな」

そう笑いながら刀に手をかける荒川、沖田はその様子を見て抜こうと思ったがふとあることを思いつき鞘に戻した

沖田（いや、彼の実力を見るいい機会か）

沖田「隊長命令です、片付けなさい」

荒川「あいよ」

男「た、隊長!?!く、くそおお!!」

剣を振り下ろす、それを刀で受け流し男の後頭部に逆刃を打ち付ける

男「くうう」

後頭部を押さえてる所に顔面に蹴りを入れぶつ飛ばす

男「ぐへえ」

荒川「よええ」

男「この!」

刀を横に振ったのを屈んで避け足払いをし顎に一発入れる

男「ごっ!?!」

男はそれを喰らうと倒れ起き上がらなくなった

荒川「いっちょよ上がり」

荒川は男の懐を探ると財布をだしそれを女将に投げ渡す

荒川「意外と持つてるぜ、椅子の修理代とこいつのやつにしといてくれ、それでもお釣りが帰ってくると思うが」

女将「は、はい」

沖田（：相手にもならないか）

まあ試験に受かるほどだったから当然だろう、正直素手でも十分そうだった

沖田「荒川さん、そいつを屯所まで連れていきます、運びなさい」

荒川「ほつとけ、これで懲りたろ」

沖田「駄目です、これも仕事です」

取り敢えず新選組に喧嘩を売った以上ほうって置くわけにはいかない、屯所に連れていけと指示をするが彼はしそうにもない、そんなやり取りをしていると横から話し声が聞こえた

男「おいおいまたかよ」

女「相変わらず壬生浪は変わらないのね」

沖田はそれを聞くと目が鋭くなりその話していた人を睨み付ける

沖田「見世物ではない、ちれ」

女「は、はい」

荒川「どうしたんだ？すごい顔だぞ？」

それを見て不気味がった荒川が声をかける、沖田は荒川から顔を背ける

沖田「……別に」

荒川は気になつて聞きたかったが沖田は何か嫌そうな顔をしている、それに気づいたのか聞かないことにした

荒川「……まあいいや、もう行こうぜ」

沖田「……そうですね」

お互いに気まずそうにしながら歩いていく、そのまま顔を合わせずに巡回を終えた

夕方になり屯所の庭が照らされている、その庭に何人か隊士がおりそこに沖田と荒川がいた

沖田「これが我々の仕事です、明日から稽古が始まりますのでちゃんと出るように」

荒川「ああ」

沖田「それでは」

その雰囲気のまま別れようとした、その時荒川が沖田に声をかける

荒川「なあ」

沖田「…なんですか？」

沖田はその声を聞き振り返る、すると

荒川「大丈夫？」

普段とは違う声、とても優しそうな声をかけ心配している荒川がいる

沖田「……平気です、気をつかわなくて結構」

目を見開き驚いてしまうが素直でない沖田は辛く当たってしまったからその場を去っていった、あの人の事を思い出しそうだったから

酒の力

荒川「ほら大人しくしな」

男「くう」

荒川が街の見回りをしていた時、また余計な事をしていた浪士がいたのでそれを取り押さえていた所だ、そしてそのまま屯所に持つていき後は他の隊士に任せた

荒川「はい完了と、それじゃ飯でも食おうかな」

何処にいかうか、うどん屋かそれとも居酒屋か本格的な日本料理でも違いがあるのでどれにしようか迷うのだ、そしてそんな事を思い浮かべているとある人物を思い出した

荒川「あいつあれ以降何か冷たいんだよな」

自分の隊の隊長沖田総司、現代では美少年といわれ最高の刀の使い手でもあった

荒川（そーいや俺あいつの事知らねえな）

知っている事と言えば刀が強いということだけ、相手とも話す機械が少なすぎるのでどんな人間なのか今一わからないのだ

荒川「どうすつかなく」

話しかけようにも警戒心が高すぎていつも話が弾まない、どうしようかと考えているとあることを思い付いた

荒川「そうだ、よく使ってた手でも使うかな？」

なら善は急げだ、早速沖田を探して声をかける

荒川「おーい沖田」

沖田「隊長と呼びなさい」

荒川「いいじゃん別に」

沖田「それで？何ですか」

相手をしたくないのか目をそらしたため息を付いていた、正直ちよつとイラつとするがここは堪える

荒川「今日の夜暇？」

沖田「特に何もありませんが？」

荒川「よし、商店街の澄川の居酒屋知ってる？」

沖田「知っていますが、それが？」

荒川「今度そこに飲みにいこうぜ」

沖田「……はい？」

まさか自分が誘われるとは思われなかったのか呆氣にとられていた

荒川「んじや、今夜の9時、じゃなかった戌の刻？に来いよ！」

沖田「ち、ちよっと!？」

有無を言わさずに沖田から離れていく荒川、残された沖田は何が何やらわからず立っている

沖田「なんで私と？」

その言葉に答えてくれる人はいなかった

沖田「まったく、何であいつなんかと」

そう悪態をつきながら目的の場所まで移動する、そこには何やら変な白い棒を加えて居酒屋の前に立っていた、そしてこちらを認識すると少し驚いた表情をしている

荒川「あ、ホントに来た」

沖田「はい？」

荒川「いやさ下手したらこなさそうだったから、お前真面目なんだな」

沖田「……悪かったですね、真面目で」

そう顔を剃らす、そして荒川は手を叩き仕切り直した

荒川「んじや入ろうぜ、今回は俺の奢りだ」

そう言うのと荒川の中にはいっていく、沖田は少し考えながらも仕方なく入ることにした、そして荒川が座っている席の向かい側に座る

荒川「おすおっちゃん、どぶろくと炙り鯖くれ、沖田はどうするの？」

沖田「……甘酒と三色団子を」

男「おう」

沖田「…何が目的で？」

そう沖田は荒川を睨み付ける、荒川はキョトンとした表情で沖田を見る

荒川「別に、ただ俺沖田の事なんも知らねえからさ、だから知ろうと思つて」

沖田「え」

それを聞いた沖田は顔が赤くなる、それを見た荒川は少し引き気味な顔をしている

荒川「おいこんぐらいで顔染めんじゃねえよ、相変わらず可愛いやつだな」

沖田「染めてません」

まだ多少赤いが店主が酒とつまみを持ってきた

男「ほい、出来たぜ」

荒川「おほー来た来た、んじや早速」

盃を持ち前に出す、乾杯の合図をしろとの事だ

沖田「まさかしろと？」

荒川「他にある？」

だが沖田はそれには応じず酒を飲む

荒川「なんだよつめてえな」

沖田「馴れ合う気はありませんので」

そう言いながら団子を一口食べる、荒川をつまみを食べ酒を飲んだ

荒川「これから仕事する仲間じゃないか、そこまで警戒せんでも」

沖田「身元不在の怪しい人間を仲間と思つた事はありません」

それを聞いた荒川はふて腐れながら答える

荒川「しゃあないじゃん、両親はいなくなつて家抑えられたんだし」

沖田「え？」

荒川「まあろくでもない親だつたけどさ」

目の前の盃を軽く揺らしながらまた口につけまた離す

荒川「親父は賭け事、お袋は付き添いではまつててよ、俺はずっと一人だつたな、やべ辛気臭い話だつたな忘れてくれ」

そう手をひらひらとさせつまみを食べ外を眺める、現代とは違い綺麗な夜空が空に見える、それを見た沖田は申し訳なさそうな顔をしていた

沖田「…すいません」

荒川「いいつて、別に聞かれて困ることでもないし人生に苦味は付き物、それに少しの甘味があれば気持ちは楽になるのさ」

沖田「甘味ですか、たとえば」

顎に手を当て少し考えながらこちらを見るとピンときたのかニヤニヤし始めた

荒川「お前のような美人さんを口説くのかな」

沖田「な!? な、何を言っているんですか」

それを聞いた沖田は顔を赤く染めながら驚いた、荒川はそれを見ると吹き出し盛大に笑う

沖田「笑わないでください!」

荒川「いやわりい、ホントに真面目だから面白くてさ」

手で腹をおさえ笑い終えるまで待つ、沖田の方は顔を染めながら酒を飲んでいた

沖田「まったく、来るんじゃないかった」

荒川「まあまあ酒でも飲みながら話していこうぜ、世間話をさ」

その後大分飲んで緩くなったのかお互いに軽く話し合っていた

荒川「へえ〜壬生浪って新選組になる前の名前だったんだ」

沖田「そうですよ、幕府のお偉いがたが浪士を抑えられないので我々のような新選組、治安維持を目的とした組合を作り維持をしたのです」

荒川「ふ〜んそれじゃあの井上のおじちゃんとも長い付き合いなのか」

沖田「そうですね、試衛館から付いてきた人ですから、近藤さんに

付いてきた者の大半が隊長を勤めていますよ」

荒川「その流派つて今も教えてんの？」

沖田「まあそこまで深くは教えませんが今はあまりやってませんね」

荒川「それじゃ今度教えろよ、興味あるし」

沖田「まあ暇さえあれば」

荒川「よっしゃ！ラツキー」

沖田「ラツキー？」

荒川「まあようは運が良いってことさ」

沖田「そんなんが運がいいって、あなた基準低すぎませんか？」

荒川「うるせえ」

酒の力もあるのだろうか？多少の笑み話は出来るようになっている、沖田も途中で警戒はある程度解いているようだ

荒川「さて、そろそろいい時間じゃないか？」

沖田「そうですね」

そう言うと二人とも立ち上がり店主に金を渡し扉を開けて出ていく

荒川「ごつそさくん」

外の冷たい空気が身体中を包む、そして荒川は沖田の方を向いた

荒川「お前家何処？送ってやるよ」

沖田「別にいいですよ、そこまで遠いって訳でもありませんし」

荒川「いや女性一人で帰らせるのはちよつと」

沖田「私にそんな事を言うとは、あなた根性ありますね」

仮にも上司なのにと心の中で思う、それを聞いた荒川は照れ隠しに頬をかく

荒川「いやそれほども」

沖田「褒めてません」

ため息をつき呆れながら荒川を見ている、いつも同じでニヤニヤしながらこちらを見ていた

沖田「それでは私はこれで、道中お気をつけて」

荒川「わかったよ、んじやな」

そう二人は別れ歩いていく、だが沖田は途中で止まり荒川の方に振り返った

沖田「……あの」

荒川「お？」

それを聞いた荒川は振り返り沖田を見る、言いづらいのか口をモゴモゴさせていたが大きく息を吐きこちらを見た

沖田「今日は、楽しかったです」

荒川「そう言って貰えると嬉しいよ」

にっこりと笑うと相手も苦笑し振り返り歩いていく、荒川も早く帰るために自分が止まっている寺の方に歩いていくのだった

手柄

「二百一！二百二！二百三！」

新選組では毎日稽古が行われる、二百回素振りや隊士同士の試合などがある、やる日は別々に決められており今日は一番隊と三番隊が稽古しているようだ

隊士「う、腕が死ぬ」

隊士「相変わらず容赦無さすぎだろ」

隊士は二百回の素振りを終え腕がパンパンになったのか、疲れはて座っていく、その中に荒川は水筒を飲み立っていた

荒川「どうせキツいだろうと思っただらそれ以上だったな、俺の鍛え方が可愛く見えてきたぜ」

まるで軍隊並の訓練だ、木刀を振りすぎたせいか腕が膨らんでいる？「中々できるやないか」

荒川「お？」

自分の腕を眺めていると誰かから声をかけられた、声がした方を見ているとそこには大柄な男がいた

永倉「そーいや名乗ってなかったな、永倉や」

荒川「お、おう」

永倉「聞いたで、沖田を困らせてるってな」

荒川「あいつ不器用な癖に根が固すぎんだよ、だから合わなくてね」それを聞くと永倉は驚きその後笑いだした

永倉「ははは！隊長に愚痴をはく新人なんかうまれて初めてや」

荒川「あいにく素直な子でね、いい子だろ」

永倉「おもしろいやっちゃな、なら頭撫でてやろおか？」

荒川「絵面が酷くなるからいい」

そう手を振り拒否を表す

永倉「お前、名前は？」

荒川「荒川、荒川将吾だ」

永倉「なんや？その取って付けたような名前は」

荒川（ギクツ）

それを聞き若干焦る、実際そうだからだ

永倉「まあええわ、あまり沖田に無理させんなや」

荒川「お、おう」

永倉「ほな」

それを言い残すと永倉は去っていった

荒川「意外と鋭いおっちゃんだな、気を付けとこ」

沖田「どうやらついていけそうですね」

そしてその後には沖田が来た、いつものように羽織を着ており幼さを残しているが美少女と呼ぶに相応しい美貌が視界に写る

荒川「お、いたの？」

沖田「何ですかそれ」

荒川「いやよ、こう言う男苦しいところには来ねえもんかと」

沖田「私は一番隊の隊長ですよ？隊長が見てなきやどうするんですか」

荒川「まあ、言われてみりやそうだな」

沖田「まったく、私は朝会がありますので、見回りの時間は忘れないように」

荒川「はいはいわかってるよ」

沖田はそう言うとその場を去り荒川も体を拭いたら見回りに行くことにした

荒川「ふあゝやるっていったって何やるんだ？」

以外にも新選組の見回りは危険が多い、浪士には平然と殺されるし逆もあるのだ、今見取り図を見て町並みを把握しながら回っている所だ

荒川「そーいやここら辺あんまり見てないな、回るか」

そう言うのと茶屋から出て決めた場所に行く、だがやはり昼間なせいか浪士が大人しい

荒川「まあ流石にこんな真つ昼間からやるやつはいないか」

そう頭をかきながら見回りを続ける、すると路地裏で浪士と話し合っている身なりの良い男がいた

荒川「ん？」

ふと疑問に思い気づかれないようにその男たちの近くにより耳を済ませる

男「……」

?「……」

何を話しているのかはわからないが沖田から少しでも怪しかったら警戒しろと言われたのだ

和哉「怪しいなあれ、つけてみるか」

移動し始めたようにつけてみることにする

和哉（何か探偵みたいだな）

そう思いながらつけているとついた場所は治安が悪い浪士たちのたまり場だ、政府の治安維持が働いていない場所は幾つかありよく裏取引に使われる事がある、だが手を出そうにも繁華街の浪士の対応でいっばいいっぱいなのだ、そして話し合いをしている奴らを見てみると何か袋を取り出した、そして身なりのいい男はその袋から何かを取り出す、それを見た荒川は前に出る

荒川「はいはいそこまでだぜ？」

?「!？」

男たちはこちらを見て驚いた、そして荒川は相手を指を差す

荒川「今すぐにその手に持っているもの捨てな、それはあまりいいものじゃないぜ」

?「何の事やら、これは薬草です」

荒川「嘘つけ」

その返答に荒川は即答する

?「本当です、これはとりかぶどと言って薬草にもなるんです」

荒川「へえくんじゃ作り方言ってみろよ」

?「そ、それは」

荒川「トリカブト、使い方によっては漢方薬になるがそれ事態はか

なりの強力な毒をもっている、修治しねえとそのままあの世行きだぜ？」

？「修治？」

荒川「なんだんなこと知らねえのか、弱毒処理の一つだよ、まあ使う部位によって変わるけどな」

呆れながら腕を組みながら相手を見る

荒川「て言うかももう少しまとな嘘つけよ、医者が、こんな所で、薬何か受けとるか馬鹿」

？「まさか新撰組にこんなやつがいるとはな、元医者か？」

声のトーンが変わった、そしてその男が手を上げると周りから浪士が出てくる

荒川「俺はそんな固そうな仕事はしねえよ少し詳しいだけだ、それに俺はこういう荒事の方が合ってるし」

？「このまま逃がすわけにはいかない、死んでもらおう」

そして周りを囲む、荒川は余裕の表情を見ながら刀に手をかける

荒川「逃がしてはもらえなさそうだなこりゃ」

そして鞘からゆつくりと引き抜き構える、同じように浪士たちも抜き始めた

？「悪いが、死んでくれ」

その声を合図に浪士たちが襲いかかる、まず目の前にいる奴を対処する、大振りの兜割りを横に流すそして相手の顔に柄を当て怯ませ包囲から抜ける、そして怯ませた相手の後頭部に逆刃を当てる

浪士「ぐう！」

そのまま相手は倒れそうになり荒川はその背中に乗り次の浪士に切りかかる、浪士はそれを受け止め一旦下がり様に脚に刀を振るってくる、脚を上げそれを回避すると同時に一歩踏み出し腕を切る

浪士「あああああ!!？」

荒川「悪く思うなよ」

浪士「こいつ！」

そして横からまた切りかかってくる、荒川はそれを刀についてある血を相手の顔にかける、それを防ごうと腕を上げてしまい腹が少し空

いてしまう、腹に逆刃を振るう、相手は腹を抑え顎に柄を打ち付ける
浪士「くそお！」

そして最初に流し浪士がこちらに来る、横から刀が迫るそれを防ぐ
と次は腕を狙ってくる、それを鏝で受け止め相手を押す、そしてその
まま懐に入りは股間を蹴り上げる

浪士「はふ!？」

そして下がった頭に膝蹴りを入れぶっ飛ばす、相手はそのまま倒れ
動かなくなった

? 「ち！」

それを見た男は逃げ出した、荒川は直ぐに刀をしまい男を追い捕ま
える

? 「くそ離せ！」

荒川「さあ屯所まで来てもらおうぞ」

そう言い荒川はその男を屯所まで連れていった

沖田「よくやりました」

そう手を叩き近づいてくる沖田、荒川はそれを見て少し笑いながら
も頭を少し下げた

荒川「まさか貴族の人を毒殺しようとはね、怖いわーほんと」

沖田「よくある話ですよ、敵は浪士だけじゃないってことです」

荒川「まあいつの時代も変わらないものは変わらないのね」

沖田「？」

それを聞いた沖田はキョトンとした表情をすふ、荒川はそれを見て
笑いながら沖田をまたからかう事にした

お固い女性

荒川「それじゃ乾杯」

「乾杯！」

そして飲み屋で杯を掲げる一番隊の隊士たち、彼らは新撰組が力をつけ大きくなつた事を記念してこうして宴を開いたそうだ

隊士「聞いたぜ、お前最近有名ならしいじゃねおか」

荒川「おう、きちんと真面目に働いてるからな」

隊士2「ちゃんと刀の手入れとかはしとけよ、しないと直ぐに駄目になるんだからな」

荒川「いつもやってるよ」

隊士3「では、俺！歌いまゝす」

隊士4「やれやれ！」

たまにはつちやける人がいて困るが人切りやらなんやら言われてたまつてるのだろう、こういう羽目の外しているようだ、そして酒を飲みながら周りを見てみると沖田が端でお茶を飲んでいた、それを見ると荒川は立ち上がりその場に近寄る

荒川「おいおいせつかくの宴だぜ？何端で縮こまってんのさ」

沖田「別に小さくなつてません、あなたたちで勝手にやればいいでしょう？」

若干冷たく返ってきた、それを聞いた荒川は酒を置き沖田の隣に座つた

荒川「…何かあった？」

沖田「別に、何でもありませんよ」

そう前を見つめる沖田、その光が灯っていない瞳の先には合いの手とともに歌を歌っている隊士たちがいる

荒川「ほら話してみろって」

沖田「……」

荒川「皆楽しそうだぜ？ここにいるより混ざつた方が楽しいって」

沖田「…わかりません」

荒川「なにがよ」

沖田「…どうしたらいいのか、わからないんです」

そう自分が持っているお茶を上からの覗く、波を打ちそこに少し歪んだ顔が映る

沖田「皆楽しそうなのはいいことです、でもそれが楽しいのかわからないんです、宴の時なんかずっとです、かつてがわからずうようよして迷惑かけるよりここでじっとしといた方がいいんです」

そう見続けながら答える、荒川はそれにため息を吐くと沖田に近づきその頬を引っ張った

沖田「いた、何するんですか!？」

それを振りほどき睨む沖田、荒川はそれを呆れながら見ていた

荒川「まったくほんと真面目なやつが考えるのはいつも馬鹿な事だよな」

沖田「な、なんですって?」

荒川「お前はガキと最初に遊んだとき、どうしたんだ?」

沖田「それは、子供たちを助けたら自然と」

荒川「どうせその時も何していいのかわからずうじうじしてたんだろ?」

沖田「う」

荒川「んでガキが引っ張ってくれたと、んでそれがやっていくうちに楽しくなっていったと」

沖田「そうです」

荒川「人と遊ぶのつて以外と難しいのはわかるぜ?たださここは前の隊なんだ、その隊長がこんなことしてると皆心配するだろ」

沖田「心配はしませんよ、どうせ」

荒川「自分の事知らないから?自分から話しかけもしない癖に?」

沖田「っ」

荒川「たまににいるんだよ、人と関わりたくないのかこうやって端によって一人で寂しくやる奴、よく飽きないよな」

荒川「まあ女一人で居心地悪いし、話しかけにくいのも仕方ねえけどよ、やっぱ人生楽しい方がいいぜ?色々やってみろよ、賭け事とか

歌とかをよ、そうすればその陰キヤみたいなこともなくなくなるだろう
そう言うのと沖田を引つ張りだし皆の輪の中に連れていく

沖田「な、何を」

荒川「いいからこいつて」

そして隣に座らせる

隊士「あれ？隊長じゃないですか」

その声とともに隊士たちが沖田の方に視線を集める

沖田「う」

荒川（こいつ、以外と陰キヤ属性強いな）

どうやって打ち解けようかと考えていると一つの方法を思い出した、さっそく沖田の脇に手を入れると横腹軽くかいた

沖田「ひゃっ!」

普段からは考えられない小高い音が周りに響いた、それに隊士が驚き沖田は顔を赤く染めている

沖田「い、いや、あの、その」

荒川「く、くく」

隣から笑いを堪える声が聞こえる、沖田はそれを聞くとすぎさま裏拳をその顔に入れた

荒川「ふんご!」

沖田「なにするんですか!」

荒川「い、いや、何か話題を作って上げようかと」

沖田「普通でいいでしょうが!何でわ、私の脇なんか!」

荒川「ほら、よくやるじゃん、ジャークだよ」

それを聞いた沖田はフルスイングで荒川を顔を殴ろうとした

沖田「変態!変人!変態!」

荒川「変態二回も言わんでいい、せめて最後はエツチかスケベだろうが、お前そのアホげに似合う頭をしてんな、もうちよつと勉強してどうぞ」

沖田「うるさい!こ、この、女性にはいつもこんなことやってるんですか!」

荒川「いやお前が初め、あああ!わかった、謝るからその刀下ろせつ

て！」

沖田「こ、この」

荒川「ほ、ほら、ご自慢のかなとこな所がきょうちよおわ!？」

沖田「士ね！士ねじゃなくて死ね！浪士にでも切られて死ね！」

荒川「隊をまとめる隊長の言葉じゃないよねそれ!？」

そう鞆を着けた状態の刀を上げている沖田、顔は真つ赤に染まっておりどうしていいかわからずに荒川に振り下ろしていた、そうしていると周りが笑いだした

隊士「ははは！何だこれ、何かの芸か？」

隊士2「いいぞ隊長！そのまま頭叩いちまえ！」

隊士3「荒川が何発目に当たるのか掛けね？」

隊士「いいねそれ、んじや俺はな」

周りは何故か沖田と荒川を応援しはじめた、そしてそれは沖田が落ち着くまで続いたと言う

あの騒動の後皆と色々話し解散した後荒川は沖田と屯所でお茶を飲んでいた

荒川「いやー楽しかったな」

沖田「何処がですか!？まったくふざけるのも大概にしてください！」

荒川「でも楽しかったろ？あの後お前ちゃんと隊士と喋れたし」

あの後沖田は顔を隠し続けたのだが落ち着いた時には隊士とお喋りをしていて、まだ会話にぎこちなさはあるがそれでも大分上達した方だ

荒川「どう？変な気を使って避けてた自分について」

沖田「…確かにあなたの言うとおりかもしれませんね、隊のこころに知らずに避けていたのは軽率でした」

赤の他人と知り合いになるのは難しい、何か出会いがないと無理だ

しそんな出会いも運がないとやってこない、人の事を知るためには待つのではなく自分から動くことだ

沖田「……」

雲は多少あるが真ん丸な月が見えた、荒川はその月明かりに照らされた沖田の顔を見る、金髪に月明かりが反射し普段からは考えられない美しさを感じる

荒川「…ほんとべっぴんだねえ」

沖田「？何か言いました」

荒川「いや、何も」

そう誤魔化しお茶を飲みながらしばらく月を眺めていた二人であつた

嵐の予感

沖田「荒川さん、ちよつといいですか？」

荒川「お？どうしたよ」

いつも通りに屯所に顔を出していた荒川に声がかけられる、沖田の方は身長が低いため見上げる形になった

沖田「先日あなたが捕まえた人の住所が特定できました」

荒川「ああ、あいつね」

前捕まえたトリカブトを買い取っていた身なりのいい奴の事だ、確か毒殺に使うとしたんだっけか？

沖田「どうやら貴族の使いの者で、毒殺を阻止したことでお礼を言いたいそうです」

荒川「別にいいのに」

沖田「こう言のは大事な事です、あなたはその屋敷に行くように」

荒川「へいへい」

荒川「ほへえ、貴族の屋敷ってどれもこうなの」

目の前にはデカイ門にその奥にはこれまたデカイ屋敷が広がっている

沖田「知りませんよ、慣れて下さい」

荒川「こいつ、ほんとにノリが悪いな」

沖田「海苔？海苔なんて何処にもありませんよ？」

荒川「……」

沖田「な、何ですかその顔は」

荒川「いや、ちよつと、寒くなって」

沖田「？まあいいです、ちゃんと作法は守るように」

荒川「へいへい」

いつも通りに少しとおかしな会話を終えると沖田とは別れ中に入っていく

荒川「ほへえ、こりやまた」

周りをキョロキョロ見ながら驚く荒川、そこには砂利のような物が敷き詰められている庭や普通の庭もあるが綺麗に手入れされている、そして真つ直ぐ歩いていくと屋敷に上がる階段の所に使用人が立っている

男「お待ちしておりました、こちらです」

男はこちらに一礼すると振り返り歩き始める、荒川はそれについていき屋敷の中を歩いていくそして目の前にいる男が止まるところに振り返る

男「こちらでございます、どうぞ」

そう言うのと隣の襖を開けた、そこには綺麗な着物を着ている家主である男が正座をしながら待っていた、荒川は中に入り向かいにある座布団の上に正座する

家主「わざわざ来ていただいてすまない」

荒川「いえいえ」

家主「君たちが捕まえた男は家が最近雇った使用人でな、そちらで調べて貰った結果まさか何処かの藩の者だったらしいな」

荒川「はい、ですが他の事を割らせる前に自決されてしまいました、申し訳ありません」

家主「いや、毒殺を企んでいたのを阻止してもらったのだ、礼を言うのはこつちだ」

そう荒川が謝罪した後に家主も頭を下げる、そして家主が手を叩くと襖が開きその中から女性がお茶を荒川と家主の前にもってきた

家主「少し付き合っってはくれないか、色々と身近な事情を知っておきたくてな」

荒川「喜んで」

家主がお茶を飲んだ後に自分も軽く飲む、そして家主が話を切り出した

家主「長州と薩摩の動きはどうなってるのかわかるか？」

荒川「薩摩の方はあまり見かけませんね、ただ長州の者はたまに見かけます」

家主「そうか、その双方は仲が悪いと聞くがそうなのか？」

荒川「隊長の話だとそうみたいです」

家主「家の情報屋から長州の大物が来ているそうだ、厄介ことにならない方がいいが」

荒川「その時は俺たちの出番ですよ、そのための新撰組です」

家主「その時は任せる」

その言葉に答えるように頷く、そして家主はまた手を叩くと女が入ってきた、そして荒川の前に大きな包みを置く

荒川「これは？」

家主「命の恩人が羽織の下に着ている着物が少し痛んでいると知つてな、小さいながらのお礼だ」

荒川「ありがとうございます」

その場で手を付き頭を下げる、その後も少しだけ話が続いた

沖田「おや？その着物は？」

そう沖田は羽織の下に着ている着物をさす、赤い着物が羽織の下から見えた

荒川「家主さんから貰ったんだ、すんっごい着心地がいい」

沖田「貴族がそんなの送るなんて、てつきりお金かと思っただんです
が」

荒川「結構貫禄がある人だったぜ、最後に頼みたいことがあったら
伝えるとか言ってくれたし」

そう嬉しそうに話す、だが沖田の方は少し浮かない顔をしている

沖田「まあそれはそれとして、任務があります」

顔つきが変わる、荒川も次の言葉に耳を傾ける

沖田「昨日監視の山崎から情報がありました、今夜勤王志士がある
屋敷に集まります、目的は政府関係者の襲撃、今回の会議でその志士

を切る事に決めました」

荒川「やる、のか」

それを聞いた荒川は嫌そうな顔をする

沖田「もし嫌だと言うのなら体調が悪いと理由で休みを与えましようか？」

荒川「……」

荒川はどうしようかと悩んだ、昔と今とじゃ価値観が違う、現代の生活になれている荒川に取ってはどうにもやりづらいのだ

荒川「いやいい、やるよ」

沖田「…そうですね、決行は三日後の夜彼らが集まるときにやります」

荒川「おう」

沖田はそれを言い残すと屯所の中に入った、荒川は夜の風に当たりながら月を眺めていた

強襲

まだ太陽が上にある昼に荒川は町を歩いていた、今回の襲撃を感じられないためにもいつも通りに振る舞っている必要があったのだ

荒川「襲撃、ね」

荒川は今夜やるであろう襲撃の事を思い出していた、ここからそう遠くない場所にある蔵田と言う寺がある、そこには勤王志士が集まり何かやらかそうとしているのだがそれを止めるため襲撃を仕掛けるのだ

荒川「…まあ頑張りますかね」

そう苦笑しながら見回り続けいつも通りに振る舞い時間になるまで潰した

沖田「ここですね」

そう建物の影に隠れながら寺の様子を見る沖田とその隊士たち、その中には荒川もおり沖田の隣で覗いていた

荒川「一見普通の寺のように見えるがホントにいるのか？」

沖田「ちゃんと確認はしたので確かです、裏の方には永倉さんと齋藤さんが、正面は私たちでやります」

荒川「俺たち一つで大丈夫か？井上とか呼んだ方がいいんじゃない？」

沖田「あまり大人数で動くわけには行きませんが、それに井上さんはここ周辺の担当じゃないので気づかれるかも知れませんので外されました」

荒川「そりや仕方ないか」

確かに担当区域じゃないのにいるのはおかしいから仕方がない

荒川「人数はわかってんのか？」

沖田「20、それぐらいしかわかっていません」

どうやら敵の数も以外と多いようだ、それに乱戦になるだろうから狭い寺の中じゃやりにくいであろう

荒川「突撃の合図はまだか？」

沖田「まだです、大人しくしてなさい」

先に入った密偵の合図を待っているのだがまだ時間がある、だが待つのが嫌いな荒川は多少イライラしておりそれを見ていた沖田は呆れてため息をついていた、だがそんなやり取りをしていると寺の裏路地の方から明かりが点滅し始めた

沖田「！来ましたよ」

その声を聞きその場にいた全員が刀に手をかける、そして走り出せるように腰を低くする、そして沖田が駆け出すと同時に全員が走りだした

沖田「荒川、着いてくるように」

荒川「了解」

そして沖田が寺の入り口前に立つ、そして隊士が二人左右に別れ入り口前にたち寺の扉に手をかける、そして沖田の方を向くと沖田はゆっくりと頷く、返すように二人とも頷きその手にかけてある取っ手を引き扉を開ける

志士「だ、誰だ!？」

見えたのは廊下を歩いている二人と階段に一人、そして入り口前にいる一人がこちらを向き驚いている

志士「し、新選組だあ!!」

奥にいる志士が声を上げ叫ぶと全員が腰にある刀に手をかけ抜こうとする、だがその前に入り口にいた志士が沖田に切られた

志士「くそ！」

刀を引き抜き沖田に切りかかる二人、だが沖田は刀についた血を一人にかけ目を潰すともう一人の方に向けより相手が切る前にその首元を切り裂いた

志士「っ!？」

もう一人は下がり沖田から距離を取ったが沖田の前じや意味がなかった、距離をつめるように大きく踏み出しその心臓を貫いた

荒川（化けもんかよあいつ）

そう思いながら階段にいた志士たちを相手しながら心の中で呟いた、奇襲とは言え一瞬にして三人も殺してしまった、だが荒川はどち

らかと言うと驚きよりも多少の恐怖を抱いていた

荒川（あんなに笑顔は綺麗なのに…）

たまに見せる自然に出る笑顔、前から思っていたのだが何故沖田が新選組にいるのが前から不思議だった、目の前の男の腕を切り顎を柄でかち上げ気絶させる。

そして階段の上から志士が大量に表れこちらに切りかかる、流石に足場が悪いので後ろに飛び階段から下り次に備える、すると横に沖田が来た

沖田「あなたは左を」

荒川「わかった」

志士「ころせえ!!」

相手も刀を抜きこちらに迫ってくる、沖田は容赦なく敵を切り荒川の方は相手はなるべく殺さずに戦闘不能程度に止め戦っていた

荒川（くそ野郎共って訳でもないからな）

勤王志士はただ外国の武力を恐れ何もしなくなった將軍に愛想をつかし天皇を中心とした社会を作り上げとようとした者たちだ、彼らの気持ちもわかるし不満を持つのもわかる、彼らは彼らなりの考え方で世の中を変えようとしている

荒川（現代でも言いたかったけど、もう少し強気になれよな）

日本は外国にも負けない強みを持っている、相手の力が大きいのは確かだがそれでも駄目な所は駄目と言って欲しい、引け腰になり続けるような事にはならないからだ

荒川（そう言えばどうなるだ？結局成功するのか？）

荒川はこの維新が成功するのか知らない、志士が戦う理由や内政事情は沖田から聞いた事だし歴史もそこまで真面目にやってなかったのかどう収まるのかは知らないのだ

荒川「！」

だがあまり考え事も出来そうにない、相手にとっては俺は敵で俺は新選組だ、ならこの仕事はしなければならぬ

沖田「ほけるな荒川！」

荒川「っ、わかってるよ！」

あら返事をし階段をかけ上がる沖田に続く、下では他の隊士が戦っている、そして2階に上がると志士たちが刀を構え睨んでいた

志士「来たぞお！」

志士「中瀬さんの所に行かせるなあ!!」

だが志士たちはその場から動かなかった、沖田はそれを見ても直ぐに駆け出し距離を詰めようとするが荒川は不思議に思い遅れてしまつて沖田に追い付こうとしたその時、嫌な物が見えた

荒川「沖田止まれえ！」

沖田「！」

それを聞いた沖田は前に視線を集中する、すると志士たちの後ろに何やら変な物を持っている志士がい、それは鉄の固まりでそれをこちらに向けている、それを見た沖田は前に転がると大きな乾いた音ともに沖田の背中を何かを通りすぎ隣に合った襖を貫いた

荒川（鉄砲だあ!?)

そう、志士たちが持つていたのは現代でも主力となり続けている今と言うピストルであった、海外からの交流が増えてきてその時に武器などが流れ込んできた、それを見た荒川は直ぐに階段を上がり隣の襖を蹴破り中に入る、沖田も同じような事をしており銃から射線を切つていた

荒川（銃、志士、まさか）

荒川は銃を見て焦るよりも人の事を思い浮かべていた、剣の腕も銃の腕もたち後々大きな同盟を気づく筈であろう人物を

荒川「坂本、龍馬」

大事な事を失念していた、もうこの時代の武器は刀等の近接武器だけではないのだ、龍馬が仕入れた銃などが広まり今から銃が主軸と成つていく時代なのを忘れていた

荒川「確か何か土方も持つてなかつたっけ、何か長いやつ」

そう相手の様子を見ながら色々思い出してきた、気紛れに選んだ歴史講義のレポートのに明治維新の事を書かされたがその時に銃を持つている人間がちらほらいた、その人たちも後々これが主流になるであろうと予測しそれを手にしていたのだ

荒川「まずったな、俺もやるべきだったかも」

正直銃なんて避けれるきがしない、喧嘩の時も銃なんか出された事なんかないしそもそも平和な現代ではそんなものも出される筈がない、だがここはまだ戦う事が普通だった頃だ、夜で背中を切られるのが当たり前の世界なのだ、相駆らわず平和ボケしている自分に頭を抱えるが今はそれ所じやない

荒川（とにかくあんまり前には出れねえ、何とかしねえと）

襖を開け様子を伺いたいが頭に当たったら終わりだ、幸い床が木のため軋む音が聞こえるので近づいてくるのはわかるが相手も余程用心深く中々視界に入ってこない、どうしようかと錯誤していると隣の部屋にいる沖田に目がいった

荒川（何かアイツ顔色悪くないか？）

いつもならこんな事になっても落ち着いているのだが何だか今日は焦り気味だ、荒く息を上げ額にも汗が出ている

荒川（風邪じゃないな、どちらにしても早く決めないと）

このままでは相手に逃げられてしまう、そうなったら新選組の評判が下がるためなるべくそんな事にはしたく無い

荒川（しゃあない、行ってみるか）

荒川が入った部屋には小さな机と座布団、装飾品の壺や掛け軸がある、どれも屋敷にありそうな物で荒川はまず机をひっくり返しその上に座布団を乗せそこに自分の小刀を突き立てる、すると座布団と机が引っ付くのでそれを安定させるため掛け軸を取りそれに巻き付け固定し小刀の柄を持った

荒川（よし）

そして入口前に戻りその場で大きく深呼吸する、そして沖田の方を向くところらの意図がわかったのか小さく頷き刀に手をかける、それを見た荒川は姿勢を低くして机を前に出し突っ込んだ

志士「な!？」

相手も音は聞こえていたであろうが流石に何をしているのかまではわからない、それに驚きながらも発砲するが即席の盾で守り怯まず駆けだす

荒川（好きただけ撃たせて弾込める時にやる、これしかない！）

荒川が無事なのは志士と距離が空いているからだ、正直こんな即席の盾では至近距離で撃たれたら貫通して終わりだ、一回でもタイミングを外すと終わりだ、相手の距離に気を付けながらも撃たれ続ける、腕に衝撃が来るが気にせずそのまま出来るだけ近づいていく、すると相手が引き金を引いた時金属が軽く叩く音が聞こえた

荒川（いま！）

そして思いつきり盾を相手に投げる、それを見た沖田は駆け出した、相手は弾を込めようとし矢先机が飛んできたせいか隙が出来てしまいその腕持っていた銃は荒川に叩き落とされそのまま腕を切り裂いた、もう一人の志士も銃を捨て刀に手をかけたがそれを抜く前に沖田に首を貫かれた

志士「あ、あ」

志士「ちくしょ」

腕を切られた志士は痛みにより気絶しもう一人はもう息をしていない、それを見た荒川は大きく息を吐き自分を落ち着かせた

荒川「何とかなったな」

沖田「ええ、そうですね」

そう返事をする沖田だったがやはり様子がおかしい、さつきから顔は青ざめている

荒川「おい大丈夫か？」

沖田「心配いりません、それより行きましょう」

沖田は顔を伏せ荒川の横を通り過ぎ奥に向かつていく、そんな様子をほっておくわけにも行かず一緒に向かう事にした、奥には大きな部屋があったが案の定部屋はもぬけの殻で外を見るための窓が大きく開いていたのであった

沖田「逃げられましたか、せめて顔さえ見ればやりようもあるのですが」

荒川「仕方ねえよ、相手は銃持ってたんだから」

あんな狭い場所で強行突破するわけにいかない、下手に動こうものなら銃で撃たれ終わりだ、だがやはりスッキリしないのか顔を曇らせ

ながら刀を鞘に納め荒川の方を向いた

沖田「取り合えず下に行きましよう、終わっていると思えますし早く二人と合流した方がよさそうです」

荒川「そうだな」

荒川も刀を収め先に行く沖田についていった、だが荒川は沖田の顔が辛そうな事だけは心配だった

あの後残党は齋藤と永倉が片付けており隊士たちはその場の跡片付けをしていた、そんな中に荒川もおり手伝っていたがやはり死体が見慣れないせいなのか表情も暗くいつもの元気がなくなっている

荒川（やべ、吐きそう）

腹は裂かれ腕は切られ寺は地獄と化していた、廊下も部屋にも返り血がべったりとくっついておりあまり見ている物ではなかった

荒川（嫌な時代だ）

そう常々と感じ吐きそうになりながらも隊士と一緒に片づけを続けた、そして部隊長たちは寺の外に出て三人で話合っていた

齋藤「逃がしちまったか、まあドンマイ」

永倉「いやこれはわしのせいや、逃げた連中はおったが全員は捕まえきれなかった」

沖田「いえ、私が手こずってばかりに、申し訳ない」

齋藤は中の援護に向かい永倉は外を見張り出てきた志士を倒していたのだが、永倉がいない別の場所で方位を突破され逃げられたのだ
永倉「にしても中々の腕前やな、置いていた隊士が一撃で切り伏せられとる」

そう隊士の死体を見る、左肩から斜めに一撃、それ以外に跡ははななくきれいに切られていた

齋藤「最近志士の動き活発だしな、名のある剣豪だったのかも知れないな」

永倉「それなら沖田、お前運がよかったのかもしれんどぞ」

沖田「え？」

「そう疑問の声を上げる沖田、永倉はそれを見ながらも言葉を続ける
永倉「自分でもわかっとなのやろ？さっきから顔色悪いで」

沖田「」

その言葉を聞いた沖田は顔を背け表情を悟られないようにするが
それをするには遅すぎた

斎藤「今日はもう休みな、後はやっといてやるから」

沖田「ですが！」

永倉「ええからはよ行き、無理すると本間に倒れるで」

二人からそう言われるがそれでも沖田は帰ろうとする素振りを見
せなかった、再び沖田が口を開こうとしたその時

永倉「おう荒川、ちよつとこつち来てくれんか？」

沖田「！」

荒川「ん？」

それを聞いた荒川は作業を切り上げ永倉の前に駆け寄る

荒川「どうしたの？」

永倉「沖田を屯所まで連れて行ってくれんか？後はわしと斎藤が
やっつく」

荒川「わかった」

沖田「ちよつと待って下さい！」

二人のやり取りを見ていた沖田がしびれを切らしたのか間に入っ
てきた

沖田「そんな事よりも今から逃げた奴らの後を追うべきです、今か
らならまだ」

永倉「こんな暗いんじや探そうにも探せんやろ、それに銃持ってた
んなら深追いは危険やで」

沖田「っ！」

斎藤「それに下手したら剣の腕も立つし、それに何処行ったのかも
検討つかないんじや無理だよ」

沖田は意見を出そうとはするが何も言い返せない、悔しそうに顔を

したに向け手を下に伸ばし握りこぶしを作っていた

荒川「まあまあ大丈夫だつて、次があるさ」

沖田「っ！」

その言葉を聞いた沖田は嫌そうな顔をし顔を伏せたまま黙っている、その場にいる男たちはどうしようかときよろきよろして目を合わせるが打開策がないのか困り果てている

沖田「コフっ！」

すると突然沖田が大きく目を見開き口に手を当て咳をした

荒川「ほら体調も悪いんだからよ、これ以上長いはよくないって」

沖田「…！」

そう沖田に駆け下り言葉を駆けるが覗き込んだ沖田の顔は苦しうだった、何かに耐えるような表情をし口元を抑えながら咳を続けるとその場に崩れた

荒川「お、おい沖田」

永倉「あかん、齋藤、先生起こしてこい!!」

齋藤「わかったよ」

永倉が大声を上げそれを受けた齋藤が寺から離れどこかに行ってしまった、荒川は崩れた沖田を心配し視線を合わせ声をかけ続ける

沖田「コフっゴブっ！」

荒川「おい沖田、だいじよ！」

そう沖田を覗き込むよう沖田の顔を見る、そこには手から血が滴り落ちていつてる沖田の姿があった

同じ失敗

灰色に染められた空から落ちてくる雨、そんな天気の中一つの屋敷でその光景を眺めている男がいた、屋敷の縁から外を見続け何やら難しそうな顔をしていた

荒川「肺結核なんて……なんであいつ言わなかったんだ」

沖田が血を吐き続けた後倒れた、荒川たちは急いで沖田を新撰組お抱えの医者まで運んだ、そして荒川は今沖田が起きるまで待っている所だ、荒川のすぐ後ろの部屋では沖田が寝ている

荒川「……もう結構たつな」

あの夜の襲撃から倒れおそらく今は昼を過ぎてている、呼吸は安定して寝ていたがそれは今は症状が安和しているだけ、また同じように働き始めたら倒れてしまうだろう

荒川「薬の成分はわかるがこんな時代じゃ無理だ、取りあえずしばらく安静にさせとかないと……」

？『性格に不適なわりによく考えておるな』

その声に思わず聞こえてきた方に振り返る、そこには黒の服にフードを被った老人が立っていた、この時代にあわない西洋の古びた服装で不気味だが荒川はその姿を見た途端その老人を睨み付けた

荒川「またお前か」

？『汝は何故救済を与えようとする？』

荒川「わりいか？友達が死にそうになってるのを見てほっとけるか」

？『今に至るまで行った救済、大して救いに足りていなかったが』それを聞いた荒川は齒を食いしばり目を開き相手を睨み付け刀を抜きその老人に振りかぶる、だがその刀は当たらずただ空を切るだけだった

？『荒くなつたものだ、果たして救済が必要なのはどちらなのか』

荒川「言葉を選んで喋ろよ、あんまり下手な事言つてると殺すぞ」

？『汝がか？己に向かう者を殺める事を好まぬ者が？』

荒川「どうしようもない屑ならやっつてだろうが」

？『否定はせんか』

荒川は多少イラつきながらも刀を納めた。ただ老人を睨み続ける。

荒川「しつこい野郎だ、他にやる事がなくて一般人にちよつかいかけることが趣味になったのか？」

？『我が存在ゆえ我に協力を求める声はあつた、だが汝を定めてい
るのは感心があるゆえだ』

荒川「感心だ？お前のお眼鏡にかなう事何かしてねえよ」

？『我が感心は汝にわからぬのは当然の事、ましてや無縁の者の思
考などわからぬのは常、汝のように』

確かにそうだ、今まさにこの老人が考えている事がまったくわから
ない、何故ここにいるのかも何故自分についてくるのかもわからない

荒川「取りあえず俺は自分出来る事をやり続ける：たとえどんな
結果だろうが受け止めてやるさ」

？『……』

荒川は老人から目を離し座り直し外を眺める、老人の方はそれを
黙って見続けた

？『その答えを出し続ける限り、汝に救済は訪れない』

荒川「別に要らねえよそんなの」

？『その救済の意味を知らぬからだ』

荒川はため息をつき一言文句を言おうとまた老人の方を向く、だが
そこには誰もいなかった

？『考えておくがよい、救済とは汝が思っている程甘美ではない』

そう頭の中で老人の声が響いて聞こえてくる、だが老人は何処を振
り返つてもいなかった、ため息を吐きその場から立ち上がるとすぐ近
くにある部屋の襖を開ける、沖田の容態は変わらず安眠しているよう
だ

荒川「：偉そうにいいやがつて、死神みたいなくせによ」

そういう中に入り沖田が起きるまで自分も休むことにした、襖を閉
じ部屋の角に座り壁に背中を預けそのまま目を閉じた

沖田「…?」

月明かりがうつすらと屋敷を照す夜の中沖田はゆっくりと目を開いた、沖田は寝たまま天井をしばらく見つめたため息をついた

沖田「…またか」

誰もいない天井に向かってため息のように出てしまった、こうやって倒れるのも何回目だろうか、体を起こし目の前にある掛け軸があるがこれも何回目だろうか、そして横に目をやると布団の横には自分の隊服が置かれていた、綺麗に畳まれておりその横には刀も置かれている

沖田「あ」

視界の端に映った人影を見て拍子をつかれたのか声が出てしまった、座禅して刀を肩に立て掛け腕を組み小さな寝息をたてながら静かに寝ていた

沖田「…まさかずっと?」

自分が倒れた時からずっとここにいたのか?だが何故ここにいるのかわからなかった

荒川「…ん?」

私の視線に気づいたのか荒川が目を覚ました、目をパチパチさせゆっくりとこちらに目を合わせた途端荒川が立ち上がりこちらに駆け寄った

荒川「大丈夫か?もう辛くないか?」

少し声が震えながらもこちらの肩を掴み私の身の心配をしてきた、近い、色々と何か近い

沖田「だ、大丈夫です」

荒川「ほんとだな?」

さらに顔を近づけてきた、私は思わず顔を反らしてしまう

沖田「ち、近いのですが」

荒川「ああ、悪い」

それを聞き荒川は私から離れていった、そして深く深呼吸をし自分を落ち着かせ気持ち切り替える

沖田「どうなってます?」

荒川「え？…ああいやお前が倒れてからずとここにいるから今どうなってるのかはわからねえ」

それを聞いた沖田は思わずため息をついてしまった

沖田「…何をしてるのですか？私のお守り何かしてる場合ですか？」

私の護衛など必要はない、そんなことに暇を当てる位なら逃げた奴らの跡を追うのが先だ

荒川「それは、お前が心配で」

沖田「なんて女々しい、そんなくだらない理由でここにいたのですか」

荒川「くだらなっ、人が倒れて心配するのが悪い事なのかよ」

沖田「そうでしょう、たとえ身分が高かろうが関係なく殺されるこの時代にそんな考えでは早死にしますよ？」

荒川「忠告どうも、けど俺は変える気はねえよ」

沖田「こいつつ、人がせつかく教えてやっているのに、殺しあいの立場に立っていると言うのが理解出来ないようですね」

荒川「理解してるよ、だけど俺は…」

沖田「いえ理解出来ていない、その証拠にあの寺ではほとんど殺してませんよね」

荒川「そ、それは」

沖田「自分から新撰組に入っておきながらこの始末、何故あなたがここに居るのが不思議でたまりません、いつそ抜けたらどうですか？」

荒川「…それ、俺に死ねって言うてるのか？」

沖田「何を…！」

熱くなりすぎて思わず考えなしに言ってしまった、咄嗟に手を口に当てる

沖田「いえ、そんなつもりは」

荒川「…わかってるよ、そんなつもりで言った訳じゃないのは」

優しい笑みを浮かべ気にするなど手を振っている、そんな彼を見て頭が冷えたのか下を向き彼と目を会わせられなかった

沖田「…取りあえず見回りに戻ります」

荒川「馬鹿まだ起きたばっかだろうが、大人しくしとけって」

沖田「これだけ休めれば十分です、早くしないと逃してしまいます」

荒川「そんなの斎藤と永倉に任せとけって、別にお前じゃなくても」

沖田「うるさい！」

そこから先は聞きたくなかったのか思わず声を上げて静止させた

沖田「これは隊長命令だ！これ以上止めるのなら切り捨てる！」

荒川「沖田…」

もう聞きたくない、いや聞きたくない訳じゃない、ただその顔で話を続けて欲しくなかった、その顔で言われるのがどうしても胸が辛くなる

荒川「…わかった、けど俺も連れてけ」

沖田「…好きにしなさい」

そう適当に返事し荒川たちは病室を後にした

荒川「…」

沖田「…」

雨がまだ降るなか二人はただ傘をさしながら道を歩いていた、打ち合わせをして決めた訳でもなく怪しい所と言う訳ではない、ただ適当にぶらつき見て回っているだけだ、しかもお互いに無言を貫き続けている、今まさに沖田の言っていた無駄な時間が過ぎているだけだった

荒川「…」

沖田「…」

さっきの喧嘩のためか目も合わせずらく沖田の後ろをただ荒川がついていつているだけだ、すると荒川が沖田の横にならぶ

荒川「…一つ聞いて言いか？」

そう沖田に投げ掛ける、沖田は荒川の方をちらりと見て次の言葉を待った

荒川「病人なのに、なんで新撰組続けてるんだ？」

それを聞いた沖田は下を向いてしまう、荒川は取りあえず返事を

待っていたがしばらくたつても返事は返ってこなかった

荒川「んじや俺が何でお前の看病していたのか知ってるか？」

沖田「え？」

荒川「知りたい？」

沖田「…はい」

それを聞くと荒川は顎に手を当て呟き始めた、そして考えがまとまったのか沖田の方を向いた

荒川「お前が心配だっというのは本音だ、お前のように無理してるやつ見てると一人にさせちや駄目だと思っつてよ」

沖田「…何故？」

荒川「俺さこんな性格だろ？最初はお前のような奴いても一人にさせてたんだがよ、そういう奴ほど一人にさせちや駄目だったんだ、そいつは何かを悩んでいる考えているんだけど幾度経つても答えが出ない、結局そいつは心の中に悩みを抱えたままどっかいつちまった」

思い出すは最初に生き返った時、聖杯戦争と呼ばれる戦争の時に出会った人たち、巻き込まれる形でそれに参加していた、そんな時一人の騎士と出会った、その騎士は最後まで自分が行った過ちを正しいいたがために自分の考えを譲らなかつた

？『あなたに何がわかる！自分がしてしまった過ちを正そうとするのが何が行けないんですか!？』

佐藤『そんな事をしてても何も変わらねえ！自分がした事は戻らないしそんな事をしてても結局他の奴がその国を終わらせる、ただ終わる時がお前の時だったってだけだ！』

彼女は重荷を背負いすぎていた、彼女は王に向かなかつたのは事実、だが彼女は最後まで王という仕事をしていた、ただそれがさまざまな陰謀により瞑れてしまっただけだ

？『うるせえ！俺は父上が王位さえ譲ってくればそれでよかつたんだ、なのに俺の事を認めてくれなかつた！』

佐藤『お前の事をよく知っていたから言えたんだよ、何でそう嫌な意味でとらえる』

その王の子は認められてほしかった、だが彼女は先走り自分を認め

させる行為はせずただ力で訴えてしまった

？『私は別に怨んではいませんが、あの場所で私の未来を見て知った時から私は決めていました』

佐藤『わかんねえよそれ、そんなん、お前が可愛そうなだけだろ』
聖女は理不尽な殺され方をされても怨みの一つも持ち合わせてはいなかった、佐藤は何故そんな考えに至るのかもわからなかった

荒川「ほんとに色んな奴がいたな、何か海であいつと会ったり、新宿であいつらと会った時もあった、だけど俺は一つも彼女たちの考えをあまり理解してやれなかった」

ため息混じりで前を見続ける、雨はただ降るばかりで傘に叩きつけられる水の音が響くだけだった

荒川「結局彼女たちとはグクシヤクしてよ、俺その人に合う言葉の出し方がわからねえからなんかこう、モヤモヤした状態でわかれてよ、そのモヤモヤが嫌になったから考えるより思った事で動いてるんだ、うじうじするよりも行動って奴だな」

沖田「…」

荒川「結局俺はわからなかった理由は彼女たちと話し合いをしなかったからだとわかったんだよ、それが理由でお前が何か悩んでいる時はなるべく話し合いたいだけだ」

沖田「…そうでしたか」

彼は自分が不器用な人間だと言うことがよくわかっている、だからさっきの喧嘩でも彼は特に怒ることはせず失言を流してくれた

沖田「あの」

荒川「お、なんだ？」

沖田「その、さっきは…ごめんなさい」

荒川「別にいいよ、意外とカチンときたけどな」

若干嫌み混じりの笑みを見せると沖田はそれを気まずそうに見ず視線を反らした

荒川「まあお前も色々あるんだろ？そこら辺俺は知らないからいつかは教えてくれるとありがたいな」

沖田「…少し時間をください」

荒川「おう」

多少の仲直りが出来たためかお互いに喋りやすくなった、そうした気づいたら雨は上がっているがまだ空は曇っている、地面はいくつもの水溜まりができそこを歩いていたためか自分達の裾が泥まみれになっっている

沖田「見回りはこれぐらいにしてそろそろ返りましょう」

荒川「いいのか、別に見回りは続けてもいいんだぞ？」

それを聞いた沖田は荒川の方を向き首を横に振った

沖田「いえ天気もこれですしまた降られては面倒です、斎藤さんたちと合流して進展がないか聞いた方がいいでしょう」

荒川「おお頑固なお前が譲るとはな、道中で何か起こりそう」

沖田「どう意味ですかそれ」

その言葉を聞いた沖田は荒川に詰め寄る、荒川は両手を前に出し手を振る

荒川「いやいや何でもない、んじや帰ろうぜ」

沖田「あ、待ちなさい！」

逃げるようにその場を立ち去る荒川、その後を追うように沖田が刀に手を掛けながら怒るように荒川を追った

歴史とは過去の偉人たちが行った偉業、革命、発明等を後世に伝えるための知恵である

歴史とはすなわち過去に名を轟かせた者の物語でもある、それが本当なのかはついぞ知らずただ記されるだけ

先生「と言うように新選組が作られました、そしてそこから新選組は力を付け始めていました、そしてそんな時に沖田総司が出会ったのが彼です」

生徒「どんな人だったんですか？」

先生「特にわかっていませんがその者はおそらく浪志だったと思われます、性格も荒く同じ浪志を見つけては喧嘩ばかりしていたようであまり人柄もよくなかったと思われれます」

生徒「そんな二人がどうして出会ったんですか？」

先生「この時浪志が街をはびこっていたので新選組が見回りなどをしていた時一番隊の隊士に見つかり喧嘩になったそうです、腕がたっていたらしく隊士では相手にならなかつたらしくその時沖田が対応したと記録されています」

先生「これがのちの一番隊副隊長、荒川将吾と呼ばれた身元不明の剣豪です」

そして今まさに未来に存在した人物が、過去の歴史に名を刻まれた

護衛依頼

荒川「…」

まだ日が指し眩しい光が地面を照す中荒川はある場所に来ていた、前に毒殺しようとした計画を止めた時にお礼にと訪れたあの屋敷だ、相変わらず立派な塀があり門も荷車が通りそうな程大きくその前には二人ほど門番がいる、その門番に近づき中に入るための手続きを行う、話しは通してあるため直ぐに中に入ることができ客間に案内されて少し経つと家主である貴族が中に入ってきた

貴族「まさか君が訪ねて来るなんてな、何かあったか？」

そして向かい側にその貴族が敷いてある座布団の上に正座で座る、荒川の方も同じように座る、その顔はいつもと違い表情を変えず真っ直ぐな目をしておりそれを察したのか相手が切り出すのを待っている

荒川「…頼みたい事があつてきました」

沖田「あなたまた問題を起こしましたね！これで何度めですか!?!」
朝の眩しい太陽が空にあるなか大声で沖田が荒川に怒鳴っていた、沖田の方は荒川より身長が足りないため上を見上げて説教している
荒川「いや悪かったって、まさか投げた先に商店があるとは思わなくて」

沖田「刀を使いなさい刀を！何でわざわざわざわざ体術で戦う必要があるんですか!?!」

荒川「いいじゃねえかよ俺まだ刀の扱い馴れてないしき、あまり使

うと直ぐに刃溢れしちゃうし」

沖田「刀とはそう言う物です！少なくとも商店の物を壊すよりは断然いいでしょう!?!」

荒川「うう、何も言えない」

それを言われて口が出せないのか押され気味になる荒川、沖田の方は言いたいことがまだあるのかそのまま続けている

隊士「またやってるよ、副隊長と隊長の喧嘩」

隊士「朝っぱらからうるさいよな」

沖田「そこさばらない！素振りの回数増やしますよ!」

その声が耳に入ったのだろうかそちらに指を指し怒鳴り付ける、二人の隊士の方は不味いと言うような顔をして素振りを続けた

沖田「まったく、朝っぱらから呼び出されたと思ったらこれとは、何のために副隊長を任せたと思ってるんですか!?!」

荒川「いやちゃんと責務は果たしてるよ、ただどうしてもこの手が…」

沖田「何が責務ですか！隊士連れては遊びに行きまくってますよね!?!」

荒川「いやほら、ガス抜きと言うか気分転換と言うか」

沖田「周何回行ってるんですか!?!こちらの費用も考えてください!」

荒川「す、すまん」

そう頬をかき苦笑いを浮かべる、沖田はそれに呆れてしまい手を顔に当て下を向く

沖田「まったく、毎日そんな事されてはこちらの身が持ちません、次からは気を付けるように」

荒川「へーい」

沖田「そこははい、でしょう!?!何ですかへーいって、ふざけてます!?!」

荒川「いいだろうがへーいでもはーいでも意味合い同じ何だからよ」

沖田「まったく違いますよね!?!」

荒川「相変わらず固いやつだな、一緒に夜を共にした中じゃないか」
それを聞いてしまった沖田の顔が見る見るうちに赤くなっていく

沖田「ば、ばば馬鹿！誰もあなたとなんか寝てませんよ!」

荒川「…俺は別にそんな事は言っていないんだかな」

沖田「あ」

思わず自分の口に手を当てるがもうすでに口から零れてしまった、

荒川はニヤニヤしながら沖田の方を見る

荒川「どうたのかな」ムツツリスケベの沖田君？何を想像してるのっおわ!？」

顔を真っ赤にしどうしたらいいのかわからなかったのか取り合えず揚げ足を取るバカを叩きのめしたいのか刀を鞘事振っている

沖田「死ね！もう死ね！タンスに小指ぶつけて死ね！」

荒川「ごめんって！やりすぎたから!!」

荒川は逃げ出しそれを追う沖田、もう見慣れてしまったのか隊士たちは笑いながら眺めている

齋藤「おーまたやつてるよあの二人」

永倉「今日も騒がしいやつちやな」

それを見ていた二人も思わず呆れながらも何だか楽しそうにそれを見ていた、そしてそこにある人物が現れる、綺麗な白髪を生やしそれを後ろにまとめている、服装は沖田たちと同じだ

齋藤「井上さん、おはよ」

井上「齋藤か」

井上源三郎、沖田と同じで試験館以降から近藤についてきた人物で今は六番隊の隊長を務めている、実力は沖田たちにも引けは取らず隊長の名に恥じない実力を備えている

井上「奴は確か試験の時の」

永倉「せや、最初は妙なやつやったのに、今じゃもう一番隊の副隊長や」

齋藤「でも対したことはなさそうなのよね、不思議な感じはするけど戦つてるところを見てみても腕はあまりなさそうだけど」

永倉「今になつて不思議に思うんやが何で井上はんは何であいつを

通したんや」

井上「…」

永倉がそう投げかけるが井上からは返事はこずただ荒川をじつと見ている

齋藤「井上さん？」

井上「一つだけ言っておく」

その声を聞き永倉も井上の方に振り向く

井上「あいつは普通じゃない、気は絶対に許すな」

その言葉からはとても嘘には聞こえなかった、まじめな井上がこうも警戒する人間はさほどおらず三人は荒川の方を凝視する

齋藤「藩の密偵か？」

永倉「それはないやろ、山崎が調べた結果なんもなかったしの」

齋藤「何も無いのが不思議だろ？普通何処から来たとかはわかるだろ」

永倉「せやけど」

齋藤「それに誰にも自分の事話してないし、怪しすぎるでしょ」

永倉はそれを聞いて口が出せなかった、確かに彼が身の上話をしたのを聞いたのは誰もいない、それにたまによくわからない言語を使う上に最初に来た時の服装もかなり変だった

井上「服装から見ると南蛮の服装であった、だが剣技は紛れもなく日の国の物だ」

齋藤「何でそんな事がわかるんで？」

井上「実際に私は彼と戦っている」

井上は試験の時を思い出していた、いつものように何も誇りもなく決意もない奴らの相手をしていて、彼もそれと同じでとても本気でここに入ろうとしている雰囲気ではなかった、しかもボロボロな刀の上に服装も日の国の者ではない、流石の井上も呆れ腕を切り帰らせようとした、だが

井上「奴の腕を切り落とそうした時、動きが変わった」

少し剣技をかじった若造かと思ったがあの一瞬だけは違った、終わらせようとし彼に刀を振り下ろした時その一瞬だけゾワリと何かを

感じ直ぐに下がった、その時の奴の顔は今でも覚えている、最初のふざけた雰囲気は消えこちらを威圧する真が通った目でこちらを威嚇していた

井上「恐らく手を出していたら相打ちだっただろう」

齋藤「まじで？」

あの井上がそこまで言うほどとは思えなかった、外側だけ見てみればただの明るい人間の筈だ

井上「奴が何者なのかは知らん、だが見た目に騙されるな、奴には何かある」

永倉「そこまででええんとちやいますか」

そう永倉が止める

永倉「あいつがどうであれ今は味方や、今まで怪しい動きはなかった、それに」

永倉は荒川の方を見る、そこには正座をさせられ沖田は変わらさず真つ赤な顔で説教している

永倉「見てみいあの沖田があんなにはしゃいどる」

試験館以来、あまり人前で笑わなかった沖田が周りの目も気にせず今を楽しんでいる、それはあの男が沖田についてくれていたおかげだ

永倉「一番警戒しとった沖田がああなんや、大丈夫やって」

齋藤「だといいんだがね」

そんな彼らの会話を知らないであろう二人は満足したのか喧嘩をやめ仲良くお茶を飲んでいた、そんな二人に駆け寄る隊士が見えた

隊士「あの、お二方に会いたいと言う人がいますけど」

沖田「はい？」

荒川「……」

沖田「まさかあなたご指名の依頼があるとは、大丈夫ですか？」

左手には皿を右には箸を持ちながら向かい側にいる荒川に問いかける、荒川の方は味噌汁を一口飲むとこちらを見た

荒川「大丈夫だって、護衛の依頼はそんなに珍しくもないんだろ、任せろって」

沖田「簡単に言いますけどそんなに楽じゃありませんよ？それに今回は依頼した相手が相手です」

沖田はご飯を食べながら一緒に焼き魚も食べる、夜のためか周りの席は騒がしく酔っぱらっているのかわいいわい騒いでいる、そんな中二人はただ静かに食事をしていた

沖田「あなたも顔見知りですからしつてるでしょうが貴族、つまり力を持っている権力者です、この人は外国または他県からくる物を輸入しそれを町の人たちと契約し商品を買っています、取り寄せるのは食品等もそうなのですが今は食料を蓄えていますね」

荒川「まあいづんどんぱちが起きてもおかしくないな」

着々と勤王志士も集まり始めている、そのためか新撰組の仕事も増え始めそれにこちら側にも怪我人が目立ち始めている、幕府の方も同じように準備を進めているしいつ始まってもおかしくはないが

荒川（まあ坂本らの話し合いがあるまで大丈夫だと思うが）

確か自分の記憶が正しければその話し合いがあつた後に改革が起きた筈だ、だがその大物たちももうここに来ていてる筈、気を抜いたらいけないしなおかつ自分も殺されないように立ち回る必要がある

沖田「今回の件で腑に落ちないのが相手が詳細をあまり話してくれないのが解せません、まあ説明不足なのはいつもの事なんですけどね」

そうあきれながらも味噌汁を一口のみ具材も一緒にかきこむ、沖田たちの立場からしてみれば隠し事などあまりしてほくないのが本音だが相手もそうはいかなかった、内容によっては色々自分達のふ不味いことにつながるかもしれないし何よりあまり信頼できないものに深く事情を知られたくない、何処に弱みがあるのかわからないので手の内を見せたくないと言うのが依頼主の本音なのだ

荒川（まあ知ったこつちやないけど）

そうあまり関心が無さそうに味噌汁を飲み干しおかわりを要求する、いくら心配しても今に始まったことじゃないし仕方ない

沖田「気を付けてくださいね、危険がありそうなら引き返す事、命あつての物種なんですから」

荒川「はいはいわかつてるよ」

沖田「ホントにわかつてるんだが…すいませくん、お団子を一つ」

呆れながらも大好物の団子を頼む沖田、その時見せた荒川の顔の變化には気づく事はなかった

荒川「来ましたぜ」

荒川は貴族の男の指示された宿に来ていた、そこは彼が管理している場所でそれほど大きくはないが場所が人が通る表側に玄関があるが避難用と隠れながら入れるために裏口がいくつかある、階層は二階まででここにはお抱えの私兵のほとんどを占めている

男「来たか」

二階にある一室に入るとそこでは至って普通の部屋で窓があり壁には掛け軸がある、畳の上もちゃぶ台と座布団がありその座布団の上に貴族の男が座っていた、ちゃぶ台の上にあつたお茶を飲みながらこちらを見ている

男「意外と早かったな」

荒川「まあ時間厳守はしとかないとな」

そう言いそのちゃぶ台の隣に立つ、口調も何故か若干いつものような感じになっていた

荒川「それで、護衛って何するんだ？見た所一人しかいないっぽいけど」

男「これからあるお得意様が来る、その人と今回ここで話すんだが最近になってうちの知り合いが殺されることが多くなってるな」

それを聞いた荒川は目を開き男の方を見る、男の方は顔色を変えずただお茶を飲むだけだった

荒川「それ大丈夫なのか？いくら表に看板出しているとは言え今は夜だ、家も回っていることはあるがあいつらはここの場所をしらないから見逃すぞ」

現代とは違い電気が発展していないため街灯がなく道もかなりくらい、警報装置もなければ屋根を伝って上から侵入なんかも平然としてくる、だからこう言う秘密の会談をする時は念入りに警戒しながら殺し屋が来そうな怪しい所を見張り尚且ついつでも動けるようにしないといけない、警察はいるとは言っても電話もない時代だ、騒ぎが起こらないと気付かないので駆け付けて間に合うのかどうかも怪しい

男「ほお、ちゃんと約束通り伏せてくれたのか、関心関心」

荒川「笑いごとじゃねえ、ここの宿の人間すくないのに大丈夫なのか？」

下に5人、二階に上がる階段に二人、女中および手伝いやく四人でその中で味方なのはたったの四人だけだ、闇討ちが一番警戒しないといけない事なのに、こいつとききたら

男「まあ聞いてくれ、今回の事はなるべく他の人に聞かれたくはないんだ、内容が内容だから少なくする必要があったんだが、あんたがいて助かったよ」

荒川「おいおいつまりそれ俺逃げ場ねえじゃん」

どうやらかなり重要な話をするようだ、つまり荒川が会談の内容を公開しようものなら殺されるし守り切れなければ事の次第によって腹を切る羽目になる、貴族や御家人の護衛なんかではこんなものいつもの事なのだがやはりめんどくさく感じたのだろうか、手を顔に当てため息をついている

荒川「お前さんにとつても危ない橋だろ、いいのか？」

男「別に構わん、これでも人を見る目には自信がある、俺の見立て通りちゃんと誰にも知らせずここに来てくれたんだからな」

不満が多少あるがもう来てしまったのでこれ以上言っても仕方がない、そう自分に納得させ部屋にある窓を少し開き外を見る、人影はなくてただ町にある松明が道路を照らしているだけだった

荒川（いくら何でも不用心が過ぎる、やばくないかこれ？）

正直一人増えた所で変わらない気がする、だいたい闇討ちを仕掛けるのは何か訳アリ、そんな奴に限って弱い奴が来ることはないのだ

荒川「ちなみに心当たりはあるか？狙われそうな所とか」

男「さあな、家は手広くやつてるから色々多いんだがそうだな、同じ商売をしてる人間かね、今回のだって良いところ取りしたわけだし」

荒川「あんまり関心しねえぞそれ」

男「いいじゃないか、商売に危険は付き物、それにこうしてかないと俺が潰されちまうからな、お前さんともそうだろう？」

それは否定出来なかった、現代でも同じことが言えるが仕事で一番大事なのはどれだけ自分に得のある話を持つてくるために何をしたらいいのが重要になってくる、世の中は常に変わりその時代にあった形を求められるのでその変わりゆく世界の中にどれだけ乗れるのかが一番重要なのだ、確かにたとえ危ない話だろうがほかの所が力をつけ始め自分の利益を持っていかれるとそこから崩れ始め崩壊するし自分も行動しなければならぬのはわかるのだが荒川が今気にしているのは別の事であった

荒川「大丈夫かねあいつ、何事もなければいいけど」

脳裏に浮かんだのは素直じゃなく子供に優しいあの沖田の顔が浮かんだ、あれから数日があったため沖田は無事仕事に戻ったのだが病人だと荒川は知っているのでどうしても気にかかるのだ、本来なら寝込んでてもいいほどの病気なのに何故か休もうとしない、本人も譲らなかつたのでこればかりはどうしようもなかつた

荒川（何焦ってんだよあいつ）

沖田は何故か無理でも最前に立とうとする、彼女は引き際もよく状

況判断もよくわかっているにも関わらず自分が体調が悪い時でも何故か出てくる上に長く残る事が多い、そのためその場で体調を崩すか数日間は動かない時もあり彼女の性格からはどうしてもこの行動は考えづらい

荒川（流石に遅くまで残る事はないだろうが、後で見に行くか）

取り合えず今は仕事をしようとするに耳を澄まし音を聞く、聞こえてくるのは自分の息遣いと直ぐ横にいる男のお茶を飲む音だけでとても静かだった、外もただ暗く闇が広がっているだけで何も変わらなくこのまま終わる事を願った、だが

荒川「っ！」

急に荒川が顔をしかめ部屋の床を覗んだ、男の方はそれに気づいたのか不思議に思い質問する

男「どうした？そんな怖い顔をして」

荒川「やばいな、一人消された」

男「…は？」

急に下を見たと思ったなら何を言ってるんだこいつは？と男は一瞬思った、そりやそうだ、男の方もバカじゃない、この部屋には腕利きの私兵が数人いるし尚且つここにいる程の者ではないが下にいるやつらも腕がたつしそんな奴らが物音出さずに殺されるはずがない

男「おいおい荒川、冗談は」

荒川「二人目だ、来てるのは一人か」

男「はい？」

男はまたしても疑問の声を上げ少し苛立ちを覚えた、流石に少し言おうと立ち上がった

荒川「動くなよ、ここで隠れてる奴らと一緒にいた方が安全だ、今来てるのは一人だから俺が見てくる」

男「何？」

それを聞いた男はその場で固まってしまい横を通り過ぎる荒川を見逃した、後ろから襖を開ける音が聞こえその後直ぐに閉まる音が聞こえた、取り残された男は混乱に包まれる同時に少しばかりの恐怖を感じていた

男「：切れ者だった？いや、そんな筈は」

だがあいつは恐らく嘘をついていない、だがそこまで鋭くはない筈だが、何故だかそれが一番しつくり来たのだ

男「お前たち」

その声を上げると天井から、あるいは掛け軸の裏から、そして窓から一人ずつ黒い服装で固めた彼らは腰に刀があり動くことにカチャカチャと何かが当たる音が聞こえ身長は高く170はあり体も普通の人間よりも大きかった、そんな男たちは男の前に跪いた

私兵「柳様、お呼びでしょうか？」

柳「片瀬、下を見てこい、他の者は残れ」

私兵「御意」

片瀬と言われた者は部屋の窓から飛び降りた、他の者は柳の周りに立ち周辺を警戒している、柳はその場に座り彼の帰りを待ちながら思い浮かんだ疑問に思考を巡らしていた

荒川「またやられた」

そうつぶやきながら階段を下りていく、若干早足になりながらも奇襲がないか探りながら気をつける、感じているとはいえもしかしたら潜り抜ける奴がいるかもしれない

荒川「やつぱりこの時代魔術の対策してるやつなんかそうはいないか」

そう荒川が何故侵入者がいるのかがわかったのは魔術のおかげだ、荒川も伊達に旅をしていない、いや、無理やりされているようなものだがそのせいか生きるために知識は色々ついている、その道中で習った魔術も種類はバラバラだがどれも使い方しだいで役に立つものばかりだ、そして階段を下りきり騒ぎが起こっているだろう場所に移動した、通路を真っ直ぐ歩きそして曲がり角を見た時、思わず目を

反らした

荒川「うげえ」

一度反らした場所をまた見直す、そこには壁や床、それどころか天井にまで血飛沫で出来上がった絵が出来上がっている、そしてその場所には四人程倒れていた、一人は壁に寄りかかって倒れ腹を横に一線されている、もう二人は地面に倒れており最後の一人は地面に仰向けになりながら血飛沫を上げていた、切られた場所から臓器が見え床には血の池溜まりが出来上がっているそんな場所に血まみれの刀を持つている男がたっていた

？「なんじゃ、まだ残つとたんか」

そう振り返りこちらを見ると驚いた様子でこちらを見ている

？「ほお、こりやあこりやあ、壬生狼とはたまげた」

そう空いている手で顎を擦りながらこちらをニヤニヤしながら見ている

？「まあええか、暇じゃったきの」

ニヤリと不気味に笑う男が荒川に近寄ってくる、刀についている血がポタリポタリと地面に垂れ落ちていき床を汚していく、床が軋む音がおおきくなつていくと相手は間を少し空け止まった

？「お初お目にかかります」

そう顔を伏せながら不気味に笑う笑顔を浮かべた男の顔がこちらを覗いていた

土佐の人切り

? 「お初お目にかかります」

不気味だ、ただ不気味だった、ウェーブがかかった髪でそれを後ろにまとめて服装も暗闇ではわかりづらい黒い着物を着ており暗闇だと見ずらそうだがその髪から光る明るいオレンジ色の瞳がこちらを見つめていた

? 「それじゃ」

顔を伏せゆつくりとこちらに近づいてくる、足音だけが聞こえた。不気味さが際だ出ていた、そしてその男が数歩と言うところでその顔の口元が歪んだ

? 「死ね」

その男の鞘から刀が抜かれそれが自分に迫ってくる、荒川は身を屈めやり過ぎすが直ぐに切り返しの切り上げが来ると自分も鞘から刀を抜きそれを止める

? 「ほお、ええ反応じゃ」

荒川 「そりやどうも」

相手は蹴りを放ちこちらを吹き飛ばし様に突きを放ってくる、荒川はそれを刀で弾き着地するがその着地様に足を狙ってきた

荒川 「おわ!？」

荒川は後ろに下がるとさらに男は追撃を仕掛ける、外から見ると荒川が押され男が攻めを取り反撃の隙を許さない

? 「どないした? 手が出せんか?」

荒川 「やろお」

ニヤニヤ笑いながら荒川を追い詰める、荒川の方もまだ切り合いに慣れていないのか防ぐしか出来ずただ下がり続ける

? 「なんや、壬生狼はこんなもんかい?」

刀を持ちながら手首を回転させ振り回し余裕の表情で荒川を見ている、荒川はその間を利用しある事を自分に施す

荒川 (確か…)

自身にある回路に力を入れ起動させるとそれが全身に広がり顔に

も幾つかの赤く光る線が出てきた、すると自身の体から力が沸き上がりその状態を安定させあまり不可がかからないようにする

荒川「フウー」

熱くなつた息を吐き脚に力を込める、脚の回路に魔力が通りその力を足の裏にためそれを地面に向けて飛ばし男に接近する

?「はあ!？」

相手は取つては空いた距離が不自然な事で縮まったため動きが止まってしまった、だが荒川が縦に振ってきた刀を見て慌てて避け追撃に來た切り上げは流しやり過ぎした

?「なんじやいまの!?!何したんじや!?!」

荒川はその質問に答えず刀を男に振り続け攻撃をし続ける、男はさっきの事の動揺が大きいのか顔に焦りが見え刀の振りも雑になっている、荒川はそんな相手の腹に前蹴りを入れた

?「ごっ!?!」

そのまま逆の足で頭を蹴り飛ばし地面に倒した後その倒れた状態の相手に刀を振り下ろす、相手はそれを刀で受け止める

荒川「おかしいなく最初は余裕そうな顔してたくせに今は焦りしか見えないぜ?もしかして顔は若い癖に結構歳取ってる?」

?「なんやと?あまり生意気な事言つとると叩つ切るでえ?」

荒川「いやいや俺は評価をしてやつてるだけだよ、ほらこう、一瞬間抜け面が見えたもんで」

それを聞いた男の目が変わり荒川を弾き飛ばし一瞬で荒川に切り込んだ、荒川はそれを冷静に刀で対処しながら最後の一撃を受け止める、その刀越しに見た男の顔は怒りに満ちていた

?「この幕府の犬があ、わしを馬鹿にしとると殺すぞお?」

荒川「犬とは人間きが悪いな、お前の、ような、こそ泥を、捕まえるのが仕事のお巡りさんだ、それに俺の評価も意外と凶星だろ?太刀筋が分かりやすくなつたぜ?」

さらに顔にシワがより目も開きその眼球には血管が浮かんでいる、相手は荒川をまた弾き飛ばし刀を振るって追撃してくるが荒川の言つた通りなのか荒川でも対処出来ていた

? 「シャ!!」

縦に振り下ろして来た兜割りを横に避け追撃に切り返してきたが大きく振りかぶってしまったのか遅かったのか反撃のパンチを顔に貰ってしまった

荒川 「おらあ!!」

? 「ぶっ!!」

さらに追撃の前蹴りが腹に決まり壁に叩きつけそこに荒川は追撃の刀を振り下ろす、男はそれを刀で弾きその間に起き上がり荒川に刀を振る

? 「おまんあまり舐めちよるとぶっ殺すぞ?」

荒川 「お前煽り耐性無すぎないか?もうちよつと我慢強くないと先行き真つ暗だぞ?」

? 「まずはその口から落としちやるかあ」

すると刀を振る速度が速くなりその場でぶつかり合う鉄の音のりズムが速くなる、刀を振りなれていない荒川にとってこの速度で迫り来る刀は捌ききるのは難しい筈なのに荒川の顔は余裕の表情だった、荒川はお得意の口を使い相手を挑発しペースを崩すことで圧倒的技術が相手の方が上でもこうして対処できるようにしているのだ、旅での戦いでの経験もあるのだろうかまだ荒川は無傷だった

? (なんでじゃ!!何で当たらん!!)

荒川 (焦ってんなこいつ)

隠し事が下手なのか表情に全部でてしまって荒川は打ち合いを続け挑発するのを続ける

荒川 「おいおいどうした?得意なのは刀だけか?あ、それとも体に痛みを受けると嬉しがる変態さんかな?」

? 「よお喋る口やな、少し喋らんようにしてくれんか?」

荒川 「おいおい質問を質問で返さないでくれないかな?最近の若者はそう言うのあるから駄目なんだよな、それとも凶星で答えられないとか?」

それを聞いてまた速度が上がるが荒川は一旦下がり後ろを振り返り逃げる

? 「まてやこの犬があああ!!」

怒鳴り声を上げながら荒川を追いかける、荒川は途中であつた部屋の襖を引っぺがしそれを相手に向けて投げる、相手はそれを見て止まり急いで後ろに下がろうとするがだが襖を突き破り荒川が蹴りの姿勢で出てきた

? 「はあ!」

そしてそのまま飛び蹴りが顔に直撃し相手はぶつ飛ばされ地面に体を叩きつけられる、その間に襖を掴みそのまま相手にそれを叩きつけた

? 「ごふっ!」

襖を持ち上げ叩きつけそれを何度か繰り返すと男が切れてこちらに刀を振りかざそうとするが相手と自分の間に襖を投げ振り下ろされた刀が襖を切り裂いた

荒川 「おおいいいパワーだ、良い所に力もあるって付け足しとくよ」

? 「舐めちよりおつてえ! 武士なら武士らしく刀つかわんかい!」

荒川 「はてはて俺にボコボコにされて何か吠えてますな? これって負け犬の遠吠えつてやつ?」

? 「こんのお!」

目をギラつかせさらに目が血走り始め広くなっている、もはやここまで来ると耐性が無さすぎて哀れみを感じるがそれをしたらさらに切れそうだ

荒川 (さて、後どれくらい稼げるかな)

さんざん切り合って相手は確実に剣術が上だが心理戦はそこまで強くないようだ、少し煽ればこの通りキレて動きが単調になり対処しやすくなった

荒川 (だけど途中で頭冷えたらやばいな、今の状態を保たないと) そう刀を上げ構える、相手の方も姿勢を低くし構えこちらを睨み付ける、そしてお互いに駆け出し切り合いになる、縦に振り下ろされた刀を横に流しこちらも切り込む、相手は刀を持ち替え何とか持っている防いだ、そしてその間に蹴りをいれようとする

? 「何回も当たるか!」

相手も刀を回し脚を切り落とそうとする、だが荒川はその脚を引き頭突きを喰らわせた

? 「ふがあ!？」

荒川 「やーい、引つ掛かった」

? 「こ、この」

相手は直ぐに起き上がり荒川に切り込もうとした、荒川に駆け出し刀を振りかぶり攻撃を続ける

荒川 (…決め時だな)

右脚を前に出し左手を後ろに上げ手のひらを広げる、それに右手に持っている刀の柄を当て構える、荒川が沖田と一緒に仕上げた構えだ、沖田の突きと荒川の独特なスタイルを洗礼させた物だがまだ出来上がっていないのであまり使いたくなかったのだがある沖田の言葉を思い出した

沖田 『私もそうだったのですがそれを仕上げるには幾つかの死地を乗り越える必要があります：もしそれを抜く時はお気をつけて』

荒川 『そうなのか』

沖田 『それとやはりいつもの喧嘩技をあまり入れてはいけませんよ、その鮮度が落ちます』

その忠告を思い出し神経を尖らせる、その振り下ろされた刀が来る前に左手で押し右手で加速させた高速の突きを放つ、それを相手は慌てて受け止めるが直ぐ様刀を回転させ切り上げを行う

? 「っ!」

それからは相手の方が押され始めた、相手があまり冷静になれない性格のためか磨き上がっていない技でも戦えている、荒川の突きが相手の脚に掠めた

? 「い!？」

荒川 「それくらい我慢しやがれ」

荒川は直ぐ様足を狙い始める、相手は防ぎながら下がるがそれでも防ぎ切れず同じ脚に二発目を受けてしまった、相手は顔を歪めながら大きく下がり荒川を睨み付ける、若干だが姿勢が傾き構えが崩れ始めている

荒川「…」

? (くそがあ少しもろってしもうたっ!こんな犬ごときにい!)

荒川 (うわあすげえ顔、隠し事何か絶対向かねえ奴だな)

改めて冷静になって見てみるとことん腹に立っているのが見てとれる、ペースを乱したため何とかこちら側に持っていけた、後はここからこいつをpushさえ込めれば

? (…これじゃあ埒あかん)

だが相手もそこまで付き合うほど暑くなっていなかった、相手は刀を出しこちらを威嚇しながら引き上げようとする、それに追撃を行い切り合いが行われる、相手が横に振られた刀を横に飛び壁に乗り移りながら相手に振り下ろす、全体重を乗せた攻撃は受け止められず壁に叩きつけられる

? 「シャツ!」

壁に転がるように横に刀を流し回転様にこちらの背中を切り付けようとする、その場に身を屈め袈裟懸けを行うがそれを刀を立て受け止めそれを救い上げるに持ち上げそこから突きを放つ

荒川 (以外と器用だな!)

それを脚に蹴りを入れ少し崩させ刃先をずらす、相手に接近し顔と肩で腕を挟み下から自分の手を使って伸ばさせた肘を上押し上げる、それにより肘が極まり激痛が走る

? (なんやあ!?)

相手はそれを避けるため荒川に向かって目潰しを行うが荒川はそれを額を出す相手が手を広げ頭を掴み壁に叩きつけようとするが荒川は挟んだ腕を持ち上げそのまま相手を押し倒しそれとともに相手に突き刺そうとするが相手は脚を荒川の腹に入れそのまま後ろに投げた

荒川 「つ!」

? 「覚えとけや犬う!!次あったら絶対ぶつ殺すしちやるからなあ!!」

荒くも何とか着地するが相手はもう入口近くまで移動していた、直ぐに追いかけて相手が出て行った戸から外にでた、だがそこには誰もお

らずただ暗い空間が広がっていた

荒川（索敵範囲内での感知なし、流石に引く頭はあったか）

周りを見渡し人がいないのを確認し寺の中に入っていく、その様子を寺の二階見守っていた二人の人物がいた、一人は仰だがもう一人は護衛の人間ではなかった、髪は後ろに結んであり顎には少し髭が生えている、得意そうな顔でその顎に手を当てその様子を見守っていた

？「さっきの奴か？あんたに無茶な話吹っ掛けたのは」

仰「そうだ、以外と腕はともかく面白そうな奴だろ？」

？「勘は良さそうだがな」

仰「そのようだな、相手はどうだった？」

後ろにいる帰ってきた護衛に話かける

片瀬「髪の毛のせいで誰かはわかりませんでしたが大目方からして土佐の者だと思われませんが、土佐の人間とは今まで揉めた事ありませんからもしかしたら流れ者かもしれません、あまり暗殺向きの頭もしていませんでしたし」

仰「土佐か：坂本がそんな事をするとは思えないがな」

？「はぐれもんかもしれんがわしらを襲うと考えるとそれは考えにくいな」

仰「そういえば最近狙う対象が無茶苦茶な奴がいたな、恐らくそいつだな」

？「まったく、警察は何してんだか」

仰「志士がそれを言うか？」

手を椅子変わりにして呆れながら投げかける、相手もそれを笑いなから流し外の光景に目を向けなおした

？「やはり皆には待たせ過ぎたか、やはりそうそうに仕掛けた方がいいか」

窓から離れ部屋の戸に向かう、それを見ていた仰が話しかける

仰「やるのか？」

？「誰かがやらないと誰も付いてこないし立ち上がらない、しばらくは動かない方がいい」

そう言い残して戸を開けて出て行った、仰はその戸をしばらく見続

けまた窓の外の風景に視線を戻した

仰「…ようやくか」

そう呟く端にいる護衛には聞こえず荒川が返ってくるまで外の薄暗い光景を眺めていた

二人の変化

まだ日が明るく町の方も賑わっている中荒川は小さな飲食店にいた、まだ昼で今は暇だが呼び出される可能性もあるためかお酒は飲まず茶を飲み昼食を食べている

荒川「うくんこう言う本格的な和食にはもう飽きたな、そろそろパスタとかラーメンとかが恋しい」

やはり未来人であるがためか舌が慣れてしまいこう本格的過ぎるとやはり派手な味が欲しくなってくる、美味しいは美味しいのだが、そうした事で悩んでいると荒川の向かいの席に誰か座って来た、その人物は黒服に身を包み雨も降っていないのに雨傘を頭に被っている、その人物を見た荒川はため息を付き思わず目を反らしてしまった

男「そう言う態度を取られると嫌なもんだな」

荒川「どうせまた依頼だろ、何で休憩中に来るかね」

男「それは悪かった、だが許してくれ、新選組と歩きながら喋ると言うのも少し目立つのでな」

荒川「こうやって喋るのも目立つと思うが？」

男「外には屋根や路地裏があるがここには玄関と窓しかない、窓の外は一応張っているしそんなに目立つ事はしてはいないさ」

荒川「どうだか」

そう悪態を付きながら魚の身を口に入れる、魚の風味が口に広がるがこんな状況ではまともにそれも楽しめない

荒川「んで？お邪魔虫の頼み事てのは？」

余程話したくないのかあの荒川が会話を切り本題に入るように誘導した、男の方も雨傘の方で顔が見えないがため息の音が聞こえ本題に入った

男「さて今回の依頼だがまあ前とそう変わらない、実は家の方でまた密偵が見つかってな、そいつが長州藩の方で雲隠れしていて俺たちじゃちよつと手を出しづらい、梅小路町の空き家に集まっているそうだ」

荒川「それで警察である俺の出番ってわけね」

男「そうだ、家との関係上あまり藩とのもめごとには首を突っ込みたくないし中を悪くしたくはない」

荒川「お仕事が減るからか？」

男「そうだ」

荒川「商人め」

からかい紛いで言った言葉をまともに返された、しかも恐らく自分たちでも片付けられるというのに商売が減るのを恐れこっちに流してきたのだ、恐らく見回り組にも同じような事をしているのだろう

荒川「まったく、便利屋みたいにくつちを使いやがって」

男「だが藩に関わっているのは本当だし、そいつは窃盗や一般人を殺してもいる、それを捕まえるとしたら警察の仕事だろう？」

荒川「私兵のように使われるのが嫌なだけだ」

男「名高い新選組の隊士にそんな事はしない、それにこっちはそっちの頼みを聞いてやっているんだ、実際にもう貰ってやっているんだろう？」

荒川「つけ」

少し押され気味に言われるが気に入らないのか嫌そうに声もあげながら顔を渋らせた、男の方も手で頬を掻きながら少し同様している
男「まあ家の大将もあんたからもらった物が凄いのかあんたがやりやすいように色々動いてくれてんだ、頼んだよ」

荒川「…」

男はそう言い残し席を立ち店の入り口から出て行き姿を消した、荒川はため息を吐き悪態も付きながら飯を口の中にかきこんでいく、そして食べていた別の食べ物注文しながら焼け食いついた、食べ終わった後もその表情は消えず店主に金を渡しそのまま出て行った

仰「どうだった？彼の反応は？」

男「案の定嫌な役回りを任されたと少々渋っていました、ですが大將の言う通り例の話を出したら引き受けてくれましたよ」

仰「まあそうだろうな」

仰は自分の屋敷でさっきのやり取りを男の報告とともに聞いていた、壁には多彩な装飾品があり壁には掛け軸や陶磁器、中もよく作られており戸には北斎が描いた波の絵が描かれていた、そんな中仰は地面に置いてある机の前に座布団の上に座りながら茶を飲み男の方は部屋の隅で立ちながら報告を続けていた

男「にしてもまさか大將があそこまで応じるとは思えなかったな、しかも頼まれてない事まで……」

仰「まあ私も迷ったがそれなりの物を提示してくれたからな、取引も対等な物にしてもよかったんだが借りを作っておきたくてな」

男「大將がそこまで言う何て、どんな取引したんですか」

仰「それはあいつと私だけの秘密だ、すまんな」

男「そりやないぜ大將」

仰「許せ富波」

そう富波と呼ばれた男は不満げな顔をしながら不満げな声も上げている、そんな様子を見ていた仰は苦笑しながら眺め茶を一口飲む、そんなやり取りをしていると富波が動き出し仰の前に立ち戸の方を見て腰にある刀に手を掛ける、すると戸が数回叩かれた

富波「誰だ？」

川口「川口でございます」

仰「入れ」

それを聞いた富波は仰の横に付くと戸が開かれる、そこには富波と違い栗色の着物を着た人が廊下に座っていた

川口「仰様お客様でございます」

仰「誰だ？」

川口「それが新選組の方です……」

それを聞いた富波と仰の二人は顔を見合わせる、まだ荒川に依頼してそんなに経っていない上にまだ日も落ちていない、富波の方は何故と頭を悩ませ仰の方は何か問題があったのかと思うがそれとは別の質問を試してみる

仰「それは誰だ？荒川か？」

川口「いえそれが、一番隊の隊長です」

それを聞いた仰は思考を巡らそうとしたがまず会う事に決め茶を置きその場から立ち上がる

仰「わかった、客間に通せ」

川口「わかりました」

それを聞いた川口は部屋から視線を外し自分の横の方に顔を向けるとそこから少し遠い場所に一人の使用人が立っており川口が手で軽く合図をするとその使用人が軽く頭を下げ沖田を呼びにいきその間に川口が客間の方に向かい直ぐに二人も客間に向かった

富波「どう言った要件でしょう、荒川の様子を見ても藩と話しているのは気づかれていない筈ですし」

仰「噂と部下からの情報から考えても欲はなさそうだからな、もしかしたら俺と敵対している幡部か胡馬辺りが仕掛けてきたかだ」

富波「後で使いを放って調べさせます」

仰「ついでに裏切った奴がどんな奴なのかわからんから殺さずこっちに連れて来いと荒川に伝えて置け」

富波「へい」

そうやり取りをしていると客間に付いた、富波は入口近くにいた川口の方に近寄りさつき言っていた事を伝えると川口はすぐさまそこ

から離れていきそれを見届けた二人は客間の方に入っていった、そこは広々とした空間が広がっておりその真ん中の方には座布団が二つしかれており一つの方に沖田が正座して座っておりそのもう一つの方に仰が座りこみその横に富波が立った、沖田は表情一つも変えずただ仰の方を見ていた

沖田「：随分騒がしいようで、何かありましたか？」

急に口を開いたと思ったならその第一声を聞いて思わず驚くがそれを表情に出さず押し止め崩さなかった、警察である以上周りの動きなどを見ておくのは常識なのを知っているのと今までの経験があったためそこまで動揺はしなかった

仰「いや何、帳簿の記載に誤りがあったのでそれを伝えただけだ」

沖田「そうでしたか、すみませんでしたつい癖で」

仰「そこまで気になさるな、逆に不安にしたようで申し訳ない」

沖田「こちらこそ」

そうお互いに譲り合いそれをすませると今度は仰が切り出した

仰「それで今回はどんな要件で？」

沖田「少し聞きたい事がございまして、家の隊の副隊長の事なのですが」

それを聞いた仰は少し焦るがまだ目的が明確化していないので沖田の言葉を止めず耳を傾ける

沖田「最近貴方様の依頼をあい：副隊長がよく引き受けているようでその理由が気になりました」

仰「ああ彼か、いや特にこれと言った理由はないのだが彼とは最近仲良くなつてなそれで家の方で色々困っていたら彼が手伝ってくれと言ったのでな、それに甘えるような形で頼んでいるのだ」

沖田「それにしても随分と多いようで」

仰「何分こんな時代だからな、片付けた先にまた起こるのだ、彼を酷使していると言う自覚はあるし別にいいと言っているのだが彼が聞かなくてな」

嘘はあまり言っていない、あちらこちらで問題は起こっているから困っているのは本当だ、ただ彼を酷使しているのを気にしているのは嘘

だが彼の性格を考えてもありえる話だ

沖田「そこまで忙しのでしたら私たちも手伝いましょうか？一人よりも人数が多い方が良いと思われれます」

仰「いや大丈夫だ、多いと言ってもそんなに重なって起こる物でもないし連日で起こる物でもない、それにあまり他の人には知られたくないのでな」

沖田「そうですか…」

そう言葉で返し軽く笑みを作っているがあまり納得はしていないように見える、それもそうだこんな言い訳にするには苦しすぎるし何より新選組はあまり貴族の事を信用していない、あまり不信に思われたくはなかったが力が強い依頼主が隠し事をするのも珍しい事ではないし新選組は貴族の事情等あまり興味がないが何だか少し食い気味にこられているので下手したら深く探られる危険がある、だが何故こんなに食い気味に聞いてくるのだろうか？彼女の事を考えて見ると依頼何て終われば興味なさそうに終わらせてたとえ気になつた事があつても聞かなかつたのにそこが不思議だ、しかもさつきから聞いてくるのが荒川の事ばかり…！

仰（ああ、あり得るかもな…）

そこで仰はある事に考えが行き着いた、今までの事を考えると沖田のこの行動は不思議に思える、政治をしている連中や依頼の内容には興味がないのは今もそうだ、こちらにはまったく興味がない、だが自分の副隊長の事は気にかけてはいる、だが彼女は自分の部下の身は自分で守れと言うだろうしたとえ副隊長でもそれは同じだろう、荒川も恐らくこの仕事に不満があるだろうしあの性格だ、隠す事はするだろうが顔には出るだろう

仰（恐らくそれが気になつて来たと言う感じだな、彼女の性格からして考えられないが…これは惚れ始めているな）

今は気になる男位だろうが今まで恋愛をしてきた口でもなさそうだし男と遊ぶにも慣れていなかつただろう、だがあの荒川と関わっていくうちに心を許し始めてるのだろう

仰（残虐非道の新選組、その一番隊の隊長がな、随分と人間らしく

なつたものだ)

改めて荒川の不気味さをしりながら心の中で苦笑する、そういえば前会った時とは違って心が今は生きている、顔に表情が自然と浮かびそれから彼女の気持ちも感じ取れる、その上彼がやろうとしている事をしつたらもはや確実だろう

仰(さてどう会話を続けようか、あいつがやろうとしている事も気になるし今のうちに色々聞いておくか)

小さな警備隊だが腕は確かだ、今のうちに人脈を作っておくのもよいだろうと思ひ彼女との話合いを続ける事にした

荒川「たく、殺せだの殺すなだのどつちなんだよ」

もう日が落ち夜になった中荒川は愚痴を溢しながらそばにあった石を蹴とばした、あの後依頼を受け場所に向かい長州藩もろとも叩きのめした、その密偵は奴らに渡し金を受け取った後その場で解散となった、ここ連戦で刀を酷使したためか刀の方がボロボロになりかけ

ていた

荒川「まあ消耗品だから仕方ないか、意外と愛着あつたんだがな」
刀を変えるため今新選組お抱えの鍛冶屋に向かっている、屯所で刀をもらっているので実際に鍛冶屋など行った事がなかったのどんなところか見てみたかったのだ

荒川「えくとここを右に曲がって、お？」

暗いので足元を確認しながら行き場所を思いだしながら行くところ家の近くで揉め事が起こっていた、一人はガラの悪く身なりも悪い男が少し老けた爺さんに詰め寄っていた

男「何でだよいいだろうが刀ぐらい!!」

?「いやだと言っておろう、お主にそこまでの才覚はなからう」

男「なんだと!」

荒川「はあ…」

疲れているので無視したい所だが警察と言う立場にいたので見過ごすわけにはいかず取り敢えず割って中に入る事にした

荒川「はいはいそこまでにしとこうな」

男「ああ!?!誰だて…め」

邪魔をされて切れ気味なっていたので案の定こちらに怒鳴り声が飛んでくるが荒川が着ている羽織を見てその顔は青ざめていく

男「こんのお…じじい覚えてろよ!!」

男の方は案の定言葉を置いて逃げ出しその場から走り去っていった、荒川の方はそれを見届けると老人の方を向くと何故か老人の方は荒川の方をじっくりと見ていた

荒川「な、何か？」

?「お主、何故ワシを助けたのじゃ？」

荒川「え?そりやまあ、助けたかったから？」

?「お主もワシの刀を狙っておるのか？」

荒川「ん？」

荒川の方は話がわからなくなっていくたがとりあえず何故助けたかの理由を解いているようだ、その言葉を聞いてついある男の事を思いだしてしまう

士郎『別に理由何てないよ、困ってたから助けた、それだけさ』

荒川（懐かしいなあ、あいつ桜とうまくやってるのかねえ）

あの甘さの塊のような友人の事を思い出しつい苦笑してしまう、それを見た老人は目つきが鋭くなり荒川を問い詰める

？「何がおかしい？」

荒川「いや悪い、ちよつと友人の事を思い出してな、別に深い理由はないよ、困ってたから助けただけさ」

そう言い残しその場を去る、刀を直さないといけないので鍛冶屋の方に急ぐ

？「：待て」

荒川「？」

するとその老人に呼び止められた、その声に引かれるように後ろを振り返る

？「助けて貰って礼も無しに別れては何だか後味が悪い、ワシの家が近くにある、茶でも飲まんか？」

荒川「いやけど俺今から刀を直しに行くのよね」

？「それなら都合がいいワシは鍛冶屋じゃ、その刀も見てやる」

荒川「あれいいの？多分気に入らない奴には作らないタイプだろう？」

？「そうじゃが今の所そんな様子はお主からは感じられん、逆に気になっておる」

荒川「うくんそこまで言うのなら、お邪魔しようかね」

荒川はその誘いを了承し爺さんの後について行く、そして周りより少し大きな家に老人が入っていきそれに続くように荒川も中に入る、ここの家はどうやら部屋が分断されており奥に仕事場があり入口近くは生活スペースのようだ、荒川は置かれている座布団に座り老人の方は茶を用意してこちらに渡してきた

荒川「あ、うまい」

？「それはどうも、さて刀の方を見せてくれるか？」

荒川「いいよ、ほれ」

そう茶を飲みながら片手で刀を腰から抜きそれを老人に渡す、老人

の方は鞘から刀を抜き状態を見る

？「酷いの、刃こぼれも酷いし刀身にガタがきとる、こりや変えた方がいいぞい」

荒川「まじか、まあ仕方ないか」

？「何ならワシの刀をやるうか？ちょうど似たような奴が幾つかある」

荒川「金なら払うぜ、幾らだ？」

？「やる刀による、じゃがその前に聞きたい事がある」

荒川「答えられる範囲でいいなら」

荒川の方は茶を飲み終え湯呑を置き老人の方を向く

？「お主、勤王志士の事をどう思っておる？」

荒川「どうって？」

？「感じた事を述べるだけでいい、話せ」

顎に手をやり少し考える、老人の方は言葉を待ちその場で動かずじっとする

荒川「そうだな、まあ言っちゃ悪いが過激派集団だわな」

上層部に不満を持った者たちが集い世の中を崩そうとしているのだからその言葉に行き着くの当然だ、未来人にとってはテロリストには変わりないのだから

荒川「けどそれほど世の中を考えてると思うぞいつらは、それ以上の奴らが平和的に連中の話なんか聞く訳なけなからこうなっちゃまったのは仕方ないのかもな」

腐敗した世の中で政治を行っている者はだいたい傲慢で自信過剰でプライドが高い、己の理想を反対するような奴らと仲良くテーブルに着く何て考えられないしそもそもする気もないだろう、だから今志士が反逆をしているのだ

？「んじや次に聞こう、お主は何故刀を握る？切るのが楽しいからか？」

荒川「楽しいから刀を持つんじゃない、俺が生きるためには刀が必要ってだけだ」

？「と言うと？」

荒川「こんな世の中だからな、綺麗事はあまり言えないしかと云って非道にははしりたくはない、刀は飽くまで自分が生きるために使うだけでももちろん人は切ったりするけどあまり殺しはしないさ、まあ俺が殺されそうになった時とかはやっっちゃうけどさ」

人はなるべく殺さないが危機が迫った時、あるいは状況によってころさなければならぬ時は殺すだろう、相手だってそうだしこの時代の生き方はこれだろう

荒川「まあ戦乱の世に生きる者の定めだから仕方ないんだろうけどさ、嫌な事正当化させるのってつらいよ」

自分にとっては関係ない事だと思っていたがこうして昔の人がやっていたような人殺しをするのは少し辛い、最初は手元が震え怖がっていたが旅をし続けるうちにそれが無くなっていってしまった、戦い続きの旅だったから仕方がないのだろうがやはり同族を手にかけるのは怖い

？「やめようとは思わんのか？」

荒川「そう思っただけけど少し気になる奴を見つけたんでね、多分無理かな」

？「そうか…」

何処か遠くを見つめ少し寂しそうな声を漏らす荒川、それを静かに見ていた老人は少し下を向き何か考え事でもしているのだろうか目を動かしている、すると急に老人が立ち上がり仕事場の方に向かった、荒川の方は困惑し仕事場の方を注視して少し経つと老人が刀を持ってまた座りなおした

？「ほれ、これじゃ」

荒川「どうも」

荒川はそれを受け取り早速それを鞘から抜いてみる、その刀身からは謎の圧を感じその焚火に照らされて光る刃も不気味な程きらめいていた

荒川「ほへえ〜何か知らねえけどすごいな、俺が持っていた奴とは大違いだ」

？「ほうわかるのか？」

荒川「嫌正直何が凄いのかわからないけど前持ってた刀より良い刀だと言うのはわかった」

そう中半まで抜きさらにじっくり見つめる、老人の方は少し驚いていた

荒川「けどこれ高そうだな、俺の手持ちで足りるかな」

そう懐に手をつ突っ込み財布を取り出す、こうなるのなら銀行に預けてある金も持ってくるんだった

？「金はこれくらいじゃ、もし足らんかったらまた顔を出すがいい、基本ここにおけるし何ならまた刀を見てやらん事もない」

荒川「そりやありがたい」

？「それとこれを持って行け」

すると老人から投げ渡された物を手で何とかキャッチする、それは小刀ともう一つはある品だった

荒川「銃!? えこれどこで?」

？「知り合い経由で手に入れた物でな、興味深い物じゃぞ、鉄の塊を高速で飛ばす事ができ…」

その説明をしようとする前に荒川は銃を構え引き金を引く、それを見た老人は驚いたが弾は抜いていたので弾丸が発射されることはなかった

？「お主使い方がわかるのか?」

荒川「ま、伊達に生きてないしね」

？「ははは、不思議な男じゃ」

荒川「そうだこの二つの刀名前何て言うの?」

？「飛来に小狼じゃ、飛来は鳥の強襲の言葉で小狼は昔小さな狼が山で遠吠えしているのを見かけてな、それを見て名付けたんじゃ」

荒川「へへ狼もいるのか、一回見てみたいな」

？「ふふ、大分昔の話じゃよ、弾が無くなったらワシの所にくるがいい」

弾が入った袋を受け取り懐にしまい刀も装備して入口に向かった、だが何か思い出したのか老人たちの方に振り返った

荒川「そういえばじつちゃん名前何て言うんだ?」

？「ワシか？わしは癸生川 笄と言う、癸生川でよいぞ」

荒川「そうか、んじや癸生川のじつちゃん、今度金持ってくるからなく」

癸生川「おう、またこいよ」

そう言い残し荒川はその場を出た、腰にある刀の柄を掴み嬉しそうに刀を鳴らしながらその場を去っていった

顔に似合わない甘い二人

土方「と言う訳だ、今回の襲撃を行うのは、沖田と斎藤、後ろを永倉と井上でやれ」

新選組の屯所では襲撃を行う作戦会議を行っていた、その指示を受けた四人は軽く頭を下げその場から立ち上がり会議室から出て行くが永倉だけはその場に残った

土方「どうした永倉？何かあるのか？」

永倉「…今回の襲撃、沖田は外してくれんか？」

土方の方は向かずただ前を見てそうお願いをする、その顔はシワを寄せているが目だけは威圧は感じ取れなかった

土方「…どう言う事だ？」

永倉「何となくわかるやろ、もう沖田の体は限界や、最近倒れる事が多なってきたしもう無理や」

土方「だがあいつはそれでもやるぞ？」

永倉「それやからや、いくらあいつでもあんたと近藤はんに言われれば引き下がる筈や、せやから…」

土方「だがもうかなりの隊士を失ってしまった、山南も松原も死んだ、沖田に動いてもらうしかない」

永倉「それなら谷と原田がおるやろう、別に沖田やのうても」

土方「谷と原田は別件がある」

それを聞いた永倉は立ち上がり土方の方を睨みつけた

永倉「そない言うなら今回はええ、けどもし次倒れでもしたらそんな時は沖田に養生してもらおうように言ってくれ…頼む」

そう頭を下げる、土方はそれを表情を変えずただその様子を見ていた

土方「…わかった」

永倉「恩にきる」

その言葉を受け取った永倉は軽くまた頭を下げその部屋から退出した、土方の方はその様子を見届けると正座の姿勢は崩さずにただ下を見つめていた

永倉「……」

襲撃は明日行われる、そのため今回は襲撃班と打ち合わせでもするのが普通なのだが今回はそんな気分ではなかった、行きつけの居酒屋に顔を出し酒を飲みながら明日まで暇をつぶしていた

荒川「あ、いたいた」

永倉「あ？」

その声を聞いて振り返ってみるとそこにはあの荒川がいた、荒川は永倉の隣の席に立つと酒を頼み飲み始める

永倉「どういう風の吹き回しや？」

荒川「おいおいそんな事言わないでくださいよ、別に茶化しにきたわけじゃないんだから」

そう出された酒を一気に飲むとおぶは―…と大きく息を吐いた、永倉はそれを見て彼の方も何かあったのかと気になり思い切つて聞いてみた

永倉「何かあったんか？」

荒川「まあその、沖田と喧嘩しちゃつて」

永倉「まじの方が」

荒川「そぞ、最近になって体が弱くなっていつてるのが目立ってきてる、倒れるの何か珍しくもなくなったし動きも鈍くなり始めた、それを踏まえた上で休めつて言ってるんですけどね、全然いう事聞いてくれなくて、そんでそのままの勢いで喧嘩して別れて来たつて所かな」

永倉「明日仕事やぞ、酒何て飲んでええのか？」

荒川「そう言うあんたも明日仕事でしょ」

永倉「わしゃええんじや、軽く飲むだけやし」

荒川「なら俺も軽く飲むだけにしようかな」

そう軽く返すと永倉はそれに苦笑し同じく酒を飲み荒川の同席を許す、二人はそこまで中が良い訳でもなかったが何故か今日は気が合った

永倉「ワシもその事を気にして一応いったんやが聞いてもらえんかったが、次に倒れた時は休ませるように承諾はしてくれた、多分沖田は怒るやろうが」

荒川「それがいいよ、あいつ無理し過ぎなのはホントなんだから」

永倉「恐らく局長も副長も本人の意思を汲み取ってるやろうが、正直血を吐いて倒れられる嫌なんや」

荒川「ははは、だよね」

正直知り合いが毎回血を吐いて倒れられたらたまつたものじやない、周りだつて嫌だし実際いつ倒れるのかわからないほど衰弱仕切つてる、荒川の方もチャラチャラしてはいるがその事を心底心配していた

荒川「ほんとに馬鹿な奴だよ、こつちの気も知らないで…」

永倉「頑固やからなあいつは」

荒川「それに真面目が加わってたちが悪い、たく堅物野郎が」

永倉「それは昔っからや…知つとるやろあいつはこうと決めた事は引かんぞ」

荒川「嫌と言う程知ってる」

永倉「そうか」

永倉が自分の酒を注ぎなおし荒川は少し間を置いたため一度置いている、そして一口飲むと深刻そうな顔をして伏せるとその顔を荒川に向けた

永倉「…なあ、ちよつと頼みたい事があるんや」

荒川「どうしたよ改まって」

永倉「沖田の事を…最後まで、見てやってくれんか？」

その言葉を聞いた荒川は少し驚いてしまった

荒川「ホントどうしたのよ」

永倉「ワシは恐らく…新選組にはおれんくなるかも知れん」

荒川「どうして？今まで試衛館以来の付き合いなんだろう？」

永倉「まあワシも色々あるんや…だが恐らくやが長くはおらん」

その顔からは何処となく疲れたような顔をしていた、周りの他の客の声や外から聞こえてくる音等も聞こえるが永倉の言葉を聞くと何故かその言葉以外聞こえなくなつた

永倉「ワシは今まで局長のやり方に従ってきた、副長も沖田もな、正直今の今まで隊長の事なんかあまり気にかけるらんかったし怪我しようが別にどうでもよかつた…山南が死ぬまでは」

荒川「沖田から聞いた事がある…自分がよく世話になつた人の介錯をしたと」

永倉「せや、山南はいい奴やった、温厚で聞き上手でな、皆にもよく好かれとつた…せやけど去年の冬、山南は脱藩し捕まり、切腹に処された」

荒川「何で脱藩したんだ？」

永倉「わからん、聞こうとは思つたけど山南は何も話してくれんかつた、沖田には話をしたようやけどな」

新選組の掟では脱藩をした者は切腹に処される、例えどんな理由で

あれそれは絶対でそれには隊長も例外ではなかった

永倉「山南が死んだと言う話を聞いて、心に穴が空いた気分になって気づいたんや、昔のあの意気投合していた皆の姿はもう無かったんや：ワシはもう、仲間が死ぬところは見とうない」

荒川「：わかるよ、それ」

永倉も荒川もどちらも仲間の死を見てきた、その人が良い人であればある程死んだら悲しい気持ちは強くなる、いつもそれで後ろ髪を引っ張られるのは残された人だ

永倉「沖田の事は前から説得しとるが聞いてはくれん、せやけどお前は違う、お前が来てからあいつは前の沖田に戻ってくれた、子供に優しくよく笑うあの頃にな、せやからお前に頼みたい」

荒川「永倉：」

身内同士で殺し合いをしているのが嫌になってきたのだろう、あの強面の永倉の顔から悲しそうにシワを寄せ瞳弱弱しく感じる、それを聞いた荒川は一度永倉から目を背けてしまう、だが不安げだった表情を捨て決意を決めた目を永倉の方に向けた

荒川「：そのつもりだ」

永倉「そうか：」

永倉はそれを聞くと安堵したのか不安の顔は晴れ酒を飲み始めた、荒川も酒を飲み始める

永倉「少し付き合ってくれんか？軽く歩きながらもう少し話したいんや」

荒川「ああ、いいぜ」

それを承諾した荒川は立ち上がり永倉の後に付いて行く、外に出るといつもの街並みが広がっている、照明を付け店を開きそれに人が集まり会話をする、それを見ていた永倉も嬉しそうにしていた

荒川「良い街だよな、俺がいた所よりも空は綺麗だしさ」

永倉「何処行っても変わらんやろ、何言つとんねん」

荒川「嫌ホントにここまで綺麗に見えないんだよ、雲ばっかかかかってさ：それに色々あるし」

空を見上げようとしても星は見えなかった、一番の理由は光害だが

近代の世界は空気も汚れている事もあるためなのだが、まだこの国には自動車等はないため空気が全く汚れていない空が広がっている、こんな旅をして意外と面白いのは今と昔の現状を実際に見れる事があるのでそれによく驚かされる

永倉 「男が夜空が綺麗何て言うのは初めて聞いたわ」

荒川 「いいだろうが別に、俺のそこじやそう言う事いう奴結構いるんだぞ」

永倉 「何や、意外と女々しいやないか」

荒川 「あんたからは雄々しいさしか感じないよ」

永倉 「それが男つてもんや、最近そんな男は中々おらんしいう」

荒川 「平和が続くとそう言う人が増えるのは必然だからな、それだまにひねくれた馬鹿がやらかすところやっつてひねくれた奴らが戦い始めるんだよ」

永倉 「ほく、意外と深い事言うんやな」

荒川 「こう見えて意外と旅はしてるんだぜ？」

永倉 「いつか聞いてみたいもんやな」

荒川 「それはまた今度な」

そう軽く話をしながら歩き続ける、何も無い平坦な道の土を踏み前へ進んでいく、目的はない何かある訳でもないただ話すために歩くだけだった、新選組として恐れられてきた永倉にとっては気持ちが悪くなっていく楽しさであった

異変

荒川「はあくつつかれたあく」

そう背伸びをしながら町を歩き異常が無いか見回る、最近仰の仕事を受けるのが多いためだろうか顔が疲れておりだるそうに手を下にぶらぶらしながら移動していた

荒川「あれの結果がわかるのはまだ先出しなあ、最終的にはどうすつかだな」

何かをぼやきながら階段を上がると屯所の門が見えた、門番の人に軽くあいさつをして中に入っていくと何やら隊士たちが集まって何かしている、何だろうと思いい近くにいた隊士に声を掛けた

荒川「何かあったの？」

隊士「ん？あああんたか、実は山崎さんがある情報を持ち帰ってさ、それで今隊長たちが会議を開こうとしてるんだ」

荒川「全員か？」

隊士「ああ、結構やばい話らしいぜ、谷さんも死んじまったのに、またひと騒動起こるかもな」

荒川「……」

それを聞いた荒川は会議室の方を注視する、戸は固く閉ざされておりその近くには誰もいない、荒川は何だかそわそわしながらその様子を見ていた

荒川「制札？」

しばらく屯所で待っていると沖田と会議の内容を話していた、屯所の空けた庭で行い他の隊士もいるが大抵屯所の廊下や縁側を歩いたりするのでこの庭には誰も立っていないかった

沖田「そうです、あなたが来る前に京都から追放された長州藩勢力が暴動を起こしました、無事に鎮圧しましたがそれで降制札が増えたのですが、最近それを？がされるのが目立ってきましたね、それでその犯人を捕まえようって作戦です」

どうやらまた余計な事をしている馬鹿がいるようだ、それでその悪さをしている奴を探すためにその剥がされている地区で待ち伏せして捕まえようって話らしい、所で：

荒川「少し聞いていい？」

沖田「何です？」

荒川「制札ってなに？」

沖田「……」

する案の定沖田は目を細めた冷たい目が荒川の方に向けられた、いやだって仕方ないじゃん？最近忙しかつたしそれにそこまで興味がなかったし、ね？

沖田「制札って言うのは禁令や法規などを箇条書きに記して道端に立てた札の事です、よく貼られてたでしょう？」

そう呆れた表情をしながら説明をする、今でいう新聞や提示版等のような物で木の札を目につくような高さで紙などに書きそこに貼り何かの知らせ等はこれを通して行われる、今まだ知らせ等は人から聞いたりしていたので荒川の方は普通に忘れていたようだ、沖田の前で手を振り軽く謝罪をする

荒川「いやわりいわりい、つい忘れてて……」

沖田「……」

だが何故か沖田は呆れた顔を変え顔にシワが少しより澄らせている、荒川はその表情から焦りを感じたのか思わず沖田に聞いてしまっ

た

荒川「ど、どうした沖田？」

沖田「…あなた、ホントに日の国の人ですか？」

その言葉を聞いた荒川は思わずその場に飛び上がりそうになってしまった、何とかその衝動を抑え返答しようとは何とか口を動かす

荒川「な、なんでそんな事聞くんだよ」

沖田「…前から思っていましたがあなた国の常識の疎すぎます、最初見かけたときの服装だったり今の事だったり…たまに変な言葉使うし」

荒川は今まで時代を旅をしてきたがその時は同じ境遇の人だったので話す事ができたのだが今回は違う、完全に自分の故郷日本であり久々に帰って来たためでもあるのだろうか少し嬉しくて口が軽くなってしまったようだ

荒川「ほら前にも言ったろ？若い頃から外国とかに出向いててそれで癖が移ったって」

沖田「…あなた嘘つくとき下手ですよ、わかりやすい顔してますよ今」

『あなた…嘘が下手ですね』

『嘘についてはいけませんよ』

『相駆らわず嘘が下手だね君は…練習をしたらどうだい？』

そう昔から言われ続けたダメ出しをまた言われてしまった、最近はず重しているが思った事は口に出すタイプなので嘘をつくとき良い理由が思いつかず苦しい言い訳が出るのだ、人をおちよくる時の口は最高なのだが、沖田は嘘をつかれたのが気に食わないのか冷たい目を一瞬向けると後ろを向いてしまった

沖田「…私には正直になれって言った癖に、あなたはしないんですね」

荒川「ち、ちがうよ、ホントに日本人何だって」

沖田「それじゃ生まれは何処なんですか、私それを聞いた事ありません」

荒川「尾張だよ」

取り敢えず今思いついた昔の地名を咄嗟に出してみる、今の状態だと土佐や長州等を上げると下手な疑いを掛けられそうだが、沖田は顔をこちらには向けずこちらに自分の後ろ姿を見せていた

沖田「…また嘘ついた」

荒川「だから、嘘何か…」

誤魔化そうと沖田に近づき沖田の肩に手を置こうとした時沖田が急に振り返りその手を振り払った、その表情からは悲しそうに涙を浮かべ辛そうな表情を浮かべていた、それを見た荒川は思わずその場で啞然としてしまい手を祓われた状態で固まってしまった

沖田「平然と嘘をつくんですね…私は嘘なんかついてないのに」

荒川「いやそりゃないだろ、お前体が弱いのにそれ大丈夫とか嘘言つてただろ」

沖田「でもそれはもう終わったじゃないですか、その時の事は正直に話したでしょう」

荒川「でもお前また無理して倒れそうになっただろうが」

沖田「今は関係ないでしょう？何で私の事を出すんです？」

荒川「お前が無理するからだ、そろそろ本当に倒れるぞ」

沖田「それが関係ないって言ってるんです、それに私の最初の質問に答えてない、何で嘘をついてるのか聞いてるんです」

荒川「だから言ってるだろ、旅をしてきたって」

沖田「そんな年齢には見えない」

荒川「そりゃ俺だって旅はしたくはなかったさ、けどするしかなかった」

沖田「何で」

荒川「それは…」

それを聞いた荒川はどう答えたらいいかわからなかった、いやそれを自分でも知らないのだ、ただ気ままに生きていたら何故か飛ばされしかも若い頃の自分に戻りただ飛ばされる所か時代を超え飛ばされ続けた、何故こうなったのか何故飛ばされるのか何て自分に聞かれても困る

荒川「わからない」

沖田「そんな、ふざけないでくださいよ、自分でやってきた事でしよう？」

沖田は呆れたように荒川に投げかける、人間の旅と言うのは必ずしも目的がありそれにそって行動をする、世界を見て回りたいとか海を見て見たい等の簡単な理由があればいい、それでもなければ旅何かやっていける訳がない

荒川「俺だって知りたいくらいだ、自分でもわけのわからない事ばかり起こるんだ、何でかまた知らない場所にいるし俺だって何が起こっているのかわからないんだ」

沖田「まじめに答えてください!!」

荒川「だからわからないんだよ!!!」

少し熱が上がっていきそれを聞かれた瞬間思わず叫んでしまった、自分でさえもわからないのだこうやって旅をしている理由が：いつもわけのわからない場所に飛ばされてしかも飛ばされる時タイムイング何かしつちやかめつちやかだ、数日で飛ばされる時もあればこうやってたまに長い時間こうやってる時がある、荒い息をたてながら沖田を睨みつけてしまいそのせいか沖田は少し怯えた様子でこちらを見ていた、それを見たためだろうか熱が冷めていき心の中が罪悪感が広がってしまった

沖田「っ」

荒川「お、沖田」

沖田がその場から駆け出し荒川はそれを止めようとしたがどう言葉を駆けていいのか思い浮かばず手を沖田の方に向けるだけで精一だった、荒川が最後に見たのは涙が瞳に溜っていきそれを必死に堪えている沖田、沖田が消え冷静さを取り戻したのか手を下げ追うか追わないか迷ってしまうがその前に後悔が勝り思わずため息を吐いてしまふ、縁側を歩いていた隊士の何人かは唾然としながらその光景を見ていた

その後沖田は街の方に来ていた、時間はもう日が沈みかけそうになつており家の方では明かりの準備をしていた、そんな中を顔を伏せ寂しそうな表情をしながら適当に道を歩いていて、そしてふいに視界に入った小石を見つけるとそれを前に蹴り飛ばしそしてまたその小石まで追いつくとまたその小石を蹴り飛ばした

沖田「ばーかばーか」

さっきの会話を思い出しながら少し拗ねていた、確かに普通に考えて見ればふざけた話だと思いが荒川の表情からは嘘を言っているようには見えなかった、いつもの沖田なら少し考えれば彼が嘘をついていなとわかる筈だろうに今回の作戦は沖田は外されたのでイラついてしまいつい彼と喧嘩をしてしまった

沖田「……」

そしてまた石を蹴り飛ばすとその石は道の真ん中からそれ近くにあった小さな店の前に転がっていった、店の準備をしていた店員はその不意に転がって来た石を見つめて顔を上げると沖田と目があった、伏せ顔だったので少し睨み顔に見えたためか苦笑いを作って気まずい雰囲気流しながら店の中に入っていった

沖田「…はあ」

沖田はそんな事等気にせずただ前を歩き続けた、今回は特に用事もないし酒場で酔うのもいいかもしれない、いつもなら彼がいるが今は

彼と会いたくないので一人で行く事にした、彼に釣られ行きつけになつてしまつた酒場に向かい店の中に入つていった

沖田「こんにちは」

女店員「あ、沖田さんこんにちは」

沖田「こんにちは」

もはや顔見知りとなつた店員さんと軽く挨拶を交わし近くにある席に座る、靴を脱ぎ畳の上上がりテーブルの前に正座で座る、周りには客はだれもおらずガラリと空いた席が目立つ、所々ある柱は古見を感じさせる茶色をしておりには明かりを灯す提灯がある、入口から見て右奥に厨房に行く戸があり左には客が座るための席と集団で食べるための席もある、沖田はそんな集団で飲むための席についていた

店員「何にします?」

沖田「取り敢えず甘酒とお団子を一つずつください」

店員「かしこまりました」

そう言うと店員は綺麗に礼をして厨房の方に行つた、沖田は席に座りその場でじつと待つ、何故だろうあか自分で決めてここに来たはずなのに心の中に大きな穴が空いたままだ、しかも彼の事を考えないようになっているのに何故か彼の事ばかり考えている、今まで口喧嘩何か腐る程やつてきたが彼のある真剣な表情何か見た事なかった

沖田「……」

店員「お待ちしました、甘酒といつもの三色団子です」

沖田「ありがとうございます」

机の上に置かれた甘酒に盃、そして皿に盛られた二つの三色団子、甘酒を持ち盃に注ぎその盃を一気に飲み干した、そしてまた盃に注ぎ三色団子を半場焼け食い気味に食べ一緒に食べる、それを隣で見っていた店員が若干引き気味に聞いてきた

店員「ど、どうしました?何かいつもより機嫌悪そうですね」

沖田「あ、すみません、気に障りましたか?」

店員「いえその、何があつたんですか?いつもの彼もいませんし……ここに来る時はいつも荒川と一緒に行くのだが今はいない、いつもチャラチャラしてる癖に話し上手でしかもたまに八つ当たりしても

何も気にせず聞いてくれた、外面からは考えられないほど我慢強くそして冷静にこつちの意見を聞いてくれた、そんな彼がいつもと違って怒らせてしまった事に少し罪悪感を覚え謝るのが辛くここに逃げてきたのだ

店員「何で彼と別れちゃったんです？」

沖田「あの人が何も話してくれないからです、自分の身近な事や家族の事何かは話してくれるのに自分が今まで何をしてきたのか話の深い所までは教えてくれないですよ、それで何かこう…距離取られてる感じがして…」

それを聞いた店員は小さく頷きながら納得していた、確かに下手に隠されるとそうとらえられるのも仕方ないのかもしれない

店員「でも彼も悪気はないんだと思います、いつも一緒にいる所見かけますけど悪い人には見えませんし」

沖田「そんなの知ってますよ、私が一番知ってるんですから」

そう恐らく彼にも悪気はないのだ、ただいつまでもじらされ続けられたのとそして今回の任務を外されたのが重なってイラついてしまったと思わず当たってしまったのだ、不貞腐れたように五杯目の酒を飲むと顔を机に乗せ顔を店員の方に顔を向けると店員の方はニコニコしながら沖田の方を見ていた

沖田「…何ですかその顔は」

店員「いえ、ホントにあの人の事好きなんだな…って思ってる」

それを聞いた沖田は思わず顔を赤らめその言葉を否定する

沖田「だだ、誰があんな捻くれ者なんか！別に好きでもなんでもありません!!」

店員「別に嘘はつかなくてもいいですよ？だってあの人と話す時一番楽しそうでしたし」

沖田「あ、あれはあの馬鹿が無理やり誘っただけで…」

店員「いえいえ舐めないでください、彼に顔を見られないようにした後よく笑ってましたよ」

そうウインクしながら人差し指を前に出し得意げに話している、沖田の方は凶星を付かれたためか口をパクパクさせ顔も赤く染めなが

ら少し軽いパニックをしていた

店員「ふふ、彼もよく言つてましたよ？彼女の笑った顔も綺麗でかわいいたか、素直じゃない所も逆にいいとか…」

沖田「もういいです!!私はある奴好きじゃありません!!」

店員「本当ですか？」

沖田「そ、そうです、私は…」

店員「好きなんでしょう？」

沖田「だ、だから」

店員「好きなんでしょう？」

沖田「っ」

有無を言わさない詰め寄り方をしてくる店員、と言うか店員なのだろうか？何だかすごい馴れ馴れしい感じで話しかけてくるのだが

店員「嘘は、つかないんじゃないかなったのでは？」

沖田「うっ」

会話の揚げ足を取ってくる女店員、またもや得意げに言ってくるその顔はどや顔で出来上がっており腕を組みながら沖田の方を見る、沖田の方はプルプルと体が振るえ始め我慢をしていたのだが酒のせいで枷が緩かったのか我慢が出来なかった

沖田「ええそうですよ!!悪いですか好きな人の事を知ろうとするのは!?!」

そう何故か切れ気味に返された、持っていた盃は大きく机に叩きつけられる

沖田「いつつつつもそうですよ隠し事ばっつかり!!あれだけ偉そうな事言ってる癖に自分はするし仕事の時はチャラチャラしてしかも問題ばっつかり起こすしその癖私の心配ばっつかりする!!何なんですかあの人私の保護者か何かですか!?!そのせいか私何て子供扱いだしなのに私の事口説こうとするし何がしたいのかわからないし!!」

そういうつも間にか置かれていた甘酒の二個目をそのまま口につけ飲み始めた、店員の方は恐らく客が来ないせいでもあるのだろうが沖田の相手をしている、沖田の方もかなり酔い始めいつもの敬語も抜け始めている

沖田「ええそうですよお私は病弱な最強剣豪沖田さんですよお、胸は小さくありませんよおたださらしで潰しているだけですよお何が小さいだばあくか」

店員「うわあ、あの人が酒をあまり飲まず話だけしていた理由がわかったかも」

病弱って言う理由もあるのだろうが恐らくこうなるとわかっていたのだろう、あの冷静沈着な沖田の姿はもはやどこにもなくただめんどくさい沖田さんが出来上がっていた、店員の方も若干圧に押され気味になっており沖田の方は甘酒三杯目に手を出している所でもう出来上がっていた

沖田「しかもあいつ私にはそう言う目を向けない癖に店の人とか女中にはものすごい口説きに始めるんですよ？こつちの気も知らずにふざけやがって」

店員（酒を飲ませると意外とちよろいですね）

沖田「あ、今めんどくさいとか思いましたね」

店員「いえそれは最初からです」

沖田「そうですかめんどくさいですか、ああもう私の何が不満なのですか!？」

店員「そういうところですよ」

いつの間にか冷静になった店員が酔っぱらった新選組の隊長に突っ込みを入れるとゆう随分シユールな絵面が出来上がっており沖田はさらにそこから四杯目に入ろうとする、皿に盛られていた団子もいつの間にか消えていた

沖田「団子はく？団子は何処に行きましたか？」

店員「わあ…」

四杯目に入った時点でデロンデロンに酔い始めたためか沖田がめんどくさい酔っ払いに進化してしまった、店員の方も煽り過ぎたと思いつめようとするがこう言った人は止めるのは難しい、案の定軽くあしらわれてしまい対応に困っていた

荒川「沖田くいるか？」

その時店員にとって救いの手が来たようだ、声がする方向を振り向

くとそこには店に入って来た荒川がいたのだが何かを察したような顔をしている、沖田の方は振り向かず皿と遊んでいるようなので荒川の声は聞こえていないようだ、荒川は立ち止まり頭を掻きながらどうしようか悩んでいるが取り敢えず話かける事にしたのか店員に近づいて来た

荒川「あゝ酔ったか？」

店員「酔いました」

荒川は店員の前で顔に手をつきため息を吐いた、店員の方は新しい客が来たため接客モードに入った、そして荒川は視線を沖田の方に移し近づいていった

荒川「おい大丈夫か？」

沖田「来ましたねこのたらし野郎、今度は店員さんでも口説く気ですか？ だったら私の見ない所でやってくれませんか？ ていうかさっと来てくださいいよもう四杯目ですよこれえ!!」

荒川「はいはいわかったわかったから早く帰ってさげくさー」

酒を持ち上げた手で人差し指を立てそれをこちらに向け話けて来た、外から見て見ると酷い絵面である荒川が珍しく引き気味になっている、沖田は席に座ったままよくわからない挙動をしながら荒川と会話をしている、荒川はそれを止めようと沖田の手を取ろうとしているが沖田はそれを振り払っている

沖田「やめろお触るなあこの変態!! 今更来ても遅いんですよ! もう沖田さんはあなたの事何か知りませくん!」

荒川「俺が悪かったってだから帰るぞ、新選組の作戦行動中にもし呼ばれたとしてその時二日酔いでしたとか恥ずかしいぞ?」

沖田「知らない!! 私には知らない! どうせ呼ばれませんよ私は病弱でよく倒れちゃいますよくだ」

そう拗ねながらぷいっと顔を机に向け酒を飲み始めるが荒川がそれを止め沖田の腕を掴み少し強引に立たせた

荒川「ほら帰るぞ、後でいっぱいはなしてやるから」

沖田「離せこのすけこまし!」

荒川「おい汚い言葉を使うな、ほら立って」

沖田「うるさい！いつもあなたがつか…」

そう言わせる前に沖田を立たせ顔を胸に寄せ抱き寄せる、それを見た店員は頬を赤らめ両手で口を覆いそれをくいるように見ている

沖田「離しなさい、私がこれくらいで許すとてもお？」

荒川「俺が悪かったて…許してくれ」

それを聞いた沖田は渋らせていた顔が緩んでいき沖田が絶対出さなそうな汚い笑顔になっている、荒川は沖田の背中を軽く何回か叩き落ち着かせるた後胸から離し肩を抱き寄せゆっくりと席から離させる、そして落ち着かない脚を支えながら会計の前に立った

店員「確かに女性のお相手は得意なようですね」

荒川「まあ今まで癖のある女性を相手してきたからな」

店員「わあ、そんな台詞言う人初めて見ました」

荒川「多分この台詞言えるの俺と…三人位だな」

店員「え!?!あなたと同じくらいいたらしの人がいるんですか!?!」

荒川「たらしじゃない後汚い言葉使うな」

一度沖田を自分で立たせ言われた値段と同じお金を出す、それを店員が受け取り会計を済ませるとまだ沖田に近づき脇から腕を回し肩を入れ支える、沖田の方は少し眠たそうにウトウトしながら荒川に支えられる

店員「今度は二人で来てくださいね、ちゃんと仲直りをしてからです」

荒川「ああ…話すのにいい機会なのかもな」

そう少し優しそうな表情で沖田の方を見た、最初に視界に入ったのは薄暗い空間で明かりにで照らされた綺麗な金色の髪だった、それを撫でるようにどかすと綺麗に整った細めた目から黄色の瞳が見えた、赤らめた頬と照らされた唇も相まってかそれからは女性としての美しさも感じさせている、そして不意にその瞳がこちらに向けられた

荒川「大丈夫か？」

沖田「…ふん」

不貞腐れたように顔を背けられた

荒川「すまなかつたな、今まで…その…嘘をついちまって」

沖田「……」

荒川「さっきの話は本当だ、俺も何でここに来たのかはわからない、それを隠していたのは多分、俺の事信じてくれないと思ったから」

沖田「あなたが嘘を言う訳ありません、別に隠さなくても」

荒川「いやこれは話のスケールが違い過ぎるんだ」

沖田「また知らない言葉使った」

荒川「えっと、話のく大きき、そう話の大ききが違うんだ、お前は頭がいいから多分これを言っても受け入れてくれないと思って……すまん」

そう歯切れた言葉を続けた謝罪をかける、沖田の方も少し冷静になったのか何も喋らず顔を伏せる

沖田「……私もその……すみません当たっちゃって」

荒川「いやこればかりは俺が悪い、ホントごめん」

そう頭を撫でながら謝罪をお互いに口にする、その後少しの無言が訪れ気まずい雰囲気になり沖田が顔を上げるとお互いに目が合った、しばらく見つめ合うと荒川がその頬に手を添えた

荒川「全部話す、途中その、別の話があるけど……信じてくれるか？」

沖田「何言ってるんですか、今まで付き合ってきた中でしよう？」

そう優しくその手を包みそれに頬を押し付ける、目を緩め優しくそうに荒川の方を見つめる、荒川も優しくそうな目でそれを見続けている、その静かな時間の中ただ見つめ合い続けていると二人は奇妙な視線を感じそちらを向くとそこには頬を赤らめじっとそれを見ていた

荒川「あ……わりい」

店員「いやそこはやってくださいよ私なんか気にせず!!何でそこで辞めちゃうんですかそこで!」

荒川「え?何を?」

店員が受付の机に身を乗り出し手を叩きつけいきなり変な事を言い出した、それを聞いた荒川の方は何の事なのかわからないため首を捻っており沖田の方は顔を真っ赤にして伏せている

店員「彼氏さんもそこはもうちよつとグイッとやるものでしょうが!沖田さんもそこは流れに乗ってしなきゃ!!」

それを聞いて荒川は何かを察したように頬を掻き目が右往左往し始めた

荒川「あゝいや何か勘違いしてるようだけど…俺たち恋人じゃないぞ？」

店員「…え？」

荒川「え？」

それを聞いた店員は不意を突かれたのかポカンと口を開けている、それと同時に荒川もポカンと口を開け固まってしまった、沖田の方は顔を伏せたまま頬を膨らまして何故かそれが気に食わないのか顔を荒川から顔を反らしていた

佐藤和也と言う人間

あのめんどくさいお酒事件の後から一か月後に沖田は荒川が止まっているであろう宿に来ていた、その中に入るとすぐ左に二階に上がる階段が見え前の方では台所が見えた、そして玄関近くで待機していた女中と目が合うと女中はその場で綺麗な礼をした

女中「ようこそおいで下さいました、新選組の方のようですがご用件は何でしょうか？」

沖田「家の荒川に会いに来たのですが、何処にいるか知っていますか？」

女中「荒川様ですね、それでしたら二階に上がってそのまま真つすぐ進んでもらい右にある手前の部屋から三番目が荒川様の部屋になっております」

沖田「ありがとうございます」

自分もその場で一礼をし玄関に上がり左にある階段を上っていく、木の軋む音が聞こえそれを気にせず進み二階に上がった、真つすぐ続く廊下にその左右に部屋がそれぞれ五つあった、言われた通りに右にある手前から数えて三番目の部屋の前に立つとその戸を軽く叩いた

荒川「おう、入っていいぞ」

返事が返って来たので戸を開け中に入っていくと最初に見えたのは荒川が机の前に座っており手には本を持ってそれを読んでいる、その机にはたよくわからない文字で書いてある紙や本が積み重なっており、しかもそれだけじゃなく部屋の隅にある気の箱の中には色んな色をした宝石のような物もあった、沖田はそれを不思議そうに見ながら前中に入り戸を閉めると荒川の向かい側に座布団が用意されているのでそこに座った、それを見計らって荒川は本を置きゆつくりと沖田に顔を上げた、窓から入ってくる日差しも相まってそれに見とれてしまい思わず頬を染めてしまう、いつもとは違う雰囲気を出す荒川は何故か違う人のようだ

荒川「どうした沖田？」

それを不思議に思ったのか荒川の方は沖田に問いかけるが沖田は

直ぐに何でもないと返答を返す、べ、別に見とれてなんかいないし、ただ雰囲気違って少し驚いたただけだし

荒川「さて、俺の話だったな…はてどう話したもんか」

そう顎に手を当て何処から話すか悩んでしまう、まず旅路の話をする前に色々説明をした方がいいだろう、そう決めると手を離し沖田の方を向いた、今の沖田は普通の彼と違う所を見れてうれしいのか何やら頬を染めているようだ

荒川「えくと、これ言っても混乱するなよ？あまり難しく考えなくてもいいからな？」

沖田「は、はい」

そう首を捻る沖田、まあ多分混乱はするだろうが

荒川「お前、魔法って知ってる」

沖田「存じませんが？」

荒川「んじや妖術は？」

沖田「…噂で聞きかじった程度なら」

流石に知っているようだ、だが顔の方は不満顔になっているがそれは仕方ない、顔色を伺って説明をしてもいいのだが自分はそういう事は苦手なので取り敢えず結論を言う

荒川「それじゃ俺がそれを使えるとしたら？」

沖田「……………。(。・ω・)ん？」

まあそうなるだろうと言う当然の反応だ、取り敢えず頭の固い沖田には説明するより実際に見せた方が早い、そう思い片手を上げそこから軽い魔法陣を作る、その赤い魔法陣の外側と内側はそれぞれ違う方向に回っており次にそれを簡単にそれを変形させてみる、手の平を上に向け四つで組んだ輪を外側から順に見やすいように分割する、それを見た沖田の方は口をポカンと開けその場で固まっていた

沖田「……………え？」

荒川「俺が組んだ四つの輪の魔法陣だ、まあルーンでもいいんだがこれを使いながら説明した方がいいからな」

沖田「え、いや、あの…え？」

沖田は荒川の手の上で起きている事が不思議過ぎて頭が混乱して

いる、荒川は少し間を置き沖田が冷静さを取り戻すまで待つが取り敢えず説明する事にした

荒川「これはまあ魔術って言うんだ、南蛮の方ではそう呼びこつちでは妖術と言う、これはわかるな？」

沖田「は、はい」

荒川「よし次だ、これは色んな事が出来る、火を出したり水を出したり、まあ平たく言えば現実離れた事、つまり常識的にありえない事が起きるのが魔術だ、今はこう覚えてくれればいい」

そして組んだ魔法陣に魔力を通して発動させるとそこから火が出た、それに思わず沖田は驚きまた固まってしまう、荒川はその火の形を変え魚にしたり猫にしたり最後には龍に形を変える、沖田はそれを見ているように見ている

沖田「す、すごい」

荒川「まあ長旅だからな、生きるためにも必要だったし」

そして荒川は術を解き炎を消す、沖田の方はその炎が消えた途端肩をビクツと震わせた、二人は思わず無言になってしまいが沖田が軽く咳ばらいをして仕切り直すとそれに合わせて荒川も説明を再開する

荒川「よし次だ、俺がここに来た理由なんだが…ホントにわからない、いつも気が付いたら別の場所にいるんだ」

沖田「ホントに…そうなんですか？」

少し不安そうな声と表情を出す沖田、荒川は少し辛そうに頷くとそのまま顔を伏せたまま続ける

荒川「沖田、今が何年かわかるか？」

沖田「慶応2年ですよね？」

荒川「いやそうなんだけど別のやつ」

沖田「…1866年ですか？」

荒川「今がそれぐらいだ、だけど俺が生まれたのは2001年で飛ばされたのは2032年なんだ」

沖田「…えっと、え？」

沖田は一度こちらに疑問を投げかけたがまた考え直したが荒川が言っていることの意味がわからないのか再び疑問の声を上げ手で頭を

押さえ顔を伏せた

荒川「まあそうなるか」

今の現代でも恐らくそうなるだろうがここは慶応二年だ、現代ではフィクションと言う形でタイムスリップ等で共有はされているがそもそもこんな時代にはそんな言葉は存在しない、現代ならまだ何とか言葉は通じるだろうが今の時代じゃどう言葉に表せばいいのか難しい物だ

沖田「えつとそれはその…今から160年後くらいから飛ばされてここに来た、と言う事ですね？」

荒川「まあそうなる」

沖田「でもあなたホントに三十路なんですか？その割にはシワが少なすぎるような…」

荒川「それも俺にはわからない、しかもその飛ばされた年に何が起こったのかわからないし…最後に俺が覚えてるのは…急に空模様が変わったと思ったら周りの人が塵になって消え始めた、それでそれをボーと見てたら…急に風景が変わった、何か綺麗な虹色の風景が目に入ってそして気が付いたら…俺は知らない街にいてしかも二十歳ぐらいまでの頃に若返ってた」

沖田「わ、若返り？」

自分でも知らないが何故か自分も熱く語っていた、だが今自分が安心しているのは確かだ、一言一言喋っていくごとに安堵していく

荒川「そこで色々な事があった、最初は聖杯戦争、そこでは良い奴としりあった、お人よしの士郎に優しい桜、気難しい遠坂そして…お前とよく似た堅物のセイバー」

もはや懐かしい光景だ、皆で囲んだ食卓、戦争によって結ばれた因果な関係だったがそれでも楽しかった、だって何だかんだ言っても皆優しかったから、俺はその時ひねくれていた、親がろくでもなかったから早く学校を卒業して家を出たかった、だが卒業はしたものの親の前科のせいで仕事が見つけれられず長年フリーターをやり続けていくうちに荒れてしまいっしか喧嘩ばかりする人生になっていた

荒川「正直あそこで消えるのもありかなとは思った、このまま消え

て行けばこんなつまらない人生に幕を下ろせるかと思つてよ、飛ばされた後もこのままつまらない人生を送るかと思つてたら、士郎たちにあつたんだ、あいつ良い奴だよ、路上で不貞腐れて寝てたらあいつが声掛けてきてよ、いいって何回も言ったのに俺を引きずっていきやがつて自分の家に連れて行きやがつたんだ」

荒川『おいうぜえぞお前』

士郎『いいから来いって！今にも死にそんな顔しやがつて』

荒川『は、元から死んでるもんだよ』

最初はそりや悪態をついた、でも士郎は無理矢理家に泊まるように言い従姉も俺の状態を見て了承した、最初のうちは不貞腐れて酒に逃げていたが彼らと接していくうちに頭が冷めていったのか軽いバイトをし始め外れていた食卓も混ざるようになり口数も増え始めたいつの間にか暖かい空間が広がっていた、自分は何をしていたのでろうか？いつの間にかなりたく無いあの親のような存在になりかけた癖に何をひねくれていたのだろうか、だからだろうか、その固くなつていた氷を溶かしてくれた暖かさにはうれしかったのだ、そしてそんな中入つて来たセイバーも同じだった

荒川「あいつも俺と同じ堅物だった、だからかな何かあいつが俺と似てて見るのが嫌だった、だからしよつちゆう喧嘩してたな」

懐かしい、よく士郎も言い合つていたっけか、遠坂と桜とセイバーが集まっていた時は士郎は大変そうだったな、そう手を口にやりクスクスと笑つてしまう

荒川「それでそこからまた次の場所に飛ばされたんだ、それであつたのは：聖女様さ」

聖杯戦争が終わり次に飛ばされたのはよくわからない空間だった、投げ飛ばされたのは太陽の日差しが良く刺した明るい草原に落ちた、よくわからない状況におかれ周囲を確認したがよく見ると上の風景の一部がおかしかった、空の中央には真つ黒な大穴が開いておりその淵にはまるで吸い込まれたような渦が出来上がっていた、そこで最初にあつたのは聖女様なのだがその時の自分の精神は乱れていた

荒川「やつと穏やかな時間がおと離れたのにまたわけもわからない

場所に飛ばされた、正直最悪だったよ、そんな時もむしゃくしゃしてよ、訳のわからない怪物とか殴り倒してきた時に聖女様にあつてよ、よく当たり散らしてたな」

荒川『お前さつきから何だ？体に鎖とか巻き付けるとかいい趣味してんな』

ジャンヌ『こ、これは私の正装です!!変な事は言わないでください』
荒川『は、何が正装だよ』

そう軽く当たり散らすようにそのジャンヌとは仕方なく一緒にいる事にした、半場八つ当たりのような会話ばかりだったがジャンヌはそれでも優しく接し俺の心を落ち着かせてくれたのだ

荒川「ジャンヌには悪い事しちまったな、俺が落ち着いたのは飛ばされて三々四回ぐらいの頃だったな、ああそうだそんなんだよ、藤丸とか言う奴に会ったのも」

そうだ大事な友人の事を忘れていた、藤丸と言う人間でパートナーのマシユ、サーヴァントの説明もいれようかなと思っただがこいつには縁のない話だ、はぶいてもいいだろう

荒川「それで三人で一緒に藤丸たちの手伝いをしてたんだよ、色々あったな、竜が出たり何故かジャンヌが二人いたりとか大変だったけど無事に解決できたんだ」

そうしてすべてが終わった後皆はそれぞれの場所に消えていった、そしてジャンヌが帰る時に自分を呼び二人で最後の別れを話していた時にある物を渡されたのだ、それは綺麗な宝石が真ん中に埋め込まれたお守りだった、そしてそれを眺めていたらジャンヌが急にその宝石事自分の手を包み自分に顔を寄せた

ジャンヌ『私があなたに作ったお守りです、もし私の手が必要な時があつたらこれで呼んでも構いません、直ぐに飛んできますから!』

荒川『お、おう』

何故か押し気味に言われたその言葉を思い出す、あいつは俺の事が心配なんだろうが俺には召還なんてできないって言う前にその途中で消えてしまった

荒川「まあ案の定また飛ばされちゃった、それで色んな所にいった

な、もう数えてないからわかんないけど二桁はいつてるだろうな、それでまあそこでも色々学んでそれでまた飛ばされてきたのがここだったって訳…沖田？」

頬が緩んだ説明をしていて下げていた視線を沖田の方に戻した、そこには目をグルグルと回し頭が破裂寸前の沖田だった

沖田「うくん妖術が使えてしかも先の時代から来てしかも世界を渡っている？何がなんだか」

荒川「まあこうなるか、やっぱり共通知識がないのは痛いな」

こればかりは仕方なく実際に荒川も見るまでは空想の話だと思っていた、取り敢えず沖田にはかなり噛み砕いて説明をし何とか理解させた

沖田「な、なるほど何となく理解はしました、それにしても本当に妖術がある何て驚きました」

荒川「俺も最初んな事言ってた」

沖田「でしようね、あなたのような人がそれを使っているのも驚きですけど」

荒川「これぐらい使えないと死ぬ場面が多かったんだよ」

沖田「そんな場所に送られる何て…何か罰当たりな事しました？」
目を細め冷たい視線を送る沖田、荒川の方は慌てて手を振る

荒川「…してない、筈」

捻くれていた時代に警察沙汰になる問題何か日常茶飯事だったし今までの事を振り返ると確かに罰当たりな行動があったようななかつたような…

沖田「何で自信なさげなんだか」

沖田の方は何だか気が抜けたのかこの人なら仕方ないと思っっているのか表情が柔らかくなっている…この野郎

荒川「何だよその顔は」

沖田「いえいえ本当の事を話してくれて何だか嬉しくて」

そう手を前に出し両手を合わせ笑顔を浮かばせる、それを聞いて少し嬉しいのか荒川の方は照れくさそうに頬を掻いている

荒川「ていうか信じるのかよ、こんな話」

今更だがこんな話をこの時代の人に言ったところで信じてもらえない、そのため誰も話さなかったたとえ話したところで意味もなかったのだが沖田の方は首を縦に振った

沖田「今のあなたからはとても生き生きした感じがします、そんな嬉しそうに話しているのに頭ごなしに否定はしませんよ」

荒川「…ありがとう」

沖田「礼なんかいのに…」

荒川「いやよ、お前に言われるのがうれしいんだ」

沖田「へ？」

それを聞いた沖田は気の抜けた声を出してしまう…そろそろ言ってもいいかな

荒川「沖田、あの時言ってた別の話にうつるんだが俺は今ある物を作ってるんだ、それを作るためにあの仰って奴と取引してたんだ」

沖田「それである人とよく会ってたんですね」

荒川「ああそれでその内容なんだけど…お前の病気についての事なんだ」

沖田「私の、病気？」

荒川は横に置いてあった本を数冊取り出し机の上に置きそれを広げる

荒川「お前の肺結核は肺の中に結核菌が入り込み感染する事で起きる病気だ、この菌の発症率はそこまでなくしかも菌が入り込んでも体の免疫機能が正常に動いているのなら別に問題はない、だがなんらかの原因、例えば老化とか他の病気とかで免疫機能が削られると寝てたその菌が起きて感染する事がある、今は特效薬が無いから栄養を取って安静にするしかないが…未来ではそうとは限らない」

そして数枚ほど捲っていくと荒川が墨で書いたのだろうか何かの調合法が書かれている

荒川「俺がいた時代では抗生物質が見つかり結核の治療を直す事ができた、この日本じゃ材料が手に入れられなかったが仰のおかげで材料が手に入って薬が作れた、もう実際に結核になっている人に実際に投与を続けて貰って完治した事も確認した」

沖田「え？それって…」

荒川「お前を治せる、と言つても直すのに最低半年以上かかるけどな」

信じられなかった、専属の医者からも直せないとはつきり言われた、自分も死ぬのは怖かっただから少しは探しはした。だがどこにも見つからなかった、しばらくはそれに恐怖し続けた、怖かった、恐ろしかった、嫌だった何もない自分が今にも消えてしまいたいそうだった、それがどうしようもなく暗くて皆から忘れられるのが怖くて自分は刀を振り続けた、そうすれば何か残るかと思つて、それをすれば皆と一緒に歩けると信じて振るい続けた、けどいつも残るのは血がついた刀と血だらけの死体だけだ

だが自分が残せるのはこれだけだ、皆も褒めてくれた、土方さんも近藤さんも私に気を使つてくれた、私もそれは嬉しかっただって自分には刀しかないから、それしか残せないから振り続けた、けど死ぬ恐怖だけは消えず血を吐くたびに夜も眠れない時もあった

沖田「ほ、ほんとうに？ほんとうに、治るんですか？」

荒川「ああ現代の医療と魔術を合わせて作った特注品だ、一応これでも医学の心があるんだ」

荒川は昔捻くれる前に親のもとを離れたく色々やってたのだがその時にできるようになったのは多少の料理と喧嘩技と医学だった、その次に習ったのが魔術で流派色々だがさつきやったように魔法陣を生成しそれを通して出すと言う詠唱型ではなく術式型だ、実際に自分が持っている刀や服には術式を書き使う際はそれに自身の魔力を通して発動させている

だが自分には才能が無いのかそれとも合わないのか知らないが何か魔術は使い辛い、使うとしても身体強化や魔術礼装モドキを作るぐらいしかできないがそれでも魔術対策がされていないこの時代では絶大効果を発揮する

荒川「ここにあるのもちゃんと魔術が使えるのかどうか実験した物さ、最初から作るなんてやった事なかったから大変だったけど何とか形になったんだ」

そう言つて袋を取り出し机の上に置いた、沖田の方はまだ信じられないのかその袋を見つめ続け驚いた表情で固まっている

沖田「…なんで？」

荒川「ん？」

沖田「何で私なんかのために？見返り何かない、ただ人が助かるだけなのに」

それを聞いた荒川は一瞬驚いた表情をするが直ぐに笑みを浮かべて喋りだした

荒川「…正直言うとな、魔術とかがあつても戦闘何か約にたなかつたしやれる事としたらせめて皆の邪魔をさせないように雑魚を片付けたりとか…最悪の場合遠くから見るしかないなかつた、それで俺なに出来るのかつて考え続けてたらまあこんな小技も使えるようになったつて所かな」

われながら藤丸はよくやっていけたものだ、実力差何か空き過ぎて嫌になる程の相手なのに負けじと頑張り世界を救つたと言えるほどの事を成し遂げ続けた、正直ただ捻くれていただけの自分と違い過ぎて尊敬の念を感じていた

荒川「皆すげえよほんと、男気があつてちゃんと女の事を思つていた、そいつらは俺なんかより男らしく生きていた、それで俺が怖気づいてた事態にも向かつていつてよ…それに比べて俺何か」

悲惨な目に会おうとも良き生き方を貫いた士郎、運命の過酷さに巻き込まれた藤丸とマシユ、そして今まであつてきた人達、それぞれにしつかりした生き方をしていた、なのに自分はどうかだ今まで何もなしたことがない、ただ喧嘩ができるだけのただの荒くれ者だ

荒川「だからこんな病弱な女性を助ける何て事しかできないんだ、情けねえだろ？」

沖田「そんな事あるわけないじゃないですか」

弱気になつていた表情が不意を突かれたのか驚いたように弱弱しい目を開きながら沖田の方を見る、そこには真剣な表情をした沖田の顔があつた

沖田「私は人を助ける程の偉業以上の事なんて見た事がありません

ん、志士も私たち新選組も考え方が違うだけで人を助けると言う本質は変わりません、あなただって私を助けようと言う過程でもう何人も助けてるじゃないですか、今まで治療が困難だと思われていたこの病気を治し人を助けたと言う程の結果をもう残しているじゃありませんか、正直切るだけだった私何かよりもすごいです」

荒川「け、けどよ、それは未来の知識を使つてずるしてるだけで…」
沖田「だから何ですか、私にとってはそんな事知りませんし第一未来の知識を使つてはいけない何て何処にもありません、それに遅かれ早かれ使われる物なんですから効率的に考えて早いに越したことはないはありません、違いますか？」

荒川「けど、それじゃ未来が変わって…」
沖田「私にその未来の世界と言うのは知りませんがあなたがあなたにとって今生きているこの時間こそ現在の話で私を救うと言う話が未来の話になります、そしてあなたがいた未来の世界と言う所があなたにとって過去の世界になるんです…違いますか？」

荒川はそれに言葉が見つからず思わず黙ってしまう、確かに自分にとっては2032年のあの世界はもう過去の話だ、けど他の人間にとっては違うのだ。もし自分が殺した志士の中に未来まで生き残つて子孫を残していた人がいたらそれは自分が殺したも同然だ、だからなのだあまり殺したくないのは、自分の信条で出た慈悲でもなければ人を殺す事が怖い…と言うのは少しあるが本当は未来がどうなるのかが怖いだけなんだ

沖田「そんな事言ったら私何て何人切ってますか？私は一々その人の未来の事を考えていませんしそもそも志士だって殺される覚悟位できています、それが出来ていないのに志士なんかになるなって話です」

荒川「そりゃ…そうだけだよ」

沖田「それ何かと比べてあなたがやろうとしている事はとても良い事です、人殺しで成り立たないただ純粹に人を救うと言う何の穢れもない…良い事なんですよ」

その声に当てられて何だか胸が熱くなり目元がかすんできた、調子

が悪い訳じゃないただなんだか救われたような気がするのだ

沖田「正直私を救うためだけなのにそんな事をしてくれる何てなんて言葉をしたらいいのかわかりません、もう治る訳がないと言われ続けて死ぬのが怖かったのに、未来がないと思っていたのにあなたが光を灯してくれたんです、自身持つて下さい」

そう優しくそうに微笑みを見せてくれた沖田の顔を見て何故か視界がボヤケて何も見えなくなかった、腕の裾を使って何度目をぬぐってもそれが取れずただ裾が濡れていくだけだった

荒川「そう、か、そうつか」

いつもはろくに考えず行動するのにこういう変な事は考えるのにこういう時だけ自信がなく躓いてしまう、そしてそのままいじいじしたまま終わるのが怖くて、今回もそれをするのが嫌で思わず行動してしまっただけそれでも不安があったのだ、なのに彼女はそれを気にしなくていいと言ってくれた、嬉しいと言ってくれた、それがどうしようもなく嬉しくて涙が止まらないのだ

荒川「くそがよう、ガキみてえに泣いちまって、情けねえ」

だが嫌ではない心の中にあつた不安が取れて歯止めがきかないのだ、それに加えて沖田の優しくそうな表情が眩しすぎて嬉しいのだ、荒川はしばらく泣き続け沖田はそれを終えるまで静かに優しくそんな笑みだけを返していた

荒川「あー泣いたないた、こんなに泣くのは初めてだな」

沖田「そ、そうなんですか、ちよつと嬉しいかも」

荒川「ん？何か言ったか？」

沖田「い、いえなにも！」

そう目の前で手をぶんぶんと振り誤魔化した、それを見ていた荒川はしばらく沖田の方に視線が釘付けになった、美人と言ってもいい程の顔にいつものクールさに勝るこのギャップのある可愛さ、今も顔を赤らめ顔を伏せているその様子がとても可愛らしく感じてしまう

荒川（あーあ、こりや惚れてんな俺）

もう沖田から目を離せない、拳動の一つ一つを見るのが嬉しく感じてしまった、荒川は立ち上がり沖田の隣に座り彼女を抱き寄せた

沖田「え!?!ええ!?!な、な、ななんですか!?!」

荒川「あーいやよ、俺も恥ずかしいと思ってるんだけどさ、何か我慢する理由が思いつかなくてよ」

もう片方の手を腰に回し顔を正面に向けさせる、沖田の方は変な顔になっており目が右往左往し始めている

荒川「そのよ、俺お前に惚れたんだわ」

沖田「……へえ？」

荒川「だから、異性として好きになったって事」

その言葉を聞いた沖田の頭からボンっと言う音が聞こえそうな効果音とともに沖田の目が周り始めたがそれを気にせず額をくつつける

沖田「だ、だめですよどうせ嘘でしょう？わかってますよそんな事だっけいつも私の事を子供扱いしてましたよね？だからこんな簡単に惚れる訳が……」

荒川「…ダメか？」

沖田「い、いや駄目とか、そう言うんじゃないよ」

荒川「駄目なら離れてもいい、けどまんざらでもないのなら…目を閉じてくれるか？」

やばい言っついて何だがすんつつつごい恥ずかしい、いやでも全然悪い気分じゃないしそれにもうやってしまったからには後には引け

ない、そう覚悟を決め沖田の方を見つめ続けるとゆっくりと目を閉じた、荒川の方は額を離し沖田の口を自分の口で塞ぐ

沖田「ん」

頭に手を回しこちらに引き寄せるように押し付ける、沖田の方も荒川の背中に手を回しお互いに抱き合う、そしてその状態が数秒続いたのち口を離した

沖田「……」

荒川「……やばいな、これ」

沖田の方はそれに小さく頷く、沖田の方は顔を伏せたまま表情が見えない

荒川「なあ」

沖田「…なんですか？」

荒川「もっかいいいか？」

沖田「!?!」

その声に釣られて沖田の顔が起き上がる、ちなみに沖田の後頭部には荒川の手があるため離れる事ができない、沖田は目を反らしたが大きく息を吐いた後また目を瞑った、それを見た荒川は顔を寄せた、最初は口を合わせるだけだったが今度は舌を入れて見た、沖田はそれに驚いたのか目を見開き体が少し跳ねてしまいが観念したように目を閉じそれを受け入れる

沖田「ん…んう」

沖田の方も舌を伸ばし始めお互いの舌同士を舐め合わせて唾液を交換し合う、それがさつきより長く続くとゆっくりと口を離した、綺麗な透明な糸がお互いの舌から伸びその中心が下に落ちていった

沖田「ずるいですよホントに、まともに顔何が見れないんですけど」

荒川「俺は…ずっと見て見たいがな」

沖田「…そういうとこですよ」

そういうと顔を荒川の胸に押し付けた、心臓の方が鼓動の速さが尋常じゃなく早く聞こえてくる

沖田「すごい早いですね…そんなに嬉しかったですか？」

荒川「そりやな…こんなキスするのなんか初めてだったんだし」

沖田「それは…色々嬉しいですね」

荒川「お前のは聞かせてくれないのか」

沖田「き、聞きたいんですか!？」

「またもやつられて上げた顔が上がり口がパクパク動き動揺して
いた…こいつ意外とバリエーションが多いんだな」

荒川「ああ」

「恥じらいはあるだろうが今は嬉しさがまさりそんな事より彼女の
事を知りたい、沖田の方は彼と少し開け顔を伏せたまま小さくどうぞ
とつぶやいた」

荒川「…お前も早いじゃねえか」

沖田「そりゃこんな事されたら早いですよ!!」

荒川「それにここ柔らかいし…いい匂いがする」

沖田「っ!？」

顔を沖田の胸に埋めその場で臭いを嗅ぐ、さりげなくやる変態行動
に沖田の方はもう頭の容量を超えてしまい混乱しその場で固まって
いた、しばらくの間このままの状態が続くが名残惜しいように顔を離
した

荒川「よし、んじゃ薬の投与を始めるか」

沖田「こ、こここの空気でするんですか!？」

荒川「そりゃ早くやるには越した事はない、それにこれ以上続けた
ら俺がお前に何かしそうだ…それともやって欲しかったか？」

沖田「は!？え、あ、いや、えっと、そ、その…そういうのは女の子
に言わせないでください!!」

何を言い出すんだこいつはと言うかこんな性格してたか？何故か
いつもの荒川と違って今の彼はその…綺麗に見えてしまう

沖田「も、もういいですから早くやりましょう」

荒川「おう、ちよつと待ってろよ」

沖田「あ」

荒川が沖田から手を離し少し先にある棚を開いた、そしてそこに手
を突っ込み袋を取り出すと棚を閉め沖田の方を振り向いた

荒川「あ、そうだ忘れてた」

沖田「な、なにがです？」

荒川「俺の本当の名前だ、まあわかつていたと思ってたけど荒川は偽名なんだ」

近づいていき沖田の前に立ち自分の真名を告げる

和也「俺の名前は佐藤和也だ、改めてよろしくな」

沖田「…ええ、これからよろしくお願いしますね」

そうお互いに笑いながら自分の名前を告げた、和也自身もよくわからなかったのだがこの名前を出せたのが何故か嬉しかった

時代が望む姿

和也「おらあ！」

都の路地裏で和也が刀を振り上げそれを勢いよく下ろした、志士はそれを刀で受け止めるが和也はそれを直ぐに切り返し下から切り上げた、刀が弾き上げられそのまま相手を切り裂いた、血飛沫を上げ倒れる志士を最後に和也は刀を振って血を払い蹲っている志士の服で血拭きを行う

和也「刀の手入れって面倒だな、まあせっかく貰った刀だし大事にしないとな」

血拭きを行わないと刀は錆びるので行わないといけないので拭かないといけないのだがこの時代では紙が少し貴重品なのであまり使えないためこうやって相手の服や自分の服で拭き取り後は家でしっかり洗い後は油を塗ると言うのが普通の流れらしい、前までは刀の拭き方を知らずよくそのままにしていたのだがそれを見た沖田がやめるように言いそれを渋々受け入れたのだ

和也「悪く思うなよ…恨むのなら弱い自分を恨むんだな」

そう刀はそのまま抜き身のままその場を振り返る、夜な事もあってか先がほとんど見えないがそこは魔術回路で目を強化しているため多少は見えるようにしてあるため問題なく路地から出られた、そしてその近くを回っていると数人の隊士が手に松明をもって近づいてきた

隊士「副隊長、それは…」

和也「あの路地裏に何人か転がってる…朝になる前に片付けるぞ」
そう後ろにある路地を親指で指し支持を出す、今回は沖田は同伴しておらず何やら新選組で起こっているらし沖田の仕事を和也が変わりにやっているのだ、一応副隊長でもあり隊士との交流も多く信用もあるため特に問題なく進んでいた、肌寒い夜風が当たる中他の隊士と一緒に後処理をしていると他の隊士が声を掛けてきた

隊士「あの…少しいいですか？」

和也「何だ？」

隊士「その…家はどうなるんですかね」

和也「伊東の事か？」

沖田たちが招集された案件は伊東らの動きがおかしいようなのだ、聞いた話では土方と伊藤らの中が前より酷くなり会議の時も意見の違いからよくギスギスした状態で終わっている事が多いようだ、目立つのが伊東と藤堂のようなのだ

隊士「何で藤堂さんが…」

和也「確か試衛館の頃からいるんだっけか？」

隊士「はい、長い間一緒に戦って来たのに二人とも何で…」

和也「まあ見る限り思想の違いだろうな、俺は難しい事はわからないが人には譲れない物があるもんだ」

目の前で並べられた志士の死体を見る、肩から斜めに一線袈裟切りと呼ばれる切り方をされていた、和也はその志士の死体をなるべく丁寧に扱いそのまま運んでいく

和也「例え今まで戦っていた同士と別れるようになっても人は自分の信じた事をやるしかないんだ」

隊士「けどだからと言って…」

和也「何と言おうがこのままじゃ割れるのは時間の問題だ…正直あまり想像したくないがな」

何故こうなったのかは自分でもわからない、今まで新選組でかわったのが沖田ぐらいしかいなかったためか伊東がどんな人物なのかもわからない、そのためあまり深い事は言えないため自分では止められないだろう

和也（身内で殺し合うかもしれんな…沖田にはかなり酷な話だろうな）

沖田には少し無理はさせたくないしストレスを与えたくない、その時は自分が変わりにやるしかないだろう、隊士たちの方も不安がつている、自分の方も嫌な感じは取れないまま仕事の後処理を終わらせた

茶の味が口に広がりその後皿にのっていた三色団子を口に放り込む、ピンク色の団子からくる梅や桜の香りが口に広がり中々美味い、その次に釣られるように白の団子を口に含むが普通の団子の味でした

和也（茶は食べ終わった後に飲むべきだったかな？）

そう思いながらも飲み込み終えた後最後の緑を食べる、ヨモギの香りが広がり串を皿の上に置く、その後茶を飲み干しその場を立ち上がり日差しが指す場所に出る

和也「明日は沖田の様子を見に行かなきゃか」

薬は改良したとは言え毎日飲まなければならぬが新選組の仕事はどうしてもしたいと言う事で傷を負わない限りは遅くはならないのだが症状が悪化しないか週に二回程付き添いの先生に確認してもらってるのだが沖田が来てくれと言う事なので暇をとって一日遊びに連れ添う事があるのだ

和也「ホント大人しくしとけよなまったく…まあ嬉しいけどよ」

好きな人と一緒にいる事は嬉しい事だ、前の世界では自分に好きな人ができるなんて思いもしなかった、普段は冷静沈着で少し冷たい感じがするが素の時はそうじゃない、子供のようにはしゃぎさらに可愛い反応をするあのギャップが凄まじい、しかも初めて知ったが小さいあの体にあの胸の大きさはずるい！しかも体は抱かせてはくれるが

そう言う行為は流石にさせてはくれない

和也「…生殺しだよなあれ」

我ながら変態のような考え方だがこれは許してほしい、だってあのスタイルは正直ずるいししかも今までであったジャンヌとかも今思えばそうなのだがサーヴァントの女性のだいたいスタイルが良すぎる、普通あんな彼女が出来たら嬉しいだろ

和也「さてどういじったものかな、あの日以降キスしていないし久々にするのもいいな」

あの日から和也の変な枷が外れたせいかな沖田の事が好きでたまらなくなり隙あらば抱き着いたり愛をささやくなど普段の和也からはとも考えられない甘えっぷりである、やはり今まで愛を知らずそれを知った時の嬉しさが激しかったのか気持ち悪い程止まらないのだ、そうニヤニヤしながら明日の事を考えながら歩いていると少し気にかかる事が耳に入ってきた

男「聞いたか？昨日田原さんの所の人が殺されたって話」

男2「ああ、隊長と副長が切り殺されたって話…かなり酷かったらしいな」

男「田原さんはその時古河の奴に呼ばれていたらしい、そして昨日の夜屯所に帰ってきたら…副長と隊長が殺されていたらしい…」

男2「ホントひでえ話だよ、こりや田原さんとこは閉じちまうな…」

男「最近物騒なのに…ホントに怖くなってきたな…」

そうひそひそと話す男たちの声が入ってきた、実は最近警察集団が襲われる事件が今のを入れて二件発生しており最初の起こったのは正樹組と呼ばれていた所で25人ほどの小さな組だったが二週間前に組の屯所で全員殺されており屯所の中は血まみれになっていたが一太刀で全員やられていたので遺体は切られた箇所以外は血がついていなかった、今も捜査中で分かっておらず難航しているようだ

和也（田原んところは見回り組が調べてるから任せていいな…まじでこっちは来てほしくないけど）

ただえさえ内輪もめで胃が痛いのにこれ以上厄介事は本当に困る、沖田のためにもあまりストレスを与える訳にもいかないのだ

和也「…先に潰しておくか？」

見回り組と新選組は仲は良くないため恐らく邪険にされるだろうし家の方も関わるなって言いそうだけど、割れた後に後ろを刺されないように先に潰すのもありだ

和也「…すっかり板についてきたな」

こんな荒い警察がいるのだろうかと思うだろうがこんな時代でも現代でも探せばいるだろう、それに理由はどうあれ俺がここにいる理由はただ一つ…沖田のためなのだから

井上「その隊士」

和也「ん？…げ」

急に後ろから声を掛けられたと思って後ろを振り向くとそこには井上がこちらを見ていた、相駆らわず渋い顔をしており眉間にシワを寄せた顔がこちらに向けられ思わず引いてしまう

井上「げつとは何だ」

和也「いやなんもないつすよ…ほんとに」

井上「そうかそれならいい、なら少し付き合え…仕事だ」

和也の横を通り過ぎようとする井上に歩調を合わせついていき聞き耳を立てる、一般人は新撰組がその場にいるだけであまり近づかないので聞かれる心配はあまりないがこのご時世のため一応の警戒はしておく

井上「最近警察が殺される事件が多発しているのは知っているな？」

和也「あ、ああ、二件だよな」

井上「正樹と田原の事は知っていたか、なら話しは早い実はついさつき山崎がある情報を持ってきた…ある土佐の人間が消えた、その途端に正樹の所が殺された」

和也「んじやこの事件は土佐の人間が？」

井上「土佐の人間には間違いないのだろうが…土佐藩からはそんな動きはない恐らく独断だろう」

和也（こんな忙しい時に独断で殺してくる奴もいるのかよ…）

井上「だがそれとは別件で起こった人切りがある、これは知ってる

か？」

和也「いやそれは：知りません」

それについては初耳だった、最近内輪もめとこの警察殺人の話題しかなかったものでそれで頭がいっぱいだった

井上「殺されたのは森田和樹32歳、我流の道場を開いていて弟子はもうおらず道場の方は畳む予定だったそうだ、その森田が三日前に道場の直ぐ傍で切り殺されていた」

和也「もしかして犠牲者はその一人？」

井上「そうだ」

和也（：あまり大きな事件でもないような）

少し口は悪いがこのご時世では人が切られる何て珍しくもない、現代では結構な騒動になりそうなの今の時代はまだ刀を持っているのが普通だったのでそう思うのも不思議ではない

井上「：あまり大きな騒動でもないって思ったか？」

和也「え、ええまあ」

井上「まあそう思うのも無理はないか：お前は知らないと思うが死んだ森田は私の友人だ」

それを聞いた和也は罪悪感に駆られた、思わずえ？つと言う言葉が出てきてしまいその後間が空いてしまう、反らした目をゆっくりと井上の方に向けたが相手の方は特に表情は変わってなかった

井上「気にするな：ここでは珍しくもない話だ」

そう流しながら歩いていった橋の中心で止まって端により川を眺める、和也の方も気まずそうに近寄り井上の隣に立つ

井上「森田とは仕事で知り合った、気の合う奴で暇な時に一緒に飲んでた時があっただけの仲だ、剣の道場と言うよりは学問のような事をしていてな、小さい子供にはよく好かれておったようだ」

立ち尽くしているだけであつたがその顔からは寂しさを感じさせるが和也の方もそれと似たような気分になっていた、和也の方でも仕事先で知り合つて仲がよくなった人がいたのだ、正義感が強くよく志士の相手をしていた、その喧嘩の最中に和也も参戦し息があつて仲がよくなりたまにはあるが飲みに行った事があつたのだ、それかと言

うものよく仕事先で会う事があったのだがその二週間後路地裏で切り殺されていた

和也「…やっぱり憎いから追うのか？」

井上「…私は知りたいたけだ、森田が殺された理由をな」

井上がこちらに振り向き視線を合わせる、和也の方は体はそのまま顔だけを合わせる

和也「…こんな時代だから邪魔だから殺されたとか…」

井上「それでもワシは知りたいたいだ…ワシの数少ない友人であり優しい人間であつた」

井上からは憎しみよりも悲しさを感じさせる、沖田と同じく冷静沈着であり何より厳しさを出していたあの井上からは意外だった、自分の方は友人が殺された事で怒り犯人を見つけそのまま瀕死になるまで殴つたと言うのに、それが不思議でたまらない

和也「憎くはないのか？その殺した奴は」

井上「まあ憎くはあるだろうな、殺し合いとは無縁の生活をしていた森田と言う事を知っているワシからしてみればたまったものではない、だがそれでやり返すのは恐らく森田は望んでおらん、ワシが憎しみに染まる顔なんぞ見たくもないだろう」

自分の大事な人が殺されたから殺し返す、現代でもよくあう話ではあるが結局人殺しと言う点で言えばやってる事は同じなのだ、死人に口なしと言うのであればそんな事を考える必要もないがその殺された人間の事を考える人は死んだ人間の後の事も考えてしまうのだ

和也「…あんたは偉いな、辛いだろうに」

井上「辛いのは誰でも同じだ、それにこんな時代だ…覚悟はできていた、ならせめて森田に会う時の土産話ぐらいは作っておきたいからな」

シワが寄せられた渋い顔だが何処となく笑つてるように見えた、友人が殺されたと言うのにここまで強い人間はいない、昔の自分なら怒り狂って殴り飛ばしていたのに

和也「…何で俺なんだ？」

井上「…最近沖田の調子がよく任務でも苦痛の顔を上げる事は無く

なった、医者の方からも病状が直つてきたと言うらしい：お前のおかげだと言うのも聞いた」

和也「え？誰から」

井上「何年沖田たちと一緒にいたと思つてゐる：あいつは酔わせて調子を上げさせたらずぐ喋るからな」

それはまつたく知らなかった、好きな人の意外な一面を聞いて嬉し
いちゃ嬉しいのだがまさかばらされるとは思えなかった、いや身内だ
から仕方がないと言えばそうだし魔術の事だつて今は知られては：
いるがそこまで広まつては今はずなので大丈夫だろうが後で沖田に
言う事が増えた

井上「お前のおかげで私の友人が助かるのにワシは君の事をよく知
らんし邪険にしていた：だから君の事が気になつてな」

和也「そ、そうなのか」

別に普通に声掛ければいいのに：意外と不器用なのか？

和也「まあいいよ、俺もあんたと話したかつたからな」

井上「そうか：なら行くか、沖田にはもう話であるから大丈夫だ」
井上が歩き出しそれにまた和也がついて行く

井上「：そういえば何故医者だと言うのを隠していたんだ？その腕
があれば上士のお抱えにも慣れただろうに」

和也「あゝ：楽しくなさそうだからかな？」

自分の気になる点、相手の気になる事を聞き出すと言う基本的な事
だが二人にとっては嬉しい事だ、今まで警戒をしてきた井上と今まで
心を開かなかつた和也、和也としては初めての試みだったが以外と詰
まる事無く楽しくなりながら歩いて行つた

笠の男

井上「ここだ……」

そう井上に案内された場所は事件現場、つまり道場だった。広さは大きさは二十坪とやや広く床は木で敷き詰められその上には机と座布団が置かれていた。入口から見て奥の右には技を学ぶための道具、左には軽い本棚が置かれておりトイレは入口から見て直ぐ右手にあった。そして道場の近くには物置があり井上の友人はその道場と物置の倉庫の間で殺されていたようだ。

和也「結構使ってるなここ……」

汚れて床が色濃くなっている、こう言うのを年季が入っていると言うのだろうか、机の方も墨が目立ちかなり使われている。次に庭、道場が大きく敷地のほとんどもを占めており空き地は少ししかない。その間で殺されておりまだ調査中のためか血痕の方もそのままだった。

和也（死因は首を切られた事により血が肺に溜つての窒息死か怪我による出血多量のどちらか、死体は道場の方に向いていた。）

森田と言う人間は幼い子に学問を、成人には武術の両方を教えていた。ただ年々数が減り門下生も両手で数えるぐらいしかいなかった。時に道場を畳むと決めその準備中であつた。日課は街の散歩と人と会話をする事、人柄は悪くないが知っている人は少なくそのだいたい井上のような老人ばかり、特にトラブルはなく平穩に過ごしていた。

和也（確かにおっさんの言う通り殺される原因が無い、俺が知らないだけなのかもしれないが井上のおっさんが心当たりがないのが引っ掛かる。）

井上は会う回数が少なかったとはいえ殺される前に何度か井上と会っている、井上の洞察力は高いし経験の事もあつてか恐らく新選組の中で一番の筈だ。人と言うのは友人の前では弱みを見せやすい筈なのに井上が気づかないのは少しおかしい。

和也「調査って二回目なんだっけ？」

井上「そうだ、ここはあらかた調べた、道場の方を少し探るか」

和也「へーい」

現場での残された状況証拠は血痕と死体だけ、死体の方は井上が見ているのでここには残っていないだろう。次に二人が向かったのは道場の中だった。

和也「ゴホツ！何だここほこりだらけじゃねえか」

道場にある右の物置の方を調べていた、長い木の棒や木刀などが置かれておりどうやら剣術だけではなく槍術もやっていたようだ。

井上「ここまでほこりがあるとここにはなさそうだな。」

井上の推測では二年ここは使用されていない、ならここにあるとは少し考えづらい。殺された動機があるのだとしたらここに一度訪れている筈だ。二人は次に左にある蔵書を探る。

井上「ここは：最近使われたな」

和也「ああ、埃は少しあるがさつきのと違ってそんなに充満していない、何かあるかもな。」

蔵書は意外と多彩なため多く換気をする窓が一つと左右に綺麗に並んである本棚が左右に二つずつ並んでいる。そしてその本棚を見て井上が気づいたのか左の奥の本棚の前に移動する。

和也「どうした？」

井上「ここだけ雑に抜けているな。」

和也「どっちも抜けてるぞ？」

和也の言う通り左右の本棚は所々抜けている、無くしたかあるいは腐敗して使えなくなったかのどちらかだろう。そこまで気にかかる事ではない筈だが：

井上「あいつの性格はよく知っている、几帳面で整理整頓はしつかりしていた。本は抜くにしても本を倒しはしない。」

確かに右の方は抜けているにしても一つだけしか抜けておらずどれも倒れていない、なのに井上が指している場所は同じく三つだが本が横に倒れている。

井上「ここは武術に関する物だな。」

和也「何処に何が置かれてるのかわかんの？」

井上「いやワシはここには訪れた事はない。ただ綺麗に整理されて

いるからな、何処に何の種類が置かれているのかがわかりやすい、教え子も使うからな。」

先生だったためか何処になにが置かれているのかがわかりやすい。

和也「けどそれじゃ俺らわかんないぞ？」

井上「：森田の教え子に聞いてみるか」

和也「知ってるの？」

井上「ああ：ワシが指南した時もある。」

和也「そうなのか」

井上は小さく頷く。

井上「随分前に剣術の指南を軽くな」

和也「あんたで軽くって：ぜってえ軽くないだろ。」

沖田の話では井上はかなり厳しい、木刀素振り千回、基礎体感および筋肉トレーニング二百回等かなり厳しいめだ。

和也（と言うかあそこの奴全員厳しいすぎんだよ。）

いや時代が時代だからこうなるのも仕方がない、一番怖いのは副長だが：

井上「では行くか」

和也「おう」

次は証拠探しに繋がる聞き込み調査だ、まずあそこに何が置かれていたのかを確認せねば。井上に誰かを聞き二手に分かれて探す事にした。

森田の元教え子は三年前に道場を出た後上士になり今は内政関係の仕事をしているようだ。ただ思想が志士派に近くあまり他の上士にはよく思われていない。そのため家は上士のように立派ではなくただの普通の一軒家のようだ。

和也「まあ意外と積極的な奴のようだが」

どうやら志士と同じように今の体制を思っていないらしく中から変えようと動いていたらしい。剣術の方も井上の指南を受けており腕も立つようだ。

和也「あつた」

人が歩く整地された歩道に並ぶように続く家、そこにある少しさびれた一軒家があつた。年代を感じさせる物ではあるが少し改装した跡があつた。

和也「…取り敢えず叩くか」

取り敢えず入口の戸を叩く、木の乾いた音が響く、だが声は返ってこず静寂が周りを包み込む。

和也「流石に上士が昼間にいる訳ないか、しかも内政だし」

この時の上士と言えば自分も一度見た事はあるのだがかなりうざい、いちいち上士が道を通る時一般の人は道の端によって頭を下げると言うよくわからない風習があるようだ。しかも仕事関係で関わった時も守ってもらった癖に偉そうにしてて一回ぶん殴りそうになつたがバレないように軽く梃子の原理で股間をやった時がある。

和也「けど俺たちが上士の仕事場に入れる訳ないからな、かと言って待つのは嫌だし…：…適当に聞きまわって何処で働いてるのか聞か。」

上士ともなれば多分城の中だろうが城と言っても複数ある。現代でも京都にはその城が残っておりそれが世界遺産になったりしているのだが城の中に入れるかどうかは知らないし興味もなかったが今

は人が使用しているので入りにくいだろう。

和也「ちよつといいか？」

女「は、はい」

隣の家を訪ねる、戸越しにこちらに視線をやるだけだが話は聞いてくれるようだ。

和也「お隣さんの上士の人何処で働いてるかわかる？」

女「お隣：ああ、その人でしたら多分：」

事前に写していた地図を出しそれを女性に見せる、そして女性がその地図にある所に指をさした。ここから少し遠いが歩けば三十分ぐらいだろう。

和也「あんがとさん」

そう言い残し目的の場所に向かって移動する。まだ日も高いので時間はそう気にしなくてもいいだろう。移動しながら他にもないか聞きながら続けたが特に目新しい情報はなかった。どうやら他者との接触はあまりしていないようで気の良い人にも挨拶だけ返していたようだ。

和也「相変わらず無駄にでかいこと：まああの城よりは小さいけど。」

確か二条城だっけか？おかしいぐらい広かったが：確か何個か焼け落ちてしていると聞いたが：まあ今ではわからないか。

和也「：こうなるんだったら修学旅行、さぼらなきやよかったな」
中学旅行の時京都に行く機会があったのだが別段興味もなかったし友人もいなかったので行かなかったがこうなるのだったら行つとけばよかった。

和也「：今思えば何で俺こんな目にあってるんだ？」

自分は確かに普通の人間じゃないがそれでも魔術師としては三流以下だ。ダ・ヴィンチ曰く魔力の質と量がいいが魔術に対する技術が無すぎる。色んな時代に行きそういう魔術に関する事も学び続けたがどうにも使いにくい。そのため自分のオリジナルを作っては見た者の所詮は素人の真似事にすぎないただのまがい物、ただの人間には効くが魔術師相手ではまるで役にたたない。

シャーロック『宮本武蔵のように別次元の者と言う訳でもない、それでも君が放浪者と言うのは十分に考えられるがそうなる君がそうなる何かがある筈だ。だが飛ばされる前君は何の力もなかったただの一般人、調べた結果家柄も別段特殊と言う訳でもない。でもそれが飛ばされない理由にはならない：情報が少なすぎるな』

あの怖い程頭が切れるシャーロックでも結論には至らなかったが憶測上の推理なら二つ上げられた

シャーロック『ただ単に巻き込まれた、もあるが少し考えずらい。それだったら君はもう死んでいる筈だ。二つ目は選ばれたか、その方が少ししつくり来る。だが何故君が選ばれたのかの理由がわからない。何にしても君はこれからこの旅を続けなくてはいけない。幸い君にはレイシフト適正もサーヴァントを召喚する資格もある、聖杯関係に巻き込まれたら召喚して戦うのもいいだろう。』

とは言うものの適正は藤丸よりも高いぐらいと言う訳で他の魔術師と比べると凡人レベルだろう、と言うか他の連中がおかしすぎるんだ。一般の奴でもかなり強いし魔道元帥に至っては下手したらサーヴァントに勝つとか言う人間なのに化け物みたいなやつがいる。

シャーロック『魔術を極めると言うのはそういう事だ。自分が目指す根源に辿り着くために何世代をもかけて作り上げる。それを引き継がせるために魔術刻印なのだが君にはそれが無い、君が基礎的な魔術を使い接近戦を仕掛けるのは正解だろう。それに君は戦況の見極め方と判断力も高い上に格闘技における汎用性の幅も広い、まさにふさわしい戦い方だ。』

流石にセイバー等の三銃士は援護がなければ無理だがアサシンやキャスター位なら場所さえ良ければ勝った事がある。とはいえ近づければだが

和也「あれから一年近く…これほど長くいるのは初めてだな。」

今まではここまで長くはいる事はなかった、それにここもいずれ離れるとなると…

和也「…どうにか留められないものか。」

その時はいつになるのかわからない、飛ばされる条件もわからない

のでどうしようもないがいつ飛ばされるかは体が教えてくれる。

和也「おっと、着いたか。」

どうやら考えている間に着いてしまったようだ、周りはいつものように塀に囲まれているようだがその城の大きさは隠せていなかった、恐らく二階建てで広さもあり門もありその前には門番がいる。頭を搔きながらめんどくさそうに仕草をするが取り敢えず門番に話しかけて見た

和也「あのく少しいいか？」

門番「……何だ？」

よかった、無視されなかった。たまに新選組だからと言って門前払いどころか話しかけて無視される時があるのだがどうやら大丈夫のようだ。

和也「……ここに亜寿沙って人いるか？」

門番「……いるが、何か問題でも？」

和也「少しある事件が起きてな、それでその事について話を聞きたいんだけど」

門番「今は全員仕事をしている、日を改めよ。」

和也「そりやそうか……んじや俺が来たって言っといてくれ。」

それを聞いた門番は何も言葉を返さなかったがその場で一礼をして返した、和也もそれに対して礼をして返しその場を後にした。

和也（あー言ったものの上士となるといつ帰ってくるか……次の手ばかりでも見つけておくか……）

教え子は二人、後一人である平良と言う人物にあたるのもいいかも知れない。

和也「えつと六角通ってその次車屋町の下行ってその次はんで次は綾小路で……えつと、次は何だっけ？」

あまりにも通りの名が多すぎる、いや別に全部覚える必要はないのだがたまに迷子とかに道を教える事があるので一応は覚えているのだが流石に全部覚えるのは難しい、担当地区なら覚えているのだが流石に全部は覚えられない。

和也「まあ何とかなるんだけど……」

とは言えこつちには地図があるので問題はない、相変わらず基盤の目のような地図で見間違えそうだが

和也「全体図じゃなくて地区事に別れた拡大地図を買うんだった。」
いやさだって最初に行った店にはこれしかなかったし別の店で拡大地図みつけたけどもう買った後だったしその時金が無かったし（酒代で潰した）仕方ない。

和也「次を右でその左の三番目の家…あった。」

平良と呼ばれる人物は教えを受ける前はホームレスのような生活をしていたようでその時に拾われたようだ。今は小さな豆腐屋をやっているようでここにいなくともお隣から話を聞けば店の場所もわかるだろう。

和也「それじゃ…」

家の戸を叩こうとしたその手が止まった、めんどくさそうにしていたたるんだ目が鋭くなり目の前の戸を睨みだした。

和也「…まさか」

戸を開き中に入る、木のきしむ音が響き明かりが無い薄暗い通路を通っていく、そしてある場所に出た。恐らく食事をするための机と椅子が置かれており広さは一間（2mぐらい）ほどの大きさだった。そしてそこには、青く冷めきった腐敗した死体があった。

和也（死後一週間過ぎ、死因は…まあ左斜めから右にかけての袈裟切り…かなり綺麗に切つてあるな）

豆腐屋の従業員はおらず一人営業であったため不思議に思う人は少なかったのだろう、だからと言って時間が経ち過ぎなような気がするが…

和也（にしても不味いな…この様子だと上土の人が危ないかもしれない、だが仕事場にいるのなら大丈夫だろうし井上に報告するか）

森田、亜寿沙、いずれも関係者だ、なら恐らくこのままでは亜寿沙が殺されるかもしれない。それに見つけた以上事件として処理しなければいけない、どちらにせよ放って置くわけには行かないので早く動いた方がいいだろう。そう判断し和也はその場を後にした。

井上「まさか殺されていたとはな…」

無事に合流できた二人は和也の報告を受け頭を抱えていた、井上の方は何の収穫も無かったようで先に屯所で待っていたようだ。

和也「どうする？見つけちゃった以上俺がああ現場預からないと…」

見つけたのは和也なので第一発見者である一番隊が行かなければならない、今では担当が振り分けられるがこつちにはそんな細かい事はせず見つけた隊がやらなければいけない事になっている。

井上「そうだな、こつちは既に終わっている。その亜寿沙と言う人はワシが引き受けよう。」

和也「頼むわ」

その後和也は現場の調査に向かう、一番隊は沖田に無理をさせないようには働かせるから今回は自分一人だ。基本的な事は沖田から叩き込まれている。まず死体の確認と現場の状況の収集を終えた後近辺で聞き込みを始めそれを繰り返した、そしてある情報が出て来た。

和也「笠をした薄茶色の羽織を着た男がいた？」

男「ああいたぜ、丁度一週間前ぐらいだったかな、志士にしては中々

いい物着てるなって。顔は見えなかったけど刀の方に変な紋章があつたぜ。」

和也「どんな紋章？」

男「う〜んとそれがな見た事がない紋章でな、何か”子”って字があつたような。」

和也「子か：他に何かないか？」

男「それぐらいだな、珍しいと言っても最近物騒だからさ。あんまり目を合わしたくなかつたし：」

和也「そうか、あんがとさん」

男「おう」

そう別れを告げ集めた情報を整理する、この近辺は志士の姿も警察の姿もあまり見かけない上に雨も降っていないのに笠を被っているのは臭すぎる。いや女性の場合だとありそうだが腰に刀を差している時点でうさんくさい。それにこれはさっきの人から聞いたわけじゃないがその似たような背格好をした人物を見た時傘を深く被り直したと言うのも聞いたので恐らく犯人はそいつだろう。ならば簡単だ、一度現場に戻る。

和也「さてこういうのは地道にやった方がいいんだろうけどせっかく魔術があるんだ、使わない手はない。」

今から和也が行うのは魔術だ、魔術に関しては基本的な事しか知らないがそれでも基本の幅が広すぎる。探索系探知系などでも細かく分けるともはや目もあてられない。

和也「それに沖田も待つてるだろうし、早めに終わらせるか」

魔法陣を生成、外輪と間輪で方式を作り後は中輪を通して心輪に流し込み起動、後は安定させればオツケー。

和也（構造理念構築、魔術式展開、基礎式第一第二展開、応用式で補助：発動）

《追跡》

魔術が発動しそれが周りに青い波動が広がる、それがどんどん広がっていくとその誰もいな背景だけが残る波動の中ある一つの影が現れた

和也（見つけ）

和也の目に映っているのはその切った人物の残留因子だ。和也はそれを魔術で見る事ができだいたい探し物はこれを使ってきた。追跡するのは“人を切った人物”と言う風に今回は探し出した。一応物探しでも使用できるが結びつきが強くないと姿も映し出さないのでも中々使いずらくさらに姿は映すが一瞬しか移さず後は自分の足で探す必要がある。

和也（と言ってもまあ服装とかは絞れてるしな）

和也は追跡で一度場所を把握しそして目撃証言で得た容姿と照らし合わせながら探していくのだ。自分の技術が足りない時は工夫で補う。それが彼のやり方だった。

和也（さて、お目当ての奴は…）

急いでその場に向かい前聞いた怪しい身元の人間と合致しそうな奴を目で探す。一応刀の柄にも目を配り文様と一致する物を探し続ける。すると

和也（…見つけた。）

流石に服装は同じではなかったが頭に被っている雨傘と刀の柄にはしっかりと“子”と言う文字があった。その男は特にこちらを気にする事はなくただ静かに歩いている。取り敢えず最初は声を掛ける。

和也「あくちよつとそこの笠被ってるやつ止まってくんない？」

すると目的の人間はびたりと脚を止めた、和也は若干距離を保ちながらそのまま喋り続ける。

和也「ちよつと聞きたい事があるからさ…屯所まで来てくんないかな？」

？「……」

雨傘の男はただ立ち尽くし背中を向けていた。

和也（目安で170ちよつと、服の上からじゃ体格はわからないが何か寒気がするな。）

不味ったな一人や二人ぐらい連れてくればよかった、とは言っても声をかけた以上捕まえなきゃな…

?「…!」

和也「!やろ」

案の定相手はそのまま走り出し和也はそのまま追いかける、表で目立つ路上でチェイスが始まった。相手は和也と違い周りの障害物を倒してきたりはしないが普通に屋根の上に乗ったりするので身体能力はかなり高い。

《身体強化》

とは言えこちらは魔術で水差しできる、回路を起動させ体を強化し相手を追い越すと同時に刀に手をかける。

和也「これ以上逃げたら脚叩き落とすぞ!!止まりやがれ!!」

だが相手は止まらず相手は刀に手をかける、それを見た和也はその刀を抜かれる前に手で掴み押しつけて抜けないようにしてそのまま服を掴んで後ろに投げる。だが相手の方は身を捻り着地しまた刀に手を掛ける、だがそれを抜かせまいと腕を抑え捻り上げまた後ろに投げる。次は切り返しが早かったため受け身を取るしかなく地面に叩きつけられそのまま押さえつける。

和也「さて喋ってもらおうぞ、それか屯所に連れられた方がいいか?」
?「っ!」

雨傘のせいで顔が見えないが男なのは確かだ、それに力の方も強く少し抑えるのが難しいが捻っているのものでそんなに動けないだろう。だが相手の方は喋る事すらせず口を閉ざしている。

和也（仕方ない、このまま…）

腕を逆の方に捻り続け骨を外そうとする、相手の方は口元しか見えないが歯ぎしりをしている所を見るとあっちも辛いようだがこのまま外して連れて行くしかない。それにこれは井上にやらせるべきだ。だからこのまま屯所まで…そう決め腕を外そうと思って力を込めた途端自分の背中に何かが当たった。

和也「あ?」

何故かその事で思考が止まりしばらくその場で止まってしまおう、それと同時に体が寒気で覆われ胸に残っている違和感を覚えそこに視線を移すとそこには銀色の刀身が血を纏いながら出ていた。

和也「っ！」

そしてそのまま後ろから誰かに押され刀が自分の体から出て行く、そしてそのまま背中を切られ背中に謎の熱が走る。

和也「ゴフツッ！」

そのまま何も出来ず血を吐きながら前に倒れそうになるが手で何とか支える、そして少し間を空け後ろを振り向こうとした瞬間、銀色の光が見えた。

和也「っ！」

すぐさま身体強化を行い鞘から刀を抜きそれを防いだが相手の力が強くてそのまま裏路地に落ちてしまった。眩しい日差しを放つ太陽が見える。

和也（く、くそ、気づかなか…）

すると急にその太陽が何かに隠された、その影はそのままこちらに落ちていきそのまま刀を突きさしてきた。

和也「ぎい…くそ…が」

そのまま視界が霞んでいく、相手の方は刀を抜きこちらの喉元の前突き立てる。そしてそのまま喉に突き立てようとした途端、和也の手から光が発生した。すると刀を突き立てようとした奴はその謎の光とともにあった爆発に巻き込まれる。だが威力はそんなになかったためか軽傷で済み後ろに下がる事でやり過ごした。

？「…音か」

ほぼ至近距離で起こったと言うのに相手も和也も傷を負っていない、自爆技かと思いい離れたがどうやらそうではなく音を響かせここに視線を向かせる事が目的だったようだ。

？「…妖術師だったか…まあよい、帰るぞ。」

？「は、はい」

するといつの間にか降りていた森田を切ったであろう犯人はその背中を突き刺した人物に頭を下げていた、そして相手はそのままその場から消えていった。

和也（な、治らねえ、普通の傷じゃない。よりもよって妖刀の類かよ、は、早く、塞がねえ…と）

人混みは作った、後は運に任せるだけ。

和也（沖田には…叱られるなあ。）

もはや体はピクリとも動かず体の保持だけを行い和也はそのまま意識を手放した。

割れた新選組と傷ついた恋人

日差しがあり明るく春に入ったこの季節、綺麗な桜は咲き鳥も元気よく泣き始め街の人たちも新しい春の訪れに活気が増し笑顔が咲いていた。だがある組織は違った。春の訪れだと言うのに笑顔が咲いておらず逆に不安の表情を浮かべていた。その屯所の方も雰囲気は暗くその中にいた沖田の方も同じだった、ただ違いと言えば彼女と彼らの不安は違うと言う話だった。沖田は静かに縁側の方を歩きながら手に木でできたランチプレートの上におかゆを持ちながら歩いて行く。そして部屋の戸を開き中に入って行った。

「副隊長まだ起きないのか…」

「仕方ねえよだつて背中に大きな刀傷に胸と腹に穴空いてんだぜ？普通死ぬだろ。」

「ここに運び込まれた時もかなりやばかったもんな、沖田隊長とか今日で介護何回目だよ。」

「荒川さんが寝込んでまる一か月、それからずっと傍で荒川さんの所に來てた。」

「隊長と荒川さん仲良かったもんな、目を覚ましてくれればいいんだけど…」

「家も今やばいからな…」

そう庭で不安の声を上げる隊士たち、いい年だと言うのに新選組の方でも不安があった。新選組にいた伊東甲子太郎、藤堂平助、斎藤一人たちを合わせた13人が御陵衛士となり新選組を抜けたためだ。

「ほんとどうすんだよ、荒川さんから」来年忙しくなるから覚悟しとけよ」って言われてたのに。」

「荒川さんこの事ずっと気にしてたもんな…」

確かに新選組から抜けたこの事件もそうだった。だが和也が気にしていたのは今年から起こり始める改革の影響で変わっていく新選組の事を気にしていたのだ。

沖田「……」
沖田は中に入ったが何も喋らずただ目の前で寝ている和也の傍に座り手に持っていた物を置く、そして沖田は静かに和也に声を掛けた。

沖田「和也さん、起きてますか？」

和也「っ…あ？」

それを聞いて寝ていた和也が目を覚ました、だがいつものような元気がなく目を開けるのも辛そうにしており目の周りにもクマが出来ている。和也が起き上がったとした時沖田が背中を押してあげた。

和也「よお沖田、今日もありがとな」

沖田「はい、調子はどうですか？」

和也「まだ体は動きそうにねえな、と言うか今もだるい。」

沖田「おかゆ持ってきましたけど、食べれますか？」

和也はそれに小さく頷き沖田から渡されたおかゆを食べ始める、沖田は静かにその光景を見続けた。

和也「…そんなに見つめられちゃ食べずらいよ。」

沖田「…すみません。」

和也がそう言うのと沖田は目を下にやり反らした、和也はおかゆを食べ終わるとそれをプレートの上に置きそのまま沖田に話かける。

和也「そう辛そうな顔しないでくれ、お前がそんな顔だと俺も辛い。」

沖田「…だって、あなたのこんな姿を見るの…」

和也「俺が油断してたせいだ。自業自得だよ。」

そう指をいじりながら笑い飛ばす、だが沖田の方は曇った顔が消えずただ顔を下げていた。

和也「まあ大丈夫だよ。最初よりは調子いいしちゃんと養生してるからそのうち戦線復帰できるって…」

沖田「…私は別に復帰してほしいんじゃないよ…あなたが元気になつてほしいんです。」

それを聞いた和也は少し呆気にとられたが直ぐに笑みを浮かべ沖田を抱き寄せようとするが力が入らず前に倒れそうになる。それを沖田は急いで支えた。

和也「っ…わりいな、力が入んなくて…」

沖田「横になってください、それから…」

和也「いや、お前が来ているのならせめて起きていたい。」

そう言いながら最初と同じ体勢に戻し話を続ける。

和也「そっちは大変なんだろう？大丈夫なのか？」

沖田「…伊藤さんらが離反するのは会議の雰囲気でも分かっていましたから、こうなつた以上敵対する関係になるでしょう。」

和也「辛いかな？」

沖田「伊東さんは会議の時でしたか会いませんでしたけど恐らく新選組を私物化できなかったのが嫌だったのでしょうね。あまり考えなくはたくはありませんでしたか…」

伊東の方でもそう言った動きはあったが別の理由もある。近藤の思想は佐幕派、幕府も朝廷も敬いながら外国から日本を守ろうという考え方で伊藤の方も最初は近藤の思想と似通っていたのだが京都での治安維持をされていて幕府側にそんな動きもなくさらに幕府の政治も維持できなくなってきた。そのため治安維持をするよりも新選組を離れ動いた方がいいと思つたのだろう。

和也「まあ局長も副長もその話には頭捻つてたしな、やっぱり割れ

ちまったか。」

沖田「ですがわからなくもありません。今の幕府の動きは控えめに言っても酷いですから。」

やはり長い年月の支配が響いているのか政治自体の中が固まってきて腐ってきたのだろう。上土の中では権力に物を言わせ日本の中では偉そうにしていた割には外国にはこびへつらうような態度だ。そりゃ幕府ではなく天皇を立てようと言う考えも悪くはない。

沖田「正直辛いですよ、昔の私ならそこまで考える暇がなくて割り切っていたでしょうけど、今こうして考えてみると…」

和也「やっぱり仲間だった奴と戦うのは辛いよな…」

沖田の容体が良くなり前のような焦りが無くなったためか元仲間を相手にするのは少し引つ掛かるようだ。和也は日が浅くそれに新選組の知り合いと言えば指で数えるぐらいしかいないのでそこまで辛くはないが昔からの付き合いをしている彼女にとっては辛すぎる話だ。

和也「…なあ沖田、お前はどうしたい？」

沖田「…私は今でも新選組と共にあります、だから彼らと会ったその時は切るのみです。それに…」

目が釣り上がり鋭くなった、手に力が入り隊服にシワが出来る程握りしめた。

沖田「あなたを殺そうとした奴も見つけなくてはなりません。それがもし彼らだったら…」

その次の言葉を言おうとした時沖田の額に和也のデコピンが炸裂した。

沖田「いつ!？」

和也「怖い顔はすんなって言ったろ。そんな顔見たくもないし怒っている顔なんて…」

沖田「…和也さんだって同じ事があつたらする癖に。」

和也「うっ」

確かにそうかも知れない、もし沖田がこんな目にあつたら…多分抑えめで顔の原型無くした後全身ボコ殴りにするかも…

沖田「反省してくださいね、和也さんが重傷を負ったって聞いて心臓止まりそうだったんですから…まだ恋人らしい事できてないのに…」

そう可愛く頬を膨らませプイッと顔を反らした、どうやら最後の嫌味は聞こえるように言ったようだ。そこも可愛らしい。

和也「す、すまん。」

沖田「ホントですよ！和也さんに言われた通り大人しくしていたら殺されかけたって聞いて叫びそうだったのに実際に見て膝崩れたんですから！あの地獄の一週間あなたが起きるまでどれだけ心配した事か！」

和也「そ、それ言ったらお前だって前までこんな感じだったんだぞ！現場で血反吐吐くはぶつ倒れるはで毎日胃が痛かったんだからな！」

沖田「だ、だからと言って和也さんがそんな目に合ったら私の事いえませんかよね!?ならお口は閉じててください今回は私が説教する番です！」

和也「ふざけんな！そもそもお前だって俺の説教なんてほぼ聞いてなかったろうが！偉そうに言える立場か！」

そこからは緊張がほぐれたのか溜ったうつぶんの言い合いになった、前との違いと言えば今回はギスギスしてはなく素直ではない二人が負けたくないための揚げ足取り合戦なのでどちらかと言うとほんわかしている。

沖田「和也さんのばーかばーか！」

和也「言つたなこのお！」

そう何故か取っ組み合いになり意味のわからない喧嘩が始まる、すると和也が沖田を捕まえようとしそれを沖田が避けようとしたが和也の方が早かった、だがぶつかる位置が悪くそのまま押し倒すような形になった。

「……………」

沖田が下に、和也が上からお互いに見つめ合うようになる。沖田の方は目を緩め頬が赤くなり少し弱々しい感じを出し和也の方も顔が

少し赤くなっている。そして和也が顔を近づけて行き沖田と唇を合わせた。

沖田「んっ…んん。」

沖田の方はそれを受けとめ手を首に回しさらに深くキスをする。そして少し経つと唇を離れたが和也が直ぐに合わせて行った。

沖田「ちよっつん！」

沖田の方はそれに驚いていたがまんざらでもないのかそれを受け止める。そしてまたしばらくすると和也が唇を離れた。

沖田「はあっ?!、いきなり、激しいですよ?。」

和也「いやよ、溜ってたからさ。」

沖田「だからと言って飛ばしすぎです。まったく…。」

そう肩で息をしながらとろけたような目で和也を見る。和也の方も体を沖田に預けていた。そのためか沖田が何か異変に気づきさらに顔を赤らめた。

沖田「あの…何か当たってるんですけど。」

和也「あ、わりい。」

そう言うのと和也は沖田から離れる、沖田の方は少し名残惜しそうにしたが起き上がり顔を伏せた。

沖田「えっと、その…やっぱり溜ってるんですか。」

和也「ま、まあ、そうだが…まあ別に困る事じゃないし…。」

そう恥ずかしそうに沖田の方から目を反らした、和也は頬を掻き反らし続け沖田は顔を伏せたまま顔を赤らめている。

和也（にしても俺…ここまで浮かれるとはな…今まで遊びでしかやった事なかったのに。）

今まで色恋沙汰など無かったと言うか興味もなかったのもそこまです気にはしてなかったのだが最近になって恋人ができた和也にとってはそんな雰囲気になる前にヒョって緊張し過ぎてそこまで行くのができない。いやそれは恋人出来始めた人にとっては当たりまえなのだが…

和也「い、いや悪い、久々にしたからよ。それに仕方ないだろ…好きな奴とこうしてイチヤつく何てやった事なかったんだから…。」

沖田「…あまりそう言う事言わないでください、まともに見る事もできないじゃないですか…」

和也「お、おう。」

お互い意識のし過ぎでもはや目を合わせる事も出来ずにおり長い沈黙が訪れる、和也の方は沖田よりも歳を取って多少の経験はあるがそれはあくまで遊びであって恋人とこうやってやりとりをするのはなれていないのだ。和也の方はどうしようかと頭を捻っていると沖田が切り出した。

沖田「和也さん…」

和也「な、なに？」

沖田「そ、そういうのに、その…困ってるのなら、私が…しましよ
うか？」

和也「…ふあ!?!」

それに思わず驚き大声を上げてしまった、沖田の方は顔が髪で隠れてはいるが顔の方はかなり赤かった。やはり口に出すのが恥ずかしいのか正座している脚の上で指をいじっている。

沖田「ち、違いますよ!?!ただ、ただ私はその…そう!!あまり貯めすぎるのは毒だから仕方なく、仕方なく提案をしているだけです!」

そう誤魔化すように人差し指を立てながら和也にまくしたてる、和也の方は顔を反らして頬を掻く。そしてもういちど沖田の方を見た。

和也「…まあ、お願いしようかな。」

沖田「え?…あ、いや!し、仕方ないですね!…そこまでお願いするのでしたらやってあげましょう!!」

沖田の方は目の方が渦巻きのように回っており何故か腰に手を置きドヤ顔をしている。多分自分が何をしているのかわからずさらに勢いで言ったのだが相手が了承してしまったので取り消せずどうしているのかわからないので取り敢えずもうなるようになくれと言う感じなんだろう。それを見て和也の方も笑みを浮かべると沖田がそれを見て腕を上下に勢いよく振り目の方はさらに回っていた。

沖田「な、何ですかその顔は!?!私は真面目に言ってるんですよ!?!」「こら、こら、笑うのやめろー!!」

和也「い、いや悪い、嬉しくってさ。」

笑いが堪えきれないのか和也は腹を抑えながら爆笑をしていた。純粹にこうやってやりとりが出来るのは嬉しいのだろう。こうやって笑い合うのも最近出来ていなかったたので和也は楽しかった。沖田の方も心の中では嬉しいのだろう、最後の方では笑顔が咲いていた。

だからだろう、沖田に傷の話が出来なかったのは。

和也「っ！やっぱり辛いな…」

沖田がいなくなった部屋で和也は自分の胸を抑える、あの時受けた傷はただの傷ではなく妖刀で受けた呪詛だ。しかもかなり強い呪詛の方で治そうにも治せない、軽い呪い位なら手持ちの奴で何とかなるが今回は無理だ。今は何とか進行を止めているが次深い傷を受けたらまずいかも知れない。

和也「まあ抑えたまま沈静化させる事はできるがそれでも時間稼ぎだな、医者のおっさんには口裏合わせて貰っているから何とかバレずに済んでいるけど…油断した。」

これが呪いの力、信仰系等の浄化技じゃないと解けない特殊なもの。ラーマの方は相手が相手だったからあの治し方だったが自分にはそんな事できない、かと言ってマルタやジャンヌのような奴だったら行けるのだが…

和也「ここに聖杯はない、疑似的な召喚何て俺にはできないし。はあ…」

聖杯があれば手持ちのあるジャンヌから受け取ったお守りで召喚が出来るのだが今回はそんな事件に巻き込まれてはいない。となると現地にいる人に頼むしかないが自分はそのままでこの時代の事を調べてはいない。それにそう言った人間は大抵隠れている場合が多いので見つけようにも見つからない、それに新選組は今年から忙しくなる。

和也「沖田はこのままいけば無事完治だが、俺の方は無理そうだな。」

俺が飛ばされた理由も俺に呪いをかけた奴が誰なのかわからないがそんなの関係ない、俺は自分が出ることを、沖田を助けると決めたんだ。なら動く事が出来るうちに動かなければならない。たとえば俺が後先短いからと言ってようやくとできた人の生き様は見届けない。

和也（とは言えずつと隠し続けるのは…話す事も考えとかないな。俺が死ぬ時も考えて…）

沖田「…無理しちゃつて。」

そう沖田は自分の部屋で呟いた、沖田自身も和也がどういった状態なんかはよくわからないが普通の怪我でない事はなんとなくわかってた。だが沖田はそれにどうしてもイラついてしまう。自分の怪我の事を話さなかったわけではない、その事に何もできない自分にイラついてしまう。

沖田「…彼のおかげでこうやって動いているのにつ」

私のわがままに付き合いさらには私の病気までも治してくれた大恩人なのにいざって言う時になにもできないなんて…何故私は剣を振るう事しかできない！私に楽しさを、そして人としての愛を、生き方を与えてくれたあの人を何故私は助けてあげられない！

沖田「ホントに…情けない。」

歯ぎしりをしさらに自分の隊服を握りしめる、だがここでうじうじはしていられない。自分は新選組として動くが第一優先は和也さんの治療だ、とは言え自分にはそのような知識は無い。だがもしかしたら和也さんを切った奴なら何か知っているかもしれない。和也さんの方は自分の怪我の事についてどういうのかは知っており治療法も知っているが和也さんが出来ないので手詰まりなのだろう。

沖田（笠の男、そして柄に”子”と言う字を刻んだ刀…どういった流派なのかは知らないが私のものに手を出したんだ…絶対に殺す。）

御陵衛士とはどうせ必ずぶつかり合って殺し合いになる。ならば私はそれが始まるまでに好きにやらせてもらおう。

沖田「待つててくださいね和也さん…今度は私が助けますから。」

そう自分の菊一文字を持ち上げ腰に差す、もう大切な人を殺すのも失うのもいやだ。私はあの時から後悔してばっかだ、そんな自分は嫌いだ、後悔する自分は嫌いだ、私を導いてくれた恩人であり恋人なのだ。絶対に死なせはしない。そう心に決め沖田は和也の事件を追う事にした。

油小路事件 裏側

仰「そうか…荒川が襲われたか。」

それをどうでもよさそうに聞きながら手に持っている資料に目を通しながらそう呟く、仰にとつて正直どうせもいい、その人物が死のうが何されようが別に関係ない。

近衛「今も寝込んでいます。犯人は不明で今一番隊が血眼になつて探しているようです。」

仰「あんまり桂たちの邪魔はしないでくれると助かるんだがな…」
近衛「どうします？止めますか？」

仰「やめとけ、ああいう奴の機嫌損ねたら何されるかわからんぞ。」
ただの女性ならまだしもある程度立場を持つている上に今暴走気味の奴を敵に回すのは少々怖い、今は志士の連中を纏めさせるために裏でバレないようにしているので今警察側に警戒されるのは不味い。最近来なくなつたとは言えまた変にちよつかいを出すのは嫌だ。

仰（まあこれに乗じて荒川を殺すのもありだが…）

にしてもあの荒川をよくやれたものだ、その人物の事をよく知っておきたいが恐らく自分の知り合いは殺されないだろう。似たような事件を見つけ狙われそうな人物は絞れるがそれでも不安だ。あまり後ろを気にしないようにしたいのだが正体がわからないのではどうしようもない。

仰（荒川は下手に殺るより放置していた方がいいな。）

仰「それより上手く新選組の注意は引けそうか？」

近衛「しばらくの間は伊東の相手をするしかありません。近藤の方もあからさまに敵対しそうな奴をほっとけないでしょうし。」

仰「とは言え新選組は正直残つて欲しくないからな…後一押し必要だな。」

徳川派は正直残して置きたくはない、徳川の世が崩れようやつとチャンスが巡って来たんだ。できれば新選組は潰しておきたいが今の状況は少し手が出しづらい。やるとしたらあれが起こった後でいいだろう。けど…

仰「何か長生きしそうなんだよなくあいつら…」

近衛「どうしました？」

仰「いや何も…あれが成功すれば天皇様の時代が来る。そしたら来年忙しくなるぞ、旧幕派と新幕府派に別れる事になるぞ。」

徳川の体勢が崩れると必然的に旧幕府側の人間が反発するだろう。元々徳川の体制が気に入らない連中の集まりだし恐らく今の政権の連中を追い出すだろう。改革とは新しい世の中に変わる事はいいのだがそれを引きづって出て来た古い奴らが邪魔してくるのが少々面倒だ。

近衛「仰様、例の人物を連れて来ました。」

仰「お？見つけたか。」

となると俺の推測は当たってたのか、政治の方もいいが探偵を目指すのを悪くない。新政府が作られた時も腐った連中を叩き出す事もして中を洗うのもいいかも知れない。とは言え今は地盤固めが先だが…そんな事を考えていると目の前の襖が開き自分の近衛と一緒に場に似合わない古びた着物を着た人物が入って来た。

仰「君か、あの荒川をやったのは…」

そう不気味な笑みを浮かべながらその人物を見る、その人物の方は表情を変えずただ仰の方を見ていた。

仰「いやいや別にその事について審議するつもりはない安心してくれ…あの荒川をやった人物に興味があつてな。君だろ？最近影で人殺し事件を起こしているのは…」

？「……」

仰「答えなくていい、その事を口外するつもりはないし詮索もしない。」

一度目を閉じ顔を下に落とす。

仰ぎ「…君に頼みたい事があつてな？」

そう見上げるようにその人物の方を見る。その表情からでもわかる不気味な笑みをその人物は無表情で受け止めていた。

永倉「…やるのか。」

屯所の庭でそう呟く、冷たい風が当たっていると今言うのに今日やる事に何故か眠れなかった。

今日、伊東甲子太郎が死んだ。

理由は簡単だ御陵衛士に忍び込ませている斎藤から連絡があったのだ、『伊藤らに近藤局長暗殺の動きあり』と、それが発覚した時点で動きは早かった。宴に伊東を呼び殺害、その死体をさらして他の御陵衛士を呼び込み誘き出すと言う作戦だ。

だが永倉はこの作戦にはあまり乗り気じゃなかった、幾ら敵に回ったとは言えかつての仲間、試衛館以来の友人を殺すのは嫌だった。

永倉「藤堂だけは逃がせんもんやろうか…」

深いため息をつきながら上を見上げる、綺麗な月がこちらを向いていると言うのに気分が最悪だ。しかもやり方もそんなにいいもんじゃない、最近になってため息ばかりついている。

沖田「どうしました永倉さん？」

そこに沖田が話かけて来た、そんなに珍しくもない事だが永倉が沖田を見た時思わず目を見張った。雰囲気が違うのだ、最近になって優しい雰囲気に含まれていたのに今は違う、暗くそして寒気が走っている、沖田の目には光が無く笑っているのに笑っている感じがしない。

沖田「…ホントにどうしました？」

永倉「ああすまん、その…前と雰囲気が違うから…」

沖田「ああすみませんねちよつと…仕事をしていました。」

何処か深みのある言い方をしながら永倉の隣に立つ、沖田の方もほぼ病気は完治済みであり仕事にも復帰していた。その事について永

倉は喜んでいた、そして和也と良い仲だと言う事もあり少し心苦しかった。永倉としては沖田にはそのまま引退して欲しかった。だがそれも和也が襲われてから変わった。

あれから仕事の報告で聞いた限りだが沖田が前の容赦ない性格に戻った。とは言え和也の前では優しい笑みを浮かべているが最近では隊士の前でもあの様子だ。

永倉「荒川はどうや…容体は？」

沖田「…日に日に弱くなっています。表面上は偽ってもあの人隠すの下手だから…」

永倉「だから殺して回つとるんか？そんな事しても荒川の傷は治らん。」

沖田「違う私はただ探しているだけ、犯人を…そうすれば傷の原因がわかる。」

永倉「刀傷による後遺症や、どうやっても治らん。」

沖田「いや治せる。」

それを聞いて永倉は頭を抱えた、だが沖田には和也から言われたあの知識があった。

和也『物理学的に確かに後遺症は存在する、現代の医療学では細胞のダメージが酷い場合それが残った状態で残る方が多い、今の技術じゃそこまで細かい処置は出来ないが、魔術ならその幅を広げれる。』さらに今回和也が追ったのはどちらかと言うと妖刀による呪いだ、後遺症と似ているがこれは聖堂協会などの専門的な知識を持っているものなら直す事が可能、魔術の方でもそれに対する対応ができるが和也は魔術師と言うか魔術使い、そのためそんな専門的な事は出来ないのだ。

沖田「ともかく私は見つけてみせる。」

永倉「…長くないんか？」

沖田「……」

その言葉には沖田は何も返さなかった、だが早いうちに死ぬ事は何となくわかっていた。自分がそうだったのだ、日に日に弱くなっていく体、見るからに弱くなって行くと云う眼差しも死ぬほど見られた。

それに焦りも見えた、必死に隠していたがバレバレだった。

永倉「沖田悪い事は言わん今はあいつの傍にいてやれ…表面上は誤魔化しているがあいつも一人でいるのは寂しい筈や…」

沖田「…そんな筈はない。……………仕事に差し支えますので、失礼します。」

永倉「おい沖田！」

永倉の静止も聞かず沖田は逃げるように去った、沖田はまだ若く自分の事については幾らでも我慢できるが自分の大切な人が死にそうになっているから焦っているのだ。そのせいで今は和也の事以外盲目的になっている。

永倉「…はあ。」

永倉は大きなため息を吐きその場で屈む、身内同士での殺し合い、友人の暴走、永倉はこの現状に疑問を感じていた。

永倉「どうしたものか…」

試衛館以来で集まっていたあの新選組が懐かしい、家族のように息が合い笑い合いそしてその場で生きていく事に嬉しさもあった、だが今はそうでは無くなってしまった。時代ごとに求められていく姿、それには個人差があり枝分かれが起こり今の現状だ。自分の頭の中ではどうやって藤堂を逃がそうかを考えていた。

——慶応3年 12月7日——

斎藤一の密告により近藤暗殺を企てていた伊東を酒宴に招きこれを大石鍬次郎が暗殺、その死体を油小路七条に放置し残りの御陵衛士を誘き寄せ襲撃した、この戦闘時に元隊長であった藤堂が死亡を合わせて約四名が死亡、その他の者は逃げ延び19日午前4時過ぎに今出川薩摩藩邸に匿われた。その戦闘の際に永倉と原田が藤堂を逃がそうとしたが他の隊士により切られ殺された。荒川将吾も志士に襲われた傷が治っておらず屯所で養生していた。

時代の変化

沖田「和也さん、大丈夫ですか？」

和也「俺は乗ってるだけだから大丈夫だよ。お前はきつくないのか？」

沖田「もうあの事のように倒れる事は無くなりましたから平気ですよ。後もう少しで着くから辛抱してくださいね。」

和也は今馬車に引かれて移動していた、沖田はその横に並ぶように馬に乗りながら話かけていた。何故こんな事をしているのかと言うと理由があった。

あの大政奉還が行われた、大政奉還が行われその政治の中心を薩摩、長州、土佐藩が務めた。その上に明治天皇によって発せられた王政復古の号令が宣言され旧徳川幕府が解体され幕府側の新選組は京の地を離れる事になったのだ。そして幕府側が陣取っていた伏見奉行所の伏見での警護に加わったのだ。和也はその伏見の下見をした後大阪で養生する事になっていたのだから今は大阪に移動中なのだ。

沖田「まったくあなたって人は…わざわざ下見何てしなくていいのに」

和也「お前だつて同じような立場だつたら同じことしようとしてただろ。まあ俺がいなかったらどうせ肺結核で倒れてただろうけど…」

沖田「もうそれ治りましたからなりませんよ、それよりあなたの怪我は…」

和也「ああ、治ってない。だから大阪で養生するんだよ。いや、泊めてくれる宿があつて助かった。」

大阪での養生をする事になったのだがそうなるのと泊る場所が必要となり大坂何かツテ何てあるわけでもないのが最初は困っていたのだが案外簡単に見つかりそこで養生する事になった。とは言え和也の方の大人しくする気はなく何かあればいつでも行けるように準備をするつもりだ。

和也「大阪ね、どんな所なんだろうか。」

京以外の街を見た事がないと言うよりそこ新選組になつてしまつ

たから京以外の街に行く事ができなかつたのだ。そのため大阪に行く機会がなかつたのもあり他の地区に疎い。そもそも和也はこの時代の人間じゃないのでそもそもわかる訳ないのだが…

和也「大阪、通称『天下の台所』か…」

この時代の大阪は物流と商業の中心であり運河が整備され諸国の船が行きかうようになり『水の都』とも呼ばれていた。こう呼ばれる所以は商業が盛んと言うのもあるが全国の藩が蔵屋敷を設け生活物資の多くが一旦生産地より大坂に集められて再度全国の消費地に送られたためこう呼ばれた。藩にとつても大阪で諸藩が領地からの年貢米や特産物を売りさばけるためかなり儲かり幕府の方もそれを利用して同じような対応をした。明治維新のこの元年に丁度大阪府として配置される頃合いの筈だ。

和也「…なあお前俺送り届けたらもう行くのか？」

沖田「いえしばらくはあなたの傍に居ようかと…最近仕事ばかりでしたからね。」

和也「別にいいんだぞ？お前は気にせずあっちに…」

沖田「大丈夫です、少しくらいなら一緒にいても問題にはならないでしょうしね。」

そうかなつと思いつながら任されるがままに運ばれていく、大の男が女性に護衛されながら運ばれる何て江戸時代だったら笑い者だろうがもう慣れた。下手したら自分が会って来た中で女性が一番強いし気にならない。それはそれで男としてどうかと思うが…それも今更だろう。

和也「お、あれか？」

沖田「ええそうですよ、あれが大坂ですよ。」

和也が指をさした場所には大きな繁華街のような物も見えた。港には様々な形をした船があり外から見てわかる程かなりの人がいる。下手したら京都より賑わってそうな感じがする。少し押されながらも進んで行き沖田が手続きを行って中に入る。籠越しで建物は見づらかったが少し京都とは違った物売っている店が多い気がする。

和也「なあ沖田ここら辺どんな場所か知ってる？」

沖田「そんなには…私も京都以外そんなに行った事もないので知りませんが確か酒が美味しいと言う話は聞いた事がありますね。」

和也「お、まじで？そりゃ嬉しいな。」

沖田「絶対に飲ませませんからね。」

そうまるで子供を叱るような表情でそう言われた。それを聞いて少し効いたのか頬を掻きながら目を反らした。とは言えこれは現代からの癖で抜こうにも抜けない訳ので隠れて飲んでいる時がある。たまにばれるが…

ある程度町中を通った後泊る宿に着いた、沖田が和也をゆつくりと下ろし中に入って行く。中は最初泊っていた宿より広くむしろ綺麗でさらに結構広い。部屋の方も一つ一つかなり広く生活用品も充実している。物には困らなさそうだ。持ってきた荷物は沖田と他の隊士がやってくれた。和也の方も手伝おうとしたがすごい血相で沖田から止められたので大人しく待つ事にした。今は沖田と一緒に部屋におり荷物の整理をしている所だがそんなに荷物は無いので二人で机の前でゆつくりしていた。

沖田「こうしているとあの頃が懐かしいですね、知ってます？私たちが会ってもう一年になるんですよ？」

和也「そんなに経ってないようなついででで！」

返答が気に入らなかつたのか膨れ顔で頬をつねられた。

沖田「まったく、もうちよつといい台詞言えないんですかね。せつかく二人つきりになれたのに…」

和也「悪い悪いつい癖でな、許してくれよ。」

そう沖田を包むように手を回し肩に顎を置く、沖田は髪に当たるその感触に擦られながらもそれに応じるように顔を和也の方に向けた。

沖田「最初は怪しすぎる野党かと思ってたのに…まさかこんな仲になるとは思いませんでした。」

和也「俺も思ってたんだけど相手が沖田でよかったよ。俺には勿体ないくらいいい女性だ。」

沖田「…ずるいですよ今の…」

和也「好きな奴には我慢したくないんだよ、前は伝えなさ過ぎて駄

目だったしな。ジャンヌとかそうだったし…」

沖田「…好きな女性の前で他の女性を上げるのは関心しませんね。」

和也「あ。」

沖田はまた膨れ顔なりプイッと顔を和也から反らした。和也の方は逃がさないようにしながらなんとか落ち着かせる。

和也「いや悪いってこういうのに疎くって。」

沖田「こっちは気をきかせて二人つきりになったのに…それを壊す朴念仁にぶちんさんの言う事何か知りませーん。」

和也「ごめんって。」

沖田「プイ！」

和也「ごめんごめん、もうしないからさ。」

沖田「…仕方ないですね、許してあげましょう！」

和也「ありがと。」

そうお礼様に頬にキスをする。沖田の方はそれに驚き思わず赤面しされた頬を抑えながら和也の方をにらみつける。

沖田「…ほんとに二人の時は遠慮ないんだから…」

和也「俺が愛すると決めた女性だし気持ちは隠したくはない。それにこうすれば可愛い顔が見放題だしな。」

そう綺麗な笑みを浮かべながら沖田の肩に顔を押し付ける和也、沖田の方はそれに心臓が高鳴り我慢できなくなったのか姿勢を変え和也と向き合う形になる。そしてお互いに見つめ合いしばらくしてから唇を合わせる。今日は少し長めにやり離れた。

和也「…なあせつかくだし二人で見て回らないか？」

沖田「でもあなた今病人でしょう？大丈夫なんですか？」

和也「見て回る位なら大丈夫だよ、京都の方でもやってたし。」

沖田「あなた私に黙って…まあ私もしてたし仕方ないですね。いいですよ。」

そうため息を吐き仕方なく頷く沖田、了承を取れてうれしいのか和也の方は喜んでいた。

和也「よっしや久々のデートだ。」

沖田「また知らない言葉を、デートって何ですか？」

和也「逢い引きつてやつ、俺たちの時代じゃデートって呼んでた。」

沖田「へえ、どんな風になんな言葉が定着したんですか？」

和也「…わかんね。」

沖田「何ですか…」

和也「おホントに上手い。」

沖田「ホントですね、京都のうどんもよかったですけどこっちも私は好きですね。」

そして二人は大坂を回り今はうどん屋にいる。沖田は最初和也の容態を考えて近場で済ませようとしたが本人が気にするなど言ったのであまり無理をさせない方針で回る事にした。和也の方も移動する分にはそんなに辛くはないようでそれは沖田の方でも認知したのであまり気にしないようにした。

和也「なあ酒飲んででもいいだろ？ちよびつとだけ…」

沖田「駄目です。一応病人なんですから食事制限は守ってもらいます。」

和也「ケチ。」

沖田「子供じゃないんですからそんな言葉使いやめてください。」

和也「へいへい。」

沖田「あとその返事も、まったく。」

そうため息を吐く沖田、和也はそれを横目で見ながらもうどんを食べていく。大阪の汁は中々深い味がする、京都の方でも食べたがこっちの方が俺が食ってきたやつと似たような味がする。それに香りもいいしこっちの方が俺も好みだ。流石は日本の食文化の基本となつたこの時代だろうか、ようやく考えればよくこんな小さな国にここまでの文化ができたものだ。それにしても…

和也「…お前外に出ると礼儀正しいよな、部屋じゃ可愛いのに。」

沖田「っ！んん」、新選組としてそういう抜けた行動は隊の乱れの原因になります。そのため外ではこうして振る舞う事にしたんです。」

そう咳払いして誤魔化す。慣れているのだろうか冷静になるのが早く少し赤面していた顔がもう無くなっている。和也はそれを不思議に思ったのかそこを指摘する。

和也「ふくん、けど俺はどっちも好きだな。こうクールな感じがしてギャップがあつていい。」

沖田「…こんな人がいる場所でよくもまあどうどうと言えますねあなた。」

和也「だって好きなんだしいいじゃねえか。好きな女性の女としての魅力上げられない何てかつこ悪いだろ。」

そう当たり前のように言う和也、和也本人も別にいたずら心があるわけでも冗談で言っているわけでもなく本心で言っているのが沖田にとつてはたちが悪すぎる。もはや顔が赤く染まり冷静を保てず顔を合わせる事ができなくなってしまった。その様子を見ていた追加のつまみを持ってきていた定員がどうしていいのかわからずその場で固まっていた。

和也「あ悪いな気を使わせて、ありがと。」

定員「は、はいえつと…ごゆっくり。」

和也「おう、ここ美味いからまた来るからな。」

沖田「…こ、この人留まる事を知らない。」

流石は朴念仁と言った所だろうかあまりにも場所を選ばなすぎる。沖田の方はもはや顔を上げられず和也の方は可愛いと思っただけかニコニコしながらそれを見ている。そんな甘い空気を出していた二人は店を出てまた適当にぶらつく、すると和也がある店を見つけたので中に入る事にした。

中に入るとそこは日本独特の簪が並べられていた。花を模した綺麗な造形をした様々な物があつた。

沖田「どうしてここに？」

和也「いや、せっかくだし何か買おうかなと思っただけ。」

そう言うのと適当に手に取った簪を沖田の髪に当てる。沖田はそれに驚き思わず顔を上げようとしたがそれを和也が抑え簪を当て続ける。

和也「やつぱり似合うな、お前美人何だからもうちよつと着た方がいいぞ。」

沖田「べ、別に私には不要です。」

和也「何言っただ。あ、これとか似合うんじゃないか？」

そう言うのと桜の簪を取り出し頭に刺す、綺麗な金髪の髪の上に可愛いらしい桜の花が咲いていた。

和也「いいな、これ、んじや次はちよつとクールなやつを……」

そう言うのと次は青い花を刺す。前とは違い冷たさを感じさせる青が違う印象を出していた。沖田の方は勝手がわからずそのままなされるがままに和也に簪を髪に刺される。

和也「すんません、これ二つくれ。」

店員「わかりました。」

沖田「私はいりませんって。」

和也「何だよ……せっかくだと綺麗だと思っただけに」

沖田「そ、そんな顔しなくても……仕方ありませんね。」

少し寂しそうな顔を上げた和也に根を上げたのか大人しく引き下がる事にした。和也はそれを聞いて沖田に見えないように嫌な笑顔を浮かべるとすぐさま購入し店を出た。その後は大阪に来たので食

べて回った。例えばフグ、本来フグは食す事はかなり前から禁止されている。フグを食べるあるいは販売するだけでかなり厳しい取り締まりを受ける事になるが実はその禁止されてからもこっそり食べられていた。

理由は明白で解毒処理が出来ず食べたら毒死するのが原因で禁止されていた。こっそり食べていた時にもよく起こりそのため“てつぼう”と言う隠語で取引される事が多かった。武家の方では禁止が厳しく食べられず庶民の方ではこっそり食べられていた事もありさらにこの頃から大分解毒処理ができるようになってきたので種類も増えていた。実際に広まるのは明治時代に伊藤博文が食べて感動した事から解禁されていた。

ちなみにこの料理をどう食べるのかと言うと実際の所は少し難しい。出されている所なんかわからないし何処に売っているのかもわからない。そのため実際に言えば食べられない訳だが…

沖田「どっから持ってきたんですかそんなの…」

和也「交渉をして手に入れた。」

とは言え何処から出てくるのかは知っている。魔術でフグを探り当てそのままその場所に行き交渉をして手に入れた。しっかりと相手にもメリットがある話なので問題なく手に入れる事ができた(金の力)、だが沖田の顔を冷たかった。

沖田「そんなの手に入れてどうするんですか？私その噂知ってるんですけど。」

この頃はまだ毒物として見られていたものなので沖田の視線が冷たいのは当たり前の事だ。現代では食べなれたものとは言えまだ悪い印象が強い時代だ。沖田たちからすればその反応は当然だった。

沖田「そんなの捨てて他のを食べましょうよ。私あなたにそんなの食べさせたくないんですけど。」

和也「まあ大丈夫だって解毒処理の方法は知ってるからさ。」

実は和也はフグの解毒資格を取ろうとした時があったのだが結局取れなかった。だが長く生きていくうちに色んな者の解毒処理をしてきたためかフグぐらいの解毒なら問題なく処理できるようになっ

た。とは言え魔術と言うズルをしている訳だがそれには触れないでおこう。

沖田「駄目です。絶対に食べさせません。病人ですよ毒何か食べさせるわけないでしょう。」

和也「いやだから…」

沖田「他にもあるでしょう。ほらここは魚がいいです。栗おこしやらもありますしそっちにしましょうよ。」

和也「ケチ」

沖田「そんな顔しても駄目です。」

和也「ドケチ」

沖田「ちなみにその言葉の意味してますからね。教えてくれてありがとうございます。」

結局は沖田の方は引かず和也の方が折れフグは和也の小型冷蔵庫に移す事にした。その後夕食は後回しにして港の方を見る事にした。沖田の方はもう切り上げるべきだと言っていたが和也が今日一日は一緒にいたいと言うので夕飯は宿で取ると言う条件付きで付き添う事にした。

和也「うわゝ船がいつぱい、もう夜になるのに。」

沖田「何か変な船もありますね。西国の船でしょうか。」

港と言うより街の中に川を網の目状に広げそこを行き来している。中には西国の船も存在し貿易しておりこの使用している川は堀川と呼ばれていた。その堀川沿いには雑喉場魚市場、天満青物市場、堂島米市場などが立っており他には藩の蔵屋敷が存在する。

和也「やつぱりガイドがいないと少し面白くないな。他の場所に行けばよかったか。」

沖田「そもそもどうしてこんな場所に来たんですか？何か探し物でも？」

和也「いやその…せっかくだし観光名所しようかなって。」

沖田「どうして？」

和也「…俺不器用だったからよ。デートの時に何すればいいのかわからないんだ。だから少しでも楽しませたくて…」

和也は今まで女性に優しくした事もなかった、そのためか女性には苦手な印象を受け沖田も最初はそんな感じだった。だがジャンヌたちと会って以降その印象が抜けてきて沖田と出会ってようやくと無くなった。その上に好きになったのか嬉しくて喜ばそうとしたが何をしていいのか勝手がわからないのだ。取り敢えずデートでよくありそうな事をしているのだがそれで沖田が喜んでくれているのか不安なのだ。

だが沖田は和也の言葉を聞いて少し呆気にとられたが直ぐに顔を戻し優しい笑みを浮かべた。

沖田「私はあなたと一緒に居ればそれでいいですよ。こうやって手を繋いで適当に遊んで食べまわって、普通の日常の幸せを噛み締め、私はそれだけで嬉しいんです。」

沖田にとってみれば和也と一緒にいてくれるだけでよかった。特別な事はもうしてもらってるしこれ以上されたら何を返せば釣り合うのかわからなくなる。恩人であり大切な人、そんな人と一緒にいれるだけで沖田は嬉しかった。むしろ沖田の方も少し不安だった。女性らしい事もしたことがない、さらに本人の意思とは言え病人をこうして連れ歩きまわるのは避けたかった。

だがそんな事を自分が言えた事ではなかった。だから言わなかった、だができれば大人しくして欲しかった。別にデート何て家でしてくれば自分は満足だった。ただいつものように会話をして食事して普通に日常さえ送ればいい。いつも病気で振り回した彼には悪いがせめて大人しくして欲しかった。

和也「…ありがとう沖田、お前と出会えてホントによかった。」

沖田「それは私の台詞です。あなたのおかげで病気も治りかけそれに…皆との関係も直す事ができた。」

今まで井上と永倉から心配され続けそれを跳ね除け続けてギクシヤクしていた関係になってしまった。病気のせいでイラついていた性格も皆の不安にさせ自分もそれが認める事が出来ずただイラついていた。もし和也がいなければ一生皆と戦えなかったのを後悔していただろう。だから和也には感謝してもらいたくないのだ。

沖田「だからあなたがしたい事ならしてあげたいんです。それで全部返せるとは思いませんけど…」

和也「そうだなやりたい事か…お前からは何かないか？ほらしたい事とか…」

沖田「そうですね…あ。」

何かあるのか沖田は思わず声が漏れ口に手を当てた。すると頬が少し赤くなり下を向いた。

和也「何かあるのか？」

沖田「えつとですね…実はあなとその、付き合い始めてから本を読み始めたんです。」

和也「…本を読むの何か珍しくもなかったら？」

沖田「そ、そうなんですけど私が言っているのはその…恋愛物で。」手を合わせもじもじしながら頑なに目を合わせず下を向き続ける。沖田の前にはただ堀川があり今もそれが流れている。まだそこまで技術発展をしないため綺麗な川があり透明度もあるためよく通行に使われている川でも五メートルぐらいは見え魚の鱗に反射した光も見えた。

沖田「そ、それですねその本はよくある普通の恋愛でしてね。」

内容はこうだった。たどごく普通に暮らす女性と武士の話だ。女性が良い家系の生まれでその女性が惚れた男がただ放浪していた武士だった。ある日にその女性が襲われてしまいそれを見た武士が助け出しそれから出会いが始まった。

沖田「その女性は結局家系を捨て武士と一緒に駆け落ちしたんですがその話の中に武士と一緒に逢い引きしていた時があるんですがその中に…街の明かりに照らされながら一緒に船に乗る話があるんです。そ、それでですね…その。」

その話を続けようとするけど頬が赤くなっていき目の方も弱々しくなっていく前髪で顔が見えなくなった。和也は沖田と同じ高さに合わせる。

和也「それをして欲しいのか？」

沖田はそれを聞いてさらに顔を下げたがその状態で静かに縦に顔

を振った。和也はそれを見て少し苦笑してしまうが沖田の女性らしい台詞が聞けて嬉しく優しく頭を撫でその返事に答えた。

和也「いいよ。」

二人の思い出

和也「おっちゃん、ありがとな。」

夜の大阪、現代とは言え明かりが少ないがそれでも綺麗な明かりで照らされた街並みがあった。そしてそこには綺麗な川が引かれており自由に行き来できるように船の貸し出しがされていた。今現在和也と沖田はそれを今借りた後で船の上には沖田がぽつんと座っている。

男「何、別に構わへんよ。ほんじゃ良い船旅を。」

和也「おう。」

和也は船のおじさんと別れ船に乗った。漕ぎ方は言わずもがな旅で覚えたので別に問題はなく漕ぐ事ができる。

和也「取り敢えず適当に行くか。」

沖田「は、はい。」

さつきから沖田の様子がおかしい。と言うより顔を上げずつと顔を赤らめ伏せたままで様子がおかしい。別に船に乗って漕ぐだけだからおかしい話ではないし恥ずかしくもないと思うのだが…

和也「…どうした？もしかして気分がわりいのか？」

沖田「あ、いえ別にそう言う訳ではないのでき、気にしなくていいですよ。」

和也「顔はそう言っただけ。」

沖田「いいいですから、取り敢えず行きましよう！時間が減っちゃいますよ！」

沖田は誤魔化すように話を進める。和也はそれに顔を捻るが取り敢えず言われた通り進ことにした。櫂を持ち取り敢えず川に沿って進んで行く。この時はまだ電気と言うのが引かれていない。そのため明かりは提灯と松明のような物だけだがそれでもかなりの着けられていた。明かりが広がっており暗めの街並みができあがっていた。川の方にもその明かりが来ており所々にある橋にもつけられている。和也たちはそんな中をゆつくりと進んでいた。

和也「……」

沖田「……」

お互いに沈黙が訪れる、沖田の雰囲気もあつて何故だか和也も切り出すのが恥ずかしかつた。とは言え沖田からしてきた事なのでつきり沖田から何か話があると思つて話題を用意していながつたので話が出しづらいのもある。

和也「……こうして見ると綺麗だな、大阪も。」

沖田「……そうですね。」

和也「京都の方でもあつたよな、川。」

沖田「ありましたね。別にあまり興味はなかつたですが……」

和也「まあそんな暇も無かつたもんな。」

警察だつた立場もあつたが沖田とこういう関係になつたのはそんなに経つていない上に自分が大けがしたものだからろくに何も出来なかつた。それに関しては沖田に申し訳なく謝つた事もあつたが沖田はそんな事を気にしていなかつた。

和也「色々あつたな、本当に……」

沖田「……ええ、色々ありました。」

和也「ああ、それを踏まえてお前と出会えてよかつたよ。」

沖田「またそんな事言つて……」

和也「いいじゃねえか、ホントの事だつたんだから……そんな事より、何か俺に言う事あるんじゃないのか？ さつきから待つてるんだけど……」

沖田「！」

それを聞いた沖田は再び顔を赤らめて俯いてしまつたが人差し指を合わせながら呟き始めた。

沖田「あの話したじやないですか……ほらさつきした恋愛の話です。」

和也「ああだから今船に乗つてるんだろ？」

沖田「そ、その……その話には続き合つてですね。じ、実はその船に乗つてこうやって夜景を見ながら話しが続くんですけど……」

それで？と和也が返すと沖田がまた黙り込んでしまつた。明かりに照らされた沖田の顔が夜の暗さもあり少し色っぽい、少し焦らせた

いが本人が言うまで待つことにした。

喋らなくなり川の波が船に当たる音が聞こえそれによって小さく揺られる船が二人の体を揺らす。こうして見ると日本人なのに金髪と言うのは何故なのだろうか？親の一人が外国人とかそんな理由だろうか？あまり親の話しは振りたくないし自分もしたくないのでしなかつたがやっぱり気になるな。

沖田「…じろじろ見ないでください。恥ずかしいです。」

和也「あ、わりい。」

沖田「それでその…その夜景を背景にその二人は船の上でキスしたんです。」

それを聞いた和也は思わず呆気にとられ沖田はこっちの方を向いた。何かを覚悟したような目をしているが少し弱々しい感じもしている。

沖田「そ、それですね。………してくれませんか？」

和也「……」

沖田「……嫌ですか？」

和也「いや、お前からそんな事提案されるなんて思ってみなくて…少し照れ臭いと言うか何故か恥ずかしい。12月の中頃なので冷たい風が熱くなった顔に当たり冷ましていく。沖田の提案もそうだが今に思えば自分はガツガツ行き過ぎた気がして思い返してまた顔が熱くなって目を反らしてしまった。

また沖田の方を見る、沖田の方は顔は隠さなくなったがこっちの方はもう向いておらず綺麗な横顔があった。金髪の毛が冬風に撫でられその魅力が際立つ。

和也（あの沖田がな…）

随分女の子らしくなったと思う、前のような焦りも無くなり永倉が言っていた前のような優しい沖田に戻ったと言っていた。自分も今の沖田が好きだ。厳しくだけどちゃんと人の事を見ている優しさが自分も好きだ。それにこんなに素直に好意をぶつけてくれるのも好きだ。こいつといると好きな所が増えてくる。

和也「いいよ、ほら、早くしないと遅くなるぜ。」

沖田「そ、そうですね。」

二人が近づきお互いの背中に手を回す、沖田の顔は真っ赤に染まり和也も若干頬を染めお互いに見つめ合う。そして沖田が怯えるように目を瞑る。それを見て少し笑みを浮かべ沖田の顔を寄せる。その時沖田の方から声が聞こえたがそれを気にせず唇を重ねた。和也はムードを考えて唇を合わせる程度だったのだが沖田の方から舌を入れて来た。それに応じる。それを何回か繰り返し気が済んだのか離れた。夜の街並みからくる光と弱々しい表情を浮かべる沖田に思わず見惚れてしまった。

そして沖田は顔にシワをよせ和也の胸に顔を当て腕に力を込め顔を胸に押し当てる。和也はそれを不思議に思い頭を撫でながら声をかける。

和也「どうした?」

沖田「……」

和也「どうしたんだ沖田、ちよつと強いぞ?」

そう声をかけるが沖田は何も喋らなかつた、ただ時間だけが過ぎしばらくすると沖田が喋り出す。

沖田「…普通の生活ってこんななんでしょうね。」

和也「沖田?」

沖田「こうやって普通に過ごして、普通に出かけて、途中で何か食べてそして…血もみないような生活を続けて過ごしていく…こんな普通の生活がこれほど良いだ何て、知らなかつた。」

和也「…ああ、俺も知らなかつた。」

今のいままでただ戦い続けてただ振り回されるような人生だつた。飛ばされる前はただのチンピラ、飛ばされた後はただの放浪者、自分が何をしているのかもわからずただ生きていくだけの人生だつた。だが今は違う、自分の中で初めて生きる理由が見つかった。それがまさか恋とは知らなかつたが…

沖田「…ねえ和也さん、あなたは普通の生活を送ってみたいと思つた事はありますか?」

和也「昔は考えられなかつたが、今は思つてる。」

沖田「それじゃ……私とそれを送りませんか？」

和也は思わず沖田の方を見る。沖田はただ顔に埋めていた顔を横に向け続ける。

沖田「一緒にここから逃げるんです、幕府のためとか新選組のためとかそんなの全部捨てて何処か遠くへ逃げるんです。そしてそこで普通に過ごすんです。そして……私と二人で過ごすんです。」

和也「沖田……」

沖田は顔を上げる、和也の返答を待たず言葉を続けていく。和也はそれを辛そうに見ている、そしてゆっくりと沖田を抱きしめる。髪が和也の頬を擦り沖田の方は

和也「……ありがとう、俺のために、嬉しい事を言ってくれて、けど駄目だそんな事。」

沖田「どうして!?!だって、だってこれが一番いいんです!こうすれば二人とも幸せなんです!」

和也「けどそれじゃ皆はどうするんだ?今まで一緒に戦ってきた皆を置いて、俺たちだけで逃げるのか?」

沖田「……皆なら納得してくれるはずです。それにいいじゃないですか、刀もいらす力もいらすただただ老いて行くだけの人生、とても良い事で幸せな事じゃないですか。」

和也「んじやお前は皆を置いて幸せになつて納得するのか?」

それを聞いた沖田は苦虫を噛み潰したような顔をし何とも言えなくなる。和也は沖田がどんな人間なのかも知っている、今まで新選組と共に生きてきたような人物がそんな簡単に捨てられる訳がない。だが和也と一緒にいたいと言う理由は本心だろう。和也だってそうしたいのは山々だが和也には謎の転移がありそれに自分につけられた呪いがある。例え逃げた所で和也は自分が長くはないと悟っているのだろう。それは沖田の方も察しているからこんな事を言っているのだ。

和也「沖田、これは俺の経験談だ。自分も騙せないような嘘はつくな、それを行動に移したら一生引きずって生きる事になる。お前にはそうしてほしくない。」

沖田「だって、だって好きな人と一緒に生きたいと思う事がこんなに嬉しいとは思わなかったんです！今まで知らなかった、ただ切るだけの人生でも局長たちと生きる事は嬉しかった、あの人たちと行けば私は、ただ死ぬだけじゃなく何かを残せるかと思って…」

けど私は知らなかった、好きな人と一緒にいる事がこんなに嬉しい何て知らなかった、今まで普通の生活何てくだらないと思って、縁の無い物だと思ってだから私、私それを知ってあなたと一緒にいたいと思っただけです!!」

最初は興味がなかっただけ、それに病人だった自分を見てくれる人もいなかった。だから自分がいるのかどうかもわからなかった、だから自分が生きると言う証を残したかったんだ。だけど現実には甘かった、こんな自分でも見てくれう人はいた、こんなわがままな人を好きになつてくれる人がいた。だから自分はそんな甘さに毒されて、心地よくて一緒に行きたいと思っただけだ。

沖田「ここであなたを一人にしたら私は絶対に後悔する！だから私は一緒にいたいんです！いつ消えるかもわからない人を一人にさせたくないんです!!」

和也「沖田…」

沖田「お願いですから一緒にいてください…わがままなのはわかってるんですけど私はそれでも」

あなたと一緒にいたいんです。」

もつと一緒にいたい、二人で色々な所を見て回りたい。何もせずだから家にいたり遊んだりしたい。ただ一緒にいたい。今まで不幸だった部分をこの人と一緒に埋めたい、そのためなら私は、今まであった証を捨てれる。

和也は沖田の本気に戸惑っていた、純粹な好意の押し付け、和也にとつては跳ね上がりたいたい程嬉しい事だった。けど自分は謎の転移がある、いつ起こるかはそれが起きる前にわかるがその転移に沖田を連れて行く事はできないのだ。和也だって一緒に行ける方法は探そうとした、その矢先にこの呪いを受けた。だからどうしようもなかった、死ぬ事は避けられなかった、だから沖田にはせめて女の子として

生きた事を後悔して欲しくなくて、それを次に生かしてほしくて続けて来たのだ。

和也「…ありがとうな沖田、お前からそれを聞けて嬉しいよ。」

沖田「なら私と一緒に行きましょう。そしたら…」

和也「けどごめん、俺は特殊だからお前を連れて行く事も、死にかけだから一緒に行く事もできないんだ。わかってるだろ、ここで逃げたら今まで恨みを買ってきた連中の良い的になっちまう。」

沖田「そんなの私が切り伏せます。」

和也「駄目だ、俺たちは新選組として生きて以上それを片付けないかぎり俺たち二人は一生幸せに生きる事ができない。だから…この騒動が片付いたら一緒に考えよう。」

沖田「けど…その間にあなたが死んだら。」

和也「大丈夫俺そんな簡単に死なないからさ、その間にこの呪いを解く方法を探すよ。お前はその間に、新選組としての最後の仕事を終わらせてきてくれないか？」

沖田「けどそれじゃあなたが心配です。」

和也「俺は大丈夫だよいつも普通に死にそうな場所なのに何故か生きている事が多いからよ。それに俺が呪いを受けたまま死なないのはちゃんと治療を続けているから無事なんだ。そこまで心配はしなくていいよ。」

沖田が新選組でやり残したことを片付け和也はその間に治療法を探す、もし探しきれなくても一緒に探せばいい。多少時間はかかるがこつちの方が後腐れも残らない。本当は一緒に逃げた方がいいのかもしれないが今は不味い、政府が割れた現状でそんな事したら恨みを持った連中から狙われて終わる可能性がある。だが現状逃げなければ生き残れない、ならせめて新選組でやり残したことがないようにしてほしいと言うのが本音だった。

沖田「…わかりました。ならちよつと待っててください。やる事やったら帰ってきますから。」

和也「それまでゆっくり待ってるよ。」

沖田「…うん。」

そう子供のように頷き顔を胸に埋める沖田、そんな頭を優しく撫でる和也。その顔はとても嬉しそうでそして街の明かりで照らされた薄暗い中、また二つの影が重なった。

沖田「それじゃ…私もう行きますね。」

和也「ああ。」

その翌日沖田は伏見に戻る事にした。和也はこのまま大阪で養生し沖田の帰りを待つ事になる。今の所何も起こってないが敵がいる以上油断はできない、とは言え一応病人なので後回しになる可能性があるがそれでも念のための準備は必要だ。

沖田「ぱぱと、ぱぱとやって帰って来ますから…それまで大人しくしてくださいね。」

和也「わかつてるよ、お前も伏見に行く時は気をつけろよ。」

そう優しく沖田の頬に手を置く、沖田はその手を自分の手で掴み笑みを浮かべお互いに見つめ合う。今は外にいて人もいるので流石にキスはしないがそれでもかなり目立っている。それを知らない二人は名残惜しそうに離れて行く、和也は沖田の背中を見つめながら気落ちした気持ちを切り替え宿に戻る事にした。

現在
慶応3年
12月14日

夜の緑雷紫火

和也「ほら治ったぞ。」

子供「ありがたうおじさん！」

和也「困った事があつたらまた来いよ。」

治療を終えた子供を見送る和也、あの後和也は情報集めと一緒に身近にいる人の治療を行っていた。と言つても子供の軽い傷やお金の払えない人にしか処置をしない。あまり手広くやり過ぎると本職の人の不満を買う上に今現段階で敵を作るのはよくない。

とは言え自分の治療をするための金は必要なので多少の仕事はするがそれでも副業みたいなものをしてる。

呪いを解くのは洗礼詠唱等の魔術などで呪いを払うのが一般的だが恐らくここにはまだいない、第五次聖杯戦争時に間桐たちの魔術師がこの日本に来ているのは知っているが何処にいるのかもわからないしそれに例え会つたとしても歓迎されないような気がする（特に間桐とは話が合う訳がない）

となると手段的に一度海外に行く必要がある。聖堂協会に頼めば何とかしてくれそうな気がするが何分自分が会つた聖堂協会の関係者でまともな人間に会つた事がない。言峰は信仰心は本物だったが結局和也と反りが合わなかった。だがもしかしたらこの傷を治してくれるかもしれない。そのために金が必要になるかもしれないため少し多めに稼いでいる。

和也（俺が習つて来た魔術とはかなり違う、信仰心なんて俺にはねえしな…）

洗礼詠唱には信仰心が必要なので和也は別の魔術を探そうとしたが修験道と言う似たような物はあるらしいが何処にあるのか見当がつかない。動こうにも今の旧幕と新政府の騒動があつて動けない。

和也（沖田が帰つて来るまで缶詰かあ、大阪に目立った人物がいない。）

やはり神秘の事もあるため秘密にされているためなかなか探すのが難しい、自分が見つけきれないだけかもしれないが…

和也「…少し歩くか。」
少し気分を紛らわしたい。外に出よう。

外は相変わらずいつも通りだったが少し騒がしくなっている。やはり旧幕府と新政府での戦いが起るためかなりピリピリしている。ここに来て少し知り合いが出来て色々聞いてみたがやはり新政府側の意見が多い。やはり徳川の政治に不満がある人は多かつたようだ。和也「まあ伏見が近いからピリピリすんのは当然か、まあ俺もどっちかと言うと…新選組の俺がそんな事いっちゃ駄目か。」

やはり現代の生活を送っていた身としては新政府の方が良いと言うのが本音だ、とは言え今は新選組としては自重させてはもらうが…和也「何か変わった事とかあったか？」

店主「変わったも何も最近怖い話しか入ってこないよ。人殺しなど二つの勢力がぶつかりあうなど嫌な事ばかりさ。」

和也「ちなみにあんたはどっち派？」
店主「まあムカつく上士の連中に頭を下げる事が無くなるのが嬉しいね。」

と言う事は新政府派か、とは言えどっちが勝つのかはわからない、

新選組の強さは知っているがそんなの探せば幾らでもいる。それに人間の力は数とそれをいかした知略だ。神や妖精であれば話は変わってくるが人間が一人でやれること何てたかがしれている。

和也（沖田は大丈夫だろうか…あまり無茶してなきやいいんだが…）

和也「…歴史の内容、覚えておけばよかったなあ。」

とは言え和也の今までを見ていれば忘れるのは仕方ないとも言える。だが確かに和也が学校で習った知識を覚えておけば多少はマシになっただろうがそもそもこんな目に合うとは誰も思わないだろう。だがこの二つがいずれぶつかるのは目に見えている、そして現代の生活を見ていると恐らく…

和也「…この戦いの後新選組がどうなるのかまったくわからない。沖田は恐らくここら辺で病気でまともに動けなくなる筈だから戦死じゃないが…皆無事だといいいんだが。」

そう空を見上げる、こういう時は何故か空を見上げてしまう。それが何故かはわからない、けどこうしていたらただ下を見ているよりはいい。下を見ているより気持ちが落ち着く。

それに景色も綺麗だ、だから空は好きだ。

和也「…少し変わった所に行くかな。」

街ぐらいいしか歩いた事がない、ちよつと外れにでも行ってみるか…

天下の台所とは言え外れになると少し貧相な場所はあると言ふより存在する。家の方も随分昔に建てられた物で天候や時間による風化でかなり崩れかけている。現代でもたまに見かける放置された欠陥住宅だ。京都の方でもみかけてよく志士の隠れ家になっていたがここでは本当に貧相な人たちしか住んでいない。

和也（この人たちはどうなるんだ？）

疑問が浮かぶがあまりいい予感がしない、何故かと言うとこの人たちが例え新しい世の中になってもそれについてこれる気がしないのだ。今現代でも起きている事なのだが大抵人間社会は知識に疎い人は付いてこれず結果的につまはじきにされる事が多いからだ。

和也（人の社会って今も昔も変わっていないのかも知れないな…）人の社会を作るのは知識と言う名の知力、そして人自身を守るための純粋な力、そして運。人が生きて行くためには力が必要になる。和也自身もその力を持つ事で生存し運があつたからこそ残れた。だが和也が一番強く感じたのは運だ。

人では到底立ち向かう事ができない神秘、サーヴァントと言つたそもそも人が相手をする事も出来ないような存在、そんな奴らを相手にして生きて来れたのは藤丸たちがいたおかげでもあつたが一人の時はほぼ運だ。

和也（この人たちにも運があれば…）

チャンスはあつたんじゃないか？とは言え自分にも余裕がない、歴史を覚えて立ち回ればそんな事もできたかもしれないが自分はそもそも政治何てことは興味はない。気に入らない事は片付けて人を助け一時的な施しはした事はあるが、あるがそれでも本気で変えたい人間の手伝いぐらいしか本当の意味で助けた事がない。

和也「人を助けるって難しいよな…士郎。」

そう今は遠くに行つてしまった友人に投げかける、当然それは返つてこない。ただ一人の病人の声が響くだけだった。そう勝手に悲観

的になっていると視界にふと倒れている子供が目に入った。腹を押えその場でうずくまっっている上に口から吐血している。その周りには男性がおり心配そうに倒れている子供に声をかけている。

和也「どうした？何があつた？」

男「じ、実は息子が河豚なんて食べちまつて。」

和也「まさかそこら辺い捨てられたやつ？」

男「そうなんだ、食べるなつて言つたのに！」

それを聞き直ぐに容体を確認する。

和也（食べてから数分か：子供だから体に回るのが早いのか。）

本来解毒処理をしていない河豚を食べた場合四〜六時間程で死ぬ。フグの毒はテトロドトキシシン、神経と筋肉に作用して身体の麻痺を起こし熱に強く、酸にも強いいため、普通の調理ぐらいでは分解されない。水さらしても無毒化することは出来ない、本来であればこうなつてしまった時は専門の医者に見せる必要があるのだが今の時代にそんな医者は存在しない。

取り敢えず吐かせる、子供に嘔吐をさせ中身を吐き出させる。その後治療魔術で多少の解毒処理をする。和也では確実に抜く事はできないがそれでも体から七割程は抜く事はできる。そしてその後は薬を持ってきて安静にさせる。

男「本当にありがとうございます！」

和也「気にすんな子供が死ぬところは見たくないからな、それより一応無理矢理吐かせたけど体に吸収した分が残つてる。排泄は頻繁にさせるように、あと薬もやつとくから朝昼夜飲ませるよに、それから免疫力：取り敢えず毒に負けないように腹に入る分だけ絶対に食わせる。後で何か持つてきてやる。」

男「す、すみません。ほんと何つて言つたらいいのか……」

和也「だから気にすんなつて、あんたはあの子の親なんだ。こう言う時しつかりしなきゃ駄目だぞ。」

男「は、はい。本当にありがとうございました。」

そう深々と頭を下げる。和也は取り敢えず一度食材を買つたら夜までこの親子の家でいることにした。一応の処置はしたが急に容体

が変わるかもしれないので夜まではここに在る事にした。家の方はかなり痛んで在るがそれでも台所はあるのでそこで料理はできる。父親にどんな食事をしていたか聞いた所まともな食事はできていないので取り敢えず軽めの物を出す。あまり栄養価の高い物を出すと胃がびっくりして容体が急変するかもしれない。

男「う、美味しい。すみませんこんな物まで出してもらって…」

和也「いいって助けた以上最後まで面倒みなきやな。それより何でフグなんて物に出したんだ。」

男「他に食う物がなくて…それで食べ物探してたら偶然息子が…」
和也「見つけちゃった訳か…いつもこんな食べ物探してる状態なのか？」

男「…はい。綾香と結婚しあの子を授かりました。でも俺の宿が原因不明の火災に襲われ全焼してからこんな生活を続けてます。そのせいで綾香は病死して…」

和也「…悪い事を聞いたな。」

男「いえもう昔の話ですから…それからこの家で暮らして在ます。にしても驚きました、まさか大阪にこんなにすごい医者がある何て。」

和也「医者ね…まあそんなんじゃないんだけど、まあ礼は受け取っとくよ。」

いつからだろうか、こうやって人助けをするようになったのは…

昔はただ喧嘩だけをして生きていた、気に入らない事はただ殴り飛ばしそして格闘技術だけがつき力だけが備わり続けた。だが何故か心だけは何も感じなかった、人を殴りとばしても何も感じない。自分が何処にいるのかもわからない。きつとこのままただ野垂れ死ぬだけの人生なのだと思え入れて…だがあの時、謎の転移に巻き込まれた事によってすべてが変わった。士郎と出会ってからかな、人を信じるようになったのは…

最初は驚いていた、前任んでいた時とは違う寒い空間にいきなり投げ出されたのだ。驚きもするし戸惑いもあった。だがやる事は変わらなかった、前の世界で奪った金を使い路上で寝転がっていた、そんなときに士郎と出会った。とは言え第一印象は最悪であまりにもしつこいようだからボコ殴りにしたが…だがそれでもしつこく来るので仕方なく折れるように居候になる事になった。士郎はいわゆる度が過ぎたお人好しと言う奴だ、困ってる人と言うかそれよりも誰かのためにやるのが生きがいみたいで相手がかなりのやばい奴でもない限り手を出す事も文句を言うこともない。

その時の士郎は学生だったのもあって案の定そのお世話係「自称」の大河とかなり言い合っていて自分も大河からはよく思われていなかった。その後自分は家に入った事もあり好き勝手いき金も惜しみなく使っていた。だがそれでも士郎は俺を見捨てる事はなかった。例え金が足りなくなっても自分のバイト代を貸してくれたら、代わりに自分の欲しい物を買ってくれたりした。そんな士郎を見ると今の自分の在り方が情けなく思えて来た。

それからは自分も働く事にした、多分その時の自分は情けないと言う事には気付かずただ借りがあるのが癪だから返すと言う意味で働いていたような気がする。最初は馴染めずよくやめることがあったが士郎から無理しなくていいと言われて負けじとやっていた、それから士郎とは話すようになり大河とも仲良くなった。

最初の話題と言えば士郎の人助けの事についてだ、自分に金を貸してくれた時もそうだが何の嫌味もなくむしろ笑みで貸してくれたのがどうにも不気味だった。その事について本人と話した事があった。

士郎『別に誰かが助かったらそれでいいじゃないか。』

和也『いやよくねえだろ、それで自分が無理して倒れたらどうするんだ？』

士郎『それは自分のせいさ、だけど俺はそれでもやめないと思う。俺は正義の味方になるのが夢なんだから…』

和也『…重症だな。』

士郎は善人ではあったが少しまでもなかった、自分の命が危機に瀕しようとも他人の命を優先ししかもそれを迷いなく実行するタイプだ。その正確には大河も呆れており士郎の心配していた、自分はその時ろくでなしだったから変な奴だと思っていた。だが彼の優しさは本物であれだけひねくれていた筈の自分が少しはまじめに生きていけるように、しかも人を助けるようになっていた。最初は近寄りすらしなかった桜も話しかけてくれるようになった。しかもその時士郎から料理ぐらいは出来るようになった方がいと一応一緒に習っていた。そんな時セイバーと出会った。

セイバーとはかなり凄惨な出会いだった、最初は士郎が通っている学校の裏方作業をしていてそして慎二の雑務を押し付けられた時にそれを手伝っていたら何故か聖杯戦争に巻き込まれた。そして命からがら家に逃げ延びたが追いかけられそして土蔵に押し込められた時に士郎がセイバーを召喚した。

セイバーとは何故か気が合う事が多かった、と言うのも士郎の行動について意見が合う事が多かったのだ。戦争だと言うのにそれも構わず命投げ出す行動にセイバーその他が忠告したのだがそれでも士郎はそれを曲げなかった。だがそれが彼の一番の強さだと思った。

セイバー『まったく士郎には困ったものです。』

和也『まあいつもの事だけどもう少し自重してくんねえかね。』

セイバー『和也からも何とか言ってください。あれでは早死にしないでください。』

和也『いやあれがあいつらしいって言うか、あいつ自分の考え曲げない奴だから無理。』

結局戦争の終わりまでその考えは貫き通した、セイバーは消えその

後士郎はどうしているのかはわからない。けどきつと桜と元気に暮らしているだろう。俺はその時はほとんど何もできなかった、士郎たちのように魔術も使えなかったのでお留守番が多かったがそこまで気にはしなかった、色々あり死人も出たが士郎たちはちゃんとして帰ってきてくれた。その後は俺も自立するために色々やり始めていた時に藤丸たちの所に飛ばされた。

正直自分のような人間がこんなに甘くなったのは士郎と出会ったおかげだ。自分がここまで変わった原因、士郎の甘すぎる性格のおかげのようなものだった。士郎のあの異常とも言えるお人好しのおかげで和也はここまで変化したのだ。それを懐かしそうに思い出す、やはり友人の事を思うと一番最初に士郎が思い浮かんでしまう。

和也「……」

男「あの、どうかしました？」

和也「ああ気にしないでくれ。なああんたは今の時代をどう思う？」

男「そうですね、少し怖くはありますが時代の変わり目に立った、みたいな感じがします。」

「ずっと変わらないかと思ってたこんな時代がまさか変わる日が来るとは思っていませんでした、ですがそれと同時にこの先どう変わるのか怖くはあります。」

和也「んじや今新政府と旧幕府の事、どう思う？」

男「歴史を見ればわかる通り人の時代は変わっていくものです。その変わり目には常に革命の心を持っている新しい人がたちその前には常に今まで作り上げた事を守っていた人がいます。その人たちにも譲れない部分がある、だからこそ戦うんだと思います。」

和也「話し合いで済ませるって言うのはないのかな。」

男「まあそれが一番ですけどけどこれは人の社会、歴史が変わるその瞬間です。人の歴史は戦いの中にあり平和はその戦いを作り上げるための時間だと思います。それが今何です。」

和也「確かに、こうしてみると人は戦闘民族なのか。」

男「けどだからこそ人の歴史が出来上がっていくのかと思います。」

戦いの末に行き着いた答えでもそれでも人は受け入れていく、そして変わり続けて人の生きていける世界が出来上がるのじゃないでしょうか。」

和也「戦いの末にか…：そうなのかもな。」

人の歴史は戦いだけだ、革命、革新を続け人がどう生きるのかと変え続け現代の社会が出来上がった。ジャンヌもセイバーも今まで会い続けてきた英雄たち今の社会を作るきっかけになった人たちだ。だが現代の社会もまだその途中なのだろう、それがどういう形で変わるかはわからない。それが俺が生きているうちなのかそれとも終わった後なのかは戻ってみないとわからない。けどきつとそれは悪い意味でもいい意味でも価値のある事なのかもしれない。

和也（藩や新選組の皆がそうなのかもな…）

彼らは今の時代で生きそして自分の生き方の答えを出そうとしている。だからこそ現代でも語り継がれる程名を刻まれたのだ。

和也「あんたは変わった後どうするんだ？」

男「そうですね…：息子が一人で生きられるように出来るように育てようと思います。そのためにも頑張らないといけませんね。」

和也「…：良い父親だよあんたは…」

そう呟き少し男と離れ子供の容体を見るとどうやら安定してきたようだ、食べた所が薄い所だったのかも知れない。とは言え今日はこのまま泊まり込み子供の様子を見守る事にした。

その後数日特に問題もなく子供の容体が治ったのを確認した夜に引き上げた。

和也はその後自分の宿に戻っていた。部屋の窓を開けその月を眺めながらヒレ酒を一杯飲む。いつもなら怪我のせいでそこまで元気がなく酒はあまり飲みたくなかったのだが今日は何故だか飲みたくなった。熱い酒が喉を通り冷めている体が暖められる。こう言う時昔はタバコをしていたのだがいつもまにかやめてしまっていた。一応作成方法は知っているのだが自分で作ろうとは思わない。

和也「…士郎と会うまではかなり吸ってたんだがな…」

今ではもう懐かしい記憶だ、士郎の時も吸っていたのだがジャンヌ以降吸うと言うよりも吸える機会がなくなったので自然と吸わなくなったと言うのが理由だ、一応行く先には似たような物はあったがそこまで愛好家と言う訳でもなかったものでいつの間にか吸わなくなっていた。

和也「まあ今吸ってたら沖田に怒られそうだけど…」

そう沖田の名前を呟いた時何故か心に穴が空いたような感覚に襲われた、まだ数日離れたただけだと言うのに何故か隣が寂しく感じてしまう。それと同時に傷の痛みが酷くなる。

和也「っ」

時々痛くなる、思い出したかのように痛みが腹から来る。腹を抑え顔が青くなる、一応汚染の進行は止めているのでこれ以上は酷くはならないがそれでも痛みはくるのでそれには慣れない。ちやぶ台に乗せてあった痛み止めを飲みその場で深呼吸をする。熱くなった息を吐き台に腕を乗せ体を支える。

和也「…ふう…」

その体勢から数分後いつの間にか下がっていた頭を上げる、自分はそのまま部屋の隅で体を預ける。

和也「…ちよつと厠に行くか。」

少し気分紛れに行く事にした、部屋の戸を開き出る。暗い廊下が続き少し危ないので目を魔術で保護して進む。脚はふらついていないのでそのままゆっくり歩いて行く。やはり12月と言うのもあるのだから寒い、酒を飲んだ事もあって暖かくなったのか当たる風がより冷たく感じる。

部屋は二階にあり厠は基本的に一階にある。そのため階段を下りる必要があるので階段に向かう。器の軋む音が響きその音に少し不安を感じる、まるでここに一人だけのような気分になる。階段に着きそのまま下りて行く、この宿の階段は玄関、つまり入口近くにあるため入口付近を一望でき窓から入ってきた月日が中を照らし多少青に染められた空間が広がっている。

階段を下りて行く、歩くよりも大きい音が響きそれがリズムを刻み段々下がっていく。そしてその最後の段を下り一回に降りる。そして厠に行き用を済ませ二階に戻ろうと玄関前に来た時少し疑問が漏れた。

和也「…何か嫌に静かだな。」

夜が静かなのは当然だ、人は寝る時は基本的に騒音を嫌う。だからこそ寝室と言う部屋があるのだがここは玄関近くだ。さらに言えばここは大阪、天下の台所と呼ばれる場所で夜に騒がしい時は多い筈。こここの宿は市場より少し離れた程度の場所なので部屋には音が来ないが玄関ら辺ではよく市場の音が入ってくる事がある。

とは言えそこまで大きな音は入っていない、せいぜい市場がにぎわっているとと言う事がわかるような小さな音がくるだけだ。だが今はそれが聞こえてこない。

和也「……」

少し不安になりながらも二階に上がっていく、呪いにかかってからも上がる足が重く感じたが今回は何故だか別の意味で重く感じる。そして自分の部屋の方に歩いて行く。暗く包まれた廊下を歩いて行くこと異様に長く感じる。そのまま歩いて行く、すると和也の足が止まった。

目の前に何かがあった、背景に溶け込んでいるが若干緑色の皮膚が見

えた。顔は人のような形をしておらず虎の顔に植物の葉のような血管が見えている。手には鋭い爪があり足にも異様に長い爪が生えている。そしてその爪には赤い液体が垂れていた。

和也は意味がわからなかった、ここは人の里の筈だ。本来このような異種はいない筈なのにどうしてここにいる？それは完璧な油断でもあったがそれでも予想外なのは本当の事だった。そしてその異種はゆっくりとこちらに近づいて来る。

？「よ”こ”せ”え”よ”こ”せ”え”え”え”!”!”」

そう片手を上げこちらに声を出す異種、そんな事を気にせず戦闘態勢に入る。呪いをかけられ戦うのは辛いが無理矢理体を動かすのは今に始まった事じゃない。今の現状を把握する、廊下ではあるが多少空間が広い、相手の爪は手の方が短く足の方は爪先が当たる程長い。そして自分は流石に異種とは戦闘しないだろうと思つて道具はすべて部屋にある。人の形をしているので対人格闘は出来るが自分の容体を考えて道具は確保しておきたい。そして異種の方は下げている顔を上げた。

？「よ”こ”せ”え”!”!”」

そう腕を振り上げこちらに振り下ろしてきた、懐に入り相手の腕の方に手を当てそれを止めそのまま腕を掴む。そして自分の肩を土台に相手の腕をへし折ろうとするがそれを感じたのか相手の方はそのままの状態で投げ飛ばした。和也はそのまま隣にあった部屋の戸を貫き中に投げ飛ばされる。

和也「くそ今のやれたのに、やっぱ体が動かねえな。」

瓦礫を押しのか立ち上がる。どうやらここには人がいないようだ。相手の方は追撃の攻撃をしようとしてこちらに近づいて来る。和也はその場にあつたちやぶ台を持ちそのまま相手にぶつける。そして脚の方を持ちちやぶ台をヌンチャクの要領で回し相手の顎目掛けてちやぶ台を下からぶつける。そのままちやぶだいの脚を回し相手にぶつけようとするが相手はそのちやぶ台を叩き割った。

和也「ち！」

すぐさま反撃が来るので横に向けて大きく避ける。相手はそのまま

ま奇声を上げ和也に迫って来る、和也はその場に掛けてあった掛け軸を持ち相手の爪を防ぐ、爪は貫通し押され気味になるがそのまま掛け軸を相手の腕に巻き付けそのまま捻る上げる。そしてそのままもう片方の腕に巻き付けそれを相手の背面に持つていき固定する。そしてそのまま蹴飛ばす。

この間に自分の部屋に向かう、一応かなりほどきにくいようにしたので無理に外そうとすると関節が外れるようになっていた。自分の部屋に着き置いてあった刀を持つ、そして他に置いてあった魔術礼装を持ち部屋を出る。そして廊下の方に目を向けるとさっきの怪物が走って来た。

礼装を持ち構える、両腕には黒いガントレットが付いており手の甲からは刺突剣のような物が夜光に当たり銀色の刃を光らせている。ガントレットを使用するのはこのような日本刀は完全に人間用のような物なのでこの相手には相性が悪い可能性がある。それならいつも使い慣れている物で対応した方がいい、相手の攻撃を捌き攻撃を入れていく。

和也（隙作ってアルタイルの全力突きを決める。）

今现阶段で出せる最大火力、礼装、強化、魔術を使用した物理攻撃。前サーヴァントと戦って倒す程なので威力は信用できる。そのためにはまず相手を倒すか隙を作る必要がある、この技にはためがいるため使えるタイミングが少ない。最低でも相手の骨に響くほどの一撃を入れて怯ませる必要がある。

和也（攻撃捌くのは楽だが体が重くなってきている。あまり時間はかけていられない。）

和也の何十年と言う経験から学んだ事をいかしその場で戦法を建てる、まさに怪奇現象と言ってもいい程の事でも驚かず生き残るための戦法をする。

相手の攻撃を防ぐ、その後短刀を抜き相手の顎にぶつけそれに膝蹴りを入れ追撃する。顎に深く刀が突き刺さる。そしてその隙に腰に差してある刀を抜きそれを相手の足に突き刺しそれに下段突きを入れ深く刺し固定する。

もはや言葉にならない悲鳴が上がりそれを止めようと腕を上げ振り下ろす、だが和也はそれに構わず拳を真っ直ぐ構えている。不気味な腕が和也を挟もうと迫っていきだがそれに表情を一つも変えずただ相手の胸の方を見ている。そしてその腕が和也に当たろうとした時、その腕が止まった。

?「!？」

怪物の方も驚いていた、怪物の手には何か固い感触があった。少し滑らかな透明な物体がある、感触が岩と言うよりガラスのように少し冷たかった。

その正体は魔術防護壁、和也の礼装から発動する防御手段である。半円形に展開する透明な防護壁で強度はチタン壁とほぼ同等である。サーヴァントからしたら大した事ではないだろうがそれでも並大抵の攻撃では突破はできない。それに和也は本職ではないのでそこまで長くは展開できず基本的に避けを専念している。

和也（今だな。）

全身を最大強化、そして《アルタイル》の礼装も起動させ空手の正拳突きของ構えを取る。怪物の方はそれを見て腕を戻そうとする、だがその前に和也の突きが突き刺さった。鷲のような残像が緑色の稲妻の軌跡を描きながら怪物に襲い掛かる。

和也（追撃！）

そしてアルタイルをガントレットの中にしまわれ変わりに黒い剣が飛び出す。そしてそのまま礼装を起動、紫色の炎を上げながら怪物目掛けてその剣を振り下ろした。燃え上がる炎とともに怪物はそのまま包まれその辺り一帯が不気味な紫色に染められていった。

荒川将吾（佐藤和也）の歴史

周りや焼け焦げ紫の炎が各地に散らばっている、ゆらゆらと不気味に揺れそれに照らされるようにその中心には疲れたように座りながら荒い息を溢している和也がいた。腕を前に起き出た汗を指で拭き取る。

和也「くそがあ…やっぱりこんな体で使うにしては重すぎたか。」
体が重い、ガントレットの重さもあるのだろうがあまり腕が上がらない。それに重いと言うより全身に上手く力が入らない感じがする、やはり呪いを受けた状態でやるには少し無理をし過ぎた。和也の礼装自体は未完成なのでそこまで強い物ではないがそれでも上には大きな穴が空いており辺り一面は更地になっていた。

和也「二階にいるのが俺だけでよかったあ…」
実は怪物と戦っている間周りの事をサーチしていた、そして人がいない事を確認し安全を考慮して止めをさした。そう言えばここで泊っている間二階に人がいたのを見かけた事があまりない。女将とその若手の人、そしてたまに話す友人としかいなかったような気がする。

和也「女将さんに何て言おうかと言うか生きてるのかな…と言うかこれを沖田が知ったら飛んできそうだな…どうしょ。」
幾ら緊急事態とは言え流石にやり過ぎた、目の前には焼け焦げそして強化して残っている刀が二本ある。アルタイルの突きで絶命していたのでそこでやめるべきだった。とは言え体貫いて生きていたの何か腐る程見かけたのでその不安要素を排除したかったのだ。

だが女将の方も騒ぎを聞きつけこっちに来るだろう、それに大阪の警察機関も来る筈、なのでかなりめんどくさい状況になるので逃げだした方が早い気がする。

和也「けど…」

自分の部屋をチラツと見る、自分の部屋は比較的無傷、壁に穴が空いてもしなければ部屋の中は特に何も問題はなかった。それを見た和也は少し頷きながらこうつぶやく。

和也「…寝てた事にすればいけるか？」

そうこの事は何も知らずただ寝ていた事にすれば何も問題は無い筈だ（大有り）。普通の人間だったならこんな事人のせいだと思わない筈なので俺が寝ていた事になっていてもそれほど不思議な話ではない筈だ。少し気は引けるし女将にはかなり申し訳ないが今は状況が悪いので許してほしい。

和也「ごめん、俺の体治したら絶対に返すから…」

そう目の前にある死体を片付けながら心の中で謝罪する。何かこういった事をこんな生活をする前の自分がやっていたような気がするがそれをスルーしておく。

和也「にしても…何だこいつ？」

そう自分の部屋に移動した死体を眺めるように見る。顔の方は人ではない、皮膚も違ければ髪も生えていない。目の方も形状は人に近いが瞳孔の方は肉食獣のように細かった。それに全身に広がっているように見える緑色の血管、刀を引く抜くとそこから緑色の血が流れていた。

和也「後で調べてみるか…」

それを適当な紙で拭き取り適当な場所に置く、そしてもう一本引き抜き手入れを済ませた後鞘の中にしまい。部屋から廊下を覗くように見回す。本来なら誰もいない筈の場所に傘を被った男がぽつんと立っていた。

和也「…なるほど。」

そして部屋からゆつくりと出る、ガントレットの調子を確認しながらその男に近づいて行く。

和也「こんな人里に何であんなのが来たのか不思議だったんだが、お前がいるのなら少し納得はできるかな。」

？「……」

和也「お前何かしってるんだろ？さっきの奴の事について…」

相手は何も喋らない、ただ何も言わずただ無言だけが返ってくる。

？「やはり何も知らないのか。」

和也「何が？」

？「何も知らずただ生きて行く、凡人であれば想像を超えた旅であつただろ。現代の人間が思っている程楽なものではなかつたであらうな。」

和也「おいお前まさかこの転移の原因知ってんのか？」

？「人が望む未知、個々で変わる未知を見る^{知る}ために犠牲にした物、君は何を犠牲にしてきた？」

和也「何を言ってる？」

？「君が知りたがっている事もいざれ知る事になる。そのためにも…」

？「死ぬ事になる。」

その言葉と共に体に重^{殺意}圧が降りかかる、目の前にいるのは人の皮を被つた何かだった。相手が抜いた刀が光そして鋭く見える眼光は赤くくすんでいいる。眺めていると相手の体に変化が起きる、黒の羽織を着ていたその容姿が変化し紫色の鎧が現れる。そしてこちらに向けられた刀、その姿はまさに武士の姿とも言える。

和也は落ち着いて自身の礼装を発動、謎の転移の事、そしてまるで自分を見透かしたような言い方、その色々知ってそうな顔に聞いてみたいが今はそんな雰囲気ではない。相手がその気なら自分はそれを殴り飛ばすだけだ。

銀色の光線が真つ直ぐに光り出す、芸術的な光景だろうがそれを向けられる自分にとってはたまつたものではなかつた。一つを避けてもさらにその軌跡が無数に増え襲い掛かる。それをガントレットで受け流しながら下がっていく。そうやって廊下を下がっていくといあるものが見えてしまった。

そこにはこの女将と子供が倒れていた、そして今下がって行つたこの廊下はさつき倒した怪物が通つたであろう廊下だった、血の池溜りを作り子供を守るように覆いかぶさっているその姿を見て女将がどのような行動を取つたのか用意に想像ができた。そしてそれと同時に申し訳ない気持ちになつてしまった。理由はどうであれ巻き込んでしまった。

？「甘な奴だ。」

そう何の圧も感じない優しい声とは裏腹に刀の突きが和也の左腕に突き刺さる。一瞬の油断、和也らしいとも言える油断であった。すぐさま下がり肩を抑えながら血を抑える。だが相手はそれを見逃してはくれなかった。その上がった姿勢の隙間を狙って脚に刀が振られる。

それを防ぐためにアルタイルを出しそれを防ぐ、左に付けているガントレットを盾スクトゥムを出す。そして次の攻撃に盾で防ぐすると相手はその盾をなぞるように盾を抜けるとそのまま顔に刀を持っていく。冷たい刃が命を刈り取るために迫ってくる。

何とか顔を反らしその刃を避ける。だが相手はそれを見越してすぐさま切り返してくる、それをアルタイルで弾きこちらも攻撃をするが相手はそれを受け流す。

和也（宮本や小次郎みたいな事しやがって！）

下手に重い攻撃はせず最小限の攻撃だけで済ませる。和也の容態が悪いのもあるがそれにしても強い、まるで一流の剣士の如き剣裁き、そして鎧の方も若干日本の物とは違う。大袖は無くさらに籠手の方も一枚一枚の装甲を重ねてサメ肌のようになっている。それに兜の方も西洋のようなフェイスだ、だが顔の方は空いている筈なのにその表情が見えない、まるでそこだけ暗闇で包まれているようでそのため相手の顔が見えずただ黄眼がこちらを覗かせている。

今の時代では考えられない完全鎧、日本風ではあるが日本にはない形状、さらに顔を晒している筈なのに見えない顔、気になる事が多すぎる。

和也「てめえはなにmond! 何で俺を狙う!？」

? 「……」

和也の攻撃だけ防がれ相手の攻撃だけが当たりダメージが蓄積されていく、そうこうしているうちに廊下の窓を突き破り外に出る。外は月日がある薄暗い世界が広がっていた。転がるように出て来た和也を追いかけて来た謎の人物はゆっくりと出てきた、和也が蹲っている間相手は月日を眺めていた。

? 「半月に近い形、と言う事は今日は20日ぐらいか。」

そう呑気な事を呟いていた、和也の方は全身が切り傷だらけだった。そしてその言葉を聞いて和也は気に入らず相手を睨みつける。だが相手の方はそれを気にせず刀を下げたまま目を眺めていた。

和也「余裕じゃねえかこの野郎、調子乗りやがって…」

？「こーやつて眺めるのも最後になるかも知れん。今のうちに納めておきたい。」

和也「余裕ぶっこきやがって、そのムカつく顔ぶん殴ってやる。」

？「嘘つき鴉に全能神からの使い、星座が好きなのか？」

和也「生憎様こんな事しかないもんでね。」

？「龍は使わんのか？それとも使えないのか？」

和也「…何処まで知ってやがる。」

？「私の目はある程度見通せる、お前の礼装も例外ではない。君の行動もある程度予想できる、だが精神が歳を取り過ぎている割には少し浮かれ過ぎだな。」

気味の悪いほど見透かされその言葉を聞き苦虫を噛み潰したような顔になる、不気味な鎧はそれを見て笑いある事を呟く。

？「柳の手回し意外とも使える物だな。」

和也「何？」

？「宿の手回し、人払い。権力を手に入れた人間は人を操る事もできる。傲慢な奴ではあつたな。」

和也「…なるほど、まんまと嵌められた訳だ：柳の野郎。と言う事はてめえを差し向けたのは柳の奴だな？」

？「いやどのみち殺す予定であつた、別に柳は関係ない。だがあまり騒がれるのは嫌いだ、せめてお前を殺すための場所づくりはしてもらうように頼みはしたがな。」

それを聞いて和也は周りを見渡す。こんな大騒ぎが起こつていると言うのに誰一人出てきてすらいない。和也は大きなため息をつきながら立ち上がり礼装を構える。

？「にしても随分古臭い物を使っている。この世界は古風な物が多いな。」

和也「そりゃ江戸時代だから古いに決まってるんだろ何言ってるんだ。」

もしかして時差ボケ起こしてるんじゃないのか？ならそのまま上でも見て頭でも冷やしてろよ。」

？「：やはり何も知らんのか。」

和也「一人で納得してんじゃねえよ。」

相手はこちらをただ眺め和也が睨み返すだけだった、和也は相手から受けた呪いの傷もある上に肩の刺し傷もある。下手に動けずただ相手からの攻撃を受けるだけだった。だが流石に和也も熱くなり過ぎたのか少し頭を冷やす。

和也「教えろ、これは何なんだ？何で俺がこんな転移を…」

？「：君の身に起きている転移は人為的な物だ。とは言え選ばれたつと言う訳でもない。これはその選定を決めるための物だ。」

和也「選定？選定^{カリバン}の剣か？」

重い当たる節と言えばそれぐらいしかない。アーサー王が抜いたとされる選定の剣、後の約束^{エクス}された勝利^リの剣、だが奴は首を横に振り否定した。

？「そんな古臭い物に選ばれるための物ではない。とは言え少し惜しい事ではある。」

和也「んじや何だ神様か？」

？「否、だがある意味でそれに近いかもしれんな。」

和也「どういう事だ？」

？「それは君の目で見た方がいいだろうな。そもそも私では説明できない。」

そして相手は刀をこちらに向ける、和也の方も構え直しお互いに距離を空け睨みあう状態が続いた。だが状況は圧倒的に和也が不利だった。例え待っていても誰も来ない、それだけじゃなく逆に待っていたら柳の手が回って来る可能性がある。

なら目の前にいる奴を倒す必要があるのだがそれが一番難しい可能性がある、一般の相手なら幾らでも逃げ出せる。だが目の前にいる奴だけは違う、妖刀を使う紫色の不思議な鎧を着た男、こいつだけは俺と同じ感じがする。俺と同じだからこそ俺を逃がしてはくれない。

傷だらけの体を起こす、ここまで不味い状況になったのは久しぶり

だ。いやむしろよくこんな状況に陥らなかったものだ。今までは誰かがいた、藤丸や士郎そしてサーヴァントたちがいた。今までの脅威は味方がいてくれたから何とか耐えたが今は一人だ。しかも恐らく腕からして格上が相手、それを俺だけで相手しなければならぬ。

和也（今になって士郎たちがどんな気持ちだったのかわかるな……最悪使うかもしれない。）

ガントレットの調子を確かめ相手を睨みつける。これが相手に効くのかどうかかわからないがそれでも今はこれぐらいしか手が無い。だがこれを使うには狭すぎる、その他にも奥の手はあるがどれも市街地で使うには少し問題がある。

そのため使う手は結果的に絞られるのだ。

和也「……！」

ガントレットからの何かが射出される。相手はそれを易々と切り落とす、するとその落とされた物から光が出た。それに周りが白一色に染まり視界が隠される、そして鎧の男の視界が開けた頃には和也はいなかった。

？「……こつちか。」

地面には血痕が残っておりそれが続いている、どうやら逃げたようだ。性格に似合わず意外と逃げる時には逃げるようだ。その場を駆け出しジャンプする、影で出来た暗い世界から一変し月明かりで広がっている世界があった。冷たい風に当てられ空から下の様子を確認していると和也を発見した。身体強化を行いながら移動しているようだ。

？（あれだけ切つてまだ動けるか……）

屋根の上で自分の刀を見る、赤い血が付いている。そしてさっきの場所にも血痕が残っている、かなりの重傷な筈なのによく動くものだ。とは言え時間の問題だ、相手の手はわか^見か^えつ^たている、後は終わらせるだけだ。

追跡を開始する、屋根を伝いながら移動して行く、念のため視界に納めながら追っていく。和也の方はこちらに何かを射出しながら撃つてきている。移動先を予測射撃したものだ^がそんなの関係ない。

最小限の動きさえしていればまず当たる事がない。そしてそのまま追いつき相手に向けて刀を振り下ろす。だがその前にガントレットがこちらを向きそこから雷が出る。それを見た鎧の男はそれを気にせず刀を振り下ろした、襲い掛かる稲妻の嵐を刀を振りながら防ぐ、刀の鉄の部分を利用して自分に当たらないようにしているのだ。

だが和也の方はそれを気にせず左のガントレットを地面に向けると礼装から光が発し地面が爆発した。一瞬視界が防がれるがそれを振り払い煙をはらう。そして和也の方はアルタイルを展開していた、さっきの槍の根本部分に横方向に緑色の光の線がある。和也はそれに手をかけ自分の方向に引っ張るとそれが三日月のようにその月から弦が出て来た。

和也「アルタイル！」

そう引き絞られたその弦が離れ弓から光の矢が放たれる。それが真っ直ぐ進んで行き鎧の男に迫る。男はそれを切り落とす。和也はそれを気にせず弓を乱射する。ここはさっきの場所から離れた位置にある森だ、和也は移動しながらなるべく自分の礼装が使用できる場所に誘いこんだ。ここなら多少は使用できる。

和也が使用しているアルタイルは槍と弓に変形する礼装、どちらも貫通力が強く槍が一番強い威力があるが弓は連射ができる上にこっちの方が速度が速い、これで高速で動き回る鳥を落とした事がある。それにための事もでき多少の融通が利く。

？（少し流しづらいが…）

それでも刀を巧みに使い接近して行くが和也は拡散に変更し手数を増やす。そして間にために入れた矢を放つ。鎧の男はそれをかき分けながら接近していき和也の方に振り下ろす。それを槍で受け止め対処するが接近戦は圧倒的に不利だ。

槍で防ぎながら致命傷は避けて行くがそれでも完璧には防げない、どんどん追い込まれていき近くにあった木に背中が当たる。

和也（やばい!!）

振られた刀から逃れるためその場に屈むと木に斜めの線が入る。まるでフィクションのような切られ方をした木が落ちていきそこに

縦の兜割りがくる、それを横にあつた木に槍を突き刺してその木を相手に向けてぶつけようとする。

和也「お”ら”あ!!”!”

叫びとともにその横から迫る大木、だが相手はその木を飛び越えそのまま和也の方に攻撃をしかけようと刀を向ける、だが和也の方はアルタイルの弓をこっちに向けていた。そしてまた矢が放たれる、だが相手はそれを避けた、至近距離でサーヴァントでも中距離では避けづらいこのアルタイルをだ。

そして和也の胸に刀が刺さった。

和也「っ!」

さらに奥に突き刺していく、深く刺されていくその刀を和也は苦しそうな表情で見ている。そしてその目をこちらに向けた、その刀を強く握りその奥に刺していく刀を止めた。

? 「惜しかったな。」

和也「まったくアルタイルの矢を弾きやがって、お前人間じゃねえのかよ。」

? 「いや君と同じ人さ。」

和也「…なあ死ぬ前に教えてくれないか?これが何なのか?」

? 「…まあヒントをやろう。」

これは君の世界が原因で起こった現象だ、ある者がある目的で行った計画に君が選ばれた。とは言えここで終わるかもしれないがな。」

和也「死ぬのに教えてくれないのか…」

? 「それは君が弱い事が招いた結果だ。君が私よりも強ければ私から聞き出せたのにな。」

和也「…へー、そうなのか。」

? 「死ぬ前なのに随分とリラックスしているな。」

和也「そりゃ良い事が聞けたからな。」

? 「……?」

それに構わず深く刺していくのだがそこで鎧の男は何か疑問に思った事があつた。人体に刀を刺しているのにさつきから血が出ていない。その変わりに小さな光の粒子が出ている。

？「これは？」

和也「お前の目はどつちかと言うと先読みに近い目だ。お前は俺が見せた槍のアルタイルには完璧に対処していたが弓の方は少し対処が遅かった。あの雷や拡散の方も俺の礼装を理解している割には少し手が雑だった。どつちも普通に化け物みたいな対処されてたがな。」

？「…何が言いたい？」

和也「これを見てなかった時点でお前は負けだと言ってんだよ。」

その言葉と共に和也はその刀を深く突き刺していき背中を貫通した。そして相手の腕を掴みもう片方の腕でアルタイルを展開した。

？「これだけでは私は殺せんぞ。」

和也「誰も一人でやるとは言っていないぞ？」

その言葉を聞き鋭くなった六感が感じたのは後ろだ。後ろの上空を見るとそこには、もう一人の和也が全身に紫火の翼を生やして上空を飛んでいた。

和也「これが俺の礼装真体偽体。」

？「分身体だったのか。」

和也「今更気づいてもおせえよ！」

そう上空にいる和也が紫の炎を礼装に纏わせてこちらを睨んでいる、そして今男がさしている分身体の和也の方もアルタイルが緑雷が男の方を向いていた。

和也「喰らえ!!アルタイル・ザ・コーヴァス!!」

その言葉と同時に男に向かって二つの技が降り注ぐ、雷の轟音と炎の眩しい明かりがその場に発生する。雷と炎は拡散し周りを焦がしながら広がっていった。和也の分身体と本体は鎧の男にそれが当たろうとしているのをしっかりと見ていた、その場に発生しているのはエネルギーの余波がぶつかり合ってきたものだ。そしてその二つは確実に相手の命を奪うものだった。その二つに相手が取った行動は刀を抜く事だった、今更逃げようとしても間に合わない、だが相手はゆつくりと構え軽く微笑んでいた。まるでこの状況を楽しむよう

に…

そしてその二つの間に一筋の白い筋が入った、そしてそれが鎧の男から複数発生した。そしてそれが二つを切り裂いた。雷と炎

和也「……………は？」

その斬撃波に分身体は切り裂かれ消滅し和也の方はその斬撃を受けながら吹っ飛ばされていった。体の至る所から血飛沫を上げて地面に転がる。受け身を取ろうとした時に何故か左で着地ができなかった、いや何故か地面に向かって腕を振り下ろしたのに何故か空を切ったのだ。そのまま受け身を取れず転がって行き勢いが収まって止まる。

和也「ゴフツ!!」

口から赤い物が出て視界がくらむ、そして立ち上がりとした時手を地面に付けようとした時左手が見えなかった。その疑問に思い左腕の方を見るとそこには左腕が綺麗に切断されていた。

和也「ぐうう!!」

それに気づいた途端左腕から激痛が発生する。急いで左腕を手で抑えるが今更遅い、そんな事してもなくなつた腕は戻らない。

？「惜しかったな、思わず本気を出してしまった。」

そう前から声がかけられる。その方に顔を向けるとさっきの鎧の男がいた。

？「私に技を使わせたのは君が初めてだ、やはり旅はするものだな。」

そうまるでこちらを褒めるように顎に手を当てながらこちらを見下ろしている。和也の方は反撃はしたいが思ったように体が動かない。それに腕が礼装ごと切り裂かれているので反撃しようにもできない。止血左腕の止血を止めているだけで精一杯だ。

？「そう落ち込むな、君はよくやった。何も恥じる事はない。」

和也「負ければ…それまでだろうが。」

悪意のない声を怒りの言葉で返す、だが結局負ければすべて終わりだ。生き物が命を内包している殻を壊されればそれは死だ。殻が無ければ人は生きていく事はできない。

和也（や、やばい、目が…霞んできた。）

殻が死に絶えていくことで覚める事のない眠りに誘われてしまう。そこで目を閉じればただ冷たい体が残る。それをさせまいと必死に意識を保つ、そしてもう目の前にはあいつはいなかった。

和也（いやだ…だってまだ俺は…）

ようやくと自分にもできた優しい人、可愛くてそれでしつかりしている愛しい人、自分はその人の帰りを待っている。なら自分は待たなければいけない。彼女を迎えなければいけない、まだ自分は彼女と何もしていない。なにに体は眠りを求めて行く。

ここで死ぬのか？こんな所で？待っている奴がいるのに？死ぬ恐怖と同時に沖田の顔を思い出す。

立てない、喋れない、ただ下を見る事しかできない。血が床を染めて行く、感覚がなくなっていく。

ただその場に座る事しかできなかった。

——慶応3年 12月21日——

新選組 一番隊副隊長 荒川将吾が滞在していた神間屋で謎の爆発が発生した。付近の住民は市場で新政府からの道具や料理、そして新しい食品等の流入があった。『柳商店の披露会』に行っていたためこの騒動の事は知らなかったもよう。

死傷者32人、負傷者は無し。宿の二階中央廊下付近から爆発痕が広がっており八部屋が焼け焦げて消滅していたが幸いにも二階は荒川を含め小数しかおらずその焼け焦げた部屋には誰もいなかった。しかし死体の方は焼け焦げた跡はなくまるで獣の爪痕のような傷痕があったと言われている。日本刀による惨殺なども考えられたがとも日本刀でつけられる深い傷ではなかったため大坂町奉行の警察課はこれは爆発は人が起こした物ではあるが死体の方は人が殺した物ではないという発言した。

——慶応3年 12月24日——

大阪付近の山で冬眠に失敗した熊が発見された、ある藩がクマを密輸しようとした時捕獲用の檻の強度が足らず脱走し、藩士三人を殺害して12月19日に脱走した。この熊は神間屋付近にもいたようにその屋の中に入っており死体を食べたという事も判明した。大坂町奉行の警察課はこの事件を『神間屋事件』と呼びこの熊を捕獲し元の生息地に返した。だが荒川 将吾の遺体だけは何処にもない上に爆発の原因が判明していないためこの事件の搜索は続いた。この事件には新選組の沖田総司も介入していたようであり一番隊から小数のみで

隠れながら搜索をしていた。

——慶応3年 12月28日——

高安山で登山をしていた男性が謎の焼け焦げた爆心地を発見した、中心から700〜800m程広がっていた。木々にはまるで雷に打たれたような痕それによつて着火して燃えた痕のようになっていた。しかしここ最近雷が落ちるような気候は来ておらずさらに雷が落ちただけでここまで広範囲に広がっているのはおかしい、人々はこの事件の事を不気味がつていた、現代でもその爆心地の観光スポットが存在しており木々は多少生えたもののその焼け焦げた跡が地面に残り木も残っている。

そしてここから数m程離れた場所に荒川 将吾の死体を発見した、死体には無数の刀傷があり左腕が切断されていた。死後7日程たつており新選組の沖田総司が『神間屋事件』の爆発痕と高安山の爆心地を起こしたのが人物が荒川を殺害するために使用したのではないかと推測し独自で搜索を開始、大坂町奉行の警察課は荒川が起こしたもではないかと判断したが、本人は刀傷による後遺症で休養していたため事件は起こせないと判断し直し搜索を始めた。だがこの搜索は1カ月程行われたがめぼしい証拠は見つからず迷宮入りし現代でも考古学者たちがこの事件にあらゆる推測を飛ばしている。

荒川 将吾 21歳

生年月日 不明

死亡日 1867年12月21日

埋葬地 東京都 東京 浄土宗 一向山 専称寺

新選組一番隊副隊長を務めていた男性、出身は不明、親および親戚関係も不明であった。しかし独自の流派を持つておりしかも医学にも精通していた、沖田総司が患っていた肺結核を治したのが彼であり同じ病状を患っていた病人も彼に治療を受け完治させていた。彼が止まっていた宿にそれ医療に関する本がありその時から肺結核の治療が広まり死の病気ではなくなった。沖田総司とはその時から仲良くなり一番隊の隊士の日記にはよく縁側で一緒にお茶を飲んでいたと言うような事が記載されていた。

新選組での評判は好評のようで隊士からも信頼されていた、永倉の日記にも彼との関係が書かれていたようでよく二人で居酒屋に行っていたようだ。性格は自由気ままな人であり短気な人間でありそのせいかよく揉め事を起こしていたようだ。だが京都の人々の評判も悪くなく本人も迷子を見つけては親を見つけて届けたり悩み事や頼み事などがあつた時によく頼られたようで京都では万事屋のような立ち位置だった事が多かった。しかしその時の上士たちからはよく思われていなかったようで彼自身も上士たちが気に入らなかったようだ、このことから彼は志士側の人間だったのではないか？と言う一説も存在している。

彼を殺害した人物は不明で彼との関係を持つている人物が限られておりさらに出身やその他の詳しい部分がわからないため彼を殺害した人物に関してはまだわかっていない。怪我も左腕、上腕部分を骨ごと切断されていた。しかも切断痕が刀による物であつたが人の腕を切断できる力など人間技ではないため誰に殺されたのかわからなかった。

事件の裏側

——22日——

柳「終わらせてくれたか…」

自分の部屋で言葉を漏らす柳、彼の部下からの報告を聞いていた。その内容は荒川の死だ。

柳「にしても不思議な奴だな。報酬はいらないからただ戦える場を用意してくれか…しかもあいつを殺した後消息はわからなくなるとはな…一応かなり厚い網は貼っていた筈なんだが一つも引つ掛からないとは。」

柳の陽動のおかげで住民はほとんど市場に行った、あの宿の近くにある家はほとんど店の上に大抵新店舗や新しく住み始めた住民だったため簡単に引つ掛かった。こちらの方も収集は上出来だった。大阪の方にも手を広げてよさそうだ。

柳「にしても一番厄介な奴が死んだ筈なのに何か呆気ないな。」

障害があると何故だか不安であったがこう言葉で知らされていると何だか呆気なく感じるのだろうか、とは言えやる事が多いしそれに終わった事なのでもうどうでもいいが…

男「…あの一つ聞いていいですか？」

柳「なんだ？」

男「何故荒川を殺したのですか？」

疑問に思った言葉を柳に向けた、柳の方はそれを聞き男の方を見た、顎をかき少し迷っていたが視線は前に戻し声だけを返す事にした。

「まあ厄介な奴だったからだ。」

「でも荒川と会ったのは数回なんですよね？何がどう厄介だったんですか？」

「まああまり詳しい事は聞くな。ただそうだな…きっかけはあの交渉の時だな。それ以上は聞くな。」

男の方はまだ納得するまではいかなかったがそう言われた以上引き下がるしかなかった。そして柳の方はそのきっかけの方を思い出

していた。

柳『まさか君が訪ねてくる何てな、何かあったのか?』

荒川『…頼みたい事があつてきました。』

最初はただの馬鹿だと思つた、新選組の問題児から来ただけのアホ、そう思つていた。頼みたい事もあると聞いて正直自分は受ける気はしなかつた。何故なら新選組である以上気が合う訳ないのに取引する気にもなれないしそもそも得になるような話何て持つてこれる訳がない。そう思つていた。

荒川『実は、用意してもらいたい物があるのです。』

柳『用意して欲しい物か…それは何だ?』

荒川『こちらです。』

そう渡された紙に目を通す、すると驚いた事にすべて新しく外国から入った物を中心としたものだった。しかもかなり細かく書かれていた。柳は別にこの紙に驚いた訳ではない、この紙に書かれている物の個数や細かく書いている事に注目していた事だった。

人は欲しい物を買う時はほとんどそこまで考えず買う事が多い、料理をする時の材料や食器などがそうだ。そこまではいらぬのに個数を多く買い最後に残る事が多い、柳はその無駄な事が嫌いだ。使わないのならそこまで買わず使うのならきっちり計算をして購入する。ただし先の事を考えて倉庫に使いそうな物、商談に使いそうな物を入れて置く。そしてそれはすべて予想した通り使われていく。

そしてこれは自分と同じと言うより荒川の書き方が専門職を扱う人が材料を頼む時の書類と酷似していたのだ。それにしっかりとわかりやすく書かれている、よく部下の資料作りの下手さに指摘する事が多い、知識を学びわかりやすい資料を作るのは当たり前だ。そしてこの紙はまさしく学を学んだ人間が書いた物だ。

柳『…どうして用意して欲しいんだ?』

荒川『そりゃ使うからですけど…』

柳『詳細を教えてくださいませんか?自分が取引した人間が悪事を働いた何て広まったらたまった物ではないからな。それに君はそんな事を言える立場でもない筈だが?』

荒川『：わかりました。理由はその……ある人を助けたいんです。』
柳『ほう、その人物とは？』

荒川『沖田総司。』

柳はその言葉を聞き不思議に思った、確かに沖田は病気を患っている。だがだからと言って荒川が助ける理由が見当たらない。と言うよりかあんな先のない奴を助けて意味などあるのだろうか？

柳『君は確か新選組に入って間もない筈だがどうして彼を助けたいのだ？』

荒川『：俺は色んな奴を見て来ましたが、数えられない程の友人を見送っていきそしてそれを眺めていた自分がいました。俺はそんな何もしない自分が嫌なんです。だから……』

柳『助けたいと？だが彼が患っているのは病気だ、それに不治の病と聞く。君ができる事なんてないと思うが？』

荒川『それなら大丈夫です。俺ならあいつを治せます。』

柳『なに？』

柳は思わず素が出るがそれに構わず荒川は治療方を述べた、中身は現代の治し方とただ説明しただけだが柳にはその言っている事がよくわからなかった。微生物や菌の説明など外国の情報でも聞いた事がない事やさらに使用する薬も今使われている物とは全然違う。ここで柳は彼の事を怖がった、自分よりも知恵は無い人間だが知識だけは自分よりも格上だと悟ったからだ。柳はそれを黙って聞いた、だが……

柳『今の所私の得になる話が無いが君は何を用意してくれるんだ？』

今までの話はただの世間話のような物だ、ただ相手と話しているだけの茶番。今の所柳の得になる話の一つも無い。だが柳はそれを聞いて特に驚いていない荒川を見て何かを用意していると言う事だけは理解した。そして荒川が提示した物が規格外の物だった。

荒川『俺はあんたに……魔術を教える。』

柳『……は？』

柳もその事については聞いた事はあった。外国に伝わるおまじな

いあるいは逸話の中だけで存在すただの幻のような存在。柳はそれを聞いて大きなため息をついた、だが荒川が見せた魔術陣を見て驚愕した。

荒川『これが魔術だ、人が作り出した神秘の結晶。それをあんたに教える、とは言つても俺が教えられるのは基礎ぐらいなものだがな。』
柳は自分の目の前で見せられている物を見て固まっていた。おとぎ話で聞く妖術のような物を実際に見せられ自分の視野の狭さに驚かされた。日の国の知識はすべて自分の所にあると思っていた、なかつたとしてもそれに類似する物を知っていてそこまでの驚きはなかつた。

だが今日の前にある物はまったく未知の物だ、今まで知らない常識、自分が持っていた哲学や常識が崩れて行く。だが不思議と心と頭は落ち着き荒川から与えられた本を受け取り目を通していく。そしてそれから始まった、荒川から魔術を教わっていき2日で基礎を身に着けた、そして柳が特に目を引いたのが礼装作成だった。その頃から自分で研究し開発していった。自分の友人そして部下に魔術の基礎を教え使える人間を増やした、覚えれそうな人間はだいたいわかるので特に問題なく進んだ。荒川はまだその時自分はすべて学べなかつたと思つていただろうがもうその時にはすべて学習を終えていた。

魔術を教わつたおかげで何もかも変わった、例え夜中に襲撃が来ようとも不可視の罫が発動し殺される心配がなくなりさらに道具関係に置いては革新的と言つていい程向上し貿易関係はほとんど自分の話が来るようになった。

柳はすぐさま荒川を自分の所に取り入れようとして彼の有利の条件をある程度飲む事にした。最初はまず誘いの話はせず深く観察した上で行う事にした。魔術の方もまだ基礎ができていない振りをして彼との関係を続けた。そしてその誘いの話をあの秘密の会合の時に行った。

荒川『わるいけどその話は乗れねえな、俺はあいつを助けるためにあんたと取引しただけだ。』

柳はその言葉を聞き落胆と同時に彼の扱いに困ってしまった。沖

田の方でゆすりをかけた場合激怒させる可能性もあったので触れなかった、そのためただ単に彼の有利になる条件を飲むと言ったのに彼は断ってしまった。この時点で彼は新選組側の人間になってしまった。柳は彼が人との繋がりを大事にする人間と言う事はわかっていたが魔術の驚きのせいでもそこまで頭が回らなかったのだ、そのせいで柳は荒川の扱いに困ってしまった。新選組は恐らく自分の敵になる組織と言う事を予想していたのでその敵対した時までに荒川が残っていたら不味い事になる。自分はまだ魔術を知って日が浅いので荒川一人に完封される可能性があるのだ。

そのため今まで敵対か中立か迷っていた。荒川が殺されかけると言う話を聞くまでは……

柳『君に頼みたい事があつてな？』

？『……』

柳『君が殺しかけた荒川と言う人物を始末して欲しい、だがこの京都でやるな、やるとしたら京都外でやって欲しい。』

柳は特に師弟関係と言うのは関係ない、邪魔と思つた人間は排除し自分と同じ人間には協力する。特にやる事に罪悪感など感じない、むしろそれを取り除いた時には逆に安堵を感じるのが柳と言う男だ。

本当は今すぐにも荒川を排除したかったがまだこの時点で証拠隠滅ができる程地位が固まつていない、さらに新選組、特に今の沖田総司を刺激したら何をされるかわかつたものではない。さらに相手の実力が未知数なため下手に敵対する訳にはいかなかった、そのため京都にいる間は彼を放置する必要があつたと言うより手が出せなかつた。だがその荒川を殺し損ねたと言う人物を聞いて柳はチャンスだと思つた。これで最大の障害を消す事が出来る。

？『随分と上から目線だな。』

柳『すまない何分こういう性格なので、それに君が簡単にここに来てくれたのにも引つ掛かる。もしかして最初っからここに来る気ではなかつたのか？』

？『……流石に単純であつたか、それじゃ君に頼みたい事があるのだ。その荒川と言う男を殺すための場を用意して欲しい。私の要求は

それだけだ。』

柳『：それだけ？もつと他には？』

？『無い、私はただ殺してくれる場を用意してくれるだけでいい。元々私が殺し損ねた獲物だからな。』

柳『荒川に何か個人的な恨みでも？』

？『いやない、ただ殺し損ねたと言うのが気に入らないだけだ。』

ただの狂人か、柳の心にはその一言が浮かんた。自分に恨みを植え付けた人間と言うものでもなければ好敵手と言う訳でもない、ただ殺し損ねたから殺すと言う殺し屋を生業としている人間が言いそうなことだった。だがただの狂人ではないのは確かだ、あの荒川を殺し損ねたと言う時点で普通ではなかった。

？『どうしたのかな？』

柳『いや何も、荒川も厄介な奴に目を付けられたと思ってな。』

？『人を殺すと言う時点で厄介も何もなからう。それで答えは？』

柳『まあこちらとしては助かるがせめて金は受け取ってくれ、ただでやるのは後が怖い。』

？『商人としての性か？』

柳『まあそんな所だ。』

そうして取引はあっさりと終わった、後は裏で荒川の宿を用意してやり陽動もしかけておく。荒川のおかげで多くなつた科学や物資を見せつければあの大阪の住人の事だ、あっさり引っ掛かると思っていた。そして隠蔽工作だがこれは特にする事がなかった。と言うよりもしてもほぼ意味がないと悟っていた。

そして柳の予想通りに事が進んで行った。予想よりも宿の被害が大きかったのが驚きだったがその隠蔽工作は途中で熊を密輸しようとしていた所を離してやってすぐに片付いた。自分の所には何一つ怪しい噂は来ずに無事に荒川を殺す事ができた。

柳「さて後は邪魔な奴らを片付けるだけか…」

新政府の方も大分整ってきた、新選組の方は何故か荒川の騒動で少し崩れている。特に一番隊、沖田の方が独断で動く事が多くなつた。これなら排除は容易い、何故なら人は基本的に団体行動だ。そして中

で一人絵も乱した人物がいれば人は連鎖的に崩れて行く。そして一番の欠点がある、近藤勇が御陵衛士に撃たれたのだ、もうこの時点で新選組は崩れたと言っただろう。

柳「とは言え忙しくはなるだろうがな。」

そう呟きながら空を見る。今日は珍しく青空が広がっている。

岩洞

突然の奇襲

「綺麗だなく。」

そう手に持った日本刀を見ながらそう呟く、シグルドやアーサーが持つ剣とはまた違った雰囲気がある。刃に自身の顔を映るほどの美しき、少し背中に寒気がするが何故かその刃に見惚れる程の目が離せない。そしてその刀の持ち主だと思われる人物、千子村正が口を開く。

「まあ日の国の刀って言うのは剣の中でも至高の存在って言われてるからな。練度、精度、どれを取っても最高レベルみたいだったからな。まあこれが人殺しの武器何だかな。」

「でも綺麗だよ。」

「鍛え上げ続けた物だからな、綺麗なバラにもとげがあるって言うやつかね。」

「日本の武器となれば鉄砲もあるぞ！わしの鉄砲も悪くないぞ。」

そう信長は目の前に鉄砲を出す、火縄銃と言う物で日本が作ったわけではないが織田信長がこれを使用して戦に勝ったのは有名な話である。

「確か隊を作って撃った人が後ろに下がって弾込めてる間に他の人が撃つんだっけ？」

「そうじゃ、昔の鉄砲は今のよう便利じゃなかったからのう。装弾数も一発だけだし、込めるのもただ弾詰めるだけじゃなかったけんの。」

火縄銃は今の銃とは違いますが弾を弾き出すための火薬を詰めた後に弾を入れる、その後はその火薬に火をつけて発射される。そのため一度でも水に濡れると火薬が濡れて撃つことが出来なくなる。そのため雨が降る時期は使う事が限られてしまう。

だが武器としては最高だった、それは今が証明している。前までは

環境に振り回されていたのに今ではそれを克服して現代での主力武器になっている。遠距離からの制圧射撃、一方的な攻撃が可能。前までは両手でしか持つ事ができなかったのに今では片手で持つ事ができる程スリムになった。

にも関わらず刀は形を変えずそのままだった、その理由は使われなくなつたと言うのもあるが法律により日本刀の武器として扱う事が禁じられたからである。武器として扱われた刀にとっては終わりを告げられているようなものだった。日本刀はそれ以降進化はしなくなりただの美品として扱われた。

「まあ平和による抑止とも言える。使わなくなったものは忘れ去られるだけだからなあ。」

「刀は才もいる上にでかいからのお、鉄砲の方は逆に便利になり過ぎて手放せなくなつた感じがする。」

「まあ刀鍛冶として伝統が廃れるのは少し悲しいな。」

「こんなに綺麗なのに…」

「人殺しの武器だからな、平和で廃れるのは仕方ねえ。きっと昔の時代にもこうやって亡くなつた技術はあるだろうな。」

技術と言うのは進化する、だがすべてがその恩恵を受けられる訳ではない。時代に求められずそして忘れられた物もある。それも仕方がないとも言える。藤丸は手に持っている刀を見る、確かに人殺しの武器ではあるが何故だか悲しい気がする、それが藤丸の中に残っていた。そんな事を考えていると手に持っていた刀が消えた。村正が刀を消したようだ。

「そろそろ昼だ。飯にしようぜ。」

「…そうだね。」

「今日は何を食おうかのう。」

サーヴァントの部屋もあるが他にも食堂がある。厨房は料理が得意なサーヴァントが担当している、中にはプロの人もいるので美味しい物しかない、それが和食洋食すべて対応してくれるので職員や藤丸たちにとつてもかなり助かっている。サーヴァントたちも食事をとつている時もある。

そして藤丸はと言うと食事を終え中をぶらぶらしていた、廊下を歩いたり他のサーヴァントと話をしてみたりと色々な事をしている。今は廊下を歩いている所だった。

「おおー！いたいた。」

そう声を掛けられた方に振り向くとそこには見知らぬ何かがあった、青い鎧のような物を着ている人のような何か、腰には刀のような物がありこちらに向かつて笑みを浮かべながら手を振っている。とは言つても顔は見えずただ瞳がそう言っていると言う感じだが。

「ここって意外と広いんだな。同じような景色が続いているばかりで何処にいんのかわかんなくてよ。」

そう頭をかきながら近づいて来る、思わず引いてしまい一歩下が。何故そんな事をしたのかよくわからない。ただ何となくだが彼には近づかない方がいいと悟った。だが相手の方が早くもう目の前まできている。

「まあいいや、お前がここのマスターだっけか？」

そう藤丸を品定めするように見つめる。藤丸はその場から動けなかった、蛇に睨まれた蛙、頭は逃げろと警告しているのに体が動かない。それどころか何故か口が動いている、相手の質問に答えている。

「佐藤和也は知ってるか？」

俺はそれに頷く。

「今何処にいる？」

俺はそれを知らないと答える。

「居場所に心当たりは？」

俺はそれを横に振り答える。

「…そっか、あいつはいないのか。いるとしたらここだと思ったんだがな。」

そう落胆からくるため息、何故自分がこの事を喋ったのかわからな

い。この人が何故和也さんを探しているのかもわからない。謎が深まるごとに背中に走る悪寒が強くなる。

「まあいいや、そんなじゃ…」

お前で少し遊ぼうかな？」

刹那、相手が刀を抜きこちらに向けて振り下ろした、あまりにも一瞬な事でも反応ができない。ただ綺麗に光る刃を見るだけで藤丸はただその場で立ち尽くし村正が言っていた人殺しの刀と言うのが思い浮かぶ。そして目があった、相手は笑っていた。そしてその瞳には自分が映っていた。そしてその間に盾が出現する。そしてすぐさま誰かが藤丸を抱えその場から離される。

「頼光さん!？」

「大丈夫ですかマスター？」

「う、うん。何とか。」

「ほおーちゃんと来たか。」

そう関心するような声が聞こえる、そしてマシユが反撃をするるとそれと同時に相手が後ろに下がる。

「あなたは何者ですか？」

「んーしがない侍って所？」

テキトーな言い訳、その場で考えたような言葉が出てくる。マシユは藤丸の前に立ち頼光は藤丸の方を大切に抱えている。

「私の息子に手を出すとは、死にたいのですか？」

「…母さんプレイとはまた新しいな、これがあの有名な源氏の人とはねえ。」

また落胆するような冷めた目が向けられる、軽蔑、落胆、そのような目が向けられている。だが頼光は藤丸を攻撃されたためか相手の方をずっと睨んでいる。睨み合いが始まる、相手が見下ろし頼光とマシユが藤丸を守るように立つ。

「まあいいや、そんなじゃやろうか。」

相手の斬撃が放たれる、間が空いているにも関わらず一気に詰められそして鞘に納められていた刀が既にマシユの前にあった。それを

ギリギリで感知して盾で防ぐが防御でできた隙にすぐさま切り込まれた。それを頼光が刀が防いだ。火花が散る、明かりが二人を照らす。がそれでも相手の顔を見る事はできなかつた。そして次はマシユたちが仕掛ける。盾を振り上げただけの身体能力に身を任せた攻撃、それを相手は刀を当て下に流す。慣性の法則にしたがつた盾が地面にめり込んだ。そして出来た隙を埋めるように頼光が仕掛ける。頼光の激しい攻撃をまるで水のように流している。

「重いけど、流せない訳じゃないな。」

相手の斬撃が頼光の頬をかすめる、それを受けて頼光は下がる。

「この速さ、居合ですね。」

「そ、俺の我流だけど。にしてもよかつた、変な奴かと思っただけどころんと退治屋としての腕はあるんだ、全盛期の生身と戦ってみたかつたけど。」

頼光が矢を放つ、相手はそれを居合で弾きながら接近する。マシユはその間に入り突撃を止めるがその瞬間居合の嵐がマシユに振り注ぐ、盾で防いだがすべてを防ぐ事はできなかつた。そして頼光が矢を放ち近接に持ち込む、だがそれも相手に捻じ伏せられる。すると相手が後ろに引いた。

「びつくりだな、俺の刀で傷もつかない何てな。英雄の盾も中々出来がいい。」

そう刀を触り刃が欠けてないか見ている。逆にこちらから言わせてもらえばあれ程の攻撃を行って刃も欠けないのが不思議だ。しかも一番の謎なのが…

「あなた、サーヴァントではありませんね？」

「え?」

「…見る目はあるようだな。」

「あなたがとうございませす、それで、あなたは何者のですか? 私たちの事を知っているようですが?」

「言つたろ? しがない侍さ。」

「少なくとも日の国にあなたのような人物は見かけた事ありません。そしてその鎧を見ると武士でもありませんね。」

「そういうあんたは随分ラフな格好してるね、カルデアって所はいつから風俗サービスとかしだしたの？」

少し怒りが混じった声が頼光に当てられる、頼光はその事を気にせず会話を続けるがどれもこちらを見下すような言葉ばかりだ。それと同時に蔑んだ冷たい視線も向けられている。落胆している、頼光はこのままでは勝てないと思い時間稼ぎを行う。

「私が思ったような人物ではなくて残念でしたか？」

「まあそんな感じ？別に男女とかどうでもいいんだけどもうちよつと変な方向に曲がって欲しかったよ。」

「私は母です、それ以外の何物でもありません。」

「頼光のじじいが見たらさぞ落胆するだろうな。」

「…じじい？」

いやこの言葉はここにいる頼光に向かって吐いた言葉ではない、何処か別の人物に言った言葉だ。すると相手が突然後ろに振り向き歩き始めた。

「何処に行くのですか？」

「まあちよつと広い所？こんな狭い場所じややりにくいし広い場所で応援来るまで待とうかなって…てな訳で早く来いよ。」

そう言い残すと相手は消える、結局何者なのかも告げずにただ好き勝手言われただけだがこちらとしてはありがたい。時間は限られているがそれでも少しでもあるのなら対策の使用はある。

「藤丸君！」

「ダ・ヴィンチちゃん！」

情報整理をしている所にダ・ヴィンチたちが駆けつけてきてくれた。流石にカルデアの中での事件なのでホームズやゴールドフには焦りの表情が浮かんでいる。どうやらこの三人にもあの謎の人物がいつここに現れたのかわからなかったようだ。

「大丈夫!？」

「マシユたちのおかげで何とか…」

「何なんだあいつ、一体どこから現れた!？」

「やっぱりみんなも知らない?！」

「謎の人物の存在に気づいたのはつい先ほど、恐らくミス・キリエライトが戦闘を行った時にようやくと反応したのだろう。計測によれば途方の無い魔力が発生していた、魔力量は聖杯に近い。」

「それだけじゃない、ここを通る際に何名かのサーヴァントが負傷していた。退去とまではいかないけど誰もが退去寸前の状態だった。今ナイチンゲールを中心に治療を行っている。」

負傷していたのはセイバーを中心とした三騎士だ、ラーマ、清少納言、ビリーザキッド、宝蔵院胤舜などのサーヴァントが襲われていた、まだ正確な人数は確認はできていないが…

侵入したのは恐らく30分前、その間にこの痛手を考えるとかなりの手練れだ。」

不意打ちとはいえずか三十分でこの人数を相手にしてすべて切り伏せている。しかも頼光たちとの戦闘を見ると目立った傷もしていなかった。つまりほぼ無傷で勝っている事になる。マシユと頼光が押された訳だ。

「それで？その謎の鎧武者は何処に？」

「ここより広い場所待つつて。」

「広い場所？まさか!？」

「ここから近いのは…レイシフトを行う部屋だね。」

「お？やっとな来たか。」

そう刀を手入れをしていた目を部屋に入ってきた藤丸たちに目を向ける。藤丸とサーヴァントはもちろんゴールドルフたちも後ろにいる。

「ほおこれは中々…」

「あれは…龍なのか？」

「これは、また変わった者が来たな。」

柳生但馬守宗矩、ジークフリート、ネロなど現段階で連れていけるサーヴァントを連れて来た。他のサーヴァントには周辺警戒および治療を行っているサーヴァントの護衛、だがほとんどのサーヴァントはここに来ている。とは言え近接戦闘を得意とする人間に限られている。火力が高すぎるとレイシフト装置に被害が出るかもしれないからだ。

「ふーん、中々いい編成じゃないか。少し戦っただけで中々…それにここがどういう場所なのかもわかってるようだ。」

立ち上がり藤丸たちの方を見る、刀に手を掛けこちらを見定める。ホームズたちが言うには相手の魔力は聖杯並み、しかもサーヴァントではない。一体どういう理由でここにいるのか、何故こちらと敵対しているのかわからないがこっちの敵と言う事には変わりはない。なら戦うしかない、だがここで行う訳にはいかない。ここに相手が誘い出したのは恐らく純粋な近接戦闘をしたいあるいは別の意図があるのかはわからないがこれ以上被害を出す訳にはいかない。

「さーて俺と切り合うか？そうなくてもここはただじゃ済まなさそうだが？」

そう、本来カルデアそのものが戦闘を行っている場所ではない。だから…

「ネロー！」

「わかっておる。見せてやろう。我が劇場を！」

手を掲げる、それに呼応するように周りに赤い花が散り始める。

「オリンピア・プラウデーレ！門を開け！独唱の幕を開けよ！

我が才を見よ！万雷の喝采を聞け！インペリウムの誉れをここに！

咲き誇る花のごとく……開け！黄金の劇場よ！！」

アエストゥス・ドムス・アウレア
招き蕩う黄金劇場

詠唱が終わる、世界が塗り替えられる。周りに広がるは黄金、幾つもある観戦席。まさしく黄金の劇場。固有結界とは似て非なる大魔術。自己の願望を達成させる絶対皇帝圏。彼女が設計し建築物「ドムス・アウレア」を、魔力によって再現したものだ。

「こりやまた…目が痛い場所です…」

「良いであろう！すごいであろう！余が作りだした劇場！ここにいる限り余のルールに従ってもらおうぞ！」

そう隕鉄の韃^{アエストゥス・エストゥス}「原初の火」を相手に向ける、相手の方も刀に手を掛ける。

瞬間、姿が消えた。そして刀を振り下ろそうとしている敵がいた。それを見切ったかのようにネロはその刀を受け止める。

「ん？止められた？」

そしてネロの両側から二人のセイバーが襲い掛かる。敵はすぐさまその二人の攻撃を止めるが流石にセイバーの三人を相手にしているためか押されている。だがそれも居合ですべて捻じ伏せられる。それを読んでいたのか敵に向かって矢が降り注ぐ。敵も刀で帰切り落とし一度状況を確認するため一度後方に下がる。

するとネロたちがいる中央以外にも観客席側にアーチャーのサーヴァントがいた。巴御前、ロビンフッドだ。

「奴め、この劇場の中であそこまで動けるとはな。本来ならまともに動けるわけないのだが。」

「何か調子悪いな。この変な場所のせいかな？」

この劇場にいる限りネロの指定した敵はこの劇場によって弱体化される。本来ならまともに動く事もできない筈なのだが相手は平然と動いている。だが影響は出ているようでさっきまでの戦闘よりかなり遅くなっている。だがそれでも強い。

「いいね、たまにはこういうのも、いいね！」

不思議な移動法による瞬間移動から繰り出される斬撃、40mは離れていたであろう距離が一瞬でなくなる。対するはセイバーたちはそれに対応する。ネロによる黄金の劇場により弱体化、そしてセイバーによる近接対応、アーチャーによる支援攻撃、相手はそれを刀で対応している。だがこれでもさっきの戦闘よりは対応できている。

本来ならもう少し人数を増やした方がいいのだろうがあまり強力なサーヴァントだと黄金の劇場ごとやりかねない、それだと下手をしたら本調子に戻った相手に切り伏せられる。さらにこの場所ではライダー等は不向きだ。

「はっは！」

「余裕ですね！」

セイバーたちの切り合いの横からランサーが攻め入る。長尾景虎が槍を振り上げる、槍と剣、そしてそれに対峙する刀が一本、本来なら押されて当然の筈なのにこれで互角、ならばは一瞬の隙で決まる。

「くうく背筋に寒気が！一太刀一つ一つ嫌な気配が感じられますね！中々の強者とお見受けします。我が名は長尾景虎！あなたの名を聞かせてはくれませんか!？」

「うえ!?あの上杉謙信なの!?!そりゃいいね、その槍捌きで俺に傷つけられたら教えてやるよ！」

「いいですとも！」

「ちよい待てい！余の事は無視か!？」

槍の連撃が居合によって流される、だがそこにセイバーたちの攻撃が入り相手が押され始める。相手は居合を中心に行っているため一度刀を鞘に納める必要がある。全開時なら何も問題はないだろうが黄金の劇場による弱体化のせいで行動が遅れるため攻撃が遅い。そこに最速のサーヴァントであるランサーが入り防御に徹すればギリギリだが防ぐ事ができる。

「体がトロ過ぎる、速さが売りなのに……」

「ははは！結構全力でやっているのにほぼ押され気味！少々自身無くしますね!!」

「…仕方ない、手を見せようかね。」

刀を静かに鞘に納め深く腰を下ろす、刀を後ろにやり体で隠す。これなら刀をいつ抜くのか見えないため相手にはわからない。今までとは違う気配、樂觀的な雰囲気から一変して殺意が増した。今までの軽い構えとは違う姿勢、長尾はこの距離からでも感じる殺意でこの距離からでも自分を殺せる技を持っているのを感じた、他のセイバーも迂闊に近づこうとしない。それ程の技なのだ。ただの直感に過ぎないが縮地に似た技を見ればなんら不思議ではなかった。

長尾はふと思った、さんざん武士とは戦ってきたが居合を中心とした侍と戦った事がなかった。一応居合を使う人間はいたがほとんどが主流に乗っ取ったカウンター技だった。今この場にいる侍のように縮地を利用した技を見るのは初めてだった。自分の槍と相手の居合、どちらが早いのかと言う単純な事を今この場でどうしても確かめたい。このスリルを、強い相手を切る、このワクワクが止まらない。「その居合、我が宝具にて薙ぎ払いましよう!!」

「俺の居合と真っ向勝負とは、ならそちらの術、見事捻じ伏せてみせよう。」

ぶつかり合う魔力、長尾の方は恐らく宝具を使用するつもりだ。完全武装の長尾景虎の八体に分身してからの突撃、相手の出す居合がどういうものなのかはわからないが弱体化している今しかない。他のサーヴァントにも宝具を解放させる準備をさせる。長尾の後にネロを覗いたセイバー二人の宝具をぶつける。

長尾が放生月毛を呼び出す、それに長尾がまたがり突貫していく。相手はそれをゆっくりと見つめる。宝具解放による詠唱が始まる。長尾の顔は喜びに満ちていた。

「我が敷くは不敗の戦陣!」

「駆けよ、放生月毛! 毘沙門天の加護ぞ在り! 毘天八相車懸りの陣!」

びてんはっそうくるまがかりのじん

侍の顔も同じだった。そして詠唱が終わり長尾が別れる。

一人目が突撃する、槍を振りかざし相手に向かって振り下ろす、それを侍は居合によって弾きそのまま長尾を切り裂いた。

二人目、三人目も同じように仕掛けたが居合の勢いを乗せずべて切り伏せた。

四人目がそれを読んでいたように切り裂かれた長尾の後ろから奇襲をかける、侍はそれを居合の勢いを殺さずそのまま防ぎそのまま切り込むが勢いが足りず速度が落ちたのか長尾に防がれてしまった。

五人目の長尾が侍の横から仕掛ける、槍の突き、それを侍は身を捻る事で回避する。そして長尾の二人の連撃を何とか受け流しながら四人目の腕を切り飛ばした、だがその腕を飛ばされた方も怯まず腰に下げてあった刀を抜き反撃する。その反撃は見事に鎧に当たり傷が出来る、無傷の方もまるで槍を棒のように振り回し隙を見せない。

そして六人目が後ろから仕掛ける、長刀による攻撃七人目は刀による斬撃だった。居合による速度は既に消えている、四人の攻撃を流すのが難しくなってきた。弱体化が無ければ直ぐにしまえて反撃出来るのだが今の状態では難しい。なら隙を作ればいい、後ろから長刀、前から刀を持った攻撃が来る。長刀の攻撃を避け自分の刀で前の攻撃を防ぐ、するとそれを待っていたかのように侍の首を狩ろうと横の斬撃が迫る。それを腕の籠手で何とか防いだ。だが鎧の強度が凄まじいのか切り込みすら入らず籠手に流されていく、その間に刀をしまわれた。それを見た四人は後ろに下がったが遅かった。相手が小さく息を吐いた瞬間、無数の斬撃が長尾に降り注ぐ。その場にいた二人はそのまま消失、残りの二人は負傷してしまふ。だがそのやられた方も反撃に移る、消失した腕や傷などを気にせず腰に下げてあった刀で切りつける。侍の方はそれを居合の勢いを殺さずその刀を弾きだしそのまま片方に刃を向ける。向けられた方の長尾は自身の刀から手を離しそれを腕に盾にして防ごうとするが、居合の刀の方が威力があつたのかそのまま両断された。だがそのおかげで居合の勢いは完全に消えた。

そして最後の八人目が現れた、馬の声がそれを知らせる。地を砕く歩音が響く、それが近づいて来る。居合の勢いは消え刀は下がっている、にも関わらず相手は二人しかも一人は無傷でもう一人は負傷しているが自分の手を少し見せ過ぎた。これでは対処される、流星は上杉謙信、越後の竜と言われるだけはある。だが楽しい、それ故におしい。こんな巡り合わせがあると言うのに弱った状態の自分の秘技を見せ

る事になるとは…

「居合 一刀両断…」

自身のもう一つ腰に差してある刀に手をかける、我が愛刀なら問題なくすべてを切り伏せよう。さあ来い、綺麗に二つに…

「何をしている?」

不意に後ろから声を掛けられ集中が乱れた、いや別に声をかけられただけで乱れはしないのだがその声の持ち主が問題だった。

「うえ!? 頭!?!」

殺意が増していた空気が一変する。謎の侍の他にももう一人現れた、紫の鎧、同じように腰に差してある日本刀が二本。姿を見て恐らく仲間だと思われる。藤丸たちは驚いていたが長尾はそれの他に驚く物が一つあった。さつきまで対峙していた長尾の分身がいつの間にか消えていた。傷の深さからしてまだ退去するまでは行っていない筈なのに消えている。一応分身とは共有しているため消えるまでの間の記憶を受け継ぐ。もちろん最後の分身の記憶もあった、だが何が起こったのかわからなかった。視界が無数に別れたと思っていたら既に死んでいた。つまりいつ殺されたのかはわかるがどう殺されたのかがまったくと言っていい程わからない。長尾の注意は既に紫の侍の方に向いていた。

「何処にいるのかと思えばこんな所で油を売っているとは、何をしている?」

「いやあ頭の言ってた奴がもしかしたらここにいるかなあ〜と思って…」

「その様子からするといなかったようだな。だから言ったであろう。ここには彼はいない、帰るぞ。」

「…へいへい。」

青い侍の方はそれに応じた、紫の方は藤丸たちから種を返し青い侍

はそれに続く。

「待て！」

それを長尾が止める、紫の侍はそれを聞き歩を止めた。

「あなたは…何者？」

「それは貴様が知る所ではない。興味もない。声をかけるな。」

「そういう訳にはいきません、こちらは敵襲をかけられた身、そちらの気分次第で決められては困る！」

「…仕方あるまい。」

そう言う侍の方はこちらの方に振り返った、ゆつくりと腰に下げた刀を抜いた。その瞬間その場にいたサーヴァント全員がその姿を注視した。細く研がれた目から放たれる殺気、刀から放たれる尋常ではない妖気、まさしく妖刀、まさしく人切りの姿であった。

それをすべて受けた全員は構えた、霊力最大、脳をフル回転させ今持てるすべての術を探りだす。藤丸もそれを感じ自身の腕に宿る令呪を構える。

訪れた沈黙、ただ五感が感じ取る殺意だけが満たされる。

刀がゆつくりと上がる、綺麗な銀色の刀身、それを浸食する紫の血管が不気味さを際立たせる。黄金の劇場には似合わない異質。

その刀が一瞬、ぶれた。

視界が無数に割れる、体が細切れになる。無数に別れた視界にそれぞれに仲間の惨劇が映し出された。

そして現実引き戻される、今見たのは未来に起こる惨劇。何故それが見えたのかはわからない、だがそれが後数秒先で現実となる。

その惨劇を見たのはマシユと藤丸だった、藤丸はただそれを待つ事しかできないがマシユの方は藤丸の方に駆けだした。そして侍と藤丸の間に立ち盾を構える、宝具は展開できない。

そして変化が起こる、紫の侍を中心に無数の斬撃が発生する、それが広がっていきサーヴァントたち、そして黄金の劇場を切り裂いた。

崩れ落ちる劇場、その瓦礫が粒子となり消え元の景色、レイシフトするための場所が現れる。幸いにも斬撃は敵の後方では起こっていない、そのため装置は壊れてはいなかった。だが藤丸たちがいた入口

付近は広範囲に粉碎されていた。そのため斬撃をまともに受けてしまったサーヴァントたちは粉碎された瓦礫と一緒に倒れていた。腕や脚が切り飛ばされたサーヴァントたち、観客席側にいたアーチャーたちも同じような状態になっているのがその威力を物語っている。そしてその元凶たる侍の方は静かに刀を収めていた。

「…ん？」

だが侍の方はその現場で異変に気付いた、本来ならすべてを切り飛ばした筈、そのため一人も立っている筈がない。なのに一際目立つ盾がその場にあつた。

「加減したとはいえ、頭の斬撃に耐えた？」

「皆！」

敵の方は攻撃を受け止められた事に驚き藤丸の方は仲間であるサーヴァントたちの事を気にかける、マシユの方は藤丸の近くにいなから敵の方を向き警戒していた。

「…ほお。」

「え!？」

そう藤丸の方から紫の侍の声が聞こえた、マシユはしっかりと敵の事を警戒していた。二人の敵を認識し距離も測りいつ来てもいいように構えていた。そのためにも藤丸の近くにいた筈なのにいつの間にか後ろに回られていた、そしてその敵はと言うと倒れているサーヴァントに駆け寄った藤丸に顎に手を当て上から眺めている。

それを見たマシユはその間に割って入った、だが相手の方は行動を起さずただ二人の方を眺めていた。

「…見えたのか、今のが。」

こちらに問いかける、だが二人はそれに答えない。侍はそれを気にせず続ける。

「良い目だ。和也のような目だな。」

(この人、和也さんの事を知ってる。)

その疑問が思い浮かぶがその途中で相手が刀を抜いた、それを警戒するマシユと藤丸。攻撃が来るかと思いき警戒していると相手はただその刀で前を切った、いわゆる空振りだった。するとその後変化が起

こる、突然藤丸たちの後ろで何かが見えた、そこはまるで切り裂かれた痕、その出来上がった痕には街の景色が映し出されていた。

その光景に呆気を取られる藤丸、すると藤丸とマシユの体が急に浮き始めた。そしてその穴に向かって吸い込まれるように近づいて行く。

「先輩！手を！」

その声に応じ伸ばされた手を掴む、そしてマシユは自分の盾を地面に向かって突き刺す。それを利用してその穴に吸い込まれないようにしていた、だがそれを見ていた侍はその盾を蹴とばした。突き刺さっていた盾は抜け藤丸たちはその穴に入ってしまった。

「頭、確かここって……」

「ああ、私が思い付きで起こしたあの場だ。」

「何であいつらを？」

「和也と同じ強い目だ、もしかしたら面白い結果になるかもしれない。そう顎に手を当て嬉しそうに切り裂いた穴を見つめる、するとこの騒ぎを聞きつけここに向かってくる気配がいくつもあった。

「ほら行くぞ、用は済んだ。」

「へいへい。」

それを感じ取った二人は空けた穴に入って行った、そしてその穴はゆっくりと音もなく消えて行った。

奇怪な戦争

「先輩大丈夫ですか？」

「う、うん。」

あの穴に吸い込まれた二人、そして周囲を見回してみる、建物からして日本の感じがするが見知らぬ場所だ。今は夜のようにだが周囲の安全を確認した後無線が通じるか試してみたが通じなかった。

「取り敢えず隠れよう、敵が襲ってこないとも限らない。」

『それは大丈夫だ。』

そう声が頭に響いた、この声の響き方は念話だ。しかも相手は声からしてカルデアを襲った奴らだ。

『心配することはない、とは言え殺されるかもしれないと言うのは確かだが…』

「…あなたの目的はなんですか？」

『ただの暇つぶしのようなものだ、今いる場所は君がいた世界とは別の場所だ。私はここで聖杯戦争を開いている。』

「聖杯戦争を？」

『そうだ、とは言っても君たちの歴史には干渉はしないが、君はそのままだと殺される。既にサーヴァントたちには君たちの事は伝えていくからな…』

「どういう事ですか？」

『まずこの戦争のルールは普通のと違う、まず一つはこの戦争にはサーヴァントはいるがマスターはいないのだよ。』

それを聞いた二人は少し驚く、とは言っても普通の魔術師だったら驚愕していただろうが。本来なら聖杯に召喚されたサーヴァントを現代に留めるためにマスターがその役割を担うのだがそのマスターが存在しないと言う時点でこの聖杯戦争はおかしい、とは言え今まで特異点等を見て来た藤丸にとってはそこまで驚く事ではなかった。

『私が知る限りの者、あるいはそれに縁があった者が召喚されている。そしてサーヴァントだけで殺し合い最後に残った者が聖杯を勝ち取るとる事ができる。もし君が元の世界に帰るとしたらこの聖杯を勝ち

取らなければならぬ。』

「わかりません、何故そんな事を？この感じからすると僕がこの戦争に参加すること事態想定してなかったんでしょう？」

自分たちの所に来たのはあの青い鎧を着た人の独断、それに紫の反応を見るとカルデアには興味がなかった筈だ。だからこそ、この行動がよくわからなかった。

『…目が似ていた。あの和也に…』

「あなたも和也さんの事知ってるんですか？」

『ああ、私が戦った中で一番興味を引かれた人物だ。あれ程面白い奴は見た事はない。君は彼に似ている、特に目が、彼が私に見せたあの目、最後まで活路を見出す目がいい。私が一番飽きない者の目だ。』

言っている意味がよくわからないがどうやら気に入られたようだ、とは言ってもちつとも嬉しくないが…

『そろそろ夜になる、この戦争でも夜に行われるのは変わらない。まあ頑張りましたまえ。』

それを言い終えると念話は聞こえなくなった、取り敢えずその戦争が始まると言うのなら移動しなければならぬ。ともかく安全の確保をするために藤丸たちは人のいる場所を目指した。周辺の地理を確認したいのはやまやまだがここがどんな場所なのかもわかっていないのに考えず動くのは不味い、人の密集している街の中心なら襲つてはこない筈だ。

「にしても何処なんだろうここ…」

「雰囲気からして日本だとは思われますが何処の地区なのかはわかりません。先輩の方が詳しいのでは？」

「うくん…どうなんだろう。自分が住んでいた場所ならわかるんだけど少なくともここは僕は知らないな。」

日本に住んでいるからと言ってすべての都道府県を知っているかと言われるとはいってしまう人間は数えるぐらいしかないだろう。一応学生の期間で歴史や地理等でその事に触れる事はあるがそれでも名前だけだ。

「ここから先に多数の生命反応があります。そこまで歩いて行きま

しよう。」

藤丸はそれに頷いた、夕日が落ちかけている事もあり人気は少ないがマシユの格好はいささか目立ち過ぎる、もしここが現代で起こっている聖杯戦争だと言うのなら霊体化できないマシユにとつては問題があるのだ。そのため人氣が少なく尚且つ目立たない場所が必要だ。夜が明けるまでここで待機と言うのもあるがそれだとも引くときの退路を確保していないこちらが圧倒的に不利だ。もしそれを行うとしたらそれは最終手段だ。

場所は住宅街だろう、歩道を歩きながら街を目指す。知らない場所、そのため暗い場所を通っているため少し不気味に見える。

角を曲がった、太陽はもう山に隠れ街灯に照らされた道が見える。そこを真っ直ぐ進んで行く。

「先輩…」

そう先導していたマシユが藤丸に声をかけた、しまつてあつた盾を出現させ前に構える。

二人の視線の先に誰かがいる。

街灯に照らされたその姿ははつきりと覚えがある人物だった。

金髪の髪、黄色の瞳、そして一際目立つ浅葱色の羽織を着た人物。藤丸たちにとつては見覚えのある人物だった。

「…沖田さん？」

沖田総司、新選組の一番隊の隊長、カルデアにもいる彼女だったが、だが一つだけ違う所がある、こちらに向けられている冷たく細い目だけは違った。

「二つ聞きます、あなたがマスターですか？」

そう圧が乗った言葉が向けられる、どうやらこの戦争で召喚されたサーヴァントのようだ。こちらが知っている沖田とは違う、それを感じ取った藤丸は身構える。

「その羽織、新選組のお方とお見受けしますが…」

「……」

相手はそれに答えない、その場でゆっくりと刀を抜く。これが答えのようだった。

藤丸はマシユに強化の魔術を付与する。マシユもオルテナウスの起動は既に終えていた。今この場にいるのは自分が知らない沖田さんだ、聖杯に召喚された別の人格だ。それに交渉をしようにも相手はその気ではなかった。

……沈黙が訪れる、悪寒が走り冷や汗が出てくる。沖田総司の実力を知っている藤丸だからこそ嫌な予感がするのだ。仲間だったからこそ敵に回った時の圧が強く感じる。それに実際にこうやって対峙するのも初めてだからと言う事もあった。

沖田が仕掛ける、下からの切り上げが来た。マシユがそれを防ぎ反撃に盾を振り上げるが沖田はそれを横に通り過ぎるように避ける。マシユは沖田が懐に入らないように盾のスラスタ―を使用して追撃の攻撃を防ぎ後ろに下がる。そのまま沖田の攻撃が続いた。大振りの一撃を盾に叩きつけた、するとマシユは衝撃で少しの間動けなくなった所に、盾を潜り抜けて短刀が迫って来た。マシユはスラスタ―を吹かし回転させた。

「チッ。」

それを見た沖田は腕を引いた。そして手放していた長刀の方を持ち腕を引いた勢いを利用し回転、そのまま盾の方に横に振るう。案の定これは盾に当たるがこれはただの牽制だ、その内に前傾の姿勢になりながら空き足元切りつける。それをジャンプして避けた。だが沖田はそれが狙いだった、刀を引き直ぐマシユの方に向ける、水平を保ち、利き足を前に、刀の矛先を標的に向け狙いを定める。

それを見たマシユはスラスタ―を横に吹かした、その瞬間マシユの顔の横に刀の突きが通り過ぎる。そのまま横に移動していくが沖田はそこに追撃の突きを入れる、胸に目掛けて来たその突きは盾で防ぐが沖田はそのまま盾を乗り越えマシユの真上で刀を振り下ろす。それをスラスタ―を吹かし盾で防いだ、そのまま勢いを乗せ殴りつけるが沖田はそれを刀を間にいれ防いだ。沖田はそのまま殴り飛ばされるが受け身を取る。そこに盾のスラスタ―を乗せた一撃が迫る。速い追撃だ、そして盾を振り下ろした時、沖田の姿が消えた。

「えっ？」

突然目の前から消失、そして後ろからの殺気、これはただ縮地を使っただけでこんな事はできない。それがわかった時には遅かった。背後には既に刀を振ろうとしている沖田の姿があった、これでは盾の防ぎは間に合わない。そして既にすぐ横には命を刈り取ろうと刀が迫って来ていた。

「マシユ!!」

そう藤丸が声を上げる、すると何故か沖田の刀がマシユの首元で止まった。

「…ましゆ?まさか…」

そう呟くと後ろにいる藤丸に目を向ける。藤丸はそれを見て思わず身構えてしまう。

「あなた名は?」

「え?藤丸立香…です。」

「藤丸…あなた和也さんの…」

「あなたも和也さんを?」

「申し訳ありませんでした。」

そう頭を下げた謝罪された、あの後どうやら戦う事をやめこちらの事情を話した所沖田は交渉に応じ自分の隠れ家に案内してくれた。放置された雑居ビルのようで多少埃っぽいが普通に住むには困らなそうだ。藤丸の方はその謝罪を受けて慌てていた。

「和也さんのお知り合いとはついぞ知らず…」

「い、いや別に気にしてないから…」

そう言つてはいるが納得はしてくれないだろう、顔がそう言つているし…それよりも藤丸は聞きたい事があった。

「えっと一つ聞きたいんだけど…沖田さんは和也さんに召喚されたサーヴァントなの？」

「…いえ違います、私はただ召喚されただけ、召喚士の姿はありませんでした。ただ声だけはわかるのですが…」

「ちよつと待つて、それじゃ沖田さんは生前和也さんに会つてるの？」
それに沖田は頷いた、それに藤丸たちは驚いていた。何故なら本来なら有り得ない事だったからだ、藤丸たちははてつきり転移させられるのは自分たちと同じ特異点のような場所なのかと思つていたので。いやそもそも現代人が過去の時代に行くと言う事自体普通の人間が出来る訳がない。

「えっと…和也さんとはどんな関係だったんですか？」

「…和也さんは私の命の恩人であり…恋人でした。」

「恋人!？」

それを聞いて思わず声を上げてしまった、よりもよつてあの沖田とそんな関係とは想像すらしていなかった。だってあの人の性格からして…いや普通にありそうだな。沖田の方は反応を見て頭を傾けている。

「い、いやだって、そもそも沖田さんは歴史では男性で有名で…」

「いや：私は女性と言う認識で通ってますが？」

そうまるでそれが当たり前じゃね？と言う風に発言する沖田、認識のずれ、確かに沖田は女性と言う事は知っている。けどそれはただサーヴァントとして召喚した後でわかっただけで歴史では男性として記録されている筈、なのに沖田は歴史では女として記録されていると言っているのだ。藤丸たちが混乱するのは当然だった、そして色々聞いてみた結果次に驚いたのは…

「お、沖田さんの病気を治したのが和也さんなの!？」

「はい、それからですね。私が彼と仲良くなったのは…」

まさかあの病弱で有名な沖田がここでは病弱ではないと歴史で記録されている。精確には病人ではあったがそれを和也が完治させたのだ。と言う事は彼女は病人で生涯を終えたわけではないようだ。

「大丈夫ですか？さつきから驚いてばかりですが…」

「あ、いやその…こっちの認識とずれがあつて。」

「?…まあ取り敢えずこの話はここまでにしておきましょう。改めて自己紹介を、私の名は沖田総司、クラスはアサシンです。」

「アサシンと言う事はさつき私の後ろを取ったのは…」

「気配遮断と縮地を合わせただけです。偵察等も一応できますし前線にも出れますので任せてください。」

「一人なの?」

「いえもう一人います。そちらの方もアサシンです、今は偵察に行ってますね。」

もう一人アサシンがいるらしい、どうやらこの聖杯戦争はあいつが言っていた通り普通ではないようだ。

「沖田さん、この聖杯戦争について知っている事、教えてくれる?」

「わかりました、私も詳しくは知りませんがこの戦争の大まかなルールは変わりません。一般人の口封じ、そして戦闘を行うのは夜、それらは変わりません。ですが幾つか違う所があります。まずこの戦争に召喚されたサーヴァントは恐らくですが三十人は超えています。しかもクラスは均等ではなくバラバラ、そしてこの戦争にはマスター

「がいません。」

「マスターの事は知ってたけどまさかそんなにサーヴァントがいる何て…令呪はどうなっているの?」

「令呪なら私の左手にあります。どうやらこの戦争ではサーヴァントに令呪が宿っているようです。そしてこの令呪は剥奪や譲渡が出来ず持ち主が死んだらそのまま消えるようです。」

そう左手には三画で描かれた令呪があった、本来ならマスターに宿っている令呪だがこっちではサーヴァントに宿っているようだ。

「あのそれでは魔力補給は聖杯から直接渡されているつとこといいのでしょうか?」

「恐らくそうなりますね。」

「それでこの戦争を開いたのが念話をしてきた謎の人物…」

「はい、どうやら三人いるようです。誰が主催者かはわかりませんが…」

「僕たちはその主催者から直接こっちに連れて来られたんだ。」

「どんな人物でした?」

「それがよくわからなくて…わかる事と言ったら紫色の鎧を着た人物つとしか言えないんだ。顔は見えなかったし人であったのかもわからなかったけど…」

特に名前も言わなかったのでえ容姿ぐらいしかわからないがそれでも誰かはわからない。それにサーヴァントではないので恐らく現代人なのは間違いないのだが情報が不足している。そもそも現代人なのかも歴史上の人物なのかも判明していないため現代人とも言えない。ただ雰囲気を見てそう思っただけなのだが…

「あのその後一つ聞きたいのですが、ここは日本の何処なのでしょう?」

「ここは大阪ですね、ここも都会の方に近い雑居ビルです。」

「今は何年くらいかはわかりますか?」

「前に街の方のテレビを見たら2032年ですね。」

藤丸たちがいた時代より二十年近く経っていると言う事になっている。と言う事はここは未来と言う事になる、となるとあの鎧の人物

「私たちは未来人なのだろうか？ そうなるとあの不思議な格好にも納得がいく。となると一番考えられるのが和也さんと因縁がある人物と言うのが一番納得のいく理由だがそれを考えてもこの戦争に自分たちを巻き込むのがよくわからない。目が似ていると言っていたがもしかして思いつき？ そうだとしたらたまたまっただものでは無いが。」

「確かに不思議ですね。この戦争がどのような理由で起こしたのかよくわかりませんし。」

「私たちもこの戦争についての詳細は知らないんです。」

「…それでもかまいません。私はこの戦争で聖杯を勝ち取ります。」

「そう何かを決意したかのような目、戦場で戦う時の新選組としての目と似ている。でもなぜか苦しそうなそんな感じがする。」

「聖杯を手に入れて…何を願うんですか？」

「それは…言えません。」

「…ごめんね、こんなこと聞いちゃって。」

「いえ構いません、話を戻しますが恐らくその主催者は最後まで出てこないかもしれません。あなたたちが帰るためには聖杯を手に入れる必要があるかもしれません。」

「確か…主催者もそんな事言っていたような。」

「…そうなるのでしょうかしたら最後にあなた戦うことになるかもしれません。」

「…そうなるかもね。」

「どうやら沖田には聖杯にかける願いがあるようだ、そうなると沖田が藤丸と争うのは避けられない。ここにいるのはカルデアにいる沖田ではない、この世界に生きそして呼び出された沖田総司だ。そしてサーヴァントである以上自身の望みを持っているのは当然だろう。だがそれは今ではない、それは最後の手段だ。」

「私はあなたが和也さんの御友人であるのなら協力させていただきませう、ただそれはあくまでも利害の一致、藤丸さんには申し訳ありませんがもし最後に残ったのが私たちになった場合はその時は、覚悟をしてもらいます。」

「うん、それは仕方ない。」

「…何だか聞いていた通りの人物ですね。」

「え？」

「和也さんが言っていました、優しい人なのに何だか芯が太すぎる上にあんまり驚かない人だって。」

「か、和也さんそんなこと言ってたの!?!」

今まで和也の印象を聞いた事がなかった、そうかそんな風に思われてたのか。自分はただ自分のやるべきことをしてただけなんだけどなく。それに人のこと言えないでしょ、あの人だってしぶとくサーヴァント相手に喧嘩売ってたくせに…

「ん? どうやらもう一人の味方が帰ってきたようです。」

「そうなんだ、挨拶しないと…」

「一応味方同士の念話は可能らしいですので藤丸さんのことは伝えていきます。」

そしてしばらくすると人の足音が聞こえてきた、どうやらそのアサシンが来たようだ。アサシンとは聞いたがどんな人物なのか知らない。どんな人なのだろうか?すると扉が開いた。

「お、君が沖田ちゃんの言ってたマスター? かわいい顔してるね。」

明るい声、何処かで聞いたような声。綺麗な髪、薄い紫色の瞳、そして少し暗めな着物を着た女性。腰に二本、背中に二本の刀を持った人物、その女性はこちらの方を見降ろし笑みを浮かべていた。

「君が藤丸立夏…だよ、初めまして、私もう一人のアサシンだよ。」
そう元氣よく発言した、藤丸とマシユは彼女の姿を見て固まっていた。だってこの女性は…

「…えっと、あれ? 私のこと伝えてるよね?」

「その筈ですが…藤丸さん、どうしましたか?」

「あなたは…武蔵さん。」

「え? 何で知ってるの? ……まいつか、私忠実では男なんだっけ、ごめんね、私はこの通り女性でした。」

「む、武蔵ちゃん。」

「い、いきなりちゃん付けはちよつと、恥ずかしいんだけど。」

そう照れるように頬を掻く、見る度に藤丸たちが知っている宮本武

蔵だ、どうしてこの女性がここ？だってこの女性は確か…

『私が知る限りの者、あるいはそれに縁があつた者が召喚されている。』

確かにそう言っていた、と言う事は武蔵はあの女性の事を知っている？だからここそこに召喚された、でも何故武蔵ちゃんがこんな所に？色々な疑問が頭の中に浮かび上がる。

「あの…一つ聞きたいんですけど…僕のこと、知ってますか？」

「え？いや知らないけど…」

「そ、それじゃ、オリュンポスのことは？」

「オリュンポス？知らない…」

どうやら自分が知っている武蔵ではない、けどどうしてもオリュンポスのことが頭から離れない。けどそれを拭わなければ、ここにいるのは自分が知っている武蔵ではないのだ。

「…すみません、実は武蔵ちゃんとはよく会う事が多くて…」

「あそうなんだ、そっちの武蔵も女性なんだ。」（けど何か驚き方が…まあ突っ込むのは野暮かな。）

「宮本さん、どうでした？」

「ごめんまたやれなかった、やっぱりあいっらむかつく奴だけど隙がないんだよね。」

「なるほど…となるとやはり、藤丸さんたちの力が必要のようです。」

そう二人の視線が藤丸に視線を向ける。どうやら今回も激しい戦いになりそうだ。

「まったく、あの狂人には困ったものだな。」

そうぼやきながら景色を眺める、何度見てもこの景色の違いには驚かされる。まるですべてが過去のものと言っていい程の建築物、自分

が住んでいた屋敷がまるで可愛く見える。

「そうだな。いきなり追加の奴をよこすなど……しかも本来いない筈のマスターなどとは。」

「何そこまでの価値はない、この戦争には本来マスターはいない。魔力の方もどうやっていいのか知らんが余程の無駄使いをしなければ尽きる事はない。それに毎日零時には補給される。」

つまり本来マスターに必要な止める役割が必要ない、それに関してはありがたいな。」

マスターなどと言う意味のわからない奴に従える気などない、何故自分よりも弱い奴の言う事など聞かなければならないのだろうか？何故凡人などにそんな苦勞をしなければならぬのだろうか？考えられない。それがいないとなると少し荷が軽い。

「……またあいつが来たようだ、どうするキャスター？」

「そう心配するなセイバー、あいつのことだ。どうせそこまで深くは来ない。軽い偵察程度だろう。俺の兵で適当にあしらえばいい。それよりも新しくきた奴らの事が気になるな、こちらも偵察を出す必要があるな。」

「聞けばかるであ？と言う所から来たそうだが……どんな奴らなんだ？」

「わからん、俺が死んだ後にできたんだ。だが少なくとも星を見るための組織ではなさそうだな。」

「理想魔術か？」

「それだったら最悪だな。」

そう笑みとともに小さな息が出てきた、理想魔術は流石にまずい、もしそうなら少し手を考える必要がある。ただえさえあんな面倒な連中が相手だと言うのにそんな化け物が相手なら最悪だ。

「まあ何とかなるさ。」

そう自分に言い聞かせる、嫌な事が頭をよぎる。あまり考えすぎると嫌なことしか思いつかない。昔っから吉報にはあまり興味が無いのに嫌なものにはすぐに見つけてどうにかしようと思いを働かせてしまう。だが吉報に浮かれるよりはいいだろう。何にしても取り敢え

ずその人物を確認した方がいいだろう。

「さて相手にするのは嫌だが…まあ仕方ないだろうな。その人物についてはずでに何処にいるのかわかっているのか？」

「わからんな、既に沖田にやられたのかそれとも他の奴にやられたか…どちらにせよあの狂人が参加させた奴なのだからそんな簡単に死ぬような奴には見えんがな。」

久しぶりに違う戦いができそうだ。この戦争に勝たなければいけない。聖杯を勝ち取り自身の願いを叶えるためにも…

「お、頭お帰りで？」

「ああ、どうだ戦況は？」

「まだ動いていませんね、キャスターの陣形が整っているせいでアサシンの連中が手を出せないようです。にしてもいきなり人を追加するって何考えてるんです？」

「ふふ、まあ見ているといい、もしかしたらこの事で膠着状態が解けるかもしれないぞ？」

「ほお、まあ頭の目を付けた人物ですしね。まあ期待しときます。」

「そうするといい…さてどうなるか。」

維新の革命家

「おはようマシユ…」

「はい、おはようございます先輩。」

そう目を擦りながら朝の挨拶を交わす二人、今日は沖田の隠れ家で夜を明かした。一応昨日は偵察だけと言うのもあり戦いは起こらなかった。一応沖田が警戒を引き受けてくれたためゆつくり眠る事ができた。そしてこちらの準備を整え終え別の部屋にいる沖田たちの所に向かう。

「藤丸さん、おはようございます。」

「うん、おはよう沖田さん。」

「やつほく藤丸君。」

「武蔵ちゃんもおはよう。」

手をひらひらさせる武蔵、そして窓際に立っていた沖田、藤丸たちはそのままだ中に入って行く。一応藤丸たちはダ・ヴィンチたちと連絡が取れないか試してみたがどうも連絡が取れない、そのためしばらくの間は助けを借りる事はできないだろう。とは言え今まで単独行動が多かったためそこまで驚くことでもなかったがこの問題は恐らく向こうが何とかするだろう。こっちは生き残ることを考えなくては…

「食料の問題?」

「はい、私たちは今まで食事などをあまりしてこなかったので別に困る事はなかったのですが…藤丸さんたちはそう言う訳には行かないので。一応備蓄は少しだけありますが…」

「現地調達しようにもこんな時代じゃね、法律つてめんどくさいね。」
そう食料の問題があつた、今までの場合その世界にいた人たちと協力した時に一緒に食料などを貰えたのだがこの世界は現代である。しかも特に世界には変化が起こっていないため現代人も問題なく住んでいる。そのため食料を得るには必然的にお金がいるのだが藤丸たちはそんな物など持っていない、沖田たちもサーヴァントなため持っていないのだ。

「お金を稼ごうにも身元不明の人間何か雇ってくれる場所何てありませんし」

「何なら夜中に私が霊体化して取ってこようか？」

「そ、それはちよつと…」

「でもそうでもしないと君たち何も食べれないよ？ここら辺都会だから生き物とかいないし。」

「質屋に行くと言うのはどうでしょうか？適当な物を売れば…」

「一般人が鑑定できそうな物って持つてるの？」

「あまり変な事にはこだわらない方がいいですよ。自分の命には代えられないんですから…」

確かにそうなのだが受け取る訳にはいかない、それは人の物を奪うと言う事だ。何も知らずしかも何も関係が無い人の物を奪うと言うのは少し受け入れられない。

「…不思議な人ですね、魔術師なのにそんな事考えるなんて。」

「よく言われます。」

「まあそれ言っちゃうと和也さんもそうなんですけどね。」

「確かに…」

よく厄介事には首を突っ込んで解決していったからなあ、魔術の秘匿何てするつもりもなかったし…魔術師と言うより魔術使いと云った方が合っているような…沖田さんの様子からすると相変わらず変わっていないようだ。

「けどうするんですか？正直奪う以外私思いつかないのですが…」

「う〜ん…」

働いて稼ぐとは言っても身分証明書がない上に住所もないので働き先何て見つかる訳がない、かと言って一般人から奪うのは少し気が引ける。だが藤丸も心の中では奪うことの方が早い事はわかっている。だがそれを理性で止めている。とは言え時間はあまりかけていられない、食事何て人にとっては必需品だ、早めに用意しておかないと不味い事になる。

「…ねえ沖田ちゃん、私良い事考えたんだけどさ。」

「何ですか宮本さん。」

「一般人が無理なら敵のやつ取ってくればいいんじゃない？」

「なにを…ま、まさか！」

そうにやけ顔で放つ、沖田の方もそれに心当たりがあるのか少し苦い顔をしている。

「あいつらから奪うの、そしたら大丈夫でしょ。」

「そう言えば敵対しているサーヴァントは誰なのでしょう？」

「…柳 概兎、恐らくキャスターです。本拠点はわかってはいませんが能力はある程度わかっています。と言っても相手とは直接会っていませんが…基本スキル陣地作成、道具作成もありさらに恐らく宝具による兵士の召喚です。」

「兵士の方はそんなに大したことないんだけどね、けど相手の方も以外とやりてでね。こっちの嫌な事ばかりしてくるの、遠距離からガスガス売って来るしもう最悪、その癖その当の本人は穴倉を決め込んでてね。兵はでてくるけどその召喚士は出てこないの。」

と言うことはキャスターのジル・ド・レエみたいな戦い方なのだろうか、その兵と言うのがよくわからないが相手はかなり用心深い、アサシン二人係で見つけられない時点で見つけることが困難だろう。と言うか…

「…すみません、柳って誰ですか？」

「…え？」

そう普通に思った疑問を口にする、少なくとも自分は柳と言う英雄も人物も聞いた事がない。マシユの方に目を向けるも知らないと首を横に振った。だが沖田の方は何故か驚いた顔をしていた。

「柳 概兎ですよ、明治維新の人物で外国との貿易に革命を起こした人物ですよ。あの桂や西郷とも知り合いで新政府の参謀とも呼ばれた人物、私は、私はあいつに何度も煮え湯を飲まされました…それにあいつは…あいつは…和也さんを殺したんです。」

「か、和也さんを？」

「…あの時、和也さんが死んだとき私は彼の事件に執着していました。新選組にいてもその事が頭を離れず、彼の死因を探していました。誰に殺されたのか、何の理由があつて殺害されたのか…それを探してい

ました。そして和也さんが殺されていたであろう日の前に柳の方で変な動きがあったんです。殺し屋と思われる人物にあったようです。」

そう顔に怒りの表情を浮かべる、余程のことがあったのだろう。だが少しおかしい点があるのだ。

「そんなことできるのでしようか？ 確か和也さんは魔術師の筈です。それに和也さんの礼装《偽・宇宙装具》ブトレマイオスは確かサーヴァントとの戦闘をある程度行えるほどの代物です。その柳と言う人物は相当な魔術師だったのですか？」

「いえそんな噂はありませんでした、けど魔術の世界ではかなり有名なようです。彼が開発した礼装などは魔術協会でも参考さえる程の代物だったそうで、それに柳の奴聖遺物集めにも力を入れていたようで彼の住んでいた城からは幾つかの聖遺物も発見されています。」

ですが魔術師としてはそこまで強いっと言う訳ではなかったようです、教本では少し誇張されて書かれていましたが私が見た限りでは和也さん以上の魔術師と言われると違うと思います。」

「と言うことはその殺し屋が？」

「恐らくは…ですがこれだけは幾ら調べても見つかりはしませんでした。ですが相当な刀の使い手と言うだけはわかっています。」

「和也さんを倒すとすると相当な腕前ですね。」

「もし奴の宝具がその人間を召喚することであるかもしれませんが。奴の宝具に関してはほとんど何もわかっていない状況ですし…それに他のサーヴァントの事もありません。」

今現状確認されているのは四機とは言ってももう少しいるかもしれませんが…私とそして宮本さん。そして柳にあとはその…バーサーカーの源頼光です。」

「よ、頼光さんが!？」

あの頼光の方はよく知っている、何せこっちの方でも召喚されているのだから…にしてもよりもよって頼光さんが…そして新選組の観察眼もあつたのだろう、驚いた様子を見ぬ気早速頼光の事を聞いて来た。そして違う所があつた…

「え？女？男性ではなくて？」

「あれ？こつちでは男なの？」

「男だったよ？もううるさいってぐらいやかましい人でさ、しかも戦鬪狂、私も何度戦ったことか…」

どうやらこちらの方とではかなり違うようだ、こちらの世界とこつちの世界での常識の違い。そしてサーヴァント、少しの違いが藤丸とマシユの頭を混乱させる。既に変化が起こった後の特異点の世界なのだろうか？だがそれにしては変わっている所が限定的のような気がする。ジャンヌの方も何故か和也さんの事は知らなかったし反応があったモードレッドやアーサー王の方も和也さんのことについては知らなかった。今になってみると和也さんは何者なのだろうか？何年経つても衰えない体、そして謎の転移、今になってみるとかなり不思議な事だ。

「よし、取り敢えず食料の方を問題を解決するために動こう。仕事さきでも何でもいいから探さない…」

「一番確実なのはその柳と言うサーヴァントから奪う事ですが、可能なのですか？」

「二応連中の拠点は幾つか見つけています、一応バーサーカーの方がよく襲うので私たちは見ているだけの方が多かったですが、奪うと言うのであれば大丈夫でしょう。幾つか食料や金の備蓄に目途があります。」

「連中意外とやり手でさ、他の場所から物を奪ってそれをお金にしたりにしてね。そんで何でか娯楽のためにそれを使ったりしてるの、しかも商業や工業にも手を出していて魔術礼装の作成何かしてるし…」

「これ以上の長期戦は私たちも不味いと考えていた所なんです。そのため宮本さんと私で本丸を探していた所なんです。その途中で藤丸さんたちを見つけました。」

「だから君たちが来てくれたのはありがたかった、正直不安要素が強いからもう一人ぐらいい欲しいと思っていた所なんだ。」

「そうなんだ、よしそれじゃ早速今夜襲おうか？」

「意外と積極的なんですね、そうしましょう。襲うのなら早い方がいい

い。私との連戦続きで疲れているでしょうが大丈夫ですか？」
藤丸は小さく頷いた。

そして藤丸たちは夜になるまで待機する事になった、取り敢えず沖田たちが貯めていた備蓄を使い食事をとっていた。沖田たちも今夜まで待機となり休息を取っている。そして藤丸たちは食事を終えたと少し沖田たちの元を訪れていた。少し和也のことについて聞きたかった事があつたのだ。
「これは…」

藤丸は沖田が触っている物に目がいった、そこには沖田が着ている隊服とは別の隊服があつた。それは沖田が着ている物とは若干違うが新選組の隊服だ。

「和也さんが着ていた隊服です、あの人勝手に隊服を礼装にしていたようで…あの人の死んだ後私が預かってるんです。和也さんの遺品は私が預かっています。」

「この隊服、左だけ塗った痕がある。」
「私が縫ったんです、あの人のようにやれるかなって…思ったんですけど。」

そう縫ったと事を撫でる、夜に照らされた沖田の顔は優しい顔をし

ていた。懐かしむような悲しいようなどちらでも感じ取れるような顔だった。

「この服、切られた左腕の部分だけ回路が切断されています。そのためこの礼装は左腕だけには強化が施されません。」

「そうなんです、直そうにも私はそこまで魔術に詳しくありません。一応和也さんの本は見たのですが…チンプンカンプンで…」

当たり前だ、ただえさえ神秘が薄れた時代なため調べようにもできなかったのだろう。それに沖田の方は魔術師の家系ではないためそもそも魔術の才能はないのだろう。そもそも礼装は作った本人にしか修復できない、その沖田が持っている和也の本はかなりの価値は秘めているだろうがそれ相応の技術で出来上がっているため沖田ではどうしようもない。

「私にできればよかったです、生憎できたのが強化ぐらいなものです…」

「この礼装は起動できるのですか？」

「完璧には起動はできません、出来たとしても20%ほどぐらいしか…今なら30%〜40%ほどなら起動できます。」

「サーヴァントの補正をかけてもそれだけって、随分念入りに作ってるんだ。」

「それだけこの隊服は大事だったんでしよう、確か和也さん言っていました。自分の好きな物は大事に使いたいから手を抜きたくないって、あの人料理を作る時もそんな風に言っていましたから…」

「特異点の時だね、美味しかったな。」

あれはそう、ロンドンの時だ。あの時和也さんとあつて様変わりしたと思ったら色んなことができるようになっていた。まさか料理もできるようになっていたとは…しかも医者的心得もあつたしびっくりした。それだけじゃなく魔術師としても魔術も随分学習していた。何でかモードレッドやアーサー王にあった時びっくりしていたけど何でなんだろう…

「そうなんですよ、私と彼が付き合い始めた時もそうでしたけど私の好みによく合わせてくれたんです。」

「そうなんだ。そう言えば気になったんだけどその…沖田さんって和也さんと恋人だったんだよね？」

「そうですね。」

「ど、どんな感じだったの？」

「ど、どんななって…もうだめですよ女性にそんな事を聞くのは…」

そうテレ顔で返された、まさかあの沖田さんからこんな顔をされるとは思わなかった。今まで新選組として生きてきたかった沖田の事しか知らなかったので色恋沙汰の話何て一切なかった。にも関わらず目の前ですっごい砂糖を吐きたい程の話を聞かされているのだが…しかもマシユと会話弾んでるし…

「楽しそうでしょう？」

「うわ!？」

すると隣には武蔵がいつの間にか立っていた。沖田とマシユの会話を眺めるように見ている。

「沖田ちゃんさ、いつも無理な顔してたんだよ。その和也って言う人が死んだのが余程効いてたみたいで。いつも死んでるような目をしてた…けど聖杯があるからだろうね。怖いぐらい目をギラギラしてて間が悪い時もあったんだけど…あんたたちが来てから少し柔らかくなったかな。」

「そうなんだ…」

確かにこっちの方の沖田も新選組として生きられず酷く後悔していた時があった、それと同じぐらいかあるいはそれ以上の後悔だったのだろう。和也さんがいたからこうも変わったのだろう、ある意味救いなのもかもしれない。

「ねえ藤丸君だっけ？そっちの私どんな人だった？」

「え？まあその剣豪に名の恥じない人だったかな。」

強くなること、強者と戦うこと、刀を振るい続ける人生、弱肉強食の考えを持ち普通の人とは言えないがそれでもいい人であったのは間違いではなかった。その証拠に何度も助けられたのだから…

「…そっか、ねえ聞きたいんだけどさ。」

「はい。」

「鳥羽って人…知ってる？」

「…いえすみませんが、心当たりはないです。」

「…そっか、そっか。」

鳥羽…武蔵の話で出てきた人だろうか？でもそんな人いたのだろうか？

「その人、誰なんですか？」

「そうだね…：私の…知り合いかな？」

そう遠くを見つめる、そこに含まれる感情は何故かよく見知った物だった。だからだろうか、それを聞く事はできなかつた。深くは探れない、そして恐らくはその事は話してはくれないかもしれない。こんな武蔵の姿を見るのは初めてだ。

「にしても武蔵ちゃんってアサシンの適正あつたんだ、僕の所はセイバーだつただけど…」

「そうなんだ、まあ刀だけの人生だつたからね。私になるとしたらセイバーかアサシンぐらいしかないかもね。ああバーサーカーも一応あるね。刀持つてる人何てあまり正気に思われてないしね。」

「まあ現代人からするとそうなるかもね。けど戦国時代でそれは普通なんじゃなかつた？」

「切つて切られる時代だつたからね、私たちの所では別に珍しくも無い普通のことだつたし、けど面白かつたなく。」

面白いのだろうか？そう言う疑問が思い浮かぶが戦国時代の人と考えはあわないだろう。とは言え基本的な考えは自分が知っている武蔵と同じで安心した。けどなんだろうか、面白いつと言っている割には何故かあまり乗り気じゃないような…

「すみません、話が長引いてしまって…」

沖田たちの話が終わりこちらに來た、もうすぐ夜だ。打ち合わせを行うために話し合いをする事にした。

「ここが例の場所……」

そう鉄塔クレーンから見下ろしていた藤丸たち、来たのは港に近い倉庫ではなくその外れにある放置された工場の跡地、恐らく船を製造することを目的とした工場だったのだが海風や時間経過による劣化などによって放置されたらしい。それを柳が見つけ中身を改装した。とは言え工場ではなく臨時基地としての役割で工場の形をした倉庫と言う形になっている。

「ここです、警備はありますが他と比べて少ないです。スキルを使用して中に入ります。通路を確保したら合図をしますのでその後に来てください。」

二人は小さく頷いた、沖田がその場から消える。恐らく中に入ったのだろう。そしてしばらくすると侵入口付近で沖田が出てきた。

「行く。」

マシユはそれに頷き沖田と合流した後中に入って行く、そこは外から見ても違い中は別物だった。通路の場合多少風化が進んだ状態のままだったが手直しがされている。そして広い空間に出ると大企業の工場とほぼ同じ内装だった。よく整備された機材、そして安全を考慮された設計をしている。そして通路の方でも倒れていたが沖田が倒したと思われる機械兵がいた。

「あれが兵士か……」

「あれは非戦闘員です。私が倒したのも同じでここには戦闘員はあま

りいないようです。一応無力化しながら進みます。」

一応物を奪うので運搬通路を確保する必要がある、そのためその通路にいる敵は倒していく必要があるので無力化する必要がある。藤丸たちもそれに領きマシユの支援をしながら静かに無力化していく、そして例の物は先にいる武蔵が用意しているらしく合流地点に向かう。そこには中に物が入った風呂敷が置いてありその横にはニコニコしている武蔵がいる。

「早かったね、ほらもう包んであるし後は脱出するだけ……」

「な、何で風呂敷?」

「物を盗むのならこれだと思って。ほら君の分、流石に私たちより小さいけど君の問題だし持たなきゃね。」

そう他とは違う少し小さめの風呂敷が渡される、まあ確かに今回は自分たちのためなので自分も何か協力しないと後味が悪い。その風呂敷を受け取り背中に背負う。

「頭にも被る?」

「宮本さん、ふざけてないでさっさと退散しますよ。」

沖田が注意し脱出が始まる、ここまでは何も異常がなくて少し不安だ。そして来た道を通りそしてその後無事に脱出する。

「…何もなかったですね。」

「うん、嫌に上手く行きすぎなような。」

「…嫌な予感がする。」

『こんな所まで…苦勞な事だな。』

!!

その脳に響く声を聞き全員が身構える、沖田の方は刀を抜き宮本同じように抜き周辺を警戒する。マシユは藤丸の近くで盾を構えた。

『何をするのかと思ったら物を盗むとはな、元警察とは思えない行動だが…その横にいる奴、もしや人間か?』

「またですか、何処かで聞いたような声ですね。いい加減姿を見せたらどうですか?」

『質問を質問で返すとはな、まあその様子からするとあながち間違ってもなさそうだがな。』

声が聞こえるだけで何処にいるのかがわからない、今の魔術師でも行う魔術による声ではなく直接脳に送られている。こつちはアサシンたちだけなのでその場所を探知する事が出来ないのだ。そして周りに置かれているコンテナから武装した戦闘員が出てきた。

『奪った物は大した物ではなさそうだがこのまま逃がすのは少し癪だ、だから俺の兵と遊んでもらおう。』

その声と共に兵がフォーメーションを組みこちらに武器を構えた、戦闘員は見た目は機械でできた日本風の装甲だった。剣や槍もあるが中には少しFSのような銃を持つ兵もいた。銃を持った兵が後方におり槍を持つている兵が前に、剣を持つている兵は銃兵の近くに槍兵の後ろに配置されていた。

「またこの陣形、来ますよ。」

すると槍兵が沖田たちの方に駆けだしてきた、槍兵の槍が沖田に迫ると沖田はそれを下に潜り抜ける。しかし槍兵が下がり二度目の槍を放つが沖田はそれをジャンプして避けそのまま槍を踏み台にして切りつける。するとそれを剣兵が止められる。そして槍兵が槍を持ち直し第三の槍が放たれそれを見た沖田は刀で受け止めた。本来なら下がった方がいいのだがそうすると後方で構えている銃兵に狙われてしまう。これが厄介な陣形、相手の事をよくわかっている。これが柳 概兎、新政府の参謀と呼ばれただけのことはある、これは厄介だ。

「マシユー・行くよー！」

「はいー！」

「それじゃ、私が切り込もうかな。」

武蔵が駆け出しその後マシユたちが続く、その突撃を銃兵が止めようと発砲するがマシユの盾に防がれ槍兵と戦う。その一騎打ちに入られないように剣兵と銃兵の攻撃を止めている。だが流石は剣豪と言ったところか数秒で切り倒しそのまま銃兵に向かって行く、マシユも剣兵を倒しそのまま武蔵の方に向かう。沖田の方に援護を向かわせるのもいいが沖田があまり動けないのは銃兵がいるからだ、なら銃兵を倒し沖田が動けるようになれば沖田は戦いやすくなる筈だ。

銃兵は全員で3人だ。

『兵よ、ばらけろ。』

そう言うのと固まっていた兵がばらけた、今銃兵がばらければお互いに援護できるような形になり厄介な事になる。そのため武蔵は二部隊を止めるように動いたが一部隊は見逃してしまった。

「藤丸君！残りをお願い！」

その声を聞き二人は離れようとする一部隊を追う、影の英霊を召喚しその部隊を止めマシユを突貫させる。そして影が槍兵と対峙している間にマシユが銃兵を倒し影が槍兵を倒しそしてそのまま剣兵を倒した。その間に武蔵が槍兵を倒しそのまま銃兵を二人まとめて倒した。そして藤丸はアーチャーを召喚し沖田の援護を行いマシユは武蔵の援護を行って残りの兵を倒した。それを見た沖田は大きく下がった、そして藤丸たちはよく見た沖田の突きの構えを目にした。そしてそのまま大きく前に跳躍する。そしてその場から消えそのまま槍、剣、銃兵を纏めて仕留めた。

「すごい、三段突きだ。」

「流石は沖田ちゃん、あの突きだけは真似できないんだよね。」

「これですべて倒しました、早くこの場を去りましょう。」

工場の方から足音が聞こえる、恐らく援軍だろう。藤丸たちはそれに領き沖田たちの先導に続いてその場を去った。

「…中々やるな。」

状況判断良し尚且つ連携も悪くない、あの二人の良し悪しを理解しカバーが出来ている。それに兵をばらけさせた後でも沖田の方には行かず武蔵の方に向かった。決断も悪くない。沖田の援護をするより苦手とする銃兵を倒した方がいい、そうすれば沖田が動けるようになる。

「だがあの影はなんだ？」

謎の影霊、魔術師の中には召喚士が存在はする、だがそれとは少し違った感じがした。サーヴァントとほぼ変わらない力を感じた。だがそれにしている意思はあまり感じられなかった。

「それに横にいた桃髪の女、サーヴァントではあるが他とは違う。」

盾を持つ英霊とは探せば幾らでもいるがにしては少し中途半端な武装だ、サーヴァントは召喚されれば別に現代の魔術師たちが何もしなくとも当たり前だが強い、そのためマスターが行うのは主に強化か治療ぐらいなのだ。にも関わらず彼女が着ていた礼装は現代の魔術師の技術が施されていた。それに彼女、サーヴァントであるのは確かなのだが、何か違和感を感じる。

「現代では軍用化をしているのか？それとも実験…何にしてもただの盾じゃなさそうだ。」

「どうしたキャスター、難しい顔をして。」

敵の分析をしていた所セイバーが来た、キャスターは一度考えるのをやめる。

「何、少しカルデアにちよっかいを出してみたのでな。その分析をしていた所だ。」

「どうだった？」

「恐ろしく不気味な奴らだ、かたや召喚士のマスターにサーヴァントもどき…少し見えない所がある。現代の魔術は私もよく知らんからな。とは言え分析しようにもな…」

現状の所わかつているのは指揮系統が多少優れていると言う事だけ：魔術は使用したがそれも謎だ、とは言えあの影はサーヴァントを模倣した物には違いない。だがこれだけでは足りん、とは言え数で押せば恐らく殺せる。マスター事態は魔力量はそこまで大したことはなかった。

「なら、俺が出ようか？」

「よいのか？魔術戦闘において一番警戒しなければいけないのは無知だ。回路によっては対処が難しい物も存在する。ルーンの魔術や言霊、魔眼等がそうだ。あれだけは知らないとどうしようもない。」

「ワシはセイバーだ、何とでもなる。」

「セイバーの補正があるとは言えお前が生まれた時代は俺と同じ維新、対して役に立たん。だから俺も行く。」

「ほう、そろそろ出るのか。」

それに頷く、陣地は整った。沖田とあのマスターの仲がよくなる前に全員まとめて殺す。

束の間の休息

藤丸たちはあの盗みの後食料調達のため街に来ていた、奪った物は本拠点に置いておきお金だけを持って藤丸を含めた四人で来た。

「うーんたこ焼きつて以外とおいしい〜ねえ！次はお好み焼きにしな
い？」

「宮本さん…」

たこ焼きを食べながらそう提案する宮本とため息をつく沖田、二人が一緒にいる理由はただ藤丸の提案で一緒に回らないかと言う話になったのだ、沖田は最初は断ったが武蔵がそれを却下してついていくことになった。衣服を買い身なりを整え今は虱潰しに食べるところを回っている。

「すみません、食料調達の筈なのに…」

「だ、大丈夫だよ。どのみち食事はしなくちやなかつたんだし…」

「あ！あつちに串焼きもある！焼肉もいいな〜」

「宮本さん！私たちそんな暇ないですよ！」

「そんな固い事言わない言わない、藤丸くんたちこの辺しらないようだから見て回って覚えなきやいけないしき。それに流石のあいつらも人がいるこの場所でそんな事はしないでしょ。」

ここは都の商店街、様々な店が並び見ているだけでも飽きない。武蔵も恐らく街に行ってみたかったのだが行く機会がなくそのまま戦っていたのだろう。そのためいぎ羽を伸ばした時このようなテンションになったのだろう。意外と見境が無いからなこの人…

沖田さんの方は意外と落ち着いていた、カルデアにいた時は意外と武蔵の話に乗りそうな人だったがこの沖田さんは何だか少し大人びている。和也さんのおかげで長生きして病気も治り精神的に落ち着いているからなのだろうか。周囲の警戒ばかり行っている。

「沖田さん武蔵ちゃんの言う通り今日ぐらい息抜きしてもいいんだよ？」

「盗みを行って帰って来たんですよ？そろそろ休まないと…」

「大丈夫、歩き回るのには慣れてるしそれに僕たちまだ色々聞きたい

ことがあるしゆつくりしたいからね。」

確かに沖田の言う通り休んだ方がいいだろう、夜は基本的に寝るものだし仕事のあとなら尚更だろう。けど沖田さんたちと仲良くなるのも大事だ。ここにいるのはカルデアにいるサーヴァントではなく赤の他人、よく知らないのにどうやって聖杯戦争に勝つというのか。休憩も大事だが藤丸はまずそれを優先したかった。

「…何と言うか本当に変わってますね。」

「よく言われる。」

「…そうですね、よく知らない人の隣ではあまり寝付きはよくないかもしれないですね。」

そう少しため息が漏れていたが了承してくれた、沖田からしたら休んで欲しいのが本音だが確かに連携のことを考えると少しお互いのことを知っておく必要はある。けどそんなことは寝た後から、細かく言えば朝や昼にやった方がいい訳なのだが…こんなに人がいるのだから大丈夫だろう。そう自分に言い聞かせ納得し藤丸と一緒に見て回る。

「藤丸さんって和也さんとはどうやって知り合ったんですか？」

「そうだね、何て言えばいいのか…最初に会ったのはフランスかな。そこで聖杯戦争があつてジャンヌと一緒に行動していた時に出会ったんだよね。」

「その事なら少しだけ知ってます、確か特異点とかいうものではないかな？」

「そうそうフランスの特異点で最初に出会ったんだけど…あの時虫の居所が悪かったのかな。まともに話もしてくれなくて人との関わり合いは嫌いだったみたいでジャンヌとだけまともに話してた。僕たちは正直その時和也さんとは数えるぐらいしか喋った事なかったんだ。けど悪い人じゃなかったよ、戦いになって子供が巻き込まれそうになったら助けたり料理の手伝いとかしてくれたり…戦闘には参加しなかったけど縁の下の力持ちって感じだったかな。」

それがローマでも同じ感じで…そしてロンドンの時にまるで人が変わったようにエゴが似合う人になっててしかも魔術も使えるよう

になってたししかも医療にも詳しくなっていて本当に別人みたいだった。びっくりしたよ、全然話しかけられなかったのに和也さんの方からすっごい話かけられたんだ。その時かな、和也さんのことをしっただのは。」

藤丸もその間に何が起こったのかは知っている。どうやら特異点の他に不思議な空間にいたようでその時に他のサーヴァントや人などにも会って色々学んでいたようだ。魔術使いと言うこともあってフランスとは違い前線に出る程の力を身に着けていたためかなり助かった。

「…ふくん、そうですか。」

「なにか気になることでもあった？」

「…和也さんがよく話していたサーヴァントって何人います？」

「えっと確か結構いたかな…人数はわからないけど。」

「それって全員女性ですか？」

「そうだけど…」

「ふくん、ふくん。」

そう不服そうな顔をしながら途中で買ったたこ焼きを口に入れる。

もしかして嫉妬してる？

「もしかして焼いてる？」

「だって…恋人が他の女性の話してるの面白くない。」

そりやそうだ、当たり前前の反応だった。にしても和也さんに恋人か…なんだか想像つかないな。

「和也さんの恋人だったってほんと？僕からしたら全然想像できないんだけど…」

「私の恋人ですよ、ちゃ、ちゃんとその…キスだってできるんですからね！しかもあの私にデレデレで、よく甘えてくること多かったんですから。」

か、和也さんが甘える？全然想像できない、だってあの人基本的になんだか頼れる大人みたいな人だったし本人に恋人は作らないの？って話したことはあったけど“俺は多分恋人は作れないタイプ”って言ってたからあんまり和也さんが人に甘えるという状況が想

像ができない。

「甘えてくるってどんな？」

「そ、それを聞きますかあなた…中々根性ありますね。」
「？」

「…藤丸君でもしかしてそういう所疎い？」

「えっと……はい。」

そう武蔵の問いかけにマシユが答える、マシユの方も少し苦い顔をしているのを見ると何だか不思議な気持ちになってくる。藤丸の方も頭を捻っているのを見るとこの先が少し不安だ。

「まあそうですね…最初は…」

「いやそれ話すの!？」

「え？駄目ですか？」

「いや駄目じゃないけど…話して恥ずかしくない？」

「まあ恥ずかしいですけど…別に話せない内容じゃないし。」

「沖田ちゃん…その話はやめようね。後で私とお話しよう。」

「え？」

「先輩…先輩もちよつとお説教です。」

「え!？」

藤丸は相変わらずだった、いや最初の頃よりは察せるようになったんだけど…それでも相変わらずであったのが藤丸らしい。

「うう、酷い目にあつたな。」

「あれは先輩が悪いです。少し反省してください。」

そう藤丸はため息をつきながら藤丸はラーメンを食べている、豚骨の味が口に広がり特有の臭いと味が強烈だがこれが癖になる。他の二人は一緒に行動をしており藤丸は反省と意味合いを込められマシユに小言を言われていた。まあ今回ばかりは藤丸の無頓着が原因なのだが…

「…にしてもこうやってゆっくりするの久しぶりだな。」

「そうですね…」

最近は身の危険を感じることはばかりでこうやって人間社会で普通の食事をする何て思いもなかった。てつきり過去の歴史の中に潜り込み事件を解決するものかと思っていたのだがまさか現代に来る何て…しかも自分の故郷である日本に…藤丸は多少ある不安よりもここに来れた懐かしさを強く感じていた。今まで日本に来る機会がなかったわけではない、だが藤丸が来た日本のほとんどが特異点によつて変わった世界だ。現代に近いものはあつたがそれでもこのような人盛りはなかった。

「…そういえば和也さんの出身も大阪って言つてたような…」

和也さんは旅の話をしたことはあつたけど自分の生まれの話はほぼしなかった、したとしても生まれた場所だけ…それ以外ははぶらさされて聞けなかったしそもそも藤丸は聞く気はないのでそのままにした。

「…あれ？確かこの時代の年は…」

『前テレビを見た時は2032年でした。』

『俺が飛ばされた年は2032年だった。』

そうふと頭に過つたものが一致した、確かに和也はそう言っていた。あの紫色の武者、あの人は和也さんの知り合いだと言っていた。あの様子からするとあいつも和也さんの事を探していた、けど沖田さ

んの話からすると和也さんは殺されたと言っていた。そのことは恐らくあの武者も知っている筈、なら何で探してるんだ？死んだ人間なんて探せる訳がないのに…

「まさかこの聖杯戦争って…」

和也さんを蘇らせるために？いやそれにしては大事過ぎる…けどそれにしても年代が被っているのが気になる。後で沖田さんたちと話してみよう。

「先輩？」

「あ、大丈夫気にしないで。」

「やあ、隣いいかい？」

「どうぞ。」

マシユとやりとりをしていた時不意に後ろから声を掛けられた。黒髪の男、年は三十ほどで髭も少し生えていた。上に緑色のダウンをかけていて黒のズボンを履いている。その男性が隣に座った。

「よう大将、彼と同じものを頼む。…なあ君随分変わった物を着てるな。」

「え？」

「そのジャケットの下に着ている物さ、ここら辺じゃみないメーカーだが何処の？」

「いやその…適当に買った物なんでよくはわかりません。」

「そうなのか…すまない気になったもので…恋人連れなのに悪い話の間に入って…」

「え!?!いやそんなんじゃない…」

カツと顔が熱くなり思わず下に目を向けてしまう、マシユの方も少し頬を染め目の前にあるラーメンを食べて気を紛らしている。こういったことを言われると意識してまうのは当然だ。

「はははーすまないこの言葉を出すのは駄目だったな。歳を取るとつい口が滑る。」

「あいえ、お気になさらずに…」

そう苦笑いを浮かべ流す、その男性は注文が届くと手を合わせ食べ始める。にしても何だか不思議な感じがする男性だ。見た目は一般

的な中年男性だが：どう言ったらいいのだろうか。

「君たち歳は？見た感じ若い気がするが：」

「僕たち大学生なんです、ちよつと観光ついでに食べあるこうと思つて：」

「それはあまり関心せんぞ、最近謎の殺人事件が相次いでいる。夜はあまり出歩かない方がいい。」

「殺人事件？」

「知らないのか？まったく最近の子は：ニュースでも取り上げられていただろう。最近住宅街や一通りの少ない場所で辻切りのような事が起きていてな：死因は何とも不思議な話なんだが日本刀のような長物で切られたと言うらしい。こんな現代でそんな古臭い事件が起きる何てな：」

そう愚痴を溢すかのように放たれた言葉、まさかそんなことが起きている何て：恐らくサーヴァントの仕業だろう。沖田さんたちがやるとはあまり思えない、ということは恐らくキャスターかバーサーカー当たりだろうか：とは言つてもいまだにその二人には会えていないので何とも言えないが：

「それで殺されている人たちはどんな人なんですか？」

「いやほぼ関連性は無い、実際に殺されている人たちは親族でもなければなんでもないしかと言つて知り合いでもない。警察の方でも調べてはいるが未だによくわかっていないらしい：まったく勘弁してほしいものだ。」

そう随分と客観的な意見だ、とは言え被害にまだあつていない人はこういう意見しか言えないだろう。人殺し何て日本でもニュースでよく取り上げられるときはあるがそれでもあまりその事を気にする人なんていないだろう。法により悪事に抑制がかかり尚且つ増えすぎた人口により社会を回すためにはそんな事に構っている時間などないのだ。それを平和に毒された、無警戒と言う人もいるだろうがそんな事よりも足元を見るのが人なのだ。

「まあそう言う事だ、あまり夜は出歩かん方がいいぞ。と言つても犯人の気分次第だからそんなこと関係ないんだがな。」

「はい…」

藤丸はそう返事をした、とは言え一番他人事じゃないのは藤丸だった。そのことは本人もわかっておりその事について解決しようと考えている。何せ藤丸が住んでいるのは誰もいない雑居ビルだ、人がいないほぼ無人地帯。襲われても誰も見ていない、とは言っても沖田たちもそれをわかっていてやっている。基本的に戦闘を行う時は夜で誰もいないこと、サーヴァントにとっては問題ないが藤丸たちにとっては少し怖い話だ。何なら寝ている時に殺されるかもしれないからだ。

「難しい顔をしているな…何か心辺りがあるのか？」

「あいえ、そういう訳じゃないんです。ただ夜はちゃんと戸締りしないとって思いました…」

「…そうか、そうだな。私も気をつけないと…」

そう言っているうちに男性の方は既に食べ終えておりお代を払って席を立った。

「おじさんの話に付き合わせてすまん、勉強、頑張れよ。」

「は、はい。」

そう言い残すとその男性は店を出た、藤丸たちも丁度食べ終え店を出た。その後沖田たちと合流、時間も丁度いいのでそのまま拠点に戻る事になった。

「ベットはここでいいですか？」

「あ、ごめんね手伝わせちゃって…」

藤丸たちは自分たちの部屋の整理をしていた、買ってきた簡単な家具を藤丸の部屋に置き生活用品を整える。ベット等は業者に運んでもらう訳にはいかず武蔵が自分で持っていくと言い布団を片手で持ち上げた時周りの人たちがかなりびっくりしていたがそれに武蔵はドア顔で返した時は少し笑ってしまった。沖田は頭を抱えていたが…

「簡単な調理ぐらいならガスコンロでできると思うのでそれで済ませてください、水の方は水道は通っているようので使えますからそちらを。」

「はい、ごめんね僕の問題なのに…」

「気にしないでください、藤丸さんは生身の人なんですし仕方ないですよ。返す時は戦闘で返してください。」

そう沖田は返す、布団を敷き終わると沖田は藤丸の方を向く。金髪の髪が窓から入ってきた月光に照らされ輝く。カルデアにいた沖田よりも少し大人びているせいか綺麗な顔がより一層美しく見える。やっぱり綺麗だなあつと改めて思った。

「…沖田さんは武蔵ちゃんはどうやって出会ったの？」

「そうですね…召喚されて間もない頃でしたね。まだサーヴァントの数が多くて対処が難しく裏で隠れて動いていた時に会いました。私がランサークラスと勝負して相打ちしかけた時ですね。宮本さんが何でか助けてくれました、本当は一時的な協力関係だったんですけどこんなに長く続くとは思いませんでした。」

「武蔵ちゃんは何で助けたんだらう？」

「それがその…息が合いそうだったからつとと言う話だそうです。」

「な、なんか僕的にはしそうな気がする。」

以外と直感で動く人だからなあ、しかも実際に最後まで残ってるし…沖田ちゃんの方を見ると少し呆れてるけど助けられたからだらう

か、あまり強くは言えない様子。

「その後は？」

「その後はまあ私が回復するまで宮本さんが動いてくれました、回復した後は二人で協力して倒していましたね。」

「どんな人を倒したの？」

「色々いましたね：三國志の張飛だったり日本のランサーだったり：いくつか名前を聞く前に倒してしまったり知らない間に倒されたりしてましたけど：一番印象が強いのはランサーのアキレウスですね。多分私があつてきた中で一番早い人でしたね。」

「アキレウスさんいたんだ！」

そっかあの人槍持ってたっけ：確かにランサーの適正とかはありそうだけどどうなんだろうか：と言うか昔の人つて文武両道がすごかったから三騎士になれそうな人が多すぎる気がする、アーサー王がそうだったし：

「さんつて：もしかして藤丸さんのいたカルデアと言う場所にはアキレウスさんがいるんですか？」

「うん、いるよ。僕の所はライダーだったけど：」

「ライダー：確か戦車に乗っていたような：そういうえば藤丸さんが使役しているサーヴァントのことあまり聞いてなかったですね。どんな人がいるんですか？」

「えっとねまずセイバーからだけど：」

そう自分のサーヴァントの事について話だす、沖田はそれをニコニコしながら聞いていたが次第に顔が引きつった顔になり少し気になった藤丸はその理由について聞いた。

「いやその：手相とかがすごそうだなあつて：」

そう頬を掻きながら目を反らす。藤丸が召喚したサーヴァントはかなりの大物だらけで流石の沖田もかなり驚いていた、最初はそれに驚いていたのだがその後話された女性関係の話を聞いて少しマシユに同情していた。まあ藤丸も苦勞はしているので何とも言えないのだ。

「にしても東西南北の英雄がゴロゴロと：よく召喚できましたね。」

「まあ僕も伊達に生き残ってないから、特異点とかで出会ってそれから縁が出来て召喚ができるようになったんだ。」

正直特異点などが無ければここまで召喚はできなかつただろう、沖田さんと出会ったのは少し特殊だがそれでも自分はそのみんなの助けが合つて今まで生きて来れた。苦しくもあり楽しくもありそして凹んでいる自分に向かって励ましの言葉も送ってくれた。本当に嬉しかった。

「…嬉しそうですね。」

「そう見える?」

「ええ、ちよつとよかつたです。」

「え?何で?」

「…和也さんが、すごく心配してましたから…」

沖田の方は藤丸のことは和也から聞いていた、和也が怪我で伏せる前やその後もよく話題で出されたようでその時の和也の表情は最初は嬉しそうであつた、だが話をしていくうちにつれ表情が落ち込んでいきよく呟いていた。

『…大丈夫かなあ、あいつ…』

『…そんなに大変なんですか?』

『そりやね…あいつ士郎と同じで…すごくいい子だったからさ………死んでほしくない。』

そう言っていた、藤丸から直接聞いてもかなりの地獄絵図だった。沖田でも正直よく生きていたと思つている。そりやそうだ、一流でも二流でもない、ただの普通の魔力があるだけの魔術師、戦闘力があると言えどもなく技術もあるかと言えどもない。ただレイシフト適正があると言っただけのほぼ普通の人間、逆に今までよく生きてこれたものだ。ほぼ奇跡と言つていい、和也さんもそうだが下手をしたら藤丸さんもすごい人だ。

「そつか、和也さんそんなこと言つてくれてんだ。何か嬉しいな…」
そう少し照れくさそうにして頭をかいてしまう、藤丸にとって和也は数少ない友人だ。気軽に話せる上に相談にもよく乗ってくれた。頼れる大人、顔は若いけど印象はそんな感じだった。

「そう言えば士郎って誰？名前は知ってるんだけど…」

「何でも和也さんの一番の親友だそうですね、冬木市に住んでいるようで和也さんは一番会いたい人だとも言っていました。」

「冬木市って…確か最初の…そういえばそんなことも言っていたなあ…」

あそこに住んでいる人なのか…にしても和也さんの一番の親友かあ、どんな人なんだろうか。確か少しうろ覚えだけど善人だけど客観的に見れば枷が外れた異常人とも言っていた。そのことを話していた和也さんは困ったような顔をしていた。

『あいつなあ、余計な事に首突っ込み過ぎて心配なんだよなあ。先行きが心配だし…それに心臓に悪い行動するし。』

そんな事を愚痴っていた、確かに自分の命を考えず突っ込むのは無謀だ。だが沖田との話をすり合わせるとその行動を即実行していたらしい。

「…何だか和也さんみたいだなあ。」

「あの人はまだ自重できる方だと思いますが…まあ似てますね。」

特に自分より強い人と戦う所とか…今思えば以外と類似点が多い。それがわかると二人は笑っていた。やはり友達の話をする何だか嬉しい、特に知らない部分を知ると以外な所もあって嬉しい。けど何でだろうなあ、何だか話していると…泣きそうになってくる。

「…藤丸さん、辛そうですね。」

「…やっぱり…わかる?」

それに小さく頷く、だから信じられない。あの人…死んだというのが…

「…正直さ、最初沖田さんから和也さんの話聞いた時、何だかんだ言っ生きてそうだなあって思ってた。何処からかふらつと帰ってきそうとか思ってた…けど沖田さんが和也さんの話をしている顔を見ると…ホントなんだって。」

どう続けたらいいのだろう、どう認めたらいいのだろう。藤丸はある意味では人の死には慣れていよう、けどやはり友人が死ぬ所も死んだ話を聞くのも嫌だろう。それを見続けた人であるのなら尚更

だろう。

「…私も最初は…認めたくありませんでした。」

沖田もそうだった、最初聞いた時その報告に来た隊士に詰め寄った。だが数日たって和也の死体を見た時、世界が真っ白になった。どう表現したらいいのだろう、どう言ったらいいのだろう。一番死んで欲しくない人が死にその人の前で涙が枯れるまで泣いてしまった、あの時のことはよく覚えている。深い悲しみと後悔、そしてその後に出てきた外に出そうになった殺意。それが思わず顔に出てしまった。

「ご、ごめんねこんな話しちゃって…」

「いえ、私が切り出したことなので…」

いけないつい出てしまった、そう自分の失態を恥じてしまう沖田。藤丸はどちらかと言うと驚いていた。藤丸が知っている沖田は優しい、けど人の死にはここまで執着はしていない。新選組関係の人は別だが本当に和也さんの事が好きだったんだな…まあ僕も人のことは言えないけど…

「…和也さんの墓って何処にあるの？」

「…東京にあります…専称寺に埋葬されました。私もそこに…」

「そっか、今度お見舞いに行かなくちゃ…」

「それじゃ団子もお願いします。あの人もよく食べていたので。」

そう微笑みで返される、和也さんのためにも自分は頑張らないといけない。多分本人もそう言うだろう、そのためにもここから脱出してみんなの所に帰らないといけない。あの日以降連絡手段が途切れたままだけど今の自分にはマッシュと沖田さんたちがいる。ある程度は大丈夫だろう。とは言え不安要素ではある、だがこちらから何もできないと言うのが歯がゆい…だが自分が今やるべきなのは戦力強化だ。今の所連絡手段無しでもやっていける、それにそもそもこの問題は藤丸たちだけではどうしようもないのでカルデアにいるダ・ヴィンチたちがどうにかするまで待つしかないのだ。

「…とは言え今日は寝るかな。」

「そうした方がいいですよ。外は私が見張っておくので。」

「ごめんね、任せちゃって…」

「いえお気になさらず、では私はこれで…」

沖田は立ち上がる、今日は少しだけこの世界の沖田さんについてわかった気がした。そして改めて和也さんがすごい人だとわかった、だって歴史上の人物の歴史を変えてしまったんだから。自分の時も負傷者の治療を積極的にやってたのはしつてたけど病気を治せる所までは知らなかった。あの人は言っていた、自分は力をつけるよりも人の心を理解するのが先だと、だから沖田さんの病気を治す事もできたのだろう。なら自分も頑張らないと、ここまで助けられたというのに沖田さんたちに何もしないというのは嫌だ。

「沖田さん！」

「はい？」

そう振り返る、そして言った。

「おやすみなさい、それと…また明日。」

それを聞いた沖田はポカンとしたがその後笑みを浮かべてこう返した。

「また明日。」

「どうだった？大阪は。」

「はい、とても楽しかったです。」

武蔵とマシユの二人はビルのベランダで話していた、今回のことはマシユにとつては新鮮であった。日本の大阪、都会と言う街並みは亜種特異点の新宿と似たような所はあったが雰囲気は別物だった。それをどう表現したらいいのだろうか、だが同じ都会でも人の雰囲気や観光地が違う。とは言え新宿と言う一つの街との比較なので街限定での比較だが現代を見た事がないマシユにとつては充実した一日だった。

「特にたこ焼きが美味しかったです、ほくほくの生地ソースとネギの相性がとてもよかったです！」

「だよね、私もネギ派だからわかる。今度お好み焼きにでもネギ乗せてみせようかな？一緒にどう？」

「良いと思います！その時はぜひ先輩と一緒に。」

そうOKサインとともに笑顔を見せる武蔵、とは言えマシユからしてみれば一番楽しんでいたのは武蔵のようにも見えた。藤丸は故郷の懐かしさを、沖田は仕方なく了承しマシユは少し緊張していた。そして武蔵は観光巡りのように楽しんでいた、こういった人の方が周りから見れば一番楽しそう見えるものだ。

「いや、サーヴァントだったから今まで気分転換ぐらいな気持ちで食べてたけどたまには思いつきり食べるのもありかもね。」

「食事は人の三大欲求の一つだと言われています、私たちのカルデアではサーヴァントも日常のように食事をしていますし必要はなくてもやはり取るべきだと思います。」

「そうだね、今回ので食べる楽しさがでてきたし暇を見つけたら行くかな。」

やはり元人間であっても食生活と言うのは欠かせないのだろうか、武蔵や沖田も別に食事が嫌いと言う訳ではない。むしろ好きな部類だ、今までしなかったのはただ単に行く機会が無かったのとサーヴァントであるため食欲がわかなかったからだ。欠陥が減ると言うのはいいことのようにも思えるが人間にとつては日常的な幸福が減るの少し考え物だ。とは言え困ることではないと言うのは本当だが：

武蔵が今思っていることは別だった。

(…あくやっぱり思いだしちゃうなあ…)

ある人の影がちらつく、よく会っていた人物、武蔵にとってが一番身近にいた人物、夜空に浮かぶ雲を眺めながら思い出していた。その人物は善人だった、人も殺さずただ普通に生きておりよく手料理を食べさせてくれた。そして一緒に旅もした、そしてその人物は今横にはいなかった。

「…武蔵さん？」

「あ、ごめんぼつとしちゃって…」

「いえ、ただその…寂しそうだったので…」

目を見開く、そっか、やっぱりそう見えるのか…思わず苦笑してしまう。それをマシユは不思議そうに見てしまった。どうして不思議に思えたのかはマシユ自身にもわからない、だが彼女の行動に違和感を感じたのは確かだった。

「大丈夫？」

「あ、いえ、何もありません。」

「そっか…ねえそう言えばさあマシユちゃんたちがいるカルデアってどんな所なの？」

「はい、正確にはフィニスカルデアと言うのですが…」

そしてマシユはカルデアについて語りだした、こうやってカルデアの事について話すのはマシユは初めてではないのにこうやって初めてのように話すのは何だか違和感がある。とは言え彼女はそのことを気にせず話す。驚き、楽しそうに、そして悲しみ、色々な表情を浮かべた。

「…大変だね、そっちも…」

「はい、けど色々な人と出会えるのは楽しいです。」

「けど辛いよ、その旅。」

「はい、辛くはありません。ですが止まる訳にはいきません。」

そう決意を表し返答をする、それをみた武蔵はマシユと藤丸のことを強い人だ。そして恐らく自分の好きなタイプだ。けどそれと同時に恐怖を感じていた。ふと視線を外し前に移す、周りは既に真っ暗、

月明かりは時々雲に隠れ街から放たれる光が人が住む場所を照らしている。ここは街から外れているため暗い、だが遠いと言う訳ではないので街の光はこちらがわまで届いている。部屋の方も電気や水が通っているため明かりは点けられるのだが周りはほぼ放置された建物なため明かりを点けると目立つ、そのため使用は控えている。

「…マシユちゃんはそれが終わったらどうするの?」

「私は…まだわかりません。その時になってみないと…武蔵さんは、聖杯には何を願うのですか?」

武蔵はこの聖杯戦争に召喚された、と言うことは願いはある筈だ。本来あまり聞けることはないし当然話すこともないのだがこちらが知っている武蔵の願いはちよつとあれだった…なのでこちらの願いも同じなのだろうかと言う気軽な質問だった。だがその質問に対して武蔵は目を見開くのをマシユは見てしまった。

「す、すみません。気軽に聞くことではありませんでした。」

「いや気にしないで、ちよつと知り合いの事を思いだけだから…けど私の願いかあ。正直私にもわかんない。」

そう告げた、武蔵がいいそうなことではある。それに今回召喚されたのはあの紫色の武者と縁がある人間と言うことになる。そのため無欲な人が召喚されるのも不思議ではない。だが武蔵はわからないと言った、願いがない人間であれば“無い”と答えるはずだ。わからないと言うことは少なくとも願いに関して思い当たることがあるはずだ。

「わからない、と言うのは?」

「…何て言ったらいいんだろう、どう言ったらいいのかわからないって感じかな?…まだよく考えがまとまってない。」

「そうでしたか…もし考えがまとまったら聞かせてくれませんか?武蔵さんの願い。」

「いいよ。それじゃその変わりマシユちゃんの好きな人のこと教えてね?」

「ええ!?いやそれはその…」

「否定はしないと言うことはいるんだね?」

「うっ」

マシユは基本的に嘘はつけない、敵との騙し合いの時はわりと上手いが味方の時となるとわりと下手になる。それほど心を許したと言う証明でもあるのだがそれにしてもわかりやすい反応だ。それをニヤニヤしながら見ている武蔵、マシユの方は顔を赤らめ下を向いていた。

「…まあその好きな人についてはその時教えてもらおうとして、そろそろ寝るかな。」

「そうですね。」

武蔵とマシユ中に入って行く、ちなみにマシユの部屋は藤丸の部屋と一緒に。そのため武蔵とはここでお別れだ。

「それじゃマシユちゃん。また明日…」

「はい、お休みなさい。」

戦法家 柳

ただ暗いだけの場所、生気を感じないただ冷たい土の床とコンクリートで密封された空間だった。唯一の明かりはその場所を繋いでいるドアから差し込む明かりだけだ。そしてその空間には一人の男がいた。その男は手を前に出す、そして息を整え口を開いた。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。――

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。――

男の前の床に描かれていた絵が光り出す、眩い光、青白い発光をするその陣には目もくれずそのまま続ける。

閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。――

繰り返すつどに五度。ただ満たされる時を破却する。――

その陣の前には台座があった、その上には一冊の本が置いてある。風化が進んでいるのかかなり痛んでおりその中身を守っているカバーは所々かけている。男はその本をシワを寄せた目で見ながら詠唱を続ける。

――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

陣の輝きが増す、密封された暗いだけの場所は陣の発光により既に全貌がわかる。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

最後の一文、大きく息を吸いそのまま告げる。

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！すると陣の発光はさらに増しそのまま塵が発生した、それにより視界が奪われ前の状態がわからなくなる。男はそれには驚かずただ粉塵が晴れるのを待つ。そして段々と晴れたその視界にはただ陣と台座があるだけだった

「…今回も失敗か…」

もう少しため息を吐く、何度やっても成功しない。何度やっても呼び出せない。何が足りない？何故ここに来ない…

何故だ…召喚術式も触媒も必ず〃あいつ〃を呼び出せるはずなのに…

「また失敗したのか…」

そう後ろから失望の声が聞こえた、それに嫌な顔を浮かべながら振り返りそこにいた人物を睨みつける。そこにはあの紫色の武者が立っていた。

「なんだ、また見に来たのか…以外と暇なんだな。」

「暇だったらこんなごっこ遊びなど開いておらん。それにこの戦争だって副産物のようなものだ、別段興味もわかん。」

そうどうでもよさそうに答える武者、その目にはこちらを視界にとらえている。だが言葉からはこちら等眼中にない、そのように聞こえるのが一番気に入らなかった。

「それで、何でまた召喚しよう？」

いつの間にか後ろに立たれていた、もう慣れたものだ…最初の頃は攻撃もかすりもしなかった。それにこいつは俺の事を殺す気はない。だから安心して話せるがそれでも多少恐怖を感じていた。

「お前には関係ない。」

「ただ呼び出したかっただけだろ？」

「……」

「お前は一生あいつには勝てない、そして呼び出すこともできない。」「何故だ。」

「あいつが召喚に応じる筈がない。」

「前から言ってるやがるな、何でそう言い切れる？」

「それは自分で確かめたらいい。そっちの方が見てて面白い。」

そうにやけ顔を浮かべたコイツ、今ここで魔術弾でもぶつけてやろうか…いやそんな事をして勝てないのはわかっている。だからイライラだけが募っていく。

「そうやって我慢しているのも駄目だな。あいつなら殴りかかっているぞ。私はそっちの方が好きだな…」

そう呆れた声が聞こえる、癩に障ったのか男の顔が陰しくなっている。自分の忍耐のことで怒っているのではない、ただあいつと比べられているのがどうしても気に食わなかった。そう睨み合いを続けていると部屋が揺れた、何か爆発した音とともに来たそれは直ぐにやんだがそれが来たと言う事は襲撃されたということだ。

「この音…またあのじじいだな。」

「どうやらそのようだな…では私は退散するでしょう。」

そう紫の武者は告げると男の横を通り過ぎて行く、そしてそのまま部屋のドアを開け去った。男の方は取り敢えず襲撃の対処をするために直ぐに部屋を出た。

「これは…」

ふと沖田が部屋の窓から外を見る、武蔵の方も同じ方向を見ており二人は直ぐに外に出て港方面を見ていた。そしてその後藤丸たちも拠点から出てくる。

「沖田さん、これは…」

「ええ、誰か戦ってますね。」

そう全員が港方面を見る、遠目から見ても特に変化はみられないがサーヴァント同士が戦闘を行っている。藤丸の目にはいつもと変わらない港が見えているだけなので何が起きているのかはわからない状態だった。

「沖田さん、戦っている人って誰かわかる？」

「いえここからは…」

ここからでは状況が把握できない。なら近づいて確認するしかない。ここ数日何も問題が起こらなかつたためこのような異常は初めてだ。藤丸たちにとっても何が起こっているのかは把握しておきたい、沖田たちも同じ考えのようでその戦闘が行われている場所に向かった。

戦闘場所となっていたのは柳が使用している倉庫の一つだった、外

側からは特に異常がないように見えていたのだが近づいてみると境界が貼られている。その境界は特に妨害もなく通り抜けることができたのだがふと視界が変わり視界の先には壊された工場の跡地があった。

「うわあ、すごいことになってる。」

「これは…多分。」

「まあ、あいつだろうね。」

「心当たりがあるんですか？」

マシユがそう不思議そうに二人に問いかけるがそれを聞いて苦虫を噛み潰したような顔をした。どうやら心辺りはあるようだがあまり話したくない人のようだ。だが話す訳にもいかないので沖田たちは口を開くことにした。

「多分あいつですね…頼光の奴ですこれ。」

「また派手にやったなあ。流星は鬼退治で有名な人…」

「頼光さんなんですか、確か男性なんですすよね。」

「はいめっちゃでかいですよ、見ただけですが2 m程ぐらいありますし筋肉の塊です。しかもうっとおしいですかね。」

「私も戦った事があるけどもういいかな正直…飽きた。」

そう武蔵が苦い顔をしながら頬を掻いている、沖田の方も同じ顔をしている。まあ確かにこちらの頼光さんもすごい人だったけど…そこまで嫌な人なのかなあ…

「…そんなに戦闘狂なんですか？」

「戦闘狂なのはそうなんですけど…実際戦ったことしかないからよくわからないです。」

その言葉を表すように周りには機械兵や建物の残骸が広がっている。その至る所には深々とした切り傷、残骸の中には何かの衝撃で粉々になった物もある。

「早く行こう、戦闘が行われているのはもつと先…!」

そう沖田の話を遮るように銃声と共に弾が飛んでくる。マシユが盾で防ぎ沖田は回避、武蔵は切り落とした。藤丸たちが睨むその先には武器を構えた機械兵がいる。

「機械兵、しかも装備がかなり近代的ですね。」

銃兵はアサルトライフル、歩兵は剣と槍だがどれも近代兵器に近かった。そして新しく騎兵がいる。その騎兵の馬も機械馬のようで、どうやらかなり武装の魔術礼装に力を入れていようだ。中身は近代的なのに見た目は武者のような違和感、だが魔術礼装としても

「ちよつと厄介ですが…突破しましょう。」

「うん、マシユ！」

「了解です。オルテナウス、出力問題なし。いけます。」

そう盾を構え沖田たちの前に立つ、騎兵がこちらに向かって馬を走らせる。魔術礼装の長刀を振り回しそれを銃兵が援護する。マシユが盾で防ぎ沖田たちが騎兵の相手をする、武蔵はすぐさま騎兵を切り伏せ沖田は馬の脚を切り落とす。マシユはもう一体の騎兵を受け止め盾で吹っ飛ばす。銃兵も攻撃するが沖田たちは避けマシユは藤丸に飛んでくる物を防ぐ。そこに白兵戦を仕掛ける歩兵が掛かっていくが武蔵が槍兵を切り伏せ沖田が剣士を倒す。

「まだ来る！」

そこに増援の到着、歩兵が5人、騎兵が3人、銃兵が2人、どうやら今回の襲撃でかなり警戒されているようで防衛の網が厚くなっている。セイバーならともかくアサシンでは少し厳しい、マシユも一応前線に出ているが銃兵がいるのでは前にでずらい。しかも銃兵を倒していないのに増援が来たので少し不味いことになっているのでマシユが動きづらい。

「沖田さん！一旦倉庫に入ろう！」

「！そうか。」

それを聞いて全員多少崩壊したての倉庫に入る、機械兵もそれに続くように入っていくがその中には誰もいなかった。するとその機械兵の背後から沖田と武蔵が現れ兵士を倒す。気配遮断による接近で倒している、倉庫は閉鎖空間、しかも崩れているため平面での視界はほぼ確保できない。そこに気配遮断を持ったアサシンが二人、不意打ちを仕掛けるのには最適だった。無事に兵を倒し隠れていた藤丸と合流した。

「いい案だったよ、これぞ正しくアサシンだね。」

「流石は歴戦のマスター、クラスによる戦い方を心得てますね。」

「いや〜それほどでも…」

今まで二人はアサシンとしての戦いと言うよりセイバーよりの戦い方をしていたのだろう。無論不意打ち等を普通にする二人のため気配遮断は使用していただろう。その証拠に機械兵に攻撃を仕掛ける時手際が良過ぎた。やはりクラスにあった戦闘の方が発揮をしやすい、その点で言うと言うのは色々都合がいい。

「！マスターこちらに近づいて来る反応があります。サーヴァントです！」

それを聞き全員がマシユが向いている方向に身構える、燃え盛る残骸を背景に誰かが立っている。片手に本を持った四割菱柄羽織を着た男性がこちらを見ている。

「まったく、来るとは思っていたが…できれば来ないで欲しかったな。」

そうめんどくさそうに呟く男性、その声が一番に反応したのは沖田だった。声を聞いた途端か表情が鋭くなり殺気が放たれる。マシユと藤丸はそれに押されてしまう、武蔵の方は何とも言えない顔をしており男の方は沖田の方を見ると表情が緩み笑みを浮かべた。

「よう総司、久しぶりだな。あの時以来か。」

「気安く名前で呼ぶな、柳。」

「どう言おうが私の勝手だ、それに俺を殺そうとした奴にとやかく言うつもりはない。」

「殺す？それはあなたが和也さんを殺したからだ。」

「…私は殺していない、頼んだだけだからな。」

「…それを殺したと言うんだ。だがまさかこんな所で機会がくるとは思っていなかった。」

刀を向け構える、柳の方は本を開き魔術を発動、機械兵を召喚する。柳の周りには火の玉が浮かんでいる。

「少々立て込んでいる、だから速攻で殺す。」

それと同時に機械兵の銃撃が始まり柳の魔術による火玉が飛んで

くる。マシンがそれを防ぎながら後退していき武蔵が後ろの壁を切り崩しそのまま全員離脱、柳は手の平に魔弾を生成、そのまま藤丸たちがいる方向目掛けて放つ。すると凄まじい爆発と共に残った倉庫の壁が吹き飛ぶ。その衝撃に動けない状態で銃撃が集中する。

「動けないっ！」

自身の壁になる壁を破壊すると同時に爆風による硬直、それに障害物がなければアサシンの特性が発揮しづらい。こちらの能力を把握している。だが近づくことはあまり難しくはない、周りにはまだ港に置かれていた倉庫と残骸がある、後は周りにはいる機械兵をどうにかするだけだ。

「あれ？沖田さんは？」

周りを見ても沖田はいない、するとまだ中にいる機械兵の上から沖田が降りてくる。そのまま機械兵の首元目掛けて突き刺した。それに反応するように横にいた兵が刀を振り落とすが沖田はそれを無視して近くにいた銃兵に向かって飛びそのまま頭と両腕を切り落とす。そのまま銃兵を盾にして柳に近づくがそれは他の兵に邪魔をされその間に柳の雷撃が襲い掛かる。仕方なく盾を放棄してそのまま後退する、そこに銃弾が飛んでくるがそれを切り落とし無事着地した。

「相変わらず怖いな、急所を的確に狙われている。もし俺に使われていたと想像したらゾツとするな。」

「そうですね、あなたに使えればどれほどよかったですよね…」

「まあ殺されかける事はあったが結局届かなかったな。最初は魔術で楽に対抗できたのに最後に抜けてきたのは意外だったな。」

それを聞いて沖田は舌打ちをする、柳は自身の傍に魔術弾を浮かべその周りに兵を並べる。睨み合っている間に藤丸たちが沖田の近くに近づいて来る。

「あれがカルデアのマスターか…ただの平凡な人間にしかみえないがな。」

「…まあ普通に見ればそうでしょうな。」

確かに私の目から見てもただの平凡な人間、マスターとしてもほぼ実力不足と言ってもいい程の人物。優しく人に視線を合わせ寄り添

う、ここに来るのは場違いな人。だが戦闘になると切り替わると笑顔が似合う人が冷たい視線を人に向け倒していくのは少し寂しいように見える。

「…こうやって話すのは初めてかな？カルデアのマスター。」

「そうですね…」

「そうだ自己紹介がまだだったな、柳 概兎だ。」

「…藤丸と言います。」

そう少し小声で名前だけを言う、柳は表情を変えず顎に手を当て藤丸の方を見ている。

「…わからん。」

「なにがですか？」

「どう見てもただの凡俗だ、魔力の質もそしてマスターとしても実力として足りているとは思えない。」

何故君はあの狂武者こに連れて来られた？」

そう素朴な質問、魔術師としてそして聖杯戦争を知っている身としての普通の質問だった。その答えの返答は藤丸は決まっていた。

「皆に託されてここにいます。」

「…質問の回答になっていないような気がするんだが…まあいい。んじや実力を見せてもらおうか。」

魔術回路を起動、詠唱を始めると機械兵に強化が付与される。そしてそのまま刀を持った兵が藤丸たちに接近する。沖田はそれを見て藤丸の援護に行きたかったが兵と柳の魔術弾によって妨害される。マシユが前に立ち歩兵の刀を止める。武蔵が歩兵に切りかかるが槍兵に止められる。長物の特性を生かし距離を取りながら武蔵を近づけず戦っていた。

（流石に柳の近衛の分強いな。）

恐らく柳が近くについて魔術を付与しているからだろう、動きが最適化されている。沖田の方もセイバークラスでないため真正面での戦闘は厳しい所がある。

（沖田と武蔵のパターンは取ってある…だが）

武蔵は槍兵の突きを受け止めず流している、だが薙ぎ払いや切り上

げは避けている。そして大振りの攻撃がきたとき懐に潜り急所を切りつける。だが兵はその場で下がり槍を引き武蔵の攻撃を防ぐ、そのまま続けるがやはり距離を詰められた以上武蔵の攻撃は受け続けられず切り伏せられる。

沖田の方は振り上げた刀同士がぶつかり合う、沖田の方は見惚れる程の剣術、速くそして人の急所狙う昔特有の動き、昔から受け継いできた天然理心流、沖田は新選組の中でも一二を争う程の実力者だ。その上この沖田は病弱ではない、和也のおかげで肺結核が治ったためカルデアにいる沖田より体調がいい、そのため全盛期の頃であっても問題なく動く事ができる。兵の方は動きが綺麗だ、歩術も剣術も計算されそして相手を的確に殺すため「決められた動き」しかできない。そのためか沖田の方は動きを読みやすく相手が手に持っていた刀を拳ごと切り落としそのまま首を跳ねた。ただ病気が無くなっただけでこの動き、まさしく達人技だ。

(アサシン相手でこれか…二人ともアサシンだったのが幸いだな。)

方や伝説の剣豪、方や最強の人殺し集団の隊長だ、それに二人も多少本気になっている。もしセイバーで召喚でもされていたら手が付けられなかっただろう。機械兵ドールに命令を与える。銃兵はさっきの奇襲で潰された、今手元にあるのが槍兵2人と武者が3人、強化を付与する。そして沖田と藤丸の位置関係を考える。沖田は一人で藤丸の方は三人、多少藤丸の方に割かなきゃならないが槍兵と武者を一人ずつ付ければ沖田の方は足りる。残りを藤丸の方に向ければ事足りる。頭で二つの戦略を考えなければならぬが…何いつものことだ。それに沖田の癖はよく知っている、沖田に3、藤丸の方に7思考を巡らせれば十分だ。

「多少は不確定要素があるが…今はそうも言ってられないか。」

増援が来るまで時間がある、恐らくその時間内に仕留めなければ自分沖田と武蔵が死ぬ。あの二人はそう言う相手だ。

「恨み事を増やすと面倒だな、まあ自業自得なのだが…」

そう牽制程度の魔術弾を放つ、その間に兵を配置、そのまま仕掛ける。兵の動きはAIと同じだが出来の方はほぼ人工知能に近い。兵

は戦うことに特化している、そのため戦闘の学習、技術の獲得はほぼ兵がやるが戦略については行わない。それに機構、材質にも限界があるのでそれは私が改良する。そのため今の兵は沖田たちに有効だが藤丸たちにはあまり有効的ではない場合がある。あの影英霊がそうだ、召喚士としては少し不思議な影法師、その特徴を見極めたい。」

「マシユ！武蔵ちゃん！」

その声と共に二人が駆けだす、多少前に出ているが今回は銃兵がないので多少は大丈夫だろう。それに藤丸には疑似召喚がある。二人ほどアーチャーを召喚し援護する。

(来たな…)

兵が対処できない物だけを落とす、どうやらアーチャーによる攻撃は柳の方にも飛んでくるので回避しなければいけないので傍に武者を一人配置しておく。迎撃、防衛に集中させ前線に出ている兵の援護に。マシユと武蔵の攻撃が兵に集中する。兵の方はアーチャーの攻撃とマシユたちの連携で少し押され気味だが沖田の方はその逆だ。一人しかいない上に柳としても対処しやすい相手なので先に潰したい所だ。

(分散させている間に潰す、マスターの方は足止めをしておけばいいだろう。)

沖田の方を攻め続けマスターの方を焦らせると言う手もあるが長期戦が望めないので有効とは言えないだろう。それに沖田は残して置くとも面倒な事にしかならないので先に潰しておきたい。藤丸の特性の分析ができればよし、沖田の排除ができればよし、どれを取ってもいいし片方だけでも達成できれば御の字だ。藤丸も合流したいが沖田と藤丸の間から盛り上がった土の壁が形成された。

「藤丸さん！こちらの事は気にせず目の前の敵を！」

「わかった！」

あまり後手に回り過ぎると相手の攻め手が多くなる、まず目の前の障害を排除する事にした。だが本格的に介入ができなくなった事で柳の魔術が沖田に襲い掛かる。柳ははつきり言って魔術師としての歴史が浅すぎるためキャスターのサーヴァントにしては練度が低い、

その上神秘が薄れている時代だったため魔術師としては実力不足だが彼の逸話のおかげで何とかなっている。維新の革命者としての戦略もあるが魔術を研究している中である噂が立ち始めたのだ。

「生前ならこんな木偶人形すら作れなかった癖に……」

「それについてはサーヴァント化には感謝しなくてはな、神代の時代の者なら動きにくいと愚痴を溢すだろうが、神秘が薄れた俺たちにとってはまるで神話の人間になった気分だ。」

そう自分の手を開いて閉じる、今まさに自分は魔術を行使している。そのせいか震えている。沖田にとってはどうでもいい事なのだが柳にとっては重要な事だ。

「へえ、よかったじゃないですか。“念願の魔術が使えて”」

その言葉に柳は反応する、生前沖田が殺そうとし執念深く追ったために手にいれた情報、そして沖田と柳だけが知っている事である。

「魔術を行使するには遅すぎましたしね、魔術回路そんなになかったから派手な事もできませんでしたしね。何なら人形ばかりじゃなくもつと個性的な魔術を使えばいいじゃないですか、“できれば”の話ですが。」

その声の後に魔術弾の嵐が沖田に襲い掛かる、沖田は多少苦い顔をしながらも回避した。

「相変わらず減らない口だな、いい加減黙ってくれないか？」

「気に障ったのならすみませんね、魔術を使えるあなたが嬉しそうだったものでつい。」

「…その察しの良さが和也が殺される時に発揮していれば良かったのにな。」

沖田の眉が動いた、藤丸が足止めを喰らっている間に柳は沖田を挑発することにした。

「好きな人も守れずそれを殺した奴も殺せなかった…負け犬の遠吠え、いやここは負け狼の遠吠えか？」

その声と共に殺気が自分に襲い掛かる、やはり扱いやすい。いや和也の人柄が良過ぎた影響か？その人間が良ければ良い程その人が死ねば反動は大きくなるものだ。歴史に伝わる英雄、貢献者たちは人柄

よりも知恵による影響が大きい。知恵よりもその人柄に人は影響を受けやすい。

知恵は社会のため、己のためにあるが人柄だけは人のためにある。理由は単純だが、優しいだけならそれを受けた人間は容易い者となる。

その証拠に沖田はその場から飛翔し柳に向かって刀を振り下ろす。

柳は自身の空いている手に杖を召喚して防いだ。

「怖いな、だが悪手だ。」

兵の攻撃が横から来る、沖田はそれを刀で防ぎ吹き飛ばされる。距離が空いた所に柳の魔術弾が来る。それを沖田は身体能力を使い回避しながら近づいてくがその間に沖田が相手していた兵が入って来る。その攻撃を掻い潜りながら槍兵を倒し武者を無視して柳に接近する。そして柳の護衛の腕を切り落とすが護衛に腕を掴まれた。その間に藤丸の方に権勢を行いそして沖田の方に向き直す。

「死ぬ。」

エクスプロージョン
爆 発

沖田の足元に爆発を起こす、派手な光景とともに強烈な爆音と風圧が発生する。藤丸はその光景に目を見開き沖田に呼びかける。

「沖田さん！」

「さてこれで一人…！」

柳が眩く前に爆風で舞った塵を押しつけ羽織がない沖田が出てきた、直前で自分の羽織を脱ぎ捨てたのだ。原点の沖田とは思えない行動でそのまま柳の肩に刀が突き刺される。

「っ!?!」

「これでえー！」

そう怒声と共に沖田がそのまま切り裂こうとした時、倉庫の壁が突然吹き飛んだ。それに沖田は驚きその間に柳は距離を取る。藤丸たちも兵の対処を終え合流した。

「沖田さん大丈夫?」

「大丈夫です、多少火傷を負っただけです。」

そう安否を確認し終え吹き飛んだ方の壁を見る、そこには大型の男

がいた。甲冑を身に着け後ろに髪をまとめた強面の男が笑いながら入って来る。それを見た藤丸たちを除く三騎のサーヴァントは嫌な顔を浮かべた。

「なんだ、楽しそうな事をしているではないか…やはり日の本は血の気が多いな。」

「最悪だ、こんな時に暴れが来るとは…」

「む？その奴、確かここに殴り込みをかけた時に見かけた頭領ではないか、こんな所に逃げ込んでいたとは…まあよい。」

自身の腰にある刀を抜きそのままこちらに歩いて来る。藤丸にとっては初めて会うサーヴァントだが見た目の類似点から何となく誰かなのはわかっていた。だからこそ全員の視線があつたサーヴァントに向いていたのがそれを物語っていた。

「妖の類ではないのが多少気が引けるが…まあ楽しいからよし！」

「ええ!？」

藤丸が思わず驚くと同時に大男が駆け出した、その先には柳がおり兵が間に入る。だが兵の4機のうち二機が切り伏せられそのまま柳の方に突進していく。

「冗談じゃない！」

そう言う大男の進路上に爆発を発生させ自分は距離を取る。相手はそれを突き抜けてくるが自分の足元の地面を盛り上げ壊れて穴が空いた屋上に避難した。だが大男はそのまま盛り上がった地面の前で止まりそのまま上に跳躍、柳に追いつきそのまま刀を振り下ろすがそれも土の壁で防ぐ。

(今だ！)

すると大男の後方から魔術弾が飛んで来た、柳が前もって配置させていた遠距離型の機械兵による狙撃である。もしもの時のための不意打ちもしくは援護を目的とした運用なため弾の速度も高速で正確な射撃を行う。しかも今回はあいての後ろ、しかも三機による攻撃なため回避は不可能なのだが大男はまるで予知していたかのように二発を切り落とし残りの一発は鎧に当てて流した。

「化け物め。」

だが隙は出来た、その間に炎に変換した魔術弾を放つが大男は刀身に雷を宿しそのまま叩き落とす。だが爆風が起こり視界不良になった所、霊体化して離脱した。塵が晴れた時には既に柳はその場から完全に離脱していた。

「ぬう、行つたか。とは言えかなり深めに切られていた、もう動けんだろうな。なら…」

大男はそのまま倉庫の中に戻り藤丸の方を向いた。

「ふむ、やはりお前も日本の人間、にしては少しひ弱よな。もしやカルデアのマスターなのか？」

「…そうです。」

「ほおそうかそうか…むう。」

藤丸とマシユの方を見ると少し不服そうな顔をしている、顎を擦り少し考えると刀を構え直した。

「…まあ仕方あるまい、これも戦よな。——。」

そう何かを呟く、少し浮かなそうだがそのままこちらに向いて歩いて来るが途中で目を閉じ深く息を吐く、そして開けた瞳には優しが無く冷たい視線がこちらに向けられている。その歩く速度が上がっていくとそのままこちらに真っ直ぐ走ってきた。その間に沖田と武蔵が割って入るが大男は刀で吹き飛ばしそのまま藤丸の所に向かって直進する。

「マシユー！」

藤丸と大男の間にマシユが入って来る。前に出した盾から轟音が鳴り響き、地面が凹む程の攻撃が来る。沖田たちが後ろから襲い掛かる、武蔵は左沖田が右から仕掛け大男は冷静に回避しそのまま切り合いを行うが振り向いたことよってマシユに後ろを取られる形になり攻撃が飛んでくる。だがそれでも大男はその場で屈みそのまま水平に一回転、マシユたちは後ろに飛ぶことで避け距離を取った。

「藤丸さん！こいつがバーサーカー、源頼光です！」

(やっぱり、頼光さんか…)

見た目の雰囲気で何となく察してはいたがやっぱりそうなんだ。容姿はカルデアと性別は違うが持っている刀は同じだ。もしカルデア

アにいるのと同じなら対処が出来る、事前に沖田さんたちとも話を聞いて情報は得ており多数の武器を持ち戦つていけると言うのは聞いているのだが、今の所は引いた方がよさそうだ。沖田は多少負傷、しかもこれで連戦だ。アサシン以外であれば続行できるのだがアサシンである二人にはこれ以上続けさせる訳にはいかないだろう。

(沖田さん、武蔵ちゃん、隙を見て逃げよう。これ以上続けるのは難しい。)

(わかりました、前に教えた通り大振りが多いので二人とも気を付けて…)

(了解です。)

武蔵と沖田が仕掛ける、二人がかりと言うのに余裕の表情で捌き逆に攻めに入っている。マシユが後ろから盾を振り下ろすが手に召喚した長刀を持ちそのまま受け止める、それと同時に後ろに流された。マシユがスラスターを吹かしそのまま後ろに振りかぶる。頼光はそれを避けようと後ろに下がろうとするがその盾の上に武蔵が現れ下がろうとしたその隙を狙い刀を振るう。これでは後ろに下がっても意味がない。

だが頼光と言う名も伊達ではなくその刀を受け止めそしてそのままマシユの盾ごと吹き飛ばした。沖田は後ろに回っていたが頼光はそのまま後ろの沖田目掛けて振り下ろした。一人で相手をする訳にもいかないためそのまま防御に周るが逃げる隙も与えられずそのまま攻め続けられる。

「っ！」

自身の着物の裾の一部が切り落とされる、それだけじゃなく顔にも切り傷が出来始めた。そして大振りの一撃を防ぐ、途轍もなく重い、まるで大型トラックでもぶつかったような衝撃が刀越しに伝わりそのまま壁に叩きつけられる。そしてそこに頼光は接近する。だが突然頼光の後方から矢が飛んで来た。頼光はそれを急いで叩き落とし飛んできた方向を見て確認すると藤丸が召喚した影シャドウ・サーヴアクト 英 霊が召喚されていた。

「…式神使いのようなものか…だが普通の召喚士とは違うようだ。」

すると頼光は弓を出しその影英霊に向かって放つ、矢が放たれたとは思えない轟音を出しながら藤丸の方に飛んでくる。だがそれをマシユが防ぐ、すると凄まじい衝撃が伝わり少し押されてしまう。その間に頼光は二発目を発射しようとした時に後ろから沖田が、前からは武蔵が仕掛けた。頼光は弓をしまい変わりに刀、そして小刀を出しそれを受け止めながら対処していくがその攻防に影英霊の弓が放たれる。頼光はそれでも対処してきたが変わりに沖田たちが押される事はなくなった。マシユの方も参戦し互角の戦いに持ち込む、すると頼光の視界にそれが映ったのだろうか、一度距離を取ると弓を取り出しそのまま影英霊に向けて放った。武蔵がその矢に向けて刀を振る、英霊となったことで補正が掛かっているにも関わらず矢は音速を越えそのまま刀に当たらずそのまま通り過ぎた。

「マスターー！」

マシユがそう叫ぶ、だが間に合わない。矢はそのまま影英霊に向かっていく、するとそれを突然横から来た一本の矢が頼光の矢に当たった。

「え？誰が…」

矢が来た方向を見るとそこには一人の老人がいた。鎧を身にまといその手には大弓があった。顔には風格がありシワで出来ているが目は獣の如く鋭かった。

「何を呆けている、速く撃つんだ。」

「あ、はい！」

ボイホス・カタストロフ
訴状の矢文

空けられた天井に向けて矢が放たれそれが空に消えた、すると流星の川が一瞬見えたと思っただけで雨の如く光の矢が降ってきた。それが頼光の方に降り注ぐ、沖田たちはその場から避難する、二人はアサシンのため来るとわかっていたので退避は間に合ったが頼光はあの身なりなので回避は間に合わなかった。そのためその矢の被害をできるだけ減らすことにし二つの刀を出しそのままできる物を切り落とした。本来ならほぼ直撃に近い形のため重症は確実なのが影英霊のため宝具ランクのダウン、そして頼光の戦闘センスにより怪

我は負ったものの何とか軽症で済ませた。そして周辺に降り注いだためまた粉塵が舞い上がったが頼光は斧を取り出してそれを振り吹き飛ばし視界を確保する。だが空けた時には誰もいなかった。

「…逃げたか。」

頼光は周辺を確認するが何故か追う気配が無かった。そのまま弓を収め頼光はその場を後にした。

「く、くそ、よりにもよって…あいつが乱入する何て。」

そう苦虫を噛み潰したような顔をしながら傷の手当てをしていた、肩を抑えながら必死に治療魔術をかけていく。そんな時灰色の鎧を着た武者が見下ろしていた。

「…何とも情けない姿だ。」

「あの鬼退治の名人だぞ。真向から勝負吹っ掛けて勝てる訳がない。」
「言い訳か？」

そう冷たい言葉が浴びせられる、その視線も鎧の隙間からも見える程細かい目が向けられていた。

「先生がよく来訪するからと言うからどんな者かと思ったが…他の英雄と違って覇気が無さすぎる。」

「なんだと？」

「お前はただ佐藤和也のおかげで成り上がっただけの人間にすぎん、その事もわきまえず、才能を磨けなかつたお前が呼ばれた理由がわからん。」

先生が一番見向きもしない奴だ。」

そうただ冷たい言葉だけが並べられる、柳はそれに嫌な顔をしながらも何も言い返せないでいた。逃げたのも勝てないから、魔術としての才能も…

「っ。」

「新選組の沖田、劍豪の武蔵、鬼退治の名人、源頼光。神秘が薄れた時代でも名が高ければそれなりの拍カが付く。」

「偉人、人にとつての生存とは”名前を後世まで残される”ことだ。そして人の死とは色々ある。」

心臓が止まる事によつて訪れる”生命としての死”

誰からも名前を忘れられる事によつて訪れる”人としての終わり”

”

我々にとつての終わりは”忘れられることだ”。沖田も武蔵も”つまらん女”になつたがそれであつても名を残した偉人である事には変わらん。だから強い、昔の人間ほど一つに命をかけていないからな。

そしてお前が一番つまらん、何故お前が生き残っているのかもわからん。」

命の終末とは二つある。人としての終わり、生命としての終わり。生命の終わりより人としての終わりの方が怖い。何故なら忘れられると言う事は”誰からも覚えられていない”と言うことだ。それでは死んでいるようなものだ。誰からも見向きもされず、そして誰からも覚えられず。本当の人の終わりとは”存在が消滅する”ことを指す。

「ふん、お前の先生がちよっかいをかけるからだ。」

「先生は何もしとらん、相手の方から仕掛けて殺されただけだ。よりもよつてわかりやすい場所にいるから…」

ため息をつく、大人しく次元の裏に居ればいいのに何故よりもよつてあそこに……まあ恐らく暇つぶしだろうが付き合わされるこつちの身にもなってほしい。とは言え“本来の目的が果たせなかった”こともあるのだろう、しかもこの戦争も“ほぼ意味がない物になってしまった”のもあって多少苛立ちはなくなつたが幾ら暇だからと言つてあんな目立つ場所に住むなど。

「お前があいつらに告げ口していたのも知っている。余計な事をしているのはお前だ。」

「あんな事をした癖によくそんな事を言えるな。」

「お前と先生の間は何があつたのか何てしらん。まあ終盤まで残つたんだ、最後までやってみればいい。とは言えあんな調子では生き残れるかはわからんがな。」

嫌味を残しその場を去つた、柳の心に怒りが溢れてくるが治療に専念するため魔術を行使し続けた。

中国の虎

「あ、あぶなかつたあ…」

そう安堵の息を吐く、沖田たちの方も疲れた様子、マシユの方も疲れが顔に出ているが藤丸の隣で安否を確認していた。

「大丈夫ですか、先輩？」

「うん、何とかね。けど…」

そう少し遠くにいる老人を見る、老人の方は後方を確認している。沖田たちの方はその老人の事を警戒しているのか腰にある刀に手を置いている。身長は恐らく二m以上あり体格もかなり大きい、着ている甲冑はまるで鱗のように綺麗に並べられた鉄の板が敷き詰められている。だが全身を固めている訳ではなく何かしらの皮のような物を着ておりその上に胴、肩、脚などの一部分の甲冑を着ているので少し軽装に見える。兜は日本のように見えるが一番上から赤い毛が伸びておりその背中には矢筒とその身長と大差変わらない大弓を背負っていた。

そして極めつけはその風貌だ、シワだらけの顔で細い目、そして大きな髭などかなり厳しい印象を受ける。その印象から少し近寄りたくない雰囲気だったのだが藤丸には聞きたい事があった。

「あの…」

「ん？」

ふと見ていた方向から視線を外し藤丸ほ方を向く、ギョロリとその鋭い眼光が藤丸に向けられた藤丸に対し沖田は思わず手にかけている刀に力が入る。恐らく今切りかかれば何とかなるだろう、だが今味方なのかもわからない人物を切る訳にもいかずフォローが入れるように近くで待機しておく。

「何故助けてくれたんですか？」

藤丸が思っていた事を告げた、見た所サーヴァントなのでこの聖杯戦争に召喚されたのだろう。ということはこちらは本来は敵の筈だ。沖田は和也関係で、武蔵は成り行きで協力関係にはなったがこの老人はよくわからない。その理由を聞きたかった。

「ふむ…理由か…そうだな。」

そう顎にある髭を触りながら思考する、藤丸は返答を待っていたが直ぐに伏し目がちの顔を戻し返って来た。

「理由等は…若い命を散らすのは少し惜しいと思ったただけだ。」

「はい?」

「君、見た所二十歳にもなっていないのだろうか?その上聖杯戦争には巻き込まれたのだろうか…あいつから聞いた。」

『他所から連れてきた奴がいる、お前たちとは違い生身の人間だが面白い戦いをしてくれるだろう。』

「一応そう聞いたのだ、少し気になっていた所、あのキャスターの倉庫に火が上がったのを見てな。そこに向かったら…君がいた。」

「正直驚いた、こんな年端もいかない子供を巻き込むなど見てられなくてな。割って入ったのだ。」

思わずその理由を聞いて呆気にと取られてしまう。だがその厳つい顔から考えられない優しい笑みがその証明であった。

「つまりあなたが藤丸さんを助けたのは偶然ということですか?」

そう聞いていた沖田が途中で会話に入ってきた、老人の方はそれに頷いた。藤丸は少し固まっていたがまず自身が言う事をする。

「ありがとうございます、助かりました。」

「なに、頼光が出てきたでワシもいたのだが…途中で疑りがあったな。少し様子見をしてしまった。許せ…」

そう申し訳なさそうに謝罪の言葉が返ってきた。藤丸の方は慌てて気にしないようにと手を振った。

「気にしないでいいですよ。僕も沖田さんたちも助けられた訳ですしお礼を言うのはこっちの方です。」

そもそもアーチャーの行動はサーヴァントととして正しいのだ、己の勝利のために情報収集をするのは当然だ。ましてや遠方で高みの見物をしてもいいものを善意で助けられたのだ。藤丸自身にもそこまで攻めることはできないしむしろ感謝をする立場だ。

「そうだよおじいちゃん、助けてくれてありがとうね。」

「私も最初お礼を言わなければいけないのに遅れて申し訳ありません」

ん。改めてお礼を言わせてください、ありがとうございます。ごまいました。」

そう少し面を喰らったが素直にその礼を受け取った。そういえば名前を聞いていなかったな…

「そういえば自己紹介が遅れました、僕の名前は藤丸立夏です。」

「ワシの名は黄忠、字は漢升と申す。」

「黄忠って、あの三國志で出てくる…」

「はい、西暦220年頃に後漢が廃れていき起こった乱、黄巾の乱から始まった戦争でその後、魏、蜀、呉が建国されその時蜀を建国した劉備に仕えた猛将です。」

西暦220年頃に中国で起きた乱、黄巾の乱から始まった三國志にでてくる人物、廃れた後漢の影響により群雄割拠するようになりその中盤辺りで建国された蜀、魏、呉の時に劉備の下に付き五虎代將軍と呼ばれた猛将の一人、劉備の下に仕えたのが60歳に近かったと言う老人であったが、劉備の下に付く前に関羽と戦った際にほぼ互角で戦うことができるほどの実力を持っていた。

「へえ、中国の人なんだ…結構大きいね。」

「本来はこんなに大きくはないんだがのう。召喚された場所が日本のためか演義での影響が大きくてな。本来より多少盛られておる。クラスもアーチャーじゃ。」

黄忠は三國志演義では弓の名手として名が高い、関羽と戦う際に自身の馬の脚が折れた際に関羽から“馬を返られまた戻られよ”と言い見逃された際に恩を受けた。そして再戦の時韓玄に弓で殺すようにと言われたが恩を受けたためそれはせず関羽の兜をワザと射貫くと言う神業を見せた。この時黄忠も関羽も馬に乗っておりしかも走った状態でやってのけたのだ。アーチャーとして召喚されたのはそれが理由だろう。

「ワシには特に叶えたい願いなどはない、英霊として召喚されたとは言えもうだいたい歳をとっている。年老いた者ならば若い者の手伝いでもすればよかろう。どうであろう、腕にはそれなりの自信があるぞ？」

つまり協力してくれると言う事だ、いきなりの申し出で藤丸たちは

動揺する。とは言えありがたいことだ、戦力が多い方がいい、それに遠距離での支援があるのはありがたいことだ。ほぼ前衛しかいなかったのだからここに黄忠が加わればかなりカバーできる。だがいきなりこのことでどう答えを出すか迷っていた。

「…あなたはそれでよいのですか？」

すると沖田が口を開く、やや不満顔を浮かべ黄忠を見上げる形で疑問を告げた。

「例え年老いた人生とは言え後悔はある筈、あなたはそれについてはどうでもいいのですか？」

「…確かに後悔はあるのう、我が君の最後を見届けることができなかつた。」

黄忠の最後、忠実では五虎將軍に任命された翌年に亡くなり、演技では劉備の進軍による失敗による傷で亡くなった。本人にとっては思い残すことなど多いだろう、だが…

「とは言えだ、ワシの戦いはそれで終わったのだ。蜀の將軍として、我が君、劉備様のために戦うのはあの時の失敗で終わったのだ。」

「だからワシには願ひなどはない、聖杯を勝ち取って得るよりも若いもんの生末を見守っていた方がよいわい。」

そう笑顔を浮かべ藤丸に向けた、黄忠は守っていた城の住民とは仲が良かった。それに部下からも慕われることが多かつた。だが家族には恵まれず息子を早くに亡くしていた。本来歳を取ったら隠居するのが普通な時代だったのだが黄忠は常に前に出ている。もしかしたら家族がいない事をまぎらわずために人と関わっていたのかも知れない。だからこそ未練などはない、部下に慕われ住民からも慕われそして生涯を終えた。名残惜しいが若者の命を奪ってでも叶えた願ひなどはなかつた。

「…そうですね。どうします藤丸さん、私は別に構いませんが？」

「私も別に構わないかな、何だかいい人そうだし。」

「…ワシが言うのも何だが他人を疑う事を知らぬのう。」

「変に疑り深いよりはいいでしょう？」

「そうなのじゃが…何だか心配だわい。」

「よく言われます…はは。」

こうして黄忠を迎える事ができた、なんだか和也さんの聞いていた通りだ。不思議とこの人の元に集まっていく。私も宮本さんも、そして黄忠さんも、他のマスターと違いちゃんとこちらの意図を聞いてくれる。まるで一人の人として接してくれた。藤丸さんが一般人だったからかもしれない、和也さんも同じ結論だった。魔術師はサーヴァントを道具として扱いそれに応じる者は少ない。サーヴァントとは言っても所詮は元は人、しかも昔の人間は信条、信念を持った人が多い。騎士などがそうだ、騎士のように騎士道精神を持った人を召喚した時には魔術師と折り合いが合う訳がなかった。

魔術師にとっては聖杯戦争、サーヴァントなど儀式の一つに過ぎない、そのため道具として扱う魔術師と癖の多いサーヴァントで対立する場合がある。

(藤丸さんの場合それが無いのが救いですね。)

そう安堵の息を吐いた。沖田の顔に珍しく笑みが浮かんだ。

「さて結論から言うとキャスターを殺すなら今がいい。」

そう黄忠の口からそう告げられた、藤丸たちはそれを聞いていた。

今後の打ち合わせのために情報交換をしようとした矢先黄忠が先に切り出したのだ。

「キャスターの工房は既に出来つつある、それが完璧にできる前に仕留めた方がよいだろう。」

「それは賛成です、バーサーカーのおかげで遅延していましたが完成させたら不味いですから。」

キャスターの基本戦術、その要となる工房の建築を完成させないため色々妨害工作を行ってきた。だがどれも工房じやなくダミーばかりで少し難儀していたがバーサーカーが周りで暴れ回っていたせいかキャスターの行動が遅くなっていた。そのため今まで膠着状態になっていたのだがそれも限界のようだ。

「キャスターの工房は何処に？」

「…四天王寺だ。」

「あそこに敷かれているとは…何と罰当たりな。」

そう沖田が愚痴を溢す、とは言えあまりこのましくない。観光地としても有名でさらにその近くには教育する場も設立されている。正直あまり良い場所とは言えないのは事実だが魔術師として自身と合う場所を探すのも魔術師らしいとも言える。

「学校だってあるのに…」

「あいつはそういう奴ですよ、宗教や信じる者などおらずただ己があるだけ。奴は自分だけ生きていけばいいだけなんですから。」

「相変わらず針のある言葉。」

武蔵がそう苦笑しながら告げる、藤丸の方は四天王寺のことがよくわかっていないのか首を捻っていた。

「四天王寺って？」

「聖徳太子が建てた寺の一つです、四箇院の社会教育・福祉事業の思想を広め、薬草を植え、病気に備える施薬院を現在の愛染堂がある場所に建立したと伝わっています。」

「四箇院？」

「敬田院、悲田院、施薬院、療病院、この四つの総称です。敬田院は仏法修行の道場となる場所を意味し、施薬院は病氣の人に薬を施す場

所、療病院は施薬院と同じような場所で悲田院は病者や身寄りのない老人などのための社会福祉施設にあたります。」

「日本の寺ってそう言う場所なの？」

「今だと葬儀のイメージが強いですが元々は教育や福祉を目的とした場所なんです。寺子屋などがそうですね。宗教的な意味合いもありますがね。」

昔ではよく若者の流行や修行僧の場として有名だが今ではその古くから伝わる伝統の続いているか観光地となっている。今回の四天王寺は観光地となっておりその近くには学校が設立されているのである意味では寺子屋とも言える。だがこの四天王寺が建設された理由がもう一つある、それは崇仏廃仏論争。外国から仏教が伝わり各地に広まった、その時、仏教を受け入れようという立場の派閥が生まれた。蘇我氏がその中心になりこれを崇仏派と呼んだ、その仏教の考えに影響された聖徳太子もそれを広めようとしたがそもそも日本には原始神道と言う物がありその考えを広めるのは不味いと言う立場を取ったのが物部氏・中臣氏の廃仏派と呼ばれる派閥でその二つの派閥が戦ったのが崇仏論争と呼ばれる戦いである。

その時蘇我氏側に立った太子が、戦勝すれば四天王を安置する寺を建立、衆生救済につとめると祈願、勝利のあと本寺を建立した。その後仏教は日本に広まり今の時代でも仏教が中心となって動いている。「私の時代じゃよく病院みたいな感じで扱われてたな…」

武蔵がそう呟いた、武蔵がいた時代は戦国時代だがその時の怪我や遭難などで寺に駆け込む人も多かった。特に怪我による事件は多く落ち武者たちの逃げ場として扱われたこともある。そしてその言葉を聞き沖田が顔を曇らせる。

「…和也さんをここに泊めていたら…」

変に油断していたのがあだになつた、もう少し調べて置けば…あの場に無理にでもとどまっておけばあんなことには…沖田の中でそのような後悔が生まれていたがあの場合にいてもあの武者に切り殺されるのが落ちだろう。だがその事を知っていても沖田は残っていただろう、このような後悔を残すのならいつそのこと一緒に…

「なにか言った？」

「いえ何も、取り敢えず真正面から攻め込むのは無理だと思います。」
「完全なテリトリーだからね、裏工作でもしてある程度吹っ飛ばす？」
「そんなことしようものならその前に感ずかれます。とは言えどうしようも…黄忠様、柳の陣地はどのような場所？」

「柳の魔術は礼装だよりでな、陣地作成の方も礼装だよりでな、柳を強化する陣地だが、それを支えるために礼装がある。勾玉だ。」
「勾玉？」

勾玉とは古来から日本に伝わる装飾品の一つで名前の由来はただ曲がっている玉だからと言うらしい。古墳の中に納められている物もありそれはその人の立場を表し、その他には勾玉の穴は自分を生かしてくれる祖先と繋がり、我が身に降りかかる邪気・邪霊から身を守るなど様々な恩恵がある。

「湯屋方丈、不動明王 神變大菩薩（四天王寺）、四天王寺宝物館に一つずつある陣地を形成している物だ。それを壊せば陣地を維持できなくなる。」

「四天王寺って霊脈ありましたっけ…」

「本来はないが柳が霊脈の流れをいじって寺に流しているんだ。何故寺に集めたかはしらんが…」

「山が嫌いなんじゃないんですか？都育ちですし。」

「偏見…」

「いいでしょう別に…」

そう武蔵の突っ込みに不貞腐れながら答える沖田、それを見たマシユと藤丸は少し内緒話を始める。

（この沖田さんは柳と言う人物に対して、随分と好戦的ですな。）

（まあ…和也さんを殺した人のようだし…）

間接的には言え自分の恋人を殺すように促した人物など許せないのは当然だろう。とは言えカルデアにいる沖田より感情的なためかかなり表情がわかりやすい。もしこれがカルデアの沖田では死んだのは自己責任と蹴りをつけここまで和也の死をひっぱらないだろう。だが病気を治してもらい尚且つ恋人と言う普通の日常を送らせ

てくれたからだろう。柳と言う人物に対してかなりヘイトを向けているようだ。だが武蔵に注意されたのを見て黄忠が話を続ける。

「ある程度距離が離れていてもワシなら狙うことができる。じゃが問題なのはどうかやってその距離を作るかじゃが…」

「入れそうな所は四天王寺を中心に東西南の方向に一門ずつあります。兵を越えて行くというのもありますけど…結界が張られている以上門から入るのがいいと思います。」

「ですが私たちはアサシンです、気配遮断を使用して兵を越えて潜入すると言うのはありんじゃないですか？中で破壊工作を行い入りやすくする。その方がいいと思います。どうでしょう？」

「いいと思います、けどそれでも体勢立て直されたら難しいと思う。それにその工作する時間も少ないだろうしあまり効果は出ないかもね。」

「ギヤスターは公明さんや司馬懿さんのような戦略家です。動かす兵も機械の兵なので冷静に対処されたら難しいですね。」

そもそも工房に入ると言う時点で自殺行為のようなものだ、アサシンの気配遮断があるとは言えそれでもすぐに気づかれるだろう。いわば結界内のほぼすべてに監視カメラがあるような物でしかも結界を維持する場所など一番警戒している筈だ。その事を考慮しても侵入されて発見されるのが早いため破壊工作はあまり効果的ではない、勾玉の一つでも潰せればそれを陽動にして他を破壊すると言う手が打てるがそれでも他を集中的に守られたら難しい。短期決戦を仕掛けたいのだがどうしても攻撃力が足りなかった。

「公明？そつちに公明がおるのか？」

すると黄忠がその名に反応した、公明は蜀にいた人物なのでこの反応は当然だろう。

「はい、疑似的に召喚されたサーヴァントなので完全な本人と言う訳ではありませんが…」

「ははは、あの人はかなり慎重だからだろう。もしここにいたら今言った戦略は何だか却下されそうだしわい。」

「じゃがああ司馬の豪族ならいい案をくれそうではあるのう。」

司馬家は中国の豪族であり魏の将、もしこの場にいたら少しギクシヤクするかもしれないが：まあそれは仕方がない。とは言え確かにこの二人がいてくれればいい案を出してくれそうではある。

「こうなつてくると崩した後の突破力が欲しいなあ：はあく私がセイバーだったら：」

「あいつが出てきたタイミングを狙いたい：それを待っていると完成してしまう。」

ここにいるのは不意打ちかあるいは裏工作を仕掛ける方が得意だ、アーチャーのクラスも三騎士の一つではあるが本来は単独行動による意識外の攻撃、つまりやることはほぼアサシンと少し被っている。ギルガメツシュのような超規格外ならば何の問題もないがあれは本人が以上過ぎるだけだ。

時間がないため短期戦を仕掛けたいがどうしても難しい、その考えに悩んでいると藤丸が手を上げる。

「…あの、僕に一つ考えがあるんだけど：」

その言葉に釣られ全員が藤丸の方に向くと藤丸も話を続ける。

「頼光さんを味方につけるってのはどうかな？」

「やめておけ、会話がそもそも交渉しようにも会話ができるのかどうか：」

その言葉に思わず全員が目を見開くが真つ先に黄忠が否定した、だが藤丸はそれでも続ける。

「でも突破力ならバーサーカー以外適任はいないと思う。」

今の戦力はアサシンが二人にアーチャーが一人、そしてマシュと影英霊を含めると多いような気はするが戦闘が対城攻めのようなものなので工作能力はあるが攻撃力はない。アサシンは暗殺向き、アーチャーは後方支援であり影英霊に至っては一時的にしか召喚が出来ないので一時の処置程度しかできない。キャスターの拠点防御力を考えるとバーサーカーと言うのは良い手だ。

しかしそれはマスターが使役していた場合の話でなら何とかできる話だ、マスターには令呪があり例えサーヴァントが離反行為をしてもそれで抑えられる。そして聖杯を手に入れると言う同じ目的もあ

りマスターには戦況把握と言う仕事もあるためマスターの指示に従う時が多いのだ。だが今回の戦争はサーヴァントのみ、しかもバーサーカーなのでまず会話にいけるのかもわからない。そのため黄忠が否定したのだが…

「バーサーカーもこの状況はどうにかしたいと思ってる筈だよ。」

相手はあの頼光だ、少し会話をした程度だがそこまで会話は成り立たなかった訳ではない。なら孤立している状態でキャスターの拠点攻めは何とかしたいと思ってる筈だ。とは言え狂化によって強行するかもしれないが…とは言えできない訳ではない。なら会話の余地はある。

「…私たちも考えてはなかったですが、やってみるのもありですね。」

「大丈夫かのお…」

「けど藤丸君の考えが一番適任だと思うよ、うまくいけば一番厄介な奴がいなくなるかも…」

「とは言えキャスターを倒した後はどうなる、ワシはいいとしてバーサーカーが余力を残しておいたら不味いのではないか？」

「けどどうじうじしてる間にあいつの拠点が出来上がったらこっちが不利になっちゃう。後の事を考えるのも大事だけど今の状況を打破した後でもいいんじゃない？私は藤丸君の考えに賛成。」

「むむむ…」

黄忠のことにも一理あるが武蔵の案も捨てれない、聖杯戦争は基本的に一体だけで戦うのが鉄則だが他の陣営と組倒すと言うのは記録上幾つも例がある。今回はキャスターが障害、それに今までキャスターの陣営が整ってなかったのはバーサーカーが暴れてくれていたおかげだ。もしその妨害がなかったら沖田との合流もできなかったのかもしれない。

「…確かにあやつと組む以外ないかもしれないわ。」

「なら早めに会わなきゃね、黄忠さん。キャスターの陣地が出来るのは具体的にどれくらいですか？」

「恐らく三日後かのお、その間に説得せねば。」

「頼光さんの場所はわかってますか？」

「頼光は山におるよ、入りさえすれば向こうから来るじやろう。」

「それじゃ明日にはもう行こう。」

それに他の三人は領き明日のために藤丸は休息を取ることにした、沖田たちも周辺の警戒をしながら同じように休息を取った。黄忠は少し外に出て少し自分の中で思った疑問を纏めてみた。

(あの二人異様に欲が無い、聖杯に呼ばれたと言うことはあるはずなんじゃが…)

ただの考え過ぎだろうか？沖田の方は戦いに意気込みはあるが武蔵の場合少し遠くを見つめている所がある。ただ目の前の相手はどうでもよさそうに感じた。宮本武蔵と言えば強者に興味がありそうな気はするのに頼光のことはどうでもよさそうに見えた。ただそう感じただけで確証もなにもないが、何だか少し不安だ。

(そしてこの意味のわからん戦争、いったい何のために作られたんだか…)

マスターもいない、人数もバラバラ、おのが望みを叶えたいために開いた訳ではない。そんなことありえるのだろうか？

(…まあこの謎は聞けるかどうかもわからんのう、主催者が穴にいる時点で聞こうにもきけんしな。)

この戦争の真意を問いただしたい気持ちはあるが生憎その答えを持っていてあの謎の武者は何処にもいない、観測しているのでこちらを見ているのは確かだろうが探しても見つからなかった。最初は少し顔を出していたのだが後半になってくると見せなくなった。わからない不安にため息をつきながらも夜空を眺めた、月は丁度雲に隠れてしまっていた。

久々の楽しみ

大坂の山で有名ともなれば金剛山が浮かぶだろう、標高1・125m、現代でも登山地として有名で登山特有の自然を感じる事ができよく登山する人が多い（だが山頂が奈良県にあるため大阪最高峰ではない）。山の中には神社もあり1300年ほど前に役行者（白鳳時代の山岳修行者）が16歳の時この山で修行し全国各地の霊脈へ駆け上がった伝えられる。その歴史もあるためかその役行者が開いたとされる寺がありその近くには一言主を祭神とする葛城神社がある。

その場所は神域とされており立ち入る事はできない、厳密に言えば裏手の葛城岳に入ることには許されない。黄忠の話では頼光はその山にいらしいが神社には近づかないように山頂によくいらしい。アーチャーの能力でそれはよく見るらしい。

「ほれ足元には気を付けい。山頂でこけたら怪我ではすまんぞ。」

「は、はい。」

藤丸たちは昼頃に登っていた、夜頃に登るのもいいが視界が間かない時に不意打ちでもされたらたまらない。なら人目が多く尚且つ登山客に紛れられる頃がいい。登山が出来る日というのもあつて日差しがよく地面もよく乾いている。

「藤丸さん、ゆっくりで大丈夫ですよ。」

「ほら男の子がだらしないよ。はやくはやく。」

沖田たちは目立たないように変装をしている、登山客がよく着る服装でこれは街で購入したものを着ており藤丸は礼装の上にウェアを羽織っており背中には大きなバックがある。最初はマシユが盾に収納すると言ったがせっかくの登山なのだから少し体験したいと藤丸がいい荷物を持つことになった。とは言え流石に多いので黄忠と分担して持っている。

「先輩、大丈夫ですか？」

そう後ろから声をかけられた、水色のウェアに歩きやすいボトムズを履いており黒いキャップを被っている。マシユの場合デミサーヴァントなので荷物持ちをしたかったのだが藤丸が持っているので

少し後方についていたのだ。藤丸が辛そうにしているのを見て声をかけたのだろう、だが藤丸は首を横に振った。

「大丈夫、さつき休憩したし…」

「次の休憩エリアで交代しますのでそこまで頑張ってください。」

ガッツポーズをするその姿は可愛いの一言につきる、その表情を見て元気が出たのか藤丸も動き出す。彼の中では辛いというよりも楽しいという気持ちが強かった。藤丸は日本人だ、そのためこういった観光は初めてではなかったがこうしてやるのが長年の夢でもあった。特異点や異聞帯を見るよりもこうして現代の日本を見るのが何よりも嬉しかった。例えば肉体的に辛くとも精神的な安心が増さっていたのだろう。そのため彼の表情は笑顔だった。

その様子を黄忠は悲痛な表情で見ていた、自身もそれなりの経緯があり実歴もある。時には地獄のように辛く春のように安らかな時もあったが彼の今までの歴史に比べたら雀の涙以下であろう。歴史の改変、地球の白紙化。自分が今までやってきたこととは比較にもならない重荷を背負っている。ただの少年、しかも心優しい子がだ。

（旅の最中に友人を失うこともあっただろうに…生半可な精神ではない。）

だからこそ心配であった、どんなに強くとも精神が弱ければ歴史は作れない。黄忠の主劉備は優しきで生きていたような人物だったが最後は兄弟を殺された恨みを見せられ無視できず無理な進行をしてしまった、例えどのようになたえられた人間であってもその最後と言うのは嫌なものだ。劉備は名君ではあったがその性格が仇になった、精神が冷静ではなかったのだ。黄忠自身も息子や戦友を失うのは割り切るのには時間がかかった。

（普通の日常…微かでもいい、送らせてやりたいものだ。）

青年の背中を見つめ心の中で決意する。彼にとつてはこういった普通がいい、だから黄忠の方は藤丸に何も言わなかった。だが本人の心配性ゆえか自分の目の届く所にいる、沖田と武蔵は藤丸の前に出てくる。ただ登山を楽しんでいるように見えるが前に出て警戒を行い黄忠が後方を警戒している形で陣を取っている。そして二人の方は

藤丸を不安にさせないために藤丸を元気づけているのだ。

「つ、疲れたあ〜」

「お疲れ様です、先輩。」

少しすると休憩場所につき設置されていたベンチに腰を下ろす、リュックの中から水筒を取り出し乾ききった喉を潤す。一息つけ周りをみると黄忠の方は周りを警戒しておりマシユは武蔵と一緒に喋っている。沖田の方は何だかウキウキしながら周りを見ていたので思わず声を掛けてみた。

「もしかして沖田さん楽しんでる？」

「ええ、生前は仕事ばかりしていましたからね。ゆっくり登山するのは初めてです、まあ山に登ることはありますけど獲物を担いでの登山だったので…」

新選組でいる時のことだろう、よく志士を追う時や子供と遊ぶ時などに山を使うことがあったらしい。簡単な木登りやかくれんぼ程度だったがこういった観光と言う娯楽で登山するのは初めてだ。仕事と楽しみによって違った視点で見れるからの楽しみがあるので少し興奮している。武蔵の方はいつもと変わらない様子だ。

金剛山の登山ルートはさまざまだが今回は王道ルート、つまり初心者ルートというもので今はそこを登っている。その道中千早城痕と言う場所があった。鎌倉時代末期、後醍醐天皇方の金剛山一帯に赤坂城・楠木城などで城塞群を気づいた。千早城は本城の上赤坂の背後に築いた城で千早川の渓谷が三方向を絶壁で囲い背後に金剛山を控える要害の地であった。だが鎌倉幕府軍が二十万の大軍で赤坂城を攻め落とし楠木城は水を絶たれ落城、千早城も他の城より長くはもつたが機転を利かせた新田義貞が千早城に釘付けなのを利用し拳兵し何とか落城は避けられたが。1392年に北朝方の畠山基国に攻められ落城し廢城となった。

金剛山はどちらかと言うと寺より城の話が有名だ、というのも普通に歴史として記録され大阪城のような城がある場所だところいった話の方が知られている。とは言え今ではもはや跡形もないが。その後跡地に千早神社が建てられているのでもし登る時があったらお参

りしていくといい。

「こんなに自然がいっぱいなのに城があった何て考えられないな…」

「歴史、神話の時代の物なんて残っている方がおかしいですから…」

「そりゃあそうですよ、昔の物ほど無くなる事が自然ですから。」

歴史的な文化遺産や建造物などは今の人間が意図的に残しているからこそ現存しているものであってそもそも残っている事自体が不思議なのだ。その当時に生きた人間もまさか未来では歴史的な物件になっていくなど予想していなかっただろう。そのため歴史的価値があつた物は大抵、平成前の人あるいは事件によって消失している。むしろそれが普通なのだ。

「でも気持ちはわかります、私もそうですから…」

髪に刺してある桜の簪に手を当てる、和也が沖田のためと思い買ってくれた数少ない物だ。和也が着ていた羽織と物はあるが沖田に買ってくれた物は少ない。そのため沖田にとっては自分の命よりも価値がある物なのだ。

「それは想い人が君にと送った物か？」

「はい、私の命です。」

「そうか…桜か、良い物を選んでくれたな。」

「実はもう一つあるんですよ。」

そして次に見せたのが青花の簪だった。大きな葉が三枚あり中からおしべらしい物が出ている。カキツバタと言う花のようだ。

「これは…カキツバタ？」

「綺麗な簪だのう…職人の手が込んでいる。確か花言葉は…」

そう頭を捻っている、聖杯から知識が与えられているため花言葉は直ぐに思いだした。だが沖田の方は聖杯ではなくてもその言葉を知っていた。仕事上そんな事知らなかった、野原で子供と遊んでいた時よく女の子が花を摘んできた時はあつたがあまり花について関心がなかった。知った所で使わないので無駄、そもそも花にそんな物が必要なかと考えた事もあつた。そんな事を和也に愚痴を溢した時があつたのだが…

『贈り物には意味あつた方がいいだろう？友達や家族に意味もなく物

送ったことあったか?。」

『そりやまあ…ないですけど。んじやこの簪にも意味があるんですか?』

『あるぞ、本当はピンクの紫陽花をあげたかったんだが…俺がそれを選んだ理由はな…』

その時確かこう言っていた。

「…幸福が来る、でしたか…」

「はい、確か高貴、思慕、贈り物、そして幸福の意味があります。」

「本当はピンクの紫陽花を送りたかったようです。別に簪じゃなくてもいいのに…」

「紫陽花は元氣と強い愛情かあ、和也って言う人は随分とロマンチックな人だったんだね。」

「僕ら的には短期と言う言葉をそのまま表した人のような感じなんだけど…」

最初の方も気に入らない人がいたら直ぐに喧嘩売ってたし(ジャンヌがよく仲裁に入ってたが)人が変わったようになってたがそれでもその性格は治っていなかった。

「中々破天荒な人だったのか?」

「はいその…口より先に手が動く人で…」

「ははは!翼徳見たいな人じやのう。」

翼徳と言うのは劉備の義弟である張飛の事だろう、三國志では酒癖が悪く部下によく八つ当たりする事が多かったので蜀軍の問題児として有名だ。まあ張飛より大人ではあるだろうが確かに似ている部分はある。

「私の隊にいた時もよく問題ばっかり起こしてました…果てには貴族殴り飛ばそうとした時もありましたし…」

「それはその…危なかったね。」

「止めるの大変でしたよ、けど庶民の方々にはよく好かれてましたけどね。」

上の人たちとは考えがあわずよくケンカするのが多かったが普通の人にはかなり優しく接していた。子供には多少厳しくお年寄りに

は優しく接し困っている人がいれば助けていた。そのためよく頼れる人として見られておりそれもあってか新選組の怖い印象が薄れていたらしい。そうなった原因は沖田が寺子屋の子供と遊んでいる事を意気揚々と話周っていたと言うのもありそしてそれを知った沖田が和也を叱ると言う話があった、その他にも和也が問題を起こした時沖田がよく叱っていたため夫婦漫才やいろいろな言われておりよく街の見ものとして有名だったらしい。

「恥ずかしかったですよまったく…」

「そうなのく心の中では嬉しかったんじゃない？」

「そ、それはまあ……言わずもがなです。」

「相変わらず素直じゃないの。藤丸くんとマシユちゃんはそんな話なの？」

「え!？」

思わず声が漏れてしまった、顔が熱くなりそれが頬に伝わり赤く染まる。そして二人を名指しされたためかマシユの顔をチラリと見してしまう。マシユも同じように顔を赤くしていた、キャップからこちらに上目遣いのように覗いていたため思わずドキツとしてしまった。

「ほほほ、若者の浮き話は良い物だ。」

「ほらほら話ちやいなよ。あんまり隠し事するのはよくないぞ。」

「私が話たんですから次は藤丸さんの番ですよ!」

沖田はわかるとして武蔵は完全にかいかい目的だ、黄忠の方は別に話さなくてもいい雰囲気を出している。別に話てもいいのだが何だか話たくない、口がパクパクと開きどうしたらいいのかわからないと言うのもある。

「えつと…その…」

「私たちはまだそういう関係では…」

「ほう、まだといますと?」

そう揚げ足を取り始める武蔵、その事を突かれて思わずあつと空いた口を隠しました顔を赤くして黙り込む。この人あれだ、和也さんと同じで人いじるのが好きな人だ。

「これこれまだ初心な二人なのだ、あまりからかつてはいかんぞ。」

「は〜い。」

「わ、私は何だか不公平なんです…」

そう黄忠が仲裁に入りこの話はなかった事にした、結局沖田だけが晒した事になり何だか不公平さがあるが藤丸の方は助かった。ある程度休憩が済んだ所で藤丸たちは進行を再開した、武蔵の方沖田よりも前に出ており索敵をしている。他のメンバーはゆつくりと歩いている。

「…恋人つか。」

誰にも聞こえないようにポツリと呟いた言葉、その笑みが消えた顔から呟かれた声はただ空気に消えただけであった。

—— 金剛山頂上 飲食店 ——

「う〜ん、おいしい〜！」

頬に手を当てながら口に含んでいるうどんの味を楽しむ、頂上についた藤丸たちは戦いのための休息をしていた。頂上にある飲食店で食事をしている。藤丸の方も余程腹が減っていたのかお代わりをしていた。

「おいしい。」

「ふむ、これがうどんか…」

「和也さんが幾つか作ってくれましたがやっぱりあの人の方がおいしいです。」

「料理美味しいのなら当然よね、私も食べてみたかったなあ…」

「でも何だかこっちの方が味わい深いな…」

「…和也さんから詳しく聞かなかったのですがどうして藤丸さんはカルデアに？」

「えっと…歩いてたら急に攫われて…」

「うそ!？」

「私はつてきり自分から参加したものと…」

沖田と武蔵の二人は驚いていた、と言うより当然だろう。まさか攫われたとは思わなかったのだろう。沖田は彼が平凡な男性と言う事はわかっていた、だから何故カルデアにいるのかがわからなかった。話で聞いた時はそこまで気にならなかった。だがこうして目の前で会うとどうしてもその疑問が浮かんだったのでそのため率直に聞いたのだ。

「それで道中で和也さんと会った感じですか？」

「そうですね。けど異聞帯以降は会わなくなりました。」

「和也さんはその時、別の時空で旅をしていたようです。前はよくわからなかったのですが幻獣がいたり異聞帯のような異世界のような場所にいたようです。」

「何故そのようなことに？」

「それが…本人にもわからないんです。」

武蔵と同じような謎の転移、結局謎のまま終わってしまった。何故そんな事が和也さんの身に起こったのか、何故和也さんだったのか本人にはわからなかったがその件について知ってそうな人物には心辺りがある。

(あの紫の鎧武者なら…)

何か知ってる筈だ、あの人は何故だか和也さんに執着していた。僕たちがいた世界とこの世界は別の場所だ。にも関わらずあの武者は自由に行き来できた。しかも連れて来られた場所が和也さんを知っている沖田さんの場所だ。この聖杯戦争だって恐らく和也さんも何

か関係している筈だ。その事について沖田さんたちに聞いてみたが知らないようだ。

「なるほど…と言うことはそいつが？」

「いや…多分違うと思う。」

和也さんの転移される場面は見たことがないので何とも言えない、ただあの武者は自分の刀で生み出した異空間で移動していた。それなら恐らく和也さんはその場面を目撃している筈だ。

「ふむ…とは言え無関係とは言わないだろうな…」

「…私は和也さんのことを、知っているようであり知りません。」

優しい人、短期な人、そして人の優しさを知っている。けどあの人の不幸な所は知らない。他人に知られたくないと言うかただ話したくない感じだった。だが一つだけ聞いた事がある。

『俺がまだ捻くれてた時だ、武内って人がいたんだ。俺に魔術を教えしてくれた人だ。けど俺を庇って死んじまったんだ。』

『まったく…最後まで世話のかかるおじさんだったな。』

『わるい…ホントに…』

『はは…最初とは…大違いだな。謝るなんて…』

藤丸と会ってまだ間もない頃、一度地球に戻った時があった。その時別の聖杯戦争がありその時に出会ったのが武内と言う人物だった。マスターでも何でもないと和也を保護しさらに生きるために必要な魔術を教えてくれた。だが和也が息抜きで外に出たせいで敵に襲われ殺されそうになった時武内が割って入り相打ちとなった。

『ホントに嫌な黒歴史だ、自分がいかに身の程知らずだったのか…』

その時和也は一度戦いをやめて人を知る事から始めたようだ、恐らくその時を境に色々学んだのだろう。そのことについては藤丸も知らなかった。

「だから私はあの人の事を知りたい。せめてその謎だけでも私は突き止めたいのです。」

「…僕もずっとその事は気になってた、和也さんもその事について知ろうとしていたし僕も和也さんに助けられてばかりだった。」

精神的に追い詰められた時も戦闘の時も頼りがいのある人だった、

本人は気にしなくていいと言っていたが藤丸自身はどうしても返したかった。だがその前に本人が消えてしまった。

「だからせめて和也さんがどうなったのかは知りたい、和也さんを巻き込んだ理由を知りたい。」

そのためにもこの聖杯戦争に勝たないといけない、自分の世界に戻るためにも…

「…そうですね、生き返った上にせっかくチャンスがある訳です。協力しますよ。」

「例の紫の武者と会うの？まあいいんじゃない。」

「ワシは関係ないが…まあよかろう。あまり謎が多いと気がかりだしな。」

じゃが本来の目的はキャスターに勝つことじゃ、他の目的に気を取られ過ぎると脚を救われるぞ。」

そう黄忠が注意をする、ここに来た目的はキャスターを倒すためにバーサーカーを倒すことだ。藤丸が和也の謎について知りたいのは山々だがその前に自分の安全を確保するのが先だ。そのためにも頼光がいると思われる場所を確認する必要があるのだが…

「山頂にいて話だけど…頂上に行けば今からでも会えるのかな。」

「さあもう、ワシが見たのは夜の時じゃ、昼以降は見とらん。」

「山に登るのは一苦勞です、ここは私たちに任せて藤丸さんは休んでいてください。」

整備された道を歩くだけでも山道は辛い、上り坂が多いのと時間が経ち道が崩れてしまうため不安定な地面となってしまう普通の人間でこの中で搜索するのはあまりオススメできない。それに会ったとしても恐らく戦闘になるため体力は残して置いた方がいいと言うのが黄忠たちの考えだった。

「ワシが残ろう、この目なら君たちの行動を見ることができる。」

「了解です、ならマシユさんも同じように、私と宮本さんは少し見えます。」

「わかりました、お気をつけて。」

そういうと武蔵たちはうどんを食べ終え外に出た、黄忠の方は藤丸

たちが食べ終えるまでゆつくりとお茶をすすっていた。

——大阪の何処か——

ある和室に横に刀を置いて寝ている和服の男性と正座で座っている男性がいた、手を頭の後ろに回したただ天井をボケーと見ていた。

「山の中ってよく寺がありますよね。前は気にならなかつたですけど…何であるんでしょうね？」

そう呟いた、すると正座している男性が答える。

「寺は宗教の砦だ、己が理想とする姿を虚像と崇め、それを広めるがため小さな殻に閉じこもり広める。小心者の場所だよ。」

「随分酷い言いようですね。日本の歴史的な文化なのに…」

「現代では残りがすと変わらんよ、特に現代人にとってはな。」

今の連中にとつてはただの見物するだけの物、その価値など微塵も興味がないだろう。富士山や森林に不法投棄、神社やお地蔵の破壊、現代人にとっては別にあっても無くても困らない。科学によって満たされた人間はいつの間にか過去の人が何故このような物を残したのかもわからなくなつたようだ。

「やっぱり人は嫌い？」

「弱い奴は興味がない。」

ただ一言だけを告げる、そうかと寝ている男性は納得した。やっぱり嫌いなんだ。

「それで？どうだったんだ？」

「？なにが？」

「佐藤和也について何か聞けたのか？」

「あく、まあ空振りだよ。いるとしたらあそこかと思つただけど…」

「なるほど、どれで当主が余計な者を見つけたと…」

「そ、以外と見込みはあるよ。本人はクソ弱いけど。」

人の動かし方に関してはかなり良い線だ、とは言え当の本人は格闘技もできるか怪しいが…まあどれか一つに特化した方が無駄がなくていい。

「普通の人間が当主に気に入られたのか。」

「そうだよ、それでこつちに連れてきた。」

「…このお遊びには興味が無くなつたんじゃないのか？」

「それがあいつを見るためにお城の上にいるよ。俺は興味ないけど。」

「私もだ。」

そう言うのと正座していた男性が立ち上がり部屋を出るため戸を開ける。

「何処に行くの？」

「私は先に帰る、先生にはそう言っておいてくれ。」

そう言うのと部屋を退出した、寝ている男性はそれを見届けるとまた天井に目を向けた。

「…佐藤和也ねえ、ホントに探すほどの奴なのかな。」

そう呟くと目を閉じ睡眠をとる事にした。